

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書

もとおか くわばる
元岡・桑原遺跡群21

—第42次調査の報告1—

2 0 1 2

福岡市教育委員会

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書

もとおか くわばる
元岡・桑原遺跡群21

—第42次調査の報告1—



調査番号0451

2012

福岡市教育委員会

序

九州大学は、福岡市箱崎地区・六本松地区・筑紫地区的キャンパスを統合移転し、福岡市西区元岡・同桑原・糸島市にまたがる新キャンパスを建設する事業を進めており、すでに平成18年度には工学部が移転したところです。本市は九州大学統合移転事業の円滑な促進のための協力支援を行うとともに、多角連携型都市構造の形成に向けて、箱崎・六本松地区の移転跡地や西部地域のまちづくりなど、長期的・広域的な視点から対応を行っております。

統合移転用地内における事前発掘調査もこの一環として平成7年度から当教育委員会が取り組んでおり、当初は土地の先行取得を行った福岡市土地開発公社からの受託、平成14年度からはあわせて九州大学からの受託による発掘調査も行っており、現在も発掘調査を継続しております。発掘調査の報告書は、遺構・遺物の整理が終了した分から順次発行しており、本書は九州大学を委託者とする第3冊目の調査報告書で、その他にも福岡市土地開発公社分の調査報告書が18冊、概要報告書が2冊、関連パンフレットが2部発行されております。いずれも地域の歴史を語る上で欠かすことが出来ない成果と考えております。

本書で報告する第42次調査は、約7000m²の調査地区から1万箱を越える遺物と、小銅鐸・大陸系の土器、絵画や文様の入った木製品・土器など極めて興味深い遺物が出土しており、今後の弥生時代～古墳時代初期の研究にとって欠かすことの出来ない調査であると言えるでしょう。本書が文化財保護のより一層のご理解の一助となり、学術研究の資料として活用いただければ幸いです。

最後に、調査にご協力いただいた九州大学をはじめとする関係各機関と地元の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成24年3月16日
福岡市教育委員会
教育長 酒井龍彦

例　　言

- 1 本書は九州大学統合移転事業に伴い、福岡市教育委員会が九州大学の委託を受けて福岡市教育委員会が実施した元岡・桑原遺跡群第42次調査報告書の第1冊目である。第42次調査は約1万箱の遺物が出土し、今後数冊に分けて報告を行う。
- 2 本書は九州大学と受託契約を結んで実施した調査の第3冊目の報告であるが、他に九州大学統合移転事業関係として、福岡市土地開発公社受託分が18冊ある。
- 3 本書に掲載した遺構図の作成者は次のとおりである。
米倉秀紀（調査担当者）・池田祐司（現福岡市博物館）・常松幹雄（現福岡市文化財整備課）・名取さつき（福岡市技能員）・土井良伸
- 4 本書に掲載した遺物の実測図の作成者は次のとおりである。
米倉・山崎賀代子（福岡市技能員）・大庭友子（福岡市技能員）
- 5 本書に掲載した図は米倉・大庭が整図を行った。
- 6 本書に掲載した写真は米倉が撮影した。
- 7 調査中に各種の自然化学分析を古環境研究所に委託し、その成果は本書「III-5 自然化学分析」に掲載している。
- 8 図番号・図版番号等はそれぞれ通し番号とした。
- 9 掲載した遺物の番号は、通し番号とし、挿図と図版の番号を一致させた。
- 10 本書の執筆（III-5 自然化学分析を除く）・編集は米倉が行った。
- 11 本調査で出土した遺物および調査の記録類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、活用される。

本文目次

I	はじめに	9
1	九州大学統合移転用地内調査に至る経緯	9
2	第42次調査の調査組織	9
3	第42次調査I区の経過	10
II	遺跡の立地と環境	12
1	元岡・桑原遺跡群の位置と立地	12
2	調査区の立地	14
3	元岡・桑原遺跡群の概要と周辺の遺跡	15
III	第42次調査I区の調査記録	18
1	I区の概要	18
2	層序	19
3	I区の遺構	21
(1)	自然流路SD01	21
(2)	SD01に付随する溝	30
(3)	SD01底面で検出した遺構	30
(4)	掘立柱建物	31
(5)	その他	34
4	I区(A-1・2区～E-0～2区)の出土遺物	35
(1)	A-1・2区出土土器・陶磁器	35
(2)	B-1・2区出土土器	35
(3)	C-1・2区出土土器	55
(4)	D-1・2区出土土器	71
(5)	E-0～2区出土土器・陶磁器	95
(6)	土製品	144
(7)	石製品・ガラス玉類	152
(8)	焼成粘土塊	152
5	自然化学分析	171

挿 図 目 次

図 1 元岡・桑原遺跡群の位置と周辺の遺跡	12
図 2 元岡・桑原遺跡群調査地点位置図	13
図 3 元岡・桑原遺跡群第42次調査区位置図	15
図 4 調査区南壁・C-3区遺構面下土層柱状図	20
図 5 B-1・2区東壁土層断面実測図	22
図 6 N o. 1ベルト土層断面実測図	23
図 7 C-F6区南壁土層断面実測図	24
図 8 元岡・桑原遺跡群第42次調査区主要遺構配置図	27
図 9 第42次調査1区遺構配置図	28
図10 S D O 1土器群位置図	29
図11 S D O 4土層断面実測図及びS X 0 6実測図	31
図12 S B O 8・09周辺遺構配置図	32
図13 S B O 8・09実測図	33
図14 S B 1 5 2実測図	34
図15 A-2区微高地部出土土器実測図	35
図16 A-1区出土土器実測図	36
図17 A-E-0~3区遺物出土状況実測図	37
図18 B-1区上層出土土器実測図1	38
図19 B-1区上層出土土器実測図2	39
図20 B-1区中層・下層出土土器実測図1	40
図21 B-1区中層・下層出土土器実測図2	41
図22 B-2区上層・中層出土土器実測図	42
図23 B-1・2区肩及び下層出土土器実測図	43
図24 土器群8・10~13出土状況実測図	44
図25 土器群10B・11B・11C出土状況実測図	45
図26 B-1・2区土器群11A出土土器実測図1	46
図27 B-1・2区土器群11A出土土器実測図2	47
図28 B-1・2区土器群11A出土土器実測図3	48
図29 B-1・2区土器群11A出土土器実測図4	49
図30 B-1・2区土器群11A出土土器実測図5	50
図31 B-1・2区土器群11B出土土器実測図1	51
図32 B-1・2区土器群11B出土土器実測図2	52
図33 B-1・2区土器群11C出土土器実測図	53
図34 B-1・2区土器群12・13出土土器実測図	54
図35 小銅鐸・銅鋤先等出土位置図	55
図36 C-2区西ベルト出土土器実測図1	56
図37 C-2区西ベルト出土土器実測図2	57

図 38 C-2区上層出土土器(P1・P3)実測図	58
図 39 C-1区上層出土土器実測図1	59
図 40 C-1区上層出土土器実測図2	60
図 41 C-1区上層出土土器実測図3・C-2区上層出土土器実測図	61
図 42 C-1・2区中層・下層出土土器実測図	62
図 43 C-1・2区肩部等出土土器実測図	63
図 44 C-2区土器群7出土土器実測図1	64
図 45 C-2区土器群7出土土器実測図2・7B出土土器実測図	65
図 46 C-1区土器群8出土土器実測図1	66
図 47 C-1区土器群8出土状況実測図及び同出土土器実測図2	67
図 48 C-1・2区土器群10出土土器実測図1	68
図 49 C-1・2区土器群10出土土器実測図2	69
図 50 C-1・2区土器群10出土土器実測図3	70
図 51 D-1区ポンプ用地出土土器実測図1	72
図 52 D-1区ポンプ用地出土土器実測図2	73
図 53 D-1区ポンプ用地出土土器実測図3	74
図 54 D-1区ポンプ用地出土土器実測図4	75
図 55 D-1区ポンプ用地出土土器実測図5	76
図 56 D-1区ポンプ用地出土土器実測図6	77
図 57 D-1区ポンプ用地出土土器実測図7	78
図 58 D-1区ポンプ用地出土土器実測図8	79
図 59 D-1区上層・中層出土土器実測図1	80
図 60 D-1区上層・中層出土土器実測図2	81
図 61 D-1区下層出土土器実測図	82
図 62 D-2区出土土器実測図1	83
図 63 D-2区出土土器実測図2	84
図 64 D-1区土器群1A・1B出土土器実測図	85
図 65 D-1区土器群1C出土土器実測図	86
図 66 D-1区土器群2出土土器実測図	87
図 67 D-2区土器群9出土土器実測図1	88
図 68 D-2区土器群9出土土器実測図2	89
図 69 D-2区土器群9出土土器実測図3	90
図 70 D-2区土器群9B～D出土土器実測図	91
図 71 N.o. 1トレーナー出土土器実測図	92
図 72 N.o. 1ベルト出土土器実測図1	93
図 73 N.o. 1ベルト出土土器実測図2	94
図 74 E-0区出土土器実測図	95
図 75 E-1区上層出土土器実測図1	96
図 76 E-1区上層出土土器実測図2	97
図 77 E-1・2区下層出土土器実測図	98

图 78 E-1 区上器群 4 出土土器实测图 ······	99
图 79 E-1 区上层（土器群 4・6・5 A・5 B）遗物出土状况实测图 ······	100
图 80 E-1 区中层（土器群 5 C～G），下层（同 5 W～Z）遗物出土状况实测图 ······	101
图 81 E-1 区上器群 6 A 出土土器实测图 1 ······	102
图 82 E-1 区上器群 6 A 出土土器实测图 2 ······	103
图 83 E-1 区上器群 6 A 出土土器实测图 3 ······	104
图 84 E-1 区上器群 6 B 出土土器实测图 ······	105
图 85 E-1 区上器群 5 A 出土土器实测图 1 ······	106
图 86 E-1 区上器群 5 A 出土土器实测图 2 ······	107
图 87 E-1 区上器群 5 A 出土土器实测图 3 ······	108
图 88 E-1 区上器群 5 A 出土土器实测图 4 ······	109
图 89 E-1 区上器群 5 A 出土土器实测图 5 ······	110
图 90 E-1 区上器群 5 A 出土土器实测图 6 ······	111
图 91 E-1 区上器群 5 B 出土土器实测图 1 ······	112
图 92 E-1 区上器群 5 B 出土土器实测图 2 ······	113
图 93 E-1 区上器群 5 B 出土土器实测图 3 ······	114
图 94 E-1 区上器群 5 B 出土土器实测图 4 ······	115
图 95 E-1 区上器群 5 B 出土土器实测图 5 ······	116
图 96 E-1 区上器群 5 B 出土土器实测图 6 ······	117
图 97 E-1 区上器群 5 B 出土土器实测图 7 ······	118
图 98 E-1 区上器群 5 B 出土土器实测图 8 ······	119
图 99 E-1 区上器群 5 B 出土土器实测图 9 ······	120
图 100 E-1 区上器群 5 B 出土土器实测图 10 ······	121
图 101 E-1 区上器群 5 C 出土土器实测图 ······	122
图 102 E-1 区上器群 5 D 出土土器实测图 ······	123
图 103 E-1 区上器群 5 E 出土土器实测图 ······	124
图 104 E-1 区上器群 5 F 出土土器实测图 1 ······	125
图 105 E-1 区上器群 5 F 出土土器实测图 2 ······	126
图 106 E-1 区上器群 5 G 出土土器实测图 ······	127
图 107 E-1 区上器群 5 G と 5 W 間層出土土器及び 5 W 出土土器実測図 ······	128
图 108 E-1 区上器群 5 X 出土土器实测图 ······	129
图 109 E-1 区上器群 5 Y 出土土器实测图 1 ······	130
图 110 E-1 区上器群 5 Y 出土土器实测图 2 ······	131
图 111 E-1 区上器群 5 Y 出土土器实测图 3 ······	132
图 112 E-1 区上器群 5 Y 出土土器实测图 4 ······	133
图 113 E-1 区上器群 5 Y 出土土器实测图 5 ······	134
图 114 E-1 区上器群 5 Z 出土土器实测图 1 ······	135
图 115 E-1 区上器群 5 Z 出土土器实测图 2 ······	136
图 116 E-1 区上器群 5 Z 出土土器实测图 3 ······	137
图 117 E-1 区上器群 5 Z 出土土器实测图 4 ······	138

図 118 E-1 区土器群 5 Z 出土土器実測図 5	139
図 119 E-1 区土器群 5 Z 出土土器実測図 6	140
図 120 E-2 区上層出土土器実測図 1	141
図 121 E-2 区上層出土土器実測図 2	142
図 122 E-2 区中・下層出土土器実測図	143
図 123 E-2 区土器群 9 出土土器実測図	144
図 124 調査区南東拡張区出土土器実測図 1	145
図 125 調査区南東拡張区出土土器実測図 2	146
図 126 調査区南東拡張区出土土器実測図 3	147
図 127 調査区南東拡張区出土土器実測図 4	148
図 128 調査区南東拡張区出土土器実測図 5	149
図 129 出土土製品実測図 1	150
図 130 出土土製品・石製品・粘土塊・ガラス製品実測図	151
図 133 出土焼成粘土塊実測図	152

表 目 次

表 1 元岡・桑原遺跡群調査地点一覧表	16
表 2 元岡・桑原遺跡群関係調査報告書一覧表	17
表 3 出土土器一覧表	153 ~ 171

図 版 目 次

図版 1 元岡桑原遺跡第 42 次発掘調査の種実 I	193
図版 2 元岡桑原遺跡第 42 次発掘調査の種実 II	194
図版 3 元岡桑原遺跡第 42 次発掘調査の種実 III	195
図版 4 元岡桑原遺跡第 42 次発掘調査の種実 IV	196
図版 5 元岡桑原遺跡の花粉・胞子・寄生虫卵	197
図版 6 元岡桑原遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）	198
図版 7 上：元岡・桑原遺跡群全景（西から） 下：第 42 次調査区遠景（南から）	199
図版 8 上：第 42 次調査区全景（北東から） 下：第 42 次調査区全景（北から）	200
図版 9 上：第 42 次調査区全景（南東から） 下：第 42 次調査区 II 区（調査中・南から）	201
図版 10 上：SD01 全景（北から） 下：SD01 コーナー部（東から）	202
図版 11 土層断面 I	203
図版 12 上・中：土層断面 II 下：1 号小銅鐸・2 号小銅鐸	204
図版 13 上・中：SB08・09 及び同柱穴 下：SB08 橫の完形土器群（土器群 14）	205
図版 14 上：土器群 5B 下：土器群 5Z	206
図版 15 朝鮮半島・粟浪系遺物	207
図版 16 格子目タタキを施した土器とひょうたん形土器	208
図版 17 上：I 区全景（南西から） 下：I 区全景（南東から）	209

図版 18 上：II区全景（南から、調査途中） 下：I・II区北端遺構群（北から）	210
図版 19 上：SB08・09・152（南東から） 下：SB08・09（東から）	211
図版 20 SB08・09柱穴	212
図版 21 SD03・SD04・SX06・SX10	213
図版 22 土器群 10～13	214
図版 23 土器群 8・1・2	215
図版 24 土器群 4A・5A・6A	216
図版 25 土器群 5C・5F・5D	217
図版 26 土器群 5W・5X・5Z	218
図版 27 遺物出土状況 1	219
図版 28 遺物出土状況 2	220
図版 29 出土遺物 1	221
図版 30 出土遺物 2	222
図版 31 出土遺物 3	223
図版 32 出土遺物 4	224
図版 33 出土遺物 5	225
図版 34 出土遺物 6	226
図版 35 出土遺物 7	227
図版 36 出土遺物 8	228
図版 37 出土遺物 9	229
図版 38 出土遺物 10	230
図版 39 出土遺物 11	231
図版 40 出土遺物 12	232
図版 41 出土遺物 13	233
図版 42 出土遺物 14	234

I は じ め に

1 九州大学統合移転地内調査に至る経緯

平成6年に九州大学が医学部・薬学部等を除いて、福岡市西区元岡・桑原地区に統合移転することが決定された。これを受け福岡市教育委員会では、九州大学統合移転地を始めとした市内の大规模遺跡開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査を担当する課として、平成7年度に文化財部大規模事業等担当課を発足させた。また同課の発足前の平成7年2月15日から同年12月31日まで移転用地内の踏査を行い、さらに平成8年3月11日から同年9月30日まで試掘調査を実施し、さらに一部の古墳等については確認調査を行った。

統合移転予定地は福岡市土地開発公社が全域を先行取得し、埋蔵文化財調査・造成工事が終了した後に九州大学が再取得し、造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、福岡市教育委員会と福岡市土地開発公社が受託契約を結んで実施することとなり、平成8年度後半から発掘調査を開始した。

用地内で造成を行わずに現地形のままキャンパスとする地区については、公社先行取得後速やかに九州大学が再取得を行ったが、その後キャンパスの造成工事計画が変更となり、九州大学が再取得した地区についても造成工事によって埋蔵文化財が破壊を受けることが明らかになったため、埋蔵文化財の発掘調査が必要となった。九州大学は福岡市に対して、九州大学取得用地内の埋蔵文化財調査について依頼し、福岡市教育委員会は大学側が調査体制を整えるべきとして協議を進めたが、結果的に調査範囲が数万m²に及ぶ大規模なことなどから、平成14年度後半から福岡市教育委員会が調査を行うことで、協定書を結んだ。

九州大学再取得地の調査は、平成14年度後半に包蔵地の全体把握のための確認調査と試掘調査から開始し、平成15年度当初から本発掘調査（第31次調査）を開始した。調査範囲は農学部農場地区である統合移転地の南西隅部分（G地区）と他の地区数地点で、調査想定面積は4万m²に及び、当初は調査員4名体制で平成19年度中の調査終了を計画していた。しかしその後、九大側の大幅な計画変更により、九大移転計画が当初予定より5年以上遅れ込むこととなったため、発掘調査についても見直しが行われ、平成16・17年度は調査員2名体制、18年度以降は1名で調査を行うこととなった。そのため発掘調査予定は平成25年度まで、調査報告書作成は平成28年度までかかる見込みである。

調査地区についての方針も、当初は造成地内の全遺跡を発掘調査する予定であったが、結果的には圃場整備に対する調査方針を適用し、道路・水路等の永久構築物部分、遺構面を削る部分、遺構面から2m以上の盛土を行う部分に対して発掘調査を実施することとなった。

調査は表1のとおり現在も発掘調査を継続中である。九州大学取得地区の主要調査区であるG地区は出土遺物量が極めて多く、第31次調査が約1500箱、今回報告する第42次調査区は1万箱を超える。

2 第42次調査の調査組織

平成16年度・17年度（第42次発掘調査）

福岡市教育委員会文化財部大規模事業等担当課

課長 力武卓治

主査 米倉秀紀（第42次I区調査担当）・木下博文（第42次調査II区調査担当）

庶務 文化財部文化財整備課管理係 鈴木由喜

平成18年度～20年度（第42次発掘調査・同整理）

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

課長 力武卓治→田中壽夫

調査第2係長 米倉秀紀→常松幹雄（第42次調査II区調査担当）

庶務 文化財部文化財管理課管理係 烏越由紀子→垣替美香

平成21年度～23年度（第42次整理・報告）

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

課長 田中壽夫

調査第2係長 杉山富雄→菅波正人

庶務 文化財部文化財管理課→埋蔵文化財第1課管理係 山本朋子→井上幸江

3 第42次調査I区の経過

第42次調査は、排水池の予定地の一部である。排水池は全面積約8,000m²で、土置き場等の関係で、全体を北側・南東側・南西側に1/3分割し、第42次調査は、当初その南東側約3,000m²を対象として調査を開始した。当該地区は多量の湧水が想定されたため、調査区内の最も低い地点にオートポンプを設置し、常時排水を行うこととした。そのため、ポンプ設置部分の約20m²について、先行して重機で包含層まで掘削し、その後調査の途中で、諸般の事情により南西側も同時に調査を進める必要が生じたため、当初予定の南東側を42次-I区、南西側を42次-II区とした。また北側1/3は第52次調査として調査を進めた。今回報告を行うのは、このうち第42次調査I区のうちの一部で、I区の残り部分・II区については次年度以降報告を継続する予定である。以下、本報告書部分の担当者である米倉担当部分について、日にちを追って調査経過を見る。

平成16年10月1日 ポンプ部分の表土剥ぎ開始。ポンプ部分の面積は概ね25m²であるが、表土はその数倍を除去。その部分の表土剥ぎ後に包含層（自然流路SDO1の中）の掘削を行い、ポンプを据えるための浴槽のような箱を据えるが、なかなか据えられない。結局1週間後に斜めに据わる。

平成16年10月後半から12月いっぱい。重機による表土剥ぎ。現代客土・水田下に水田面1面を検出し、一部以降検出を行うも、ごく一部に砂を噛んでいるのみで、畦畔もはっきりしない。出土遺物は少なく、糸切り土師器・近世磁器が出土。偶蹄目状の足跡部分の写真を撮り、重機で掘り下げる。

平成16年12月 ポンプ部分の包含層（重機で掘り上げた土）から作業員で、遺物を探集。多量の土器のほか、ネズミ返し等の木製品も出土。

平成17年1月 作業員による発掘調査開始。全面遺構検出。2本の自然流路間の穴を掘削するも、大半は自然の窟み。ただし、北側の一部には遺構があり、この部分は後日掘削する。SD01の大きく曲がるD-1区部分にトレーナーを入れる（No.1トレーナー）。遺物多量のため、底面まで掘削できず。

平成17年2月 自然流路SD-01をA-1・B-1区から掘削を開始する。掘削開始後1月で小銅鐸2点などが出土する。

平成17年3月～7月 掘削が進むにつれ湧水量が増え、雨のたびごとにポンプを据えた箱に土砂が大量流入。そのたびにポンプが止まり、たびたび調査中断。そのため梅雨明け後にンブ部分を抜本

的に手直し。ポンプ箱内の土を一度すべて上げ、箱の周辺に2重の土止めを行い、水だけが入るようにした。併せて九大側が矢倉を組み、チェーンブロックを設置し、万が一箱内に土が入ってもポンプを上げられるようにした。以後、ポンプ停止せず。

平成17年11月 1区は北側の一部を残し、掘削ほぼ終了。調査担当者である米倉が3月まで事務専念等のため、木下が西半分2区の調査にかかる。

平成17年4月 九大関係調査の予算大幅減。併せて機構改革で九大調査等担当の大規模事業担当課が埋蔵文化財第2課調査第2係の一部となり、九大統合移転地関係では土地公社担当1名、九州大学担当1名（米倉）となる。2区の調査を中断し、1区の残り部分（C～E-5～7区）の調査を行う。

平成18年6月23日 大雨のため1年ぶりに現場プール状態。以後断続的に大雨。

平成18年7月31日 ようやく現場の水なくなり、現場の復旧を本格化。大量の土砂が現場に流入。この間現場内の高いところは人が通っていないため、草が伸び放題。この間調査は全く進まず。

平成18年8月18日 台風12号のため再び現場プール状態。

平成18年8月24日 水抜ける。再び土砂上げ開始。

平成18年8月30日 午前の大雨のためかまたもポンプ止まる。

平成18年9月1日 ポンプが漏電状態。時々スイッチを入れて水を抜くが、しばらくすると停止する。結局、後日ポンプ交換と言うことになる。それまで漏電で危険なため、ポンプを止めざるを得ない。またもやプール状態。6月22日以降はストップ状態。

平成18年9月上旬 ポンプ交換。水を抜き終わると、1区の流路は大量の土砂で埋まる。重機も届かず、手であげざるを得ない。夏の暑さがなくなる10月から土上げを行う。それまで2区の水の影響が比較的少ない部分の調査を行う。

平成18年10～12月 2区の調査と併行して1区の埋まった土を掘り上げ。1区が半年ぶりに調査可能となった。

平成19年1月 全作業員を1区に復帰。残った調査区であるB C 6・7区の最下層、縄文層の一部、E-1区土器群5最下層の調査を行う。地山面測量開始。

平成19年3月 1区全面で調査の大半終了。残りはE-1区の東側拡張区、及び各ベルト部分。2区の遺構の一部も掘削開始（住居址・建物等）

平成19年4月 米倉異動のため、次の担当者常松と引継。1区の出土総量は土器約4,500箱の他、木製品300点・石器・金属器・鉄滓など5,000箱に及ぶ。



大雨で水漬けとなった第42次調査I区

II 遺跡の立地と環境

1 元岡・桑原遺跡群の位置と立地

元岡・桑原遺跡群は玄界灘に突き出た福岡市西側の糸島半島にある。糸島半島は、現在はその全面で九州本島と繋がっているが、繋がっている部分の大半が江戸時代の干拓によるもので、縄文時代海進以降中世までは中央の一部で陸橋状に繋がっており、その東と西側は大きく海が湾入していたと考えられている。東側湾入部（古今津湾）の奥にあたる元岡・桑原遺跡群の北東側と南側に縄文時代中・後期の貝塚（桑原飛櫛貝塚・元岡瓜尾貝塚）があり、陸橋部分には「泊（とまり）」の地名が残っている。元岡・桑原遺跡群は古今津湾の奥部北側に位置している。

糸島半島は花崗岩から成る急峻な山地・丘陵部から成り、広い平野はほとんど存在しない。半島全体に渡って、浸食による狭い谷が複雑に入り出し、わずかに海岸近くに溜まった幅の狭い沖積平野が存在するだけである。元岡・桑原遺跡群の立地している地点も、標高2m～120m前後の等高線が密に入り組み、往時は丘陵部から直接海岸線へ移行する地形であったと考えられる。沖積層の一部は最終氷期（第42次調査地点）のものもあるが、現在残されている沖積層の大半は縄文時代中期以降の海退時以降に形成されたもので、それ以前の遺跡はおおむね丘陵もしくは山際の段丘面にある。

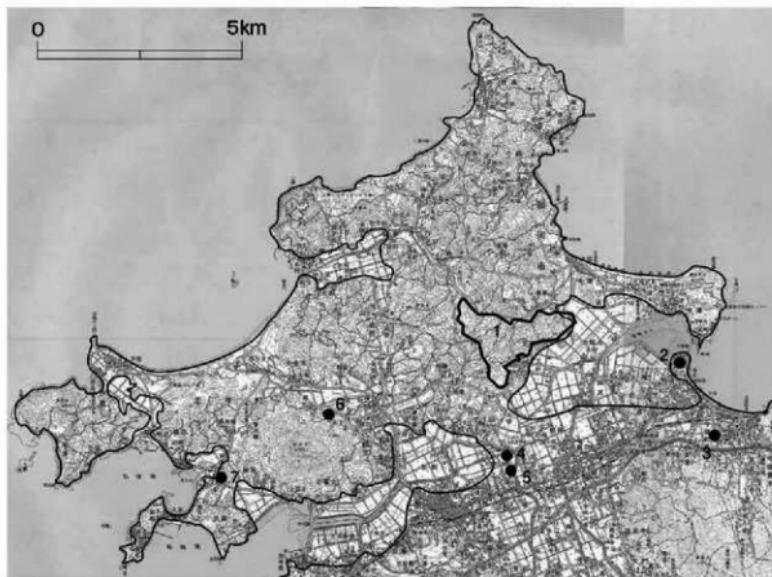


図1 元岡・桑原遺跡群の位置と周辺の遺跡

- 1. 元岡・桑原遺跡群
- 2. 今山遺跡
- 3. 今宿五郎江遺跡
- 4. 志登支石墓
- 5. 潤地頭給遺跡
- 6. 一の町遺跡
- 7. 新町遺跡



図 2 元岡・桑原遺跡群調査地点位置図

今回報告の第 42 次調査も谷部に形成された小沖積地の中にあるが、遺構面であるシルト層の下には泥炭質の厚い層がほぼ全面にあり、その中に含まれている樹木の C 14 年代は約 2 万年前を示している。このことは、最終氷期最盛期は水の流れの少ない湿地もしくは池状を成しており、上記の環境が形成されたのはいわゆる縄文海進以降のことと考えられる。

縄文海進後の海退期の縄文時代晩期になると低地部に貯蔵穴（第 2 次）や包含層（第 42 次）などが現れるが、谷部の大半が埋まり平地部が出現するのは古墳時代前半中までかかるところが多く、その時期になると各谷とも細い流路のみが残されていく状況である。これ以降元岡・桑原地区の開発が本格化したと考えられる。第 3 次調査のように崖面近くにある弥生時代住居に比べ、古墳時代前期後半以降の住居が埋まつた谷の狭い平地部に築かれている。

平地が狭いため、生活址が見つかって地点は単一時期ではなく繰り返し同じ地点を利用するため、複合する時代の遺構が見つかることが多い。第 3 次調査では縄文時代草創期～早期、弥生時代、第 18 次では古墳時代～古代、第 20 次調査では縄文時代・弥生時代・古墳時代以降の各期などの遺構が発見されている。本調査区でも、弥生時代中期から古墳時代前期の各時期の他、縄文時代晩期・古墳時代後期・古代の遺構・遺物が出土し、隣接する第 52 次調査で縄文時代草創期の遺物群も出土している。

2 調査区の立地

第 42 次調査区は、前節で述べた古今津湾の奥部北側に位置する。調査区の東側には小さな里道を挟んで狭く急な小丘陵があり、調査区の中央北側には北から延びている同様な丘陵端部がかかっている。調査区の西側にも北からの丘陵部が、高さを減じながら延びておりこの丘陵端部には旧前原市（現糸島市）によって発掘調査が行われ、弥生時代中期の倉庫群などが発見されている。第 42 次調査はこれら丘陵群の間を走る大きな自然流路（川）2 本と、2 本の川に挟まれた丘陵端部に営まれた遺構群から成っている。

2 本の自然流路が走る谷は、もともと花崗岩を基盤とするきわめて大きな一つの谷で、氷期・間氷期による堆積と浸食の繰り返しの結果、約 2 万年前には穏やかな湿地もしくは池状の地形を成していたと考えられる。縄文海進によって調査区の前面まで海が進入しその後の若干の海退の過程で、谷部全体にシルト質を主とする小沖積平地が形成され、北側上方からの水の流れが東西の丘陵のすぐ下を走る幅 30 m 前後の流路ができたものと思われる。このうち東側の流路（SDO1）は、東岸が花崗岩岩盤を削り、西岸は堆積したシルト層を削っている。縄文海進以降も全体として堆積が増しつつも、小浸食を繰り返す過程の中で、丘陵部や堆積したシルト層を流路が浸食し、最終的に東側流路（SD01）と西側流路（SD02）を形成したものである。

SD01 中央の底は縄文時代以前に堆積した樹木を含む粘質土層を削っており、川底にたまつたもっとも古い時期の遺物は縄文時代晩期中頃である。この時期の遺物が川底と東側の花崗岩岩盤を削るようにたまっていることから、水量が増して東側岩盤を削っていることが明らかで、同じ時期にこの川周辺に住みついている。弥生時代前期～中期初頭の遺物はこの川のさらに上流の 52 次調査区や 56 次調査区では見つかっているものの、当調査区では弥生時代中期まで遺物の出土を見ない。

詳細は本文中に述べるが、東側流路（SD01）と西側流路（SD02）では、遺物が出土する弥生時代中期～古墳時代前期の各時期における流路の流れの状態が時期によって、また流路によって異なっており、それに伴つて遺跡のあり方や水の祭祀のあり方が微妙に異なっている。なお、調査中

S D O 1 と S D O 2 部分は、常時北側上方からの湧水が流れしており、現在も水の流れは変わっていない。

3 元岡・桑原遺跡群の概要と周辺の遺跡

元岡・桑原遺跡群における旧石器時代～縄文時代初期の遺跡は丘陵部直下の緩斜面部で見つかっている。第3次調査では、丘陵下の狭い平地部で旧跡時代から縄文時代早期の遺物群と縄文時代草創期～早期の石組炉などの遺構が発見されている。縄文時代中期から後期はこの遺跡のすぐ横に元岡瓜尾貝塚・桑原飛櫛貝塚と貝塚が作られ、元岡瓜尾貝塚のすぐ横には、九大移転に伴う確認調査で小規模貝塚も検出している。桑原飛櫛貝塚では一部の発掘調査が行われており、中期阿高式系から後期瀬戸内系の時期の厚い貝層が検出され、片腕に貝輪をはめた人骨を含む2体の合葬墓や九州3例目の貝面など出土した。縄文時代晩期の遺構は第2次調査で貯蔵穴が見つかっている。本調査区でも晩期の包含層が S D O 1 周辺にあり、下流部ではドングリが詰まった小溝が発見されている。

弥生時代のまとまった遺構・遺物が出土するのは中期中頃からで、前期～中期前半の遺構・遺物はほとんど発見されていない。第3次調査では、中期後半の方形住居が9軒以上と掘立柱建物などが見つかり、第20次調査では自然流路から当該期の遺物が出土している。弥生時代後期後半から古墳時代初頭の遺物は、今回報告する42次調査で大量の遺物が出土し、第20次調査などでも遺物が出土しているが、明確な集落址等の検出はほとんどない。

古墳時代前期から後期までほぼ途切れることなく丘陵部に古墳が築造され、中でも前方後円墳は古墳時代初頭から6世紀中頃まで各時期のものが6基あり、前方後円墳以外でも、径30mの大型円墳（経塚古墳）や7世紀代の大型方墳2基などがあり、元岡・桑原遺跡群と隣接する遺跡のみで首長墓の系列をたどることができる。この中でも本年度に調査した元岡古墳群G-6号墳は、第42次調査区の北側に位置するが、「大歳庚寅」で始まる19文字の象嵌銘が入った大刀が出土したことは記憶に新しい。また古墳時代後期の群集墳が70基以上発見されている。集落址も谷部で竪穴住居が造られ、特に20次遺跡では70軒以上の竪穴住居が古墳時代を通して造られている。



図 3 元岡・桑原遺跡群第42次調査区位置図 (1/1000)

表1 九州大学統合移転地内（元岡・桑原遺跡群）発掘調査一覧

遺跡名	原因者等	調査期間	古墳数	調査面積	内容等	遺物量
9602 第1次	確認	971201 ~ 981031	19		試掘のみ	
9656 桑原石元古墳群	確認	961111 ~ 981031	19	円墳		
9657 桑原金属古墳	確認	960820 ~ 961129	500	前方後円墳		
9658 元岡石原古墳	確認	960827 ~ 961129	1,280	前方後円墳	3	
9656 桑原石元古墳群	公社	971201 ~ 981031	12	8,154 円墳		
9659 第2次	公社	961111 ~ 970325	3,007	古墳時代~古代溝、土坑、水田	35	
9763 第3次	公社	971129 ~ 990222	1	3,500 古墳時代(廻炉)、弥生時代住居址、円墳	144	
9764 第4次	公社	971201 ~ 980331	1,219	古代~中世孤立柱建物・溝	5	
9771 元岡古墳群2次	確認	971110 ~ 971128	60		3	
9811 第5次	公社	980427 ~ 980623	2,500	古代土坑・包含層	1	
9812 第6次	公社	980630 ~ 980828	2,800	古墳時代(含層)	1	
9813 第7次	公社	980506 ~ 990611	7,500	古墳時代~古代(含層)・建物・池、製鉄炉	530	
9829 第8次(元岡古墳群B群)	公社	980916 ~ 981225	1	300 円墳	2	
9851 第9次	公社	981102 ~ 981210	190	弥生時代住居址	12	
9854 第10次	公社	990106 ~ 990225	1,336	古代~中世包含層	1	
9855 第11次	公社	990106 ~ 990320	1,650	古墳時代~古代土塁、包含層	8	
9902 第12次	公社	990406 ~ 990328	5,500	古代製鉄炉	326	
9903 第13次	公社	990412 ~ 990316	3	6,000 前方後円墳1基、円墳2基	6	
9904 第14次	公社	990422 ~ 990722	1,200	古代包含層	1	
9923 第15次	公社	990611 ~ 990928	3,500	古墳包含層、中世水田	80	
9933 第16次	公社	990802 ~ 991110	1,200	古代包含層	1	
9934 第17次(元岡古墳群B群)	公社	990910 ~ 991208	2	517 円墳	4	
9946 第18次	公社	991010 ~ 020215	16,800	古墳時代~古代、住居・建物・池、製鉄炉	1100	
9947 第19次	公社	991016 ~ 991215	3,000	古代包含層	1	
0001 第20次	公社	000403 ~ 030523	20,130	古墳時代住居、古代建物、製鉄炉	2050	
0002 第21次	土木	000405 ~ 000921	3	石ケ元古墳群A群、桑原古墳群A群1基	6	
0033 第22次	公社	000410 ~ 010125	4,750	古代孤立柱建物、製鉄炉兼溝	10	
0019 第23次	公社	000601 ~ 010331	8,110	確認調査	1	
0034 第24次	公社	000821 ~ 030320	5,500	古墳時代住居址、古代製鉄炉	800	
0052 第25次(桑原古墳群A群)	公社	001124 ~ 011130	7	2,200 円墳	16	
0110 第26次	公社	010405 ~ 011130	1	5,487 古墳時代住居址、円墳、古代孤立柱建物	1	
0153 第27次	公社	011201 ~ 020820	4,493	古墳時代住居	106	
0154 第28次	公社	020201 ~ 020704	2,200	古代~中世包含層	30	
0204 第29次(元岡古墳群N群)	公社	020405 ~ 030930	11	4,000 円墳	10	
0240 第30次	公社	020801 ~ 020930	2,450	古代包含層	0	
0242 第31次	九大	030401 ~ 060113	9,000	古墳瓦窯・製鉄、古墳時代祭祀関連	1200	
0257 第32次	九大	030120 ~ 030331	1,700	(確認調査)	0	
0303 第33次	九大	030408 ~ 030519	1	450 桑原湖田山古墳群	2	
0310 第34次	公社	030401 ~ 030812	3	1,200 元岡古墳群1群	3	
0340 第35次	公社	030520 ~ 050112	1,850 石ケ原古墳	1		
0341 第36次	公社	030901 ~ 050331	1	3,500 般塚古墳+近世墓群	196	
0365 第37次	公社	031020 ~ 040226	4	461 元岡古墳群O群	3	
0371 第38次	公社	040308 ~ 050117	1,000 水崎城	1		
0404 第39次	民間	040405 ~ 040416	88	包含層	80	
0410 第40次	九大	040407 ~ 040430	1,000	遺物少量流れ込み	1	
0435 第41次	九大	040507 ~ 041130	900	製鉄炉+包含層	200	
第41次B	土木	050202 ~ 050217				
0451 第42次	九大	041001 ~ 090331	7,000 弥生時代~古墳時代の自然流路	10000		
0496 第43次	公社	050207 ~ 050308	500 古墳易道・その後無断破壊	1		
0523 第44次	九大	050601 ~ 051020	1,189 古墳~古代集落	60		
0535 第45次	公社	050720 ~ 051122	3	1,128 桑原古墳群A群	30	
0538 第46次	土木	050808 ~ 051011	403		4	
0562 第47次(1号墳)	九大	060105 ~ 060310	1	107 前方後円墳ではなく円墳	1	
0563 第48次	公社	060110 ~ 060223	447 強穴住居	17		
0611 第49次	公社	060403 ~ 070322	4,000		55	
0709 第50次	公社	070401 ~ 070827	811		44	
0741 第51次	公社	070829 ~ 081003	6,886 古墳時代・古代建物群	275		
0763 第52次	九大	080121 ~ 100331	3,000 弥生時代~古墳時代の自然流路	3000		
0768 第53次	公社	080215 ~ 080409	770 古代集落	7		
0844 第54次	公社	081006 ~ 090109	1,872 古代集落	53		
1001 第55次	九大	100401 ~ 100610	3	7世紀大形古墳(確認調査)		
1043 第56次	九大	110411 ~ 110413	2	7世紀大形古墳(確認調査)		
1103 第57次	九大	110413 ~ 110620		古代製鐵過溝など		
1110 第58次	九大	120123 ~ 120123		縄文時代初期		
1140 第59次	九大					

確認は確認調査、土木は福岡市土木局(現道路下水道局)の略

古墳時代末から古代になると谷部奥の開発が本格化する。第18次調査では、谷部奥の緩斜面を造成して、住居や倉庫が造られ、規模の大小はあるものの、域内の各地で同様の状況が看取できる。律令体制の確立とともに、域内で官衙系の遺物や遺構が現れる。第20次調査では自然流路を入念な土手で堰き止めた池の周りに掘立柱建物群を建て、池の中から「大寶元年」銘や人名・地名を始めとする木簡群や鈎帶・中国製陶磁器類が出土した。このような飛鳥・奈良時代の官衙系遺物は、第12次・18次・31次などでも出土している。この時期から域内での製鉄生産が活発化し、第12次調査では27基の製鉄炉が発見され、この他にも各所で大量の鉄滓が出土していることから、官が系遺物・遺構群は製鉄を背景とするものと思われる。平安時代には製鉄に加え、第31次調査で瓦の生産も行なわれている。

古代末に桑原庄さらには糸島半島全域が怡土莊に含まれて以降、今津湾の湾口にある今津が重要な港湾として存在する。鎌倉期の輸入陶磁器が出土する小集落及び墓が遺跡群内で散見できるものの、全体としては、当地は南北朝期から戦国期に山城が作られたのを除くと、現在に至るまで農村として推移していったものと思われる。第36次調査では大型円墳の南から西側に江戸時代以降の墓地が営まれているが、その一部が盛土状を成すものあり、当初は小さな土饅頭を作っていたものであろう。

当遺跡周辺の遺跡を、特に弥生時代中期から古墳時代前期が出土した今回報告する第42次調査の関連から見ると、第42次調査のすぐ西側（現福岡農協倉庫）で前原市教育委員会（当時）が調査を行い、弥生時代中期の掘立柱建物群などが検出されている。古今津湾の湾奥には国史跡志登支石墓群があるが、その南側では潤地頭給遺跡の調査が前原市教育委員会（当時）によって行われている。当調査区とほぼ同時期の住居や河川から大量の土器の他、玉造り跡などが発見されているが、当調査区II区で出土した船材と考えられる木製品がこの遺跡でも出土している。可也山の東側には弥生時代後期の大型建物群が検出された一の町遺跡がある。可也山の西側の海岸沿い御床松原遺跡があり、半両銭・貨泉が出土している。今津湾の湾口南側には国史跡今山遺跡がある。この東麓で第8次調査が行われ、庄内期～布留古式期の製塙跡が発掘されている。大量の製塙土器・蜻蛉・土師器とともに、外来系土器群・半島系土器群が出土している。

表2 調査報告書一覧

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報1			
元岡・桑原遺跡群1	第2次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第693集	2001
元岡・桑原遺跡群2	桑原石ケ元古墳	福岡市埋蔵文化財調査報告書第743集	2003
元岡・桑原遺跡群3	第3・4・8・11次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第725集	2002
元岡・桑原遺跡群4	第12・15・24次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第744集	2003
元岡・桑原遺跡群5	第13・17・25・29・37次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第829集	2004
元岡・桑原遺跡群6	第22・27・28・34次・金屋古墳・石ヶ原古墳	福岡市埋蔵文化財調査報告書第860集	2005
元岡・桑原遺跡群7	第28次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第861集	2005
元岡・桑原遺跡群8	第20次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第909集	2006
元岡・桑原遺跡群9	第26次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第910集	2006
元岡・桑原遺跡群10	第46次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第912集	2006
元岡・桑原遺跡群11	第23・30・36次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第962集	2007
元岡・桑原遺跡群12	第7次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第963集	2007
元岡・桑原遺跡群13	第20次・2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第964集	2007
元岡・桑原遺跡群14	第12・18・20次・3	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1011集	2008
元岡・桑原遺跡群15	第33・40・41・44・47次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1012集	2008
元岡・桑原遺跡群16	第18次・2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1013集	2008
元岡・桑原遺跡群17	第31次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1063集	2009
元岡・桑原遺跡群18	第20次・4・36次・2・38・45次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1064集	2009
元岡・桑原遺跡群19	第9次・18次・3	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1102集	2010
元岡・桑原遺跡群20	第43・48・49・50・51・54次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1103集	2010
元岡・桑原遺跡群21	第42次・1	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1105集	2011
桑原遺跡群1	第1次発掘調査報告	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1172集	2012
桑原遺跡群2	飛鶴貝塚第1次調査	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1173集	2012
		福岡市埋蔵文化財調査報告書第1174集	2012
		福岡市埋蔵文化財調査報告書第432集	1995
		福岡市埋蔵文化財調査報告書第480集	1996

III 第42次調査I区の調査記録

1 I区の概要

調査区は全体が幅約100mの谷の中に位置しており、調査中に水の通り道になることが予測できたため、調査区最南端の最も低いところにポンプを設置することになり、平成16年10月1日に重機でポンプ置き場周辺の表土剥ぎを開始した。ポンプ設置部分（約25m²）の数倍の広さの表土（深さ約2.5m）を除去した後に、ポンプ設置部分の包含層（SD01覆土、厚さ約1m）を重機で除去して、ポンプを設置した。除去した包含層内遺物については、作業員によってすべての遺物を取り出した。その中には大量の土器の他、ねずみ返し等の木製品も含まれていた。

その後、表土が1～2.5mと厚いため、42次東半分（I区）の約3,000m²の表土剥ぎと土送りに1ヶ月以上を要した。その間、上述のポンプ部分の包含層遺物の取り出しを行い、作業員を投入して掘り下げにかかったのは、年が明けた平成17年1月からである。まず全体を清掃し、調査区東壁沿いに流れる幅約30mの自然流路を確認した。この時点で、特に自然流路部分に北の丘陵部分から水が流れてきており、水の通り道を造るために排水溝を掘削した。これ以降調査中の全期間において、北側の上方から毎日薄々と水が流れ、調査の進行に大きな妨げとなった。

自然流路（SD01）は東壁沿いに北側の高い方から流れ、調査区南際近くで大きく西に曲がり、さらに約10mほどで再度南に曲がっている。全面清掃後、SD01が大きく曲がるコーナー部分にトレチを入れた。トレチ内からは大量の土器が出土し、中には半完形の土器も出土することから、地山まで掘削することなく、途中でトレチの掘削をあきらめた。トレチの掘削中に、調査区全体に10mおきに杭を打ち、南から北に1・2・3・・・、西から東にA・B・C・・・とグリッドを設定した。ただし、番号の振り方を失敗し、42次I区の調査途中から残りの西半分を調査しなければならなかったにもかかわらず、I区の西からA・B・Cと振ってしまったため、42次II区のグリッド番号を東から西にA・Z・Y・X・・・と振らざるを得なかった。

上記のトレチ掘削中止後、SD-01の南西の端（主にB-1グリッド）から掘削を始め、その後C-1・2グリッド、D-1・2グリッド、E-1・2グリッド、D・E-2グリッドと、SD01を南から北に掘削していく。調査開始後から大量の土器が出土し、わずか数ヶ月で数百箱を数えた。その中には、弥生時代終末頃の土器に、格子目タキを施した土器が含まれていた。掘削開始後2ヶ月目には、小銅鐸2点や貨泉・銅鋤先・土製勾玉などがまとまって出土した。

E-1区になると、流路の落ち際（南側の立ち上がり部分）に古墳時代初頭の大型土器群がまとまって出土し、その下にも大量の土器が埋まっていることが判明した（土器群5）。結果的には弥生時代中期後半以降ほぼ切れ目無く層を成して埋没しており、その部分だけで、500箱近い遺物が出土した。

平成17年度の夏によくD・E-2区に調査は進んでいったが、D-2～3区のSD01落ち際には弥生時代中期を主体とする土器が、まさに立錐の余地もないほど出土した（土器群9）。流路の中央部分は幸い大量の土器の出土ではなく、かわりに木製品が出土するが、掘削は比較的順調にいった。

17年の12月～4月は、諸般の都合からI区を中断し、2区の調査を行った。

川の中からは随所に湧水が伴い、オートポンプは休み無く稼働していたが、大雨が降るとポンプがオーバーヒート状態となって稼働を停止し、現場は水たまり状態となって、水をくみ出すのに数日を

要することがたびたびあった。特に平成 18 年 6 月 24 日の大雨では、一夜で 100mm 以上の雨が降り、ポンプが停止してほぼ全調査区が水没した上に、大量の土砂が調査区内に流入した。その後も 7 月中旬まで断続的に雨が降り、結局排水に約 1 ヶ月、土砂の除去に約 3 ヶ月を費やした。この間調査の主力は比較的土砂の流入の少なかった II 区の方に注がざるを得なかつた。

平成 18 年度末には、I 区の調査もその大半を終了し、平成 19 年 3 月に I 区の全景を撮影することができ、全体測量・1/20 実測等も終了し、川のベルト撤去と E-E 1 区の一部拡張のみが平成 19 年度の当初に残り、19 年度以降は担当者が米倉から常松に交代し、II 区の調査へと完全に移行した。

II 区では I 区で検出した自然流路と別の自然流路（SDO 2）を検出した。この流路は SDO 1 とほぼ同規模で、出土遺物の時期もほぼ同じ時期幅であるが、各時期の流路の状況や、出土遺物の内容には差があった。

SDO 1 と SDO 2 の間は調査区南半がシルト層を地山とする沖積層で、雨水等が掘削した自然の穴が大半であったが、調査区北側の第 52 次調査近くではシルト層から北の丘陵端部の層へと移行していく、竪穴住居や建物群が築かれている。それとは別に I 区調査区中央で、大型の建物 2 棟と弥生時代中期の完形赤彩土器群が出土した。

I・II 区あわせて約 1 万箱近い土器、絵画入り琴・船の部材・農具・工具などを含む 500 点以上の木製品、小銅鐸 2 点・9 枚の中国錢（貨泉 8 枚・五銖錢 1 枚）・小型仿製鏡 2 点を含む金属製品、縄文時代～弥生時代の石器などが出土し、総量はコンテナ 1 万箱を超える。土器の中には楽浪土器を含む朝鮮半島系土器、その影響を受けた日本製の土器、九州以東の各地の土器などが含まれている。また絵画上器が II 区から数点出土した。

上記のように第 42 次調査では大量の遺物が出土しており、本書を含めて数冊に分けて刊行する。また第 52 次調査は本調査に北隣する調査で、本調査からつながる遺構が発見されている。本書では第 42 次調査の I 区の遺構と遺物の一部（主に A～F-1・2 区）を報告する。ただし遺構の内、I 区北西側で検出した建物群は、II 区及び第 52 次調査で検出した竪穴住居や建物群と一連の遺構であることから、後続する報告書で詳報する。

2 層序

層序は場所によって若干異なっているが、II 区調査区南壁（SDO 2 内）中央では次の通りとなる。

1 層：表土・客土：50cm～1m

2 層：暗灰色～青灰色シルト質土壤、部分的に砂層を挟む：1～2m

数枚の水田土壤、このうち部分的に個蹄目足跡が見られる部分あり。

3 層：自然流路埋土：最深部で 1m 前後

4 層：シルト質土壤と粗砂の互層（一部粘土含む）：1m 前後

調査区南端では 4 層までしか掘れなかつたが、D-E 5 区で遺構面を掘り下げて、遺構面（3 層上面）下約 120cm で、その下の層（5 層）を確認している。この層は、D-E-4 区以北の SDO 1 底面の層である。

5 層：黒色粘質土（粘土に近い、樹木含む）

基盤層は花崗岩岩盤であるが、I 区で基盤層を確認できたのは、D-F の各区のみで、A-C は最深部で地表から 5m 近く掘り下げたが、基盤層まで達していない。5 層で出土した樹木片の C¹⁴ 年代は、19,110 ± 70 年 B.P. であり、氷期最盛期に堆積した土である。4 層の年代は明確ではないが、

3層最下層の遺物が縄文時代晚期であることから、それ以前の堆積である。

2層の数枚の水田については、正確な年代はわからないが、最下面の水田の下には、ほぼ同質のシルト層が50cm以上あり、遺構面はこの下にあるが、その遺構面上には、不定形の土坑がA・B—1～4区にかけて多くあり、これらの不定形土坑は、南側がオーバーハングし主に砂が堆積しているものと、オーバーハングせずにシルト質の土壤が堆積しているものがある。前者は北側上流から大雨時などに水の流れにより自然に穿ったものと考えられ、弥生土器などが含まれている。後者のうち一部は水田開墾時にあいた坑の可能性もある。その中から弥生土器の他、糸切り土師器皿・近世国産磁器などが出土した。これらの土坑群の標高は、図4の柱状図に最も近い地点で標高8.5～8.8mを測り、南壁土層図最下層水田の高さ(9m弱)から考えて、最下層の水田も近世以降のものと判断して構わないものと思われる。表土剥ぎ時には、最下層の水田面で一度遺構検出を行い、一部砂で覆われている部分があったものの畦等を確認するまでに至らなかった。なお、砂がかぶっている部分には偶蹄目と思われる足跡が散見できた。

以上の状況から、約2万年前頃、谷の中に穏やかに粘質土がたまり、おそらく縄文海進後の海退期に急速に砂とシルトが堆積、その後縄文時代晚期には少なくとも東側に自然流路が形成され、その後流路が埋まつたものと判断できる。流路がほぼ埋まつた時期は、最上層から6世紀以降の須恵器と奈良時代の土器・鉄鋤が出土することから、概ねこの時期と考えられるが、その時点でも流路部分はごく浅いU字形を呈している。

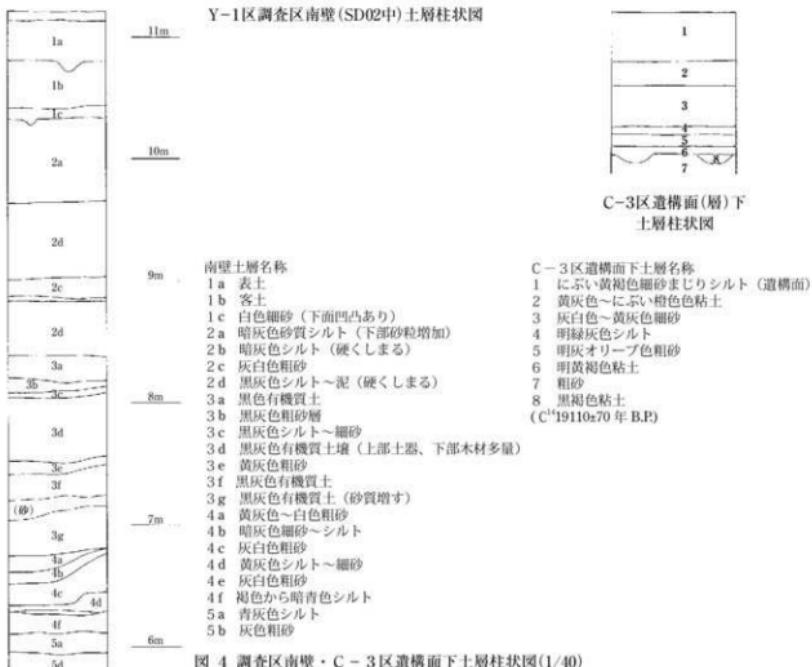


図4 調査区南壁・C-3区遺構面下土層柱状図(1/40)

3 I 区の遺構

I 区で検出した遺構は、幅 30 m 前後の自然流路とそれに伴う小溝群及び関連遺構、掘立柱建物 3 棟である。掘立柱建物の内 1 棟は、調査区北西の拡張区で検出したもので、その一部は 52 次調査区に延び、この遺構と関連する遺構群が 42 次 II 区及び 52 次調査区にあることから、42 次 II 区報告時にあわせて報告する。

(1) 自然流路 S D O 1

I 区を南北に貫通する谷部に流れる自然流路である。北から流れてきた流路は調査区南端近くで流れを西向きに大きく変え、30 m 先でさらに南に向きを変えている。この流路の延長線上では第 46 次調査が行われ、流路の続きは見つかっておらず、46 次調査区西側の試掘トレンチでは深さ 3.5 m まで掘削し、シルト層が続いている地山を確認できていないことから、流路は第 46 次調査区のさらに西側を流れいくものと思われる。また調査区内では西側 II 区を流れる流路 S D O 2 とはつながっていないが、両流路をそのまま延長すると、調査区外でつながる。流路の東壁の大半が調査区外にあるが、確認できる部分では幅 25 ~ 30 m 前後、深さ 1 ~ 1.5 m を測る。遺構内の埋土は、流路であるが故に各場所によって大きく異なっている。以下、場所ごとに埋土の状況を見る。

B - 1・2 区東壁 (図 5、図版 11)

この図面は南側の半分ほどですでに遺物包含層の上部を 10 ~ 20 cm ほど除去している。ここで特徴的なことは、遺物を包含する層の下面がほぼ平坦面を成していることである。図の太線部分から上が遺物を包含している。また流路の北側の立ち上がりは他地点に比べて直線的でやや急である。遺物を包含する層の大半は 2 層（暗灰色微細繰り土）で、弥生時代中期後半頃～後期の土器を包含している。この層は北側立ち上がりでは 60 cm 以上の厚い層で、細分を試みたができなかった。この層の上に厚さ 20 cm に満たない黒色土層（1 層：上層）があり、弥生時代終末前後の土器を包含している。この地点は平面を見ても全体が四角に整形している状況を呈しており、人工的に改変している可能性を感じる。図の中央から南側の大半は遺物をごく少量しか含まない層で、出土した数点の土器はいずれも縄文時代晚期のものと思われる。この最下層から出土したドングリの C¹⁴ 年代は、2480 ± 25 年 B.P. である。なお、ここでの流路の地山は大半がシルト層である。

No. 1 トレンチ土層 (図 6、図版 12)

調査の最初にトレンチを入れた、流路屈曲部の土層断面である。流路中央付近の埋土は大きく 3 種類に分かれる。上層は黒褐色を呈する腐葉土状の土で、その下が灰色系の粘質土、下層が砂層である。上層は弥生時代後期後半以降、下層が弥生時代中期中頃の土器を包含している。ただし南側壁近くでは弥生時代中期包含層が厚くあり、弥生時代後期後半層は溝の南端までは伸びず、同後期後半には溝幅が狭くなっていたと考えられる。この状況からは弥生時代中期には水がよく流れ、次第に淀みとなって溝幅も狭まっていき、弥生時代後期後半には腐葉土を形成する湿地状になったと推定できる。C - 1 区と D - 1 区で出土した 2 点の小銅鐸はこの上層下部から出土した。この部分での流路中央部分は花崗岩岩盤を削りこんでいる。

D・E - 3 区北壁

No. 1 トレンチと同様に上部に腐葉土層、下部に砂層があるが、その間の粘質土層はあまり見られない。また流路東側では、上部腐葉土層はさらに 2 つに分かれ、下部腐葉土層には後期後半以前の弥生土器が含まれている。流路中央部分は花崗岩岩盤を削っている。

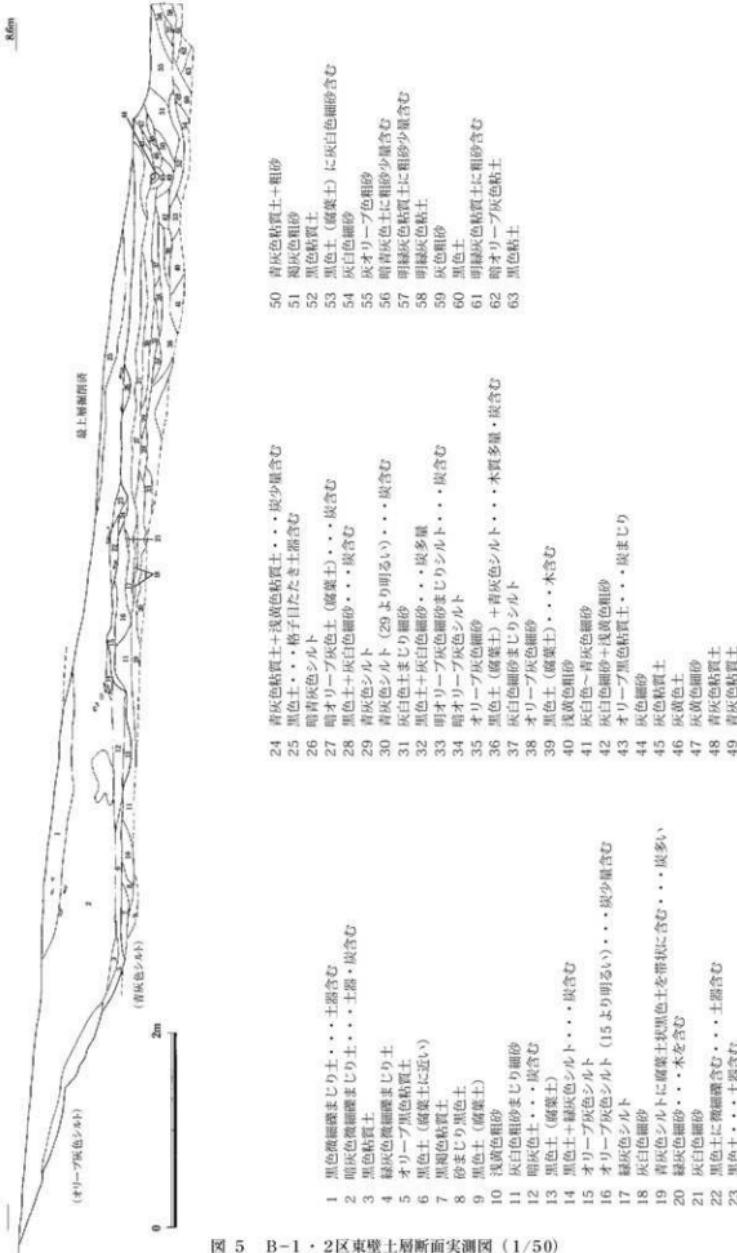


図 5 B-1・2区東壁土層断面実測図 (1/50)

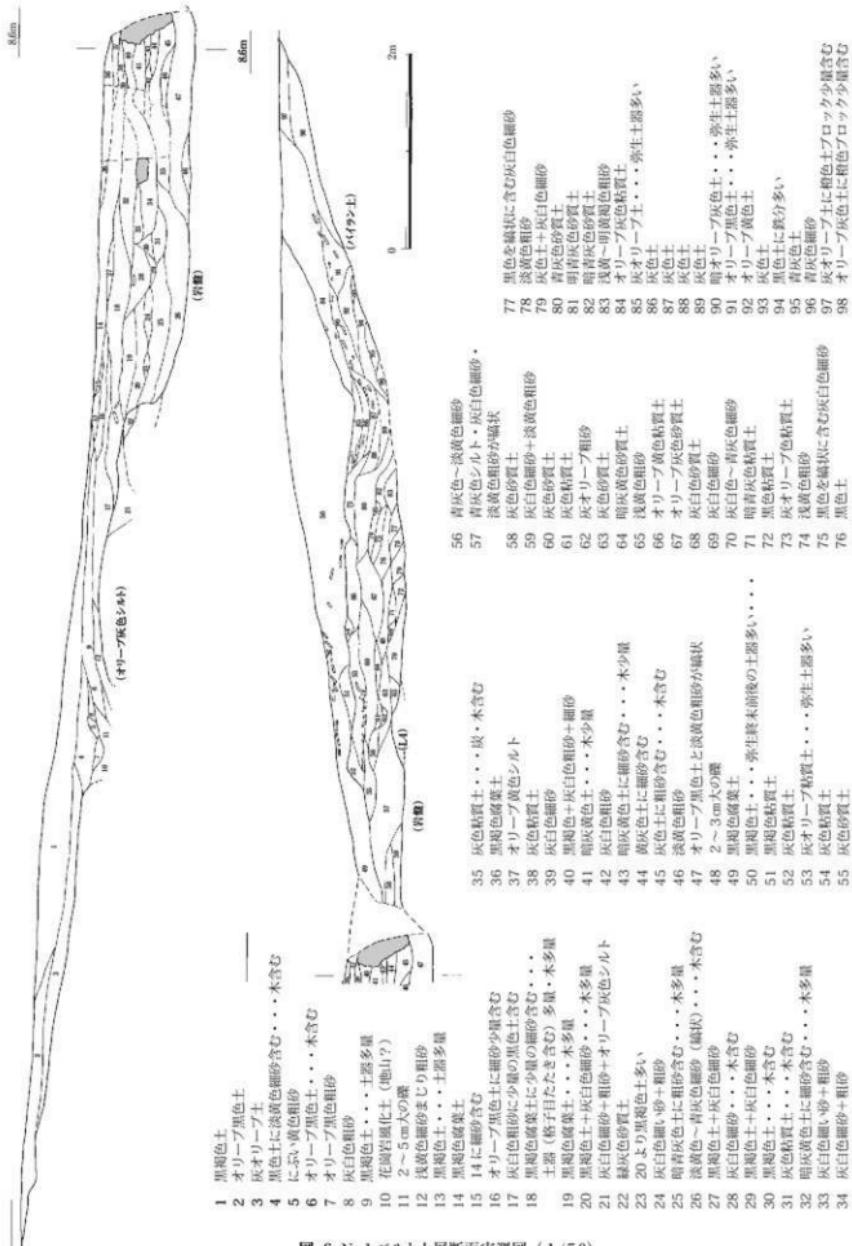


図 6 No.1 ベルト土層断面実測図 (1/50)

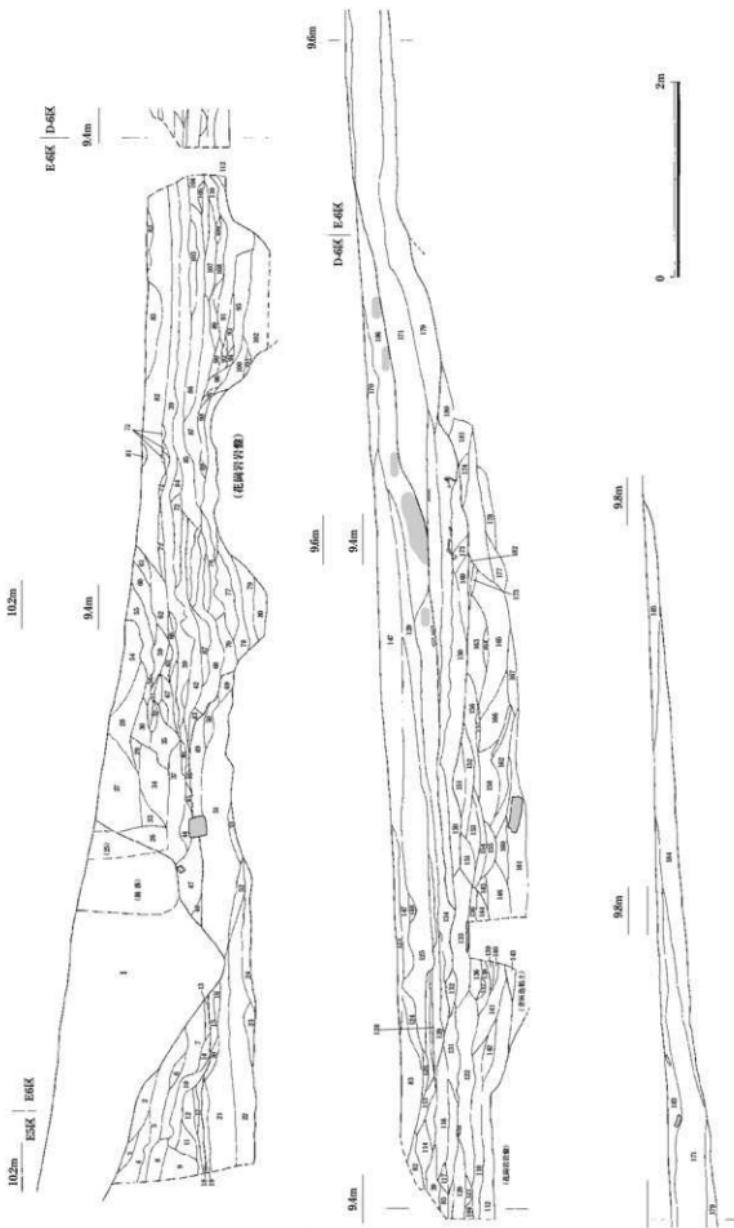


图 7 C~F 6区南壁土层断面实测图 (1/50)

1	棕色を主体とする混合土(客土)	94	砂まじり黒色土(礫集土)
2	緑色粘質土	95	明緑色細砂
3	赤オーブ粘質土	96	オリーブ灰褐色土(木少量)
4	浅緑色粘土	97	明緑色細砂
5	4より深い色	98	灰緑色細砂(鉛文)
6	明緑色砂まじり粘質土	99	灰白色～淡黄色細砂
7	花崗岩風化土(骨・白・黒色)	100	青灰色粘土(礫集土)
8	花崗岩風化土(骨分を強く含む)	101	青灰色粘土(鉛文)
9	花崗岩風化土(骨・白・黒色化)	102	粗砂を含む5cmの層(薄)
10	花崗岩風化土(骨・白・黒色)	103	青灰色粗砂まじり土
11	花崗岩風化土(白・黒色)	104	青灰色粗砂まじり土
12	花崗岩風化土(骨分を強く含む)暗色化	105	青灰色粗砂
13	花崗岩風化土(骨分を強く含む)暗色化	106	緑灰色粗砂まじり土(木多い)
14	明青灰色粘質土	107	淡黄色細砂まじり粗砂
15	黒色細砂	108	明緑色砂まじり粗砂
16	明青灰色細砂	109	灰褐色細砂
17	花崗岩ペラント(骨分強)	110	青灰色粗砂まじり土(木多い)
18	さび色細砂(骨分強)	111	青灰色粗砂まじり土(木多い)
19	灰青色細砂	112	淡黄色～青灰色粗砂まじり2～20cmの層
20	灰青色細砂中に微小粒がブロッケ状(木含む)	113	黑色土を少額含む黄色粗砂
21	2～5cmの層を含むさび色細砂(骨分強)	114	黑色土を少額含む白色粗砂
22	2～5cmの層を含む灰褐色細砂	115	黒色土を多く含む淡黄色粗砂(鉛文)
23	青灰色粘土	116	淡黄色～白色粗砂(木・鉛文)
24	5～20cmの層	117	黑色土を少額含む白色粗砂
25	黒色土	118	灰褐色砂を帯部に含む淡黄色粗砂
26	灰黑色	119	灰白色細砂
27	青みを帯びた灰白色細砂質土	120	暗緑色細砂まじり土(鉛文)
28	明オーブ灰褐色シルト	121	灰白色細砂(木)
29	28よりやや高い、	122	オリーブ灰褐色粗砂質土
30	黒色土	123	前オーブ灰褐色シルト
31	明オーブ灰褐色シルト	124	オリーブ灰褐色シルト(淡黄色・黒色シルトを含む)
32	黒色土(礫集土)	125	青灰色細砂(木)
33	明緑色細砂	126	2～3cmの層まじり青緑色細砂
34	緑灰色シルト(土器多量)	127	黑色土(礫集土)
35	青緑色粘質土	128	淡黄色細砂・黒色土
36	黒色土(礫集土)	129	オリーブ灰褐色粗砂(木)
37	黒色土(礫集土)	130	前オーブ灰褐色粗砂(木)
38	黄白色	131	灰褐色粗砂(木)
39	黒色土(礫集土)	132	灰白色粗砂(木)
40	黒色土(礫集土)	133	オリーブ灰褐色粗砂(木)
41	黒色土(鉛文)	134	淡黄色細砂質土
42	白色粗砂	135	オリーブ灰褐色粗砂(木)
43	緑灰色砂まじりシルト	136	青灰色粗砂
44	オリーブ灰褐色砂質土	137	オリーブ灰褐色粗砂
45	節オリーブ灰褐色質土	138	灰白色細砂
46	黄白色細砂	139	黄・樹枝
47	緑灰色砂まじりシルト		
48	明緑色シルト(学生遺構面)	94	砂まじり黒色土(礫集土)
49	緑色細砂(骨)	95	明緑色細砂
50	緑色細砂(骨含む)	96	オリーブ灰褐色土(木少量)
51	5～10cmの層を含むオーブ灰褐色細砂(鉛文)	97	灰褐色土(木・礫集土)
52	黒色土(骨を多く含む・鉛文)	98	明緑色細砂(鉛文)
53	オリーブ灰褐色細砂	99	灰白色～淡黄色細砂
54	青灰色粘質土	100	青灰色粘土(鉛文)
55	明緑色細砂質土	101	青灰色粗砂
56	青褐色シルト	102	粗砂を含む5cmの層(薄)
57	黒色粘土	103	青灰色粗砂まじり土
58	灰ナリーブ粘質土	104	青灰色粗砂まじり土
59	黒色粘土	105	青灰色粗砂
60	淡黄色細砂	106	緑灰色粗砂まじり土(木多い)
61	オリーブ灰褐色質土	107	淡黄色細砂まじり粗砂
62	明青灰色シルト	108	明緑色砂まじり粗砂
63	淡黄色細砂(骨)灰褐色土(木)五層	109	灰褐色細砂
64	青色シルトと灰褐色土の互層	110	青灰色粗砂まじり土(木多い)
65	浅黄色細砂まじり土	111	青灰色粗砂まじり土(木多い)
66	67 黒色土(骨色化)	112	淡黄色～青灰色粗砂まじり2～20cmの層
67	68 黒色土(骨色化)	113	黑色土を少額含む黄色粗砂
68	砂まじり黒色土	114	黑色土を少額含む白色粗砂
69	51より石多く黒い、	115	黒色土を多く含む淡黄色粗砂(鉛文)
70	黒色土(骨化)	116	淡黄色～白色粗砂(木・鉛文)
71	72 黒色シルトと白色シルト互層	117	黑色土を少額含む白色粗砂
73	74 黒色土(骨色化)	118	灰褐色砂を帯部に含む淡黄色粗砂
74	75 黑色土(骨)	119	灰白色細砂
75	76 黑色土(骨)	120	暗緑色細砂まじり土(鉛文)
76	77 2～3cmの層を含む黄色細砂	121	灰白色細砂(木)
77	78 2～3cmの層を含む灰褐色細砂	122	オリーブ灰褐色粗砂質土
78	79 淡黄色細砂(骨)と白色細砂	123	前オーブ灰褐色シルト
79	80 5～10cmの層を含む灰白色粗砂	124	オリーブ灰褐色シルト(淡黄色・黒色シルトを含む)
80	(鉛文・骨付)土器多量)	125	青灰色細砂(木)
81	82 灰褐色シルトを挟む灰白色シルト	126	2～3cmの層まじり青緑色細砂
82	83 84 オリーブ色土(鉛文)	127	黑色土(鉛文)
83	85 86 青緑色細砂	128	淡黄色細砂・黒色土
84	87 88 青緑色細砂	129	オリーブ灰褐色粗砂(木)
85	86 黒色土(鉛文)	130	前オーブ灰褐色粗砂(木)
86	87 青緑色細砂	131	灰褐色粗砂(木)
87	88 細粒の青緑色	132	灰白色粗砂(木)
88	89 89 青緑色細砂	133	オリーブ灰褐色粗砂(木)
89	90 脳髄灰灰褐色粗砂	134	淡黄色細砂質土
90	91 黒色土(鉛文)	135	オリーブ灰褐色粗砂(木)
91	92 93 明緑色砂まじり黒色土	136	青灰色粗砂
92	93 明緑色砂まじり土(木少量)	137	オリーブ灰褐色粗砂
93	94 明緑色砂	138	灰白色細砂

C～E—6区南壁（図7、図版10）

東側には大きな搅乱があるが、この搅乱は溝状を成している。その地点を除いて、最上層はシルトもしくは砂層である。この層の上面には6世紀の須恵器を含んでいる。その下に他地点同じように腐葉土層があるが、厚さ10～20cmと薄い。下部は砂層を主体とする。特に東半の岩盤上に乗る最下層は小礫混じりの粗砂層で、縄文時代晚期の遺物を包含している。西半の下部砂層は無遺物層で、縄文時代晚期の流路底面よりさらに下になるものと思われる。上層のシルト層・砂層の下の腐葉土層出土の種実C¹⁴年代は1760±25年B.P.、縄文時代晚期層出土の種実のC¹⁴年代は3055±25年B.P.である。

以上の状況から見れば、もともとは広い谷であったが、次第に谷が埋まり、縄文時代晚期には幅30m、深さ1.5m前後の浅い流れとなった。この時期から弥生時代後期前半にかけては厚さの薄い砂を主体とする土層群（下層）で部分的に腐葉土層をレンズ状に含んでおり、ほぼ常時水が流れているものと判断できる。溝底中央付近で出土する土器片の量が少なく、ローリングを受けたものがあることもこれを傍証している。上層は腐葉土層を中心とする層で、弥生時代後期後半以降の土器が含まれる。この時代にはには水の流れもかなり細くなり、その大半は水が淀むか湿地状になって腐葉土層が形成されたものと考えられる。この層のが形成し始めた時期に、小銅鐸2点を中心とする祭祀遺物が出土していることは象徴的である。

遺物の出土状況

流路S D O 1内には少量の縄文時代前期～後期土器が含まれるが、プライマリーな状況で出土するのは縄文時代晚期以降で、特に弥生時代中期中頃以降古墳時代初め頃まで大量の遺物が出土し、最上層には古代の土器・鉄滓を含んでいる。その総量は、土器がコンテナ4500箱、石器50箱、木製品150点、その他金属器・土製品などが出土した。遺物は時期により出土状況が異なっている。縄文時代晚期は流路の部分部分で出土するが、D・E 6区には溝底に厚めの包含層がある。弥生時代中期以降は全域で出土するが、大量投棄の始まった中期中頃は、2棟の大型壠方を持つ建物2棟のすぐ脇のD-4区で赤彩の壺・高环などの完形品が出土する以外は、一部を除いて多くが破片の状態で出土する。中期以降後期後半まで同じ状況である。後期後半になるとC-1区・D-1区で小銅鐸2点などの青銅器群などが出土している。弥生時代終末前後になると、C-1区・D-1区・E-1区で大型土器が相当量投棄されている。この大型土器群とともにスサ入り焼成粘土塊が出土している。また朝鮮半島系土器群・半島系調整具を使った土器群なども出土している。

これらの遺物は、まとまりごとに土器群としてI区では土器群1～15までの名称を付した。詳細な出土状況は、各区の出土遺物の項で説明を付し、ここでは大略の位置と状況を述べる。土器群1～3はD-1区のS D O 1南斜面上にある。3つのまとまりがあるため、3つの土器群に分けたが、同じ斜面の流れで時期的にも大差ない。このうち土器群3は極めて少量であった。

土器群4～6はNo.1トレチの東側、S D O 1 E-1区の南斜面上にある。最初に検出したまとまりを土器群4～6に分け、その面の土器を除去後に検出したものを土器群4 B・5 B・6 Bの名を付し、5 Bのさらに下のものを5 Cとした。5 Cの下からはE-1区全体に数ヶ所の小さなまとまりの群があり、これらを5 D～5 Gとした。さらに間層を挟んだ下には弥生時代中期から後期前半の土器群がある。この土器群4～6だけでコンテナ500箱を越えている。

土器群7・8・10・11～13はB-1・2区からD-1・2区のS D O 1北側斜面にある。このうち土器群7は散漫とし量も少ない。土器群8は大形土器のみからなる。この土器群8の下約20cm

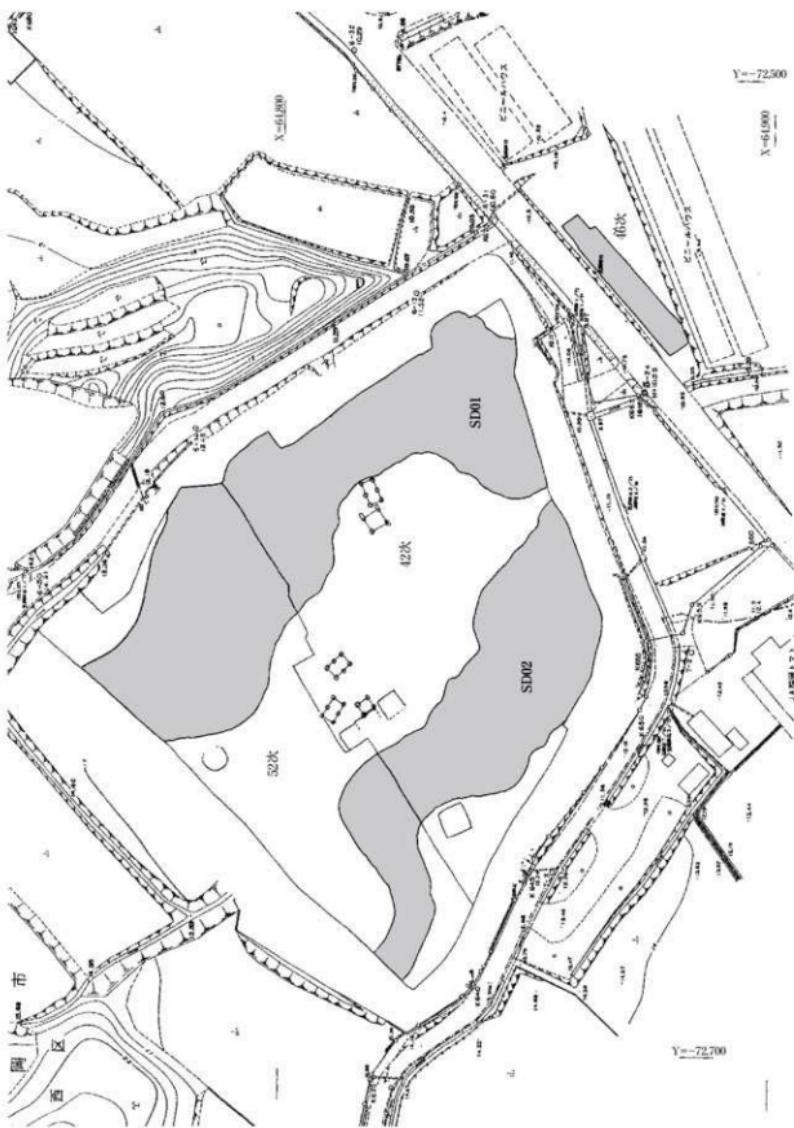


図 8 元岡・桑原遺跡群第42次調査区主要遺構配置図(1/1,000)

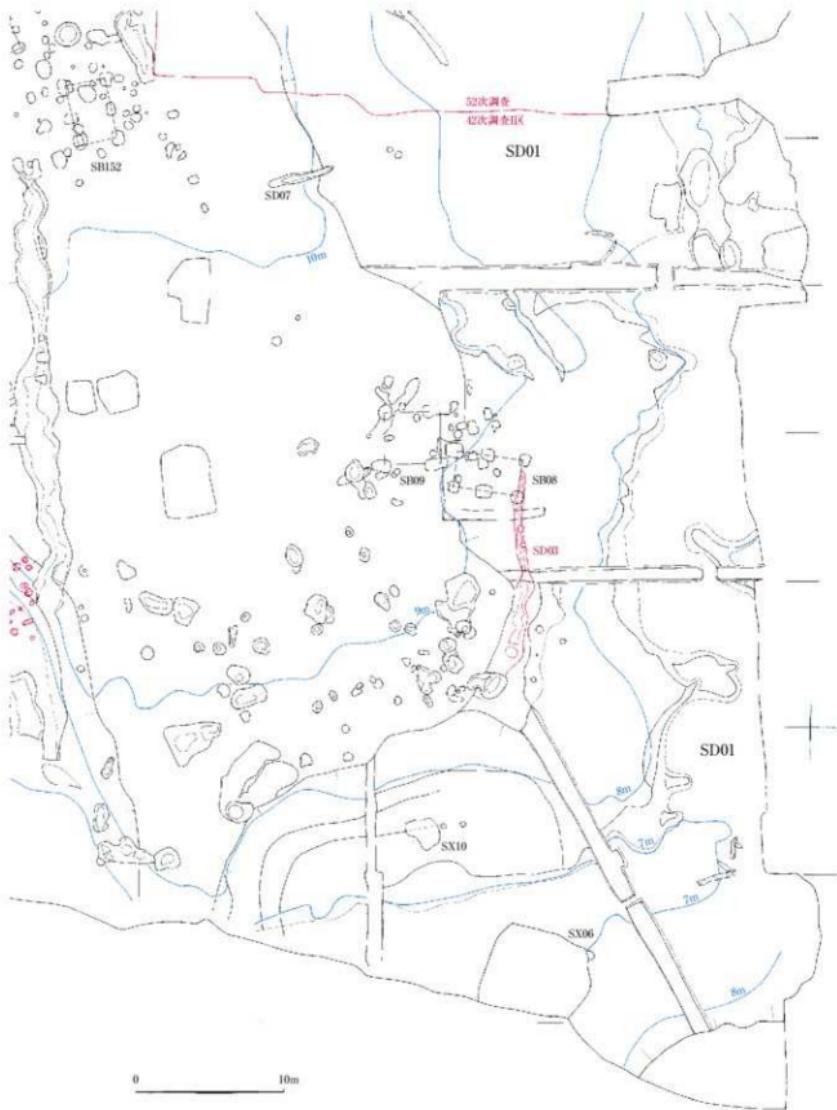


図 9 第42次調査I区遺構配置図(1/300)

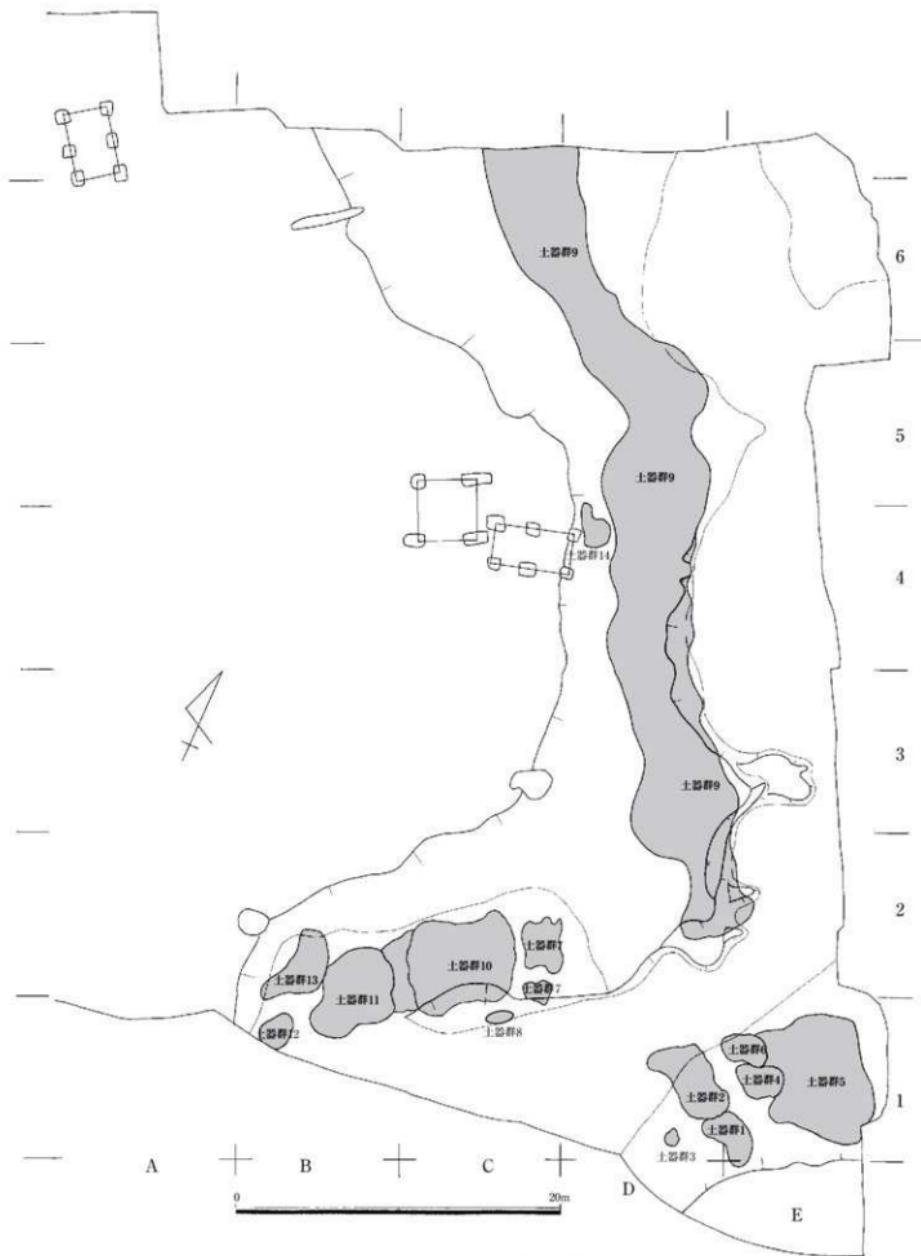


図 10 土器群位置図 (1/300)

のところから小銅鐸 1 点が出土し、同じレベルで長さ 10 m 以内の範囲から小銅鐸がもう 1 点・銅製鋤先 1 点・貨泉 1 点・銅鑓 1 点・土製勾玉 3 点が出土した。土器群 10・11 は B-1・2 区から C-1・2 区にかけてつながった土器群で、C-1 区の群を土器群 10、B-1 区の群を土器群 11 とした。この土器群は完形品が少なく、量的にも土器群 5 と比べると多くはない。土器群 7 も含めて特徴的なのは、最上層から樂浪系土器を含む朝鮮半島系土器や、格子目タタキを施した土器群が多く出土することである。格子目タタキを施した土器は、先の土器群 4~6、II 区の調査区南端でも出土するが、この地点での出土量が圧倒的に多い。

D-2 区から調査区北端の S D O 1 西斜面に延々と土器群が続き、まとめて土器群 9 の名称を付した。途中遺物の粗密はあるものの、ほぼ長さ 50 m 以上に渡って土器群が続いている。D-2 区から D-5 区までは厚みはさほどないが、C・D-6・7 区は流路が西側に広がっており、その流路を埋めるように、土器群最下層から最上層まで 1 m 近い厚さがあり、上層から最下層まで 5 個に分けて取り上げた。最上層は一部古墳時代後期の遺物を含み、最下層は弥生時代中期後半のみが出土している。なお、これらの土器群の下の砂層から部分的に縄文時代晚期の遺物が出土する。

流路の中央部では、上層（腐葉土層）からは点々と遺物の小群が出土するが、下層（砂層・粘質土層）では遺物量は多くないが、木製品が多く出土する。

(2) S D O 1 に付随する溝

流路 S D O 1 に付随したと考えられる溝がいくつかある。

S D O 3 (図版 21)

D-4・5 区で S D O 1 のすぐ西側で断続的に 15 m ほど検出した。幅 60cm 前後、深さ 10cm 前後を測り、溝の数カ所がピット状にさらに 15cm 前後深くなっている。全体で S D O 1 がかなり埋まってしまった後に形成されている。埋土は下部が砂で上部が粘質土。自然にできた小流路と思われる。なお、この溝の一端は当初 S D O 2 の名を付していたが、II 区の自然流路にその後 S D O 2 の名前を付けたので、延長線上にある溝と同じ名称 S D O 3 で統一した。

S D O 4 (図 11、図版 21)

C・D-5 区で検出した。S D O 1 から斜めに派生するようにつながった溝である。もっとも広い部分で幅 5 m、深さ 80cm を測る。北側はベルト内で立ち上がり、南側は傾斜に沿って自然消滅する。砂と粘質土・シルトから成り、何度も流れが変わっている。下部は遺物量が少なく、最上部に土器片が多く入っている。

S D O 7

C-6 区から D-6 区で検出した、S D O 1 に直交する小溝である。幅 50cm、深さ 10cm で、C-6 区で始まり、そのまま S D O 1 につながって消滅する。この溝の上には土器の小破片が流れたようになたまっている。土器はほとんどが小さな破片で、弥生土器だけではなく、土師器・須恵器の他、小型・製鏡 1 面、貨泉 1 点が含まれている。古墳時代以降に流れてたまつた遺物群と思われる。

(3) S D O 1 底面で検出した遺構

S D O 1 床面近くで検出した遺構である。

S X O 6 (図 13、図版 21)

D-1 区で検出した。西半分をポンプ設置時に掘削した穴によって一部を破壊している。S D O 1



図 11 SD04 土層断面実測図 (1/50) 及び SX06 実測図 (1/20)

の底（花崗岩岩盤）に、幅 55cm、深さ 25cm の穴を掘り、その周囲に杭を 8 本打ち込んでいる。穴の中に何かを入れ、それを固定するために杭を打ち込んだ遺構と考えられ、加工のために木を固定したもの、水さらしのためにドングリを入れたかごを固定するものなどの用途が考えられる。

S X 10 (図版 21)

C-1 区で検出した土坑状の穴に遺物の取り上げの関係上 S X 10 の番号を付けたが、全体的に浅く、S D 0 1 の一部と考えられる。

ドングリが詰まつた小溝

B-1 区で検出した。特に遺構番号はつけていない。B-1 区では S D 0 1 の遺物を含む層の下に人工遺物をほとんど含まない層が厚さ 20cm 前後あり、この溝は無遺物層の下の S D 0 1 床面で検出した。ほぼ矩形に折れ曲がり、南側は調査区外に延び、東側は B-1 区と C-1 区間のベルト部分で立ち上がる。幅約 60cm、深さ 10cm 前後を測る。人工遺物は 1 点も出土しなかったが、溝内に種実が大量に入っていた。全点は取り上げられなかったが、同定を行った 1108 点の内、アカガシ亜属が約 700 点以上と最も多い。このうちの 1 点を C¹⁴ 年代測定を行ったところ、2480 ± 25 年 B.P. の年代が測定された。

(4) 掘立柱建物

C-4 区周辺で 2 棟の掘立柱建物を検出した。1 棟 (S B 0 8) は 1 × 2 間、もう 1 棟 (S B 0 9) は 1 × 1 間で、2 棟はともにやや大型の偏方を持つが、その規模や方位は異なっている。またこの周辺には建物にはならないものの、ピットが散在する。この地点は流路 S D 0 1 の肩が奥の方に

入り込んでおり、調査始めの掘削開始時は遺物をごく少量含む灰黒褐色粘質土が広がり、この2棟の建物は検出できず、前述の溝SD03が走っており、SD03はSB08廃棄後のものである。

SB08（図13、図版13・19）

C-4区からD-4区にかけて検出した。検出した面は、この地点の遺構面である淡黄色シルトが近くなっている。遺構の残り状況からも実際の掘り込み面はさらに上にあり、実際の掘り込み面で検出しきれていないものと思われる。SB08の南東隅柱穴と重なっているSD03の遺構面の標高は概ね9.0mであるが、その高さがSB08の遺構面と仮定しても柱穴の深さは60cmに満たない。1×2間で、桁方向の柱間距離225cm、梁方向の柱間距離255cmを測る。穴の中の柱があったと推定できる場所はほぼ軸線上を通る。南列の東柱には礎板と考えられる木材が4点あり、南列中央の穴にも1点の木材がある。西側の4つの柱穴は二段掘りになっている。平面上の観察と土壠断面での観察からは柱の抜き穴ではない。出土遺物はすべて小さな破片で明確な時期は不明であるが、少なくとも弥生時代の土器ではある。

またこの建物のすぐ東側には弥生時代中期中頃の赤彩完形土器群（土器群14）が出土している。この土器群は位置的にはSB08のすぐ脇であるが、標高は8.75mを測り、柱穴の深さを考慮すると、SB08柱穴の掘り込み面は、土器群14のレベルよりずいぶん高くなり、同一時期と考えることは難しい。従って、時期的には土器群14以降、SD03以前である。

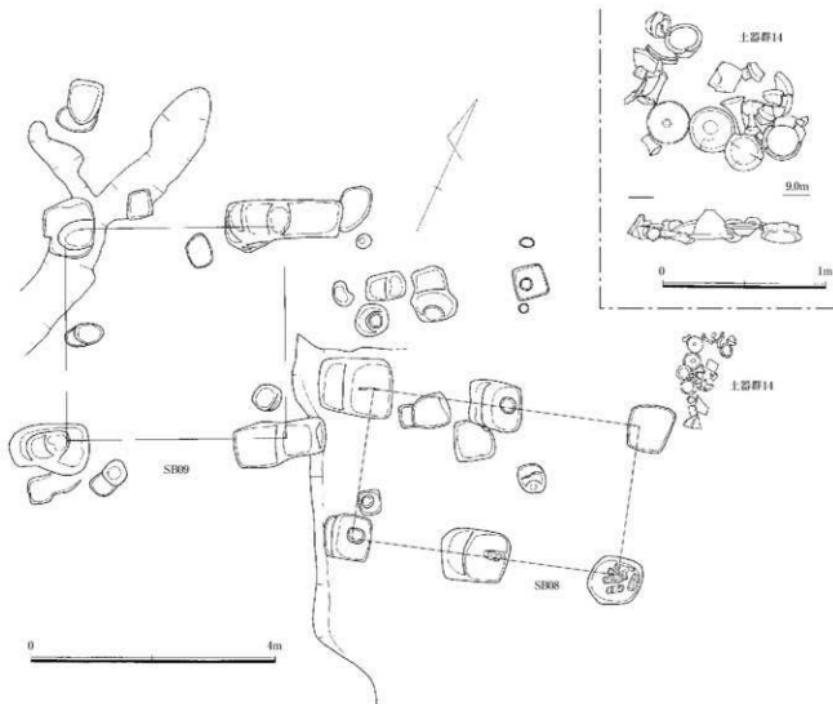
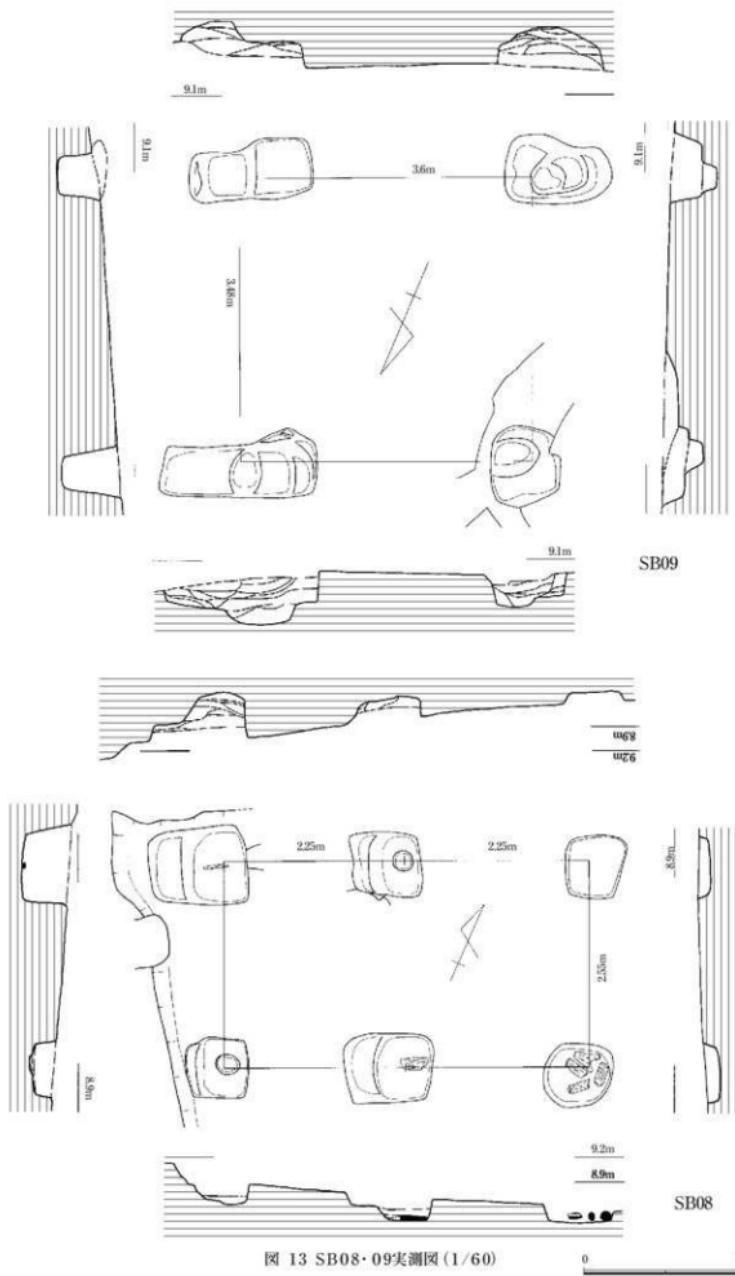


図12 SB08・09周辺遺構配置図(1/80)



S B 0 9 (図13、図版13・19)

S B 0 8 と接するように S B 0 8 北西側で検出した。1×1間の建物である。東側の2穴は長方形に近い堀方を持つ2段掘りで、東北穴の大きさは長さ187cm・幅70cm、南東穴は長さ150cm・幅72cmを測る。西側の2穴も2段掘りであるが、規模が小さい。北西側の柱穴は方形に近く、100cm×85cm、南西穴は132cm×87cmを測る。柱痕跡は検出できず、堆積が自然堆積に近いことからも柱を抜いた可能性が高いと思われる。

S B 1 5 2 (図14、図版19)

I区北西端で検出し、一部がII区及びI区拡張区(52次調査範囲)にかかる。遺構番号は52次調査で付した番号を継用する。1×2間の建物で、長さ4.23m、幅2.73mを測る。柱穴は方形に近いものが多く、一辺90cm前後、柱痕跡は径20~30cmを測る。

(5) その他

層序の項で述べたように、I区の自然流路S D O 1とII区の自然流路S D O 2の間にある微高地部分には、不定形の土坑が多くある。遺物が出土したものには遺構番号を付したが、そのほとんどが不定形な形で床面も凸凹が激しく、中には南側がオーバーハンプしているものもあり、オーバーハンプしている土坑には概ね砂がたまっている。土坑の深さはほとんどが10cm内外で深くなく、遺構番号は付けておらず、A-1区遺構面凹部として遺物を取り上げた。これらの土坑からは弥生土器の他、須恵器・糸切り底の土器・中世輸入陶磁器・近世以降の国産陶磁器が出土した。

E-1区南側付近では、S D O 1南外の微高地部からS D O 1上層にかけて古代の土器・鉄滓が出土した。量的にはコンテナ3箱ほどで多くはない。

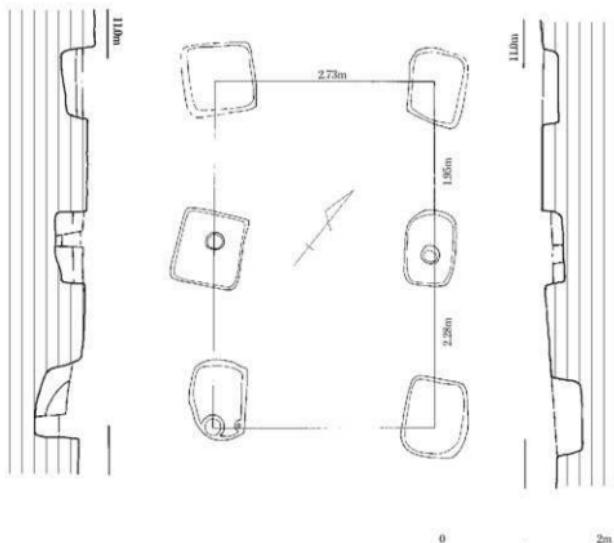


図 14 SB 152 実測図 (1/60)

4 I区(A-1・2区～E-0～2区)の出土遺物

I区から出土した遺物は、前述のように総量でコンテナ5,000箱に及ぶ。この量はほぼ福岡市全域で出土する平年1年間分以上の量に匹敵する。I区の調査終了後ほぼ5年が経過した現在でも、すべての遺物の整理が終わっていない。このような状況のため、本報告書では、実測まで終了したA～E-1・2区の土器を主とする遺物及び遺物出土状況について報告する。

(1) A-1・2区出土土器・陶磁器(図15・16)

A-1区南東の一部を除いて、東側流路(SD01)と西側流路(SD02)の間の微高地である。この部分にはシルト質の地山に前述の不定形土坑があり、その中から遺物が出土した。1は有田系染付、2は須恵器裏の破片、3は古代の須恵器脚台で1・2はA-2区の不定形土坑内、3はA-1区の不定形土坑内から出土した。他にも染付の細片・糸切底の土師器皿・須恵器の細片数点が出土している。4～13はA-1区の調査区南端に排水溝掘削中に出土した。ほとんどがSD01の落ち際から出土しているものと思われる。弥生時代中期後半の甕・壺・鉢・高杯・器台などがほとんどで、13のみ外面にハケ目を施した弥生時代終末期頃の支脚である。

(2) B-1・2区出土土器(図18～34)

ほぼ全域がSD01の中に入るが、流路の斜面部分(「肩」と標記)と流路中央部分で遺物の状況は異なる。B-1・2区から出土した土器量は図化したものが300点弱と未図化分が211箱あり、総量は300箱近い。図6のB-1・2区東端の土層図を見ると、SD01北斜面を降りきった部分は1m近い包含層がある。遺物包含層の厚さは南に行くほど薄くなり、B-1区南端では20cmに満たない。従ってB-1区とB-2区ではずいぶん包含層の状況が異なっており、それぞれの場所とB-1・2区で検出した土器群11・12・13に分けて詳述する。

最上層(1層)には格子目タタキを有する土器を含む層がある。この層はトレント以外では最初に掘削を開始した場所であり、水はけがきわめて悪く掘りにくかったこともあり、1層遺物については土器群の名称を付していないが、上記の格子目タタキを有する土器群はB-1区東側からC-1区西側の南半部に集中するように出土している。

中層(2層)は弥生土器を包含する。他の地点では、2層は腐葉土と砂の互層の部分が多いが、B-1区北半からB-2区では厚い土の層となっている。この2層には大量の土器のまとまりがあり土器群11とした。土器群11は上面(土器群11A)とその下の面(土器群11B)、さらにその下(土器群11C)にわけて取り上げた。土器群11Bとほぼ同じレベルの西側肩隅で見つけた小さな土器のまとまり2つに土器群12・13と名を付したが、土器群と呼ぶほどのまとまりではない。B区とC区の間のベルト内にも大量の土器があり、さらにC-1・2区へと土器群は続いているが、C-1・



図15 A-2区微高地部出土土器実測図(1/3)

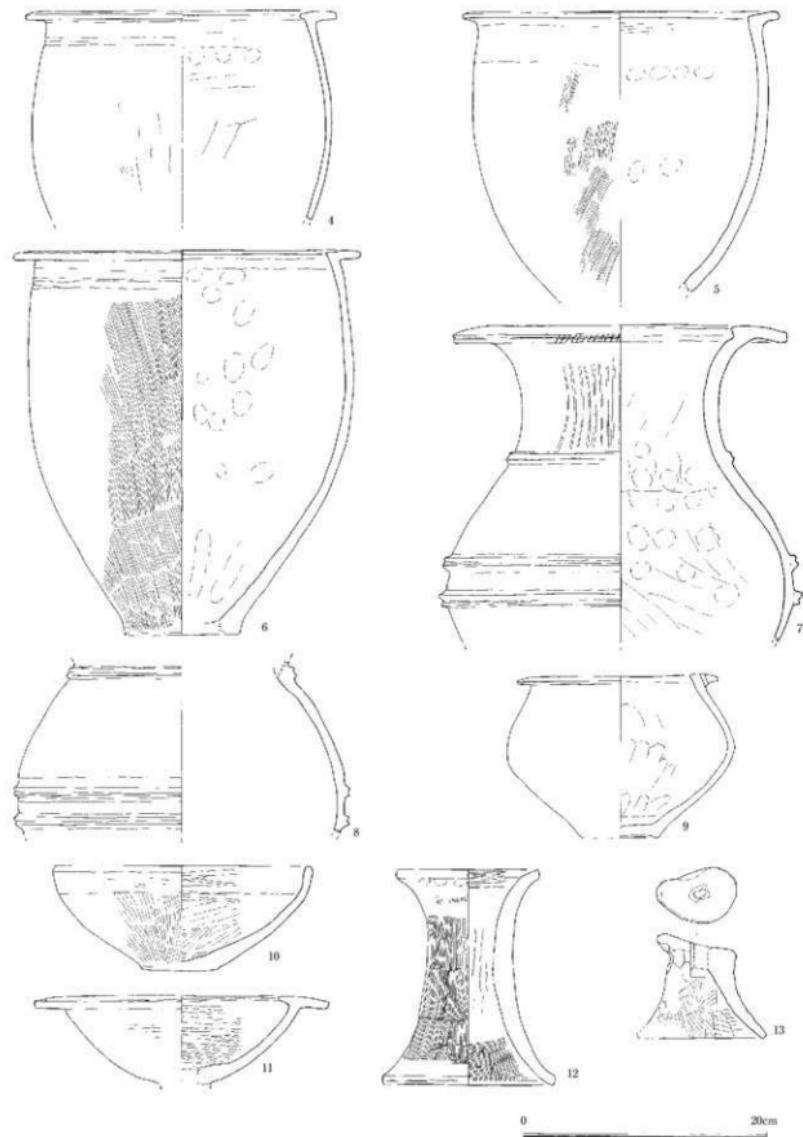


図 16 A-1区出土土器実測図 (1/4)

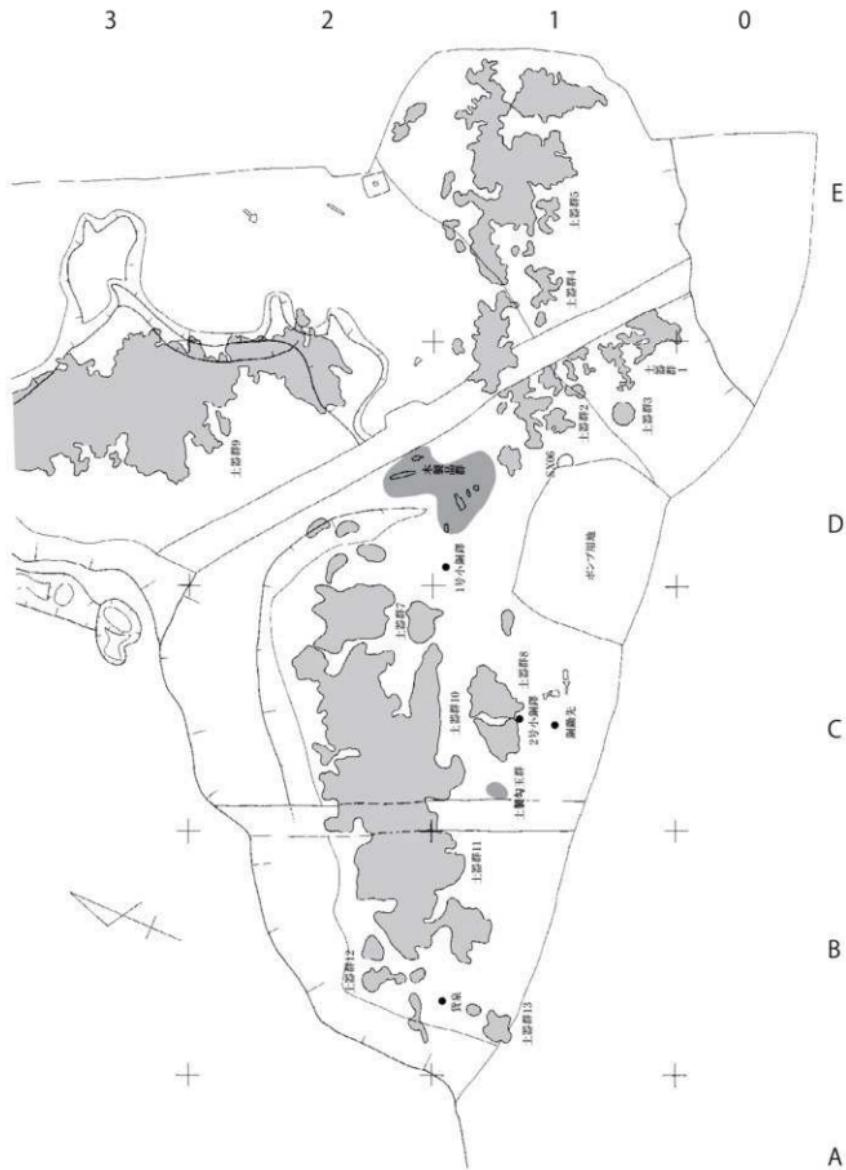
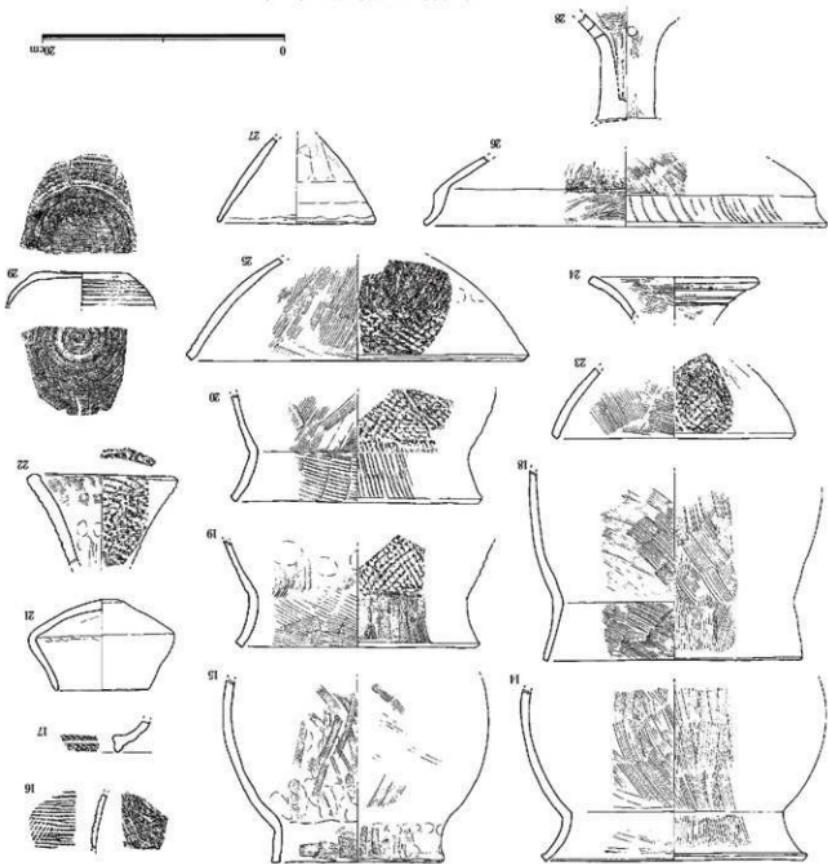


図 17 A~E-0~3区遺物出土状況実測図 (1/200)

图 18 B-1区上层出土器物实测图 1 (1/4)



2区的土壤耕层厚度为10~12cm。土壤剖面13cm处土壤厚度1cm, 土壤剖面10cm处土壤厚度1.5cm。B-1、2区的厚度与S D O I的厚度相比, 土壤耕层厚度略薄, 土壤厚度10cm处厚度1.5cm, 土壤剖面13cm处厚度1.5cm, 土壤剖面10cm处厚度1.5cm。S D O I土壤厚度比B-1、2区的厚度略厚, 土壤剖面13cm处厚度1.5cm, 土壤剖面10cm处厚度1.5cm。S D O I土壤厚度比B-1、2区的厚度略厚, 土壤剖面13cm处厚度1.5cm, 土壤剖面10cm处厚度1.5cm。S D O I土壤厚度比B-1、2区的厚度略厚, 土壤剖面13cm处厚度1.5cm, 土壤剖面10cm处厚度1.5cm。

① B-1区上層出土土器・陶磁器（図18・19）

14～33はB-1区上層から出土した土器で、完形品はほとんど無い。甕・壺・鉢・器台などの他、大型の土器も出土している。弥生土器中期後半以降弥生時代終末前後の土器までを含んでいるが、量的には弥生時代後期の土器が最も多く、中期の大型の破片も多い。上層の厚さは10cm内外と薄いため、2層の土器が入っている可能性もある。32の大型壺形土器は丸底もしくはきわめて小さな平底を呈すると思われるが、本来的には上層はこの時期の層と考えられる。29は瓦質の土器で、見込みに回転ナデ、外底部に糸切り痕が残る土器である。色調は灰色を呈し、胎土は泥質で精良である。やや焼成は悪い。楽浪系の土器と思われる。30～33は大型の壺形土器である。30・31は弥生土器、33は丸底を呈する土器である。

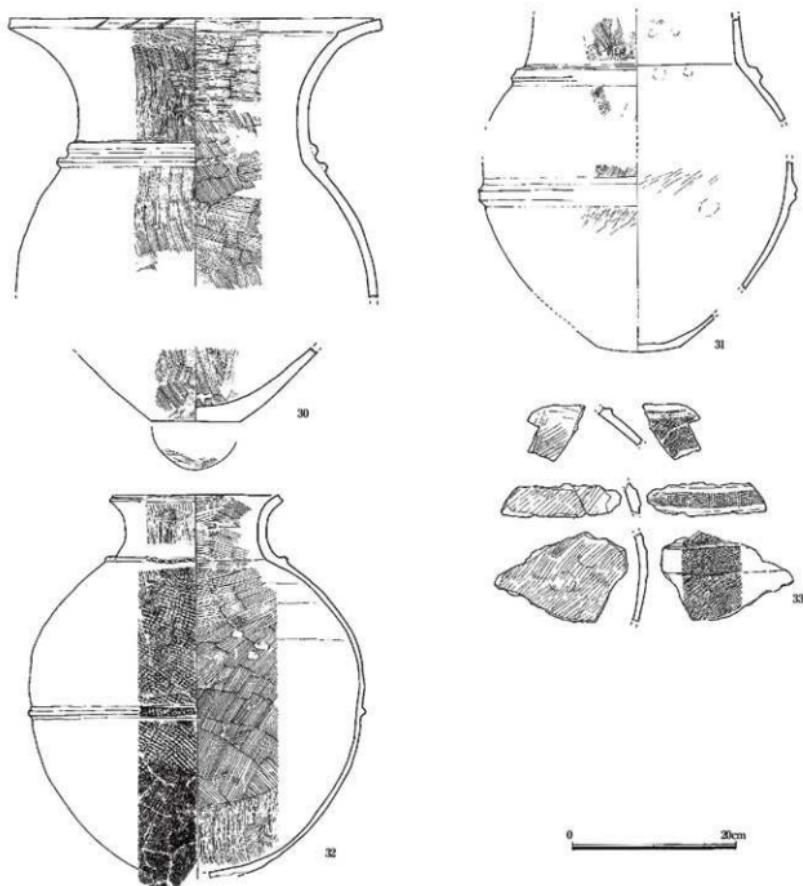


図19 B-1区上層出土土器実測図2 (1/6)

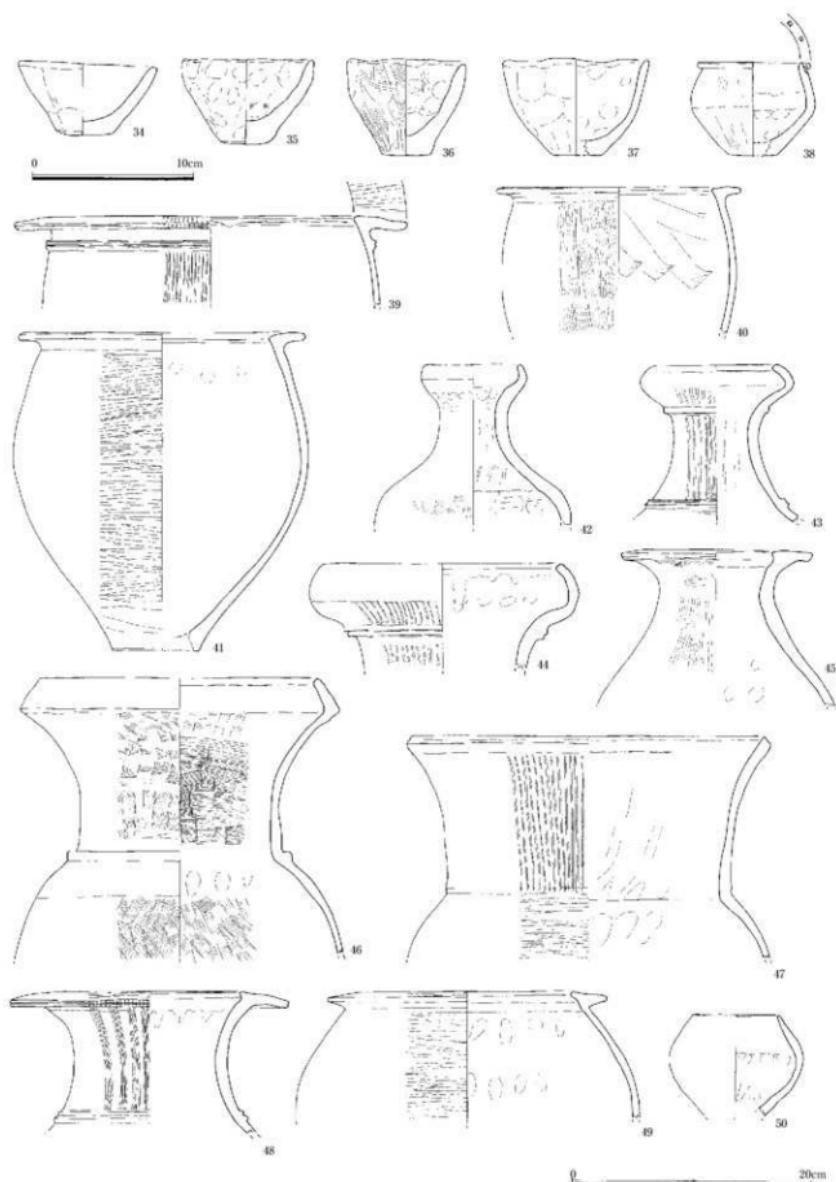


图 20 B-1区中层·下层出土土器出土土器实测图1 (1/4)

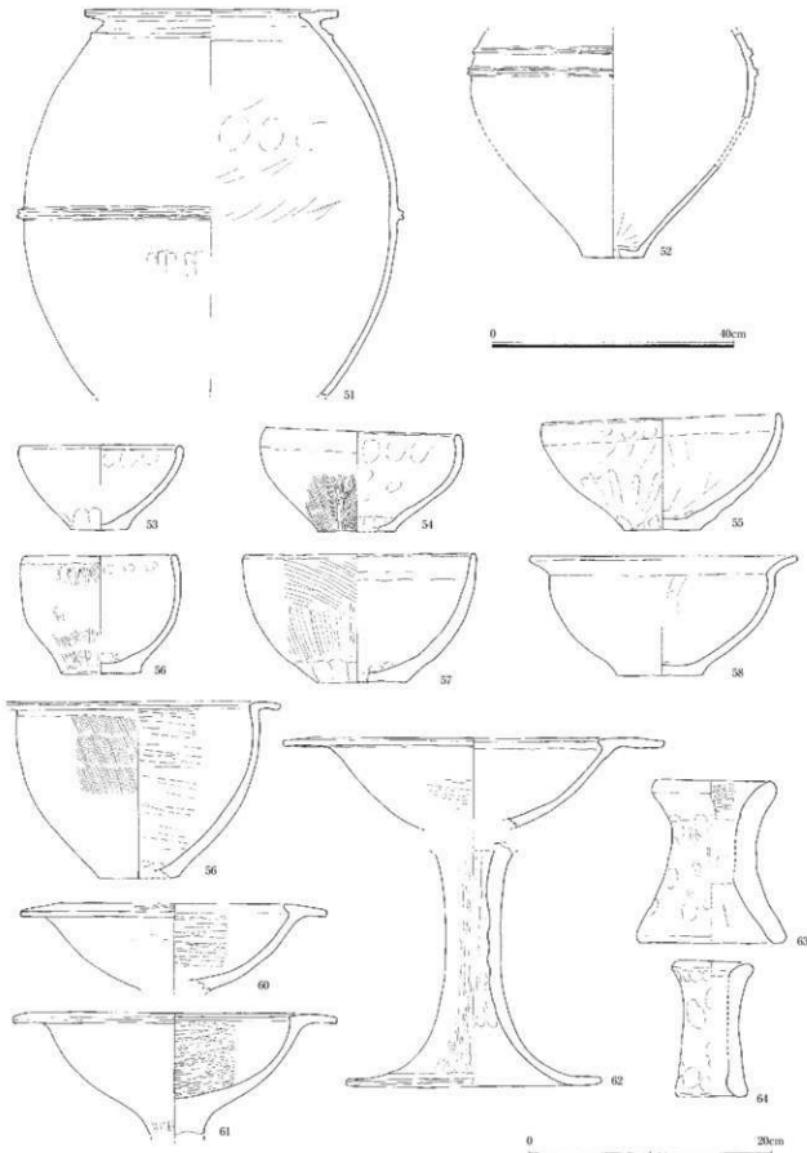


图 21 B-1区中层·下层出土土器实测图2 (1/4·1/8)

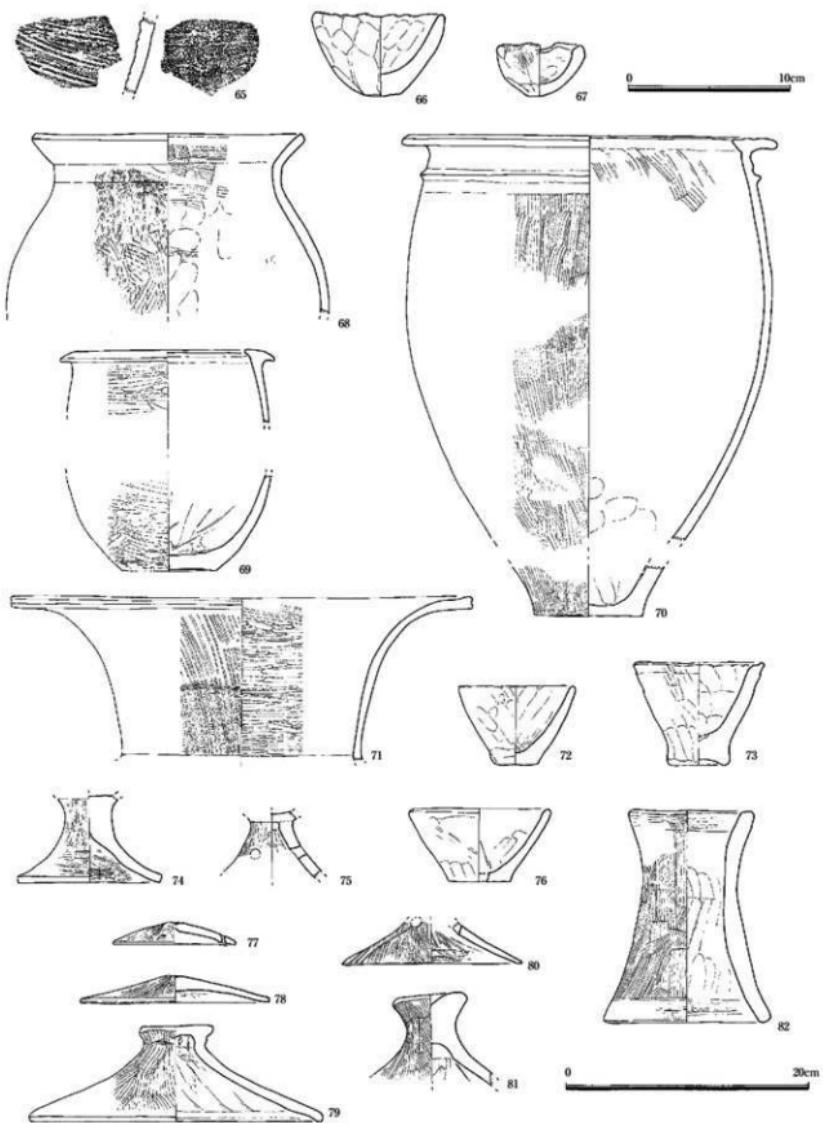


图 22 B-2 区上层·中层出土土器实测图 (1/3·1/4)

この層の出土土器の中に、格子目タタキを外面に施したものが多く含まれている。甕(19・20)、壺(17)、鉢(23・25)、器台(22)、大形壺(32・33)など多器種に渡る。器形はすべて在地の弥生時代後期から終末期前後のと同じである。タタキは全面に遺存しているのではなく、甕・鉢は胴部・体部の上位のみに遺存しており、胴部・体部の下部はタタキを施した後に部位によってハケ目を施している。大形土器も胴部中央から頸部までタタキが遺存し、凸帯にもタタキを施している。内面の多くはハケメやナデが施され、当て具の痕跡は確認できない。

② B-1区中層出土土器(図20・21)

上層断面図(図6)の中層から出土した土器であるが、37・50は下層から出土した土器であるが、基本的には下層以下はほとんど遺物を含まない層で、わずかに縄文土器数点を含んでいるだけである。従ってこの2点は下層上部で中層の落ち込み遺物の可能性が高いと思われる。次に述べる土器群11は中層と同じ層で、ここで上げた土器は、土器群11以外の中層出土土器であるが、B-1区は特に南半は中層が極めて薄い。

34～38は手づくねの土器で、38は短頸壺のミニチュア土器である。39～41は鋤先口縁の甕で、42～49は壺で、鋤先口縁・直立・袋状口縁と各種が出土している。50は無頸壺。51・52は腰柄級の大型壺である。53～59は鉢で、無頸のものと頸部を持つものがある。60～62は高环、63・64は器台で、これらのうち、赤彩している土器が多く含まれ、甕は39・41、壺は42・45・46を除く全点、鉢は58・59、高环は全点である。

③ B-2区上・中層出土土器(図22)

B-2区の上・中層出土土器であるが、B-1区と異なり、上層に遺物をあまり含まない。上層自体が全面には遺存していない。あるいは表土剥ぎ時にあやまって除去した可能性もあるが、そうであっても、表土剥ぎ時に気がつかないほどの遺物量しか無かったものと思われる。また中層の遺物は大半が次で述べる土器群11に含まれるため、ここで掲載しているのは、土器群11に含まれない土器で

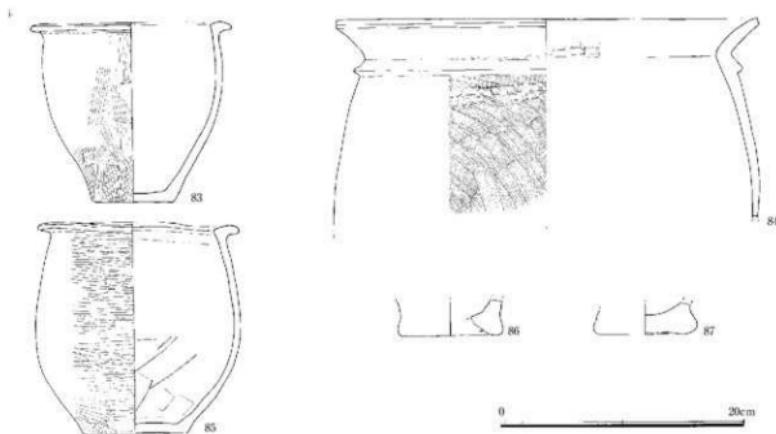


図23 B-1・2区肩及び下層出土土器実測図(1/4)

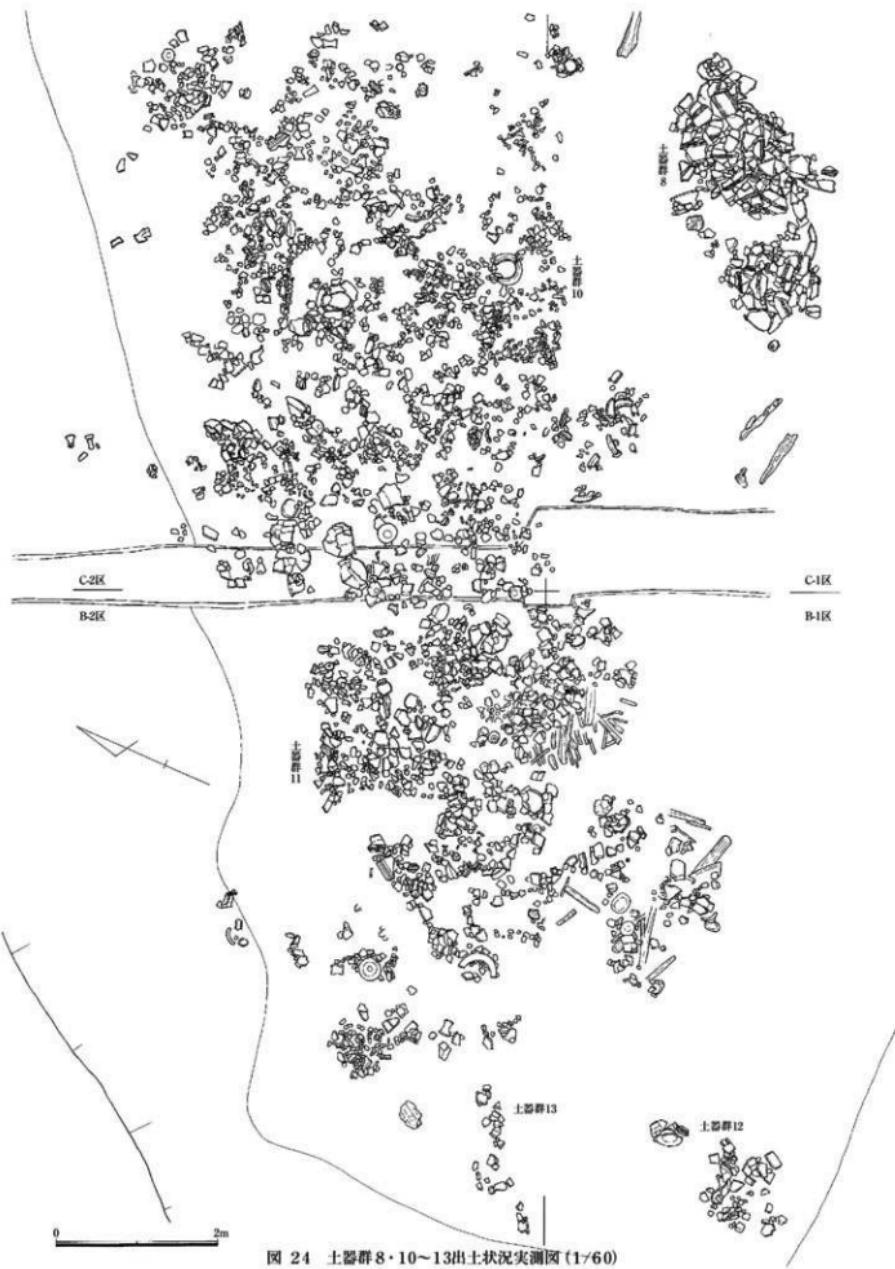


图 24 土器群8・10~13出土状况实测图 (1/60)

ある。65は縄文土器で両面に条痕文を施しているが、内面はナデ消している。68は上層出土の壺で、確実に上層出土で図化したのはこの1点のみである。66・67・69以下は中層出土または出土層位不明の土器で、弥生時代中期の土器を主体に少量の後期土器が出土している。上述のようにこれらの土器は土器群11に本来は含めてよいものである。

④ B-1・2区流路肩出土土器（図23）

S D O 1 斜面上の薄い包含層から出土した土器で、遺物量も少なく、破片が多い。83・85も図上復元である。

⑤ B-1区下層出土土器（図23）

86は弥生時代の包含層中、87はさらにその下の遺物をほとんど含まない層で検出した、堅果類が多く出土した小溝内から出土した。2点とも縄文時代晩期の深鉢底部である。ともに気泡状の小孔が無数にあり、86は穀物の圧痕状を呈しているものがある。

⑥ 土器群11A出土土器（図26～30）

B-1区北側からB-2区南側で検出した土器群である。2層上層で検出し、最下層は2層下部に及ぶ。レベルの相違で、最も上で検出した群を土器群11A、その下を11B、最も下で検出した一群を11Cと名付けた。図26～30は土器群11Aで、出土土器の大半は弥生時代後期の土器で、若干の中層土器を含んでいる。甕は多く出土しているが完形品はほとんどない。く字形に外傾する口縁部を有し、一部（88～90）を除いて長い胴部を有する。底部は大きな平底であるが、114は脚台を有している。外面はハケメ、内面はナデもしくはハケメである。113は外底部にもハケメを施している。

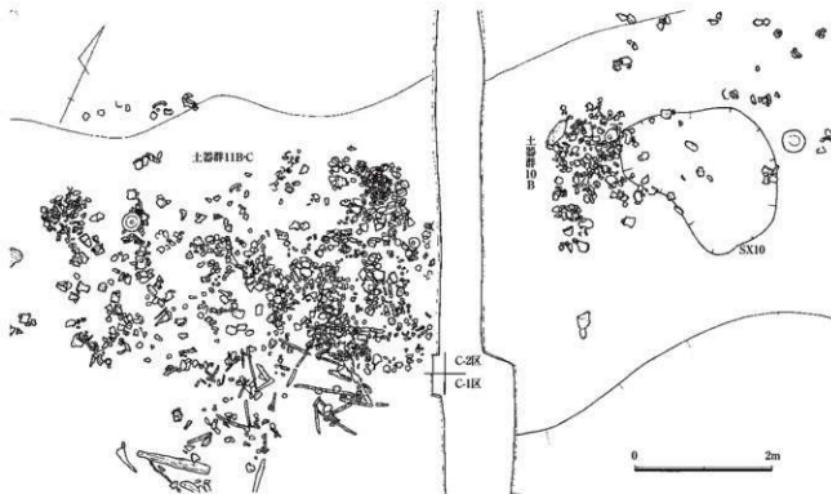


図25 土器群10B・11B・11C出土状況実測図(1/60)

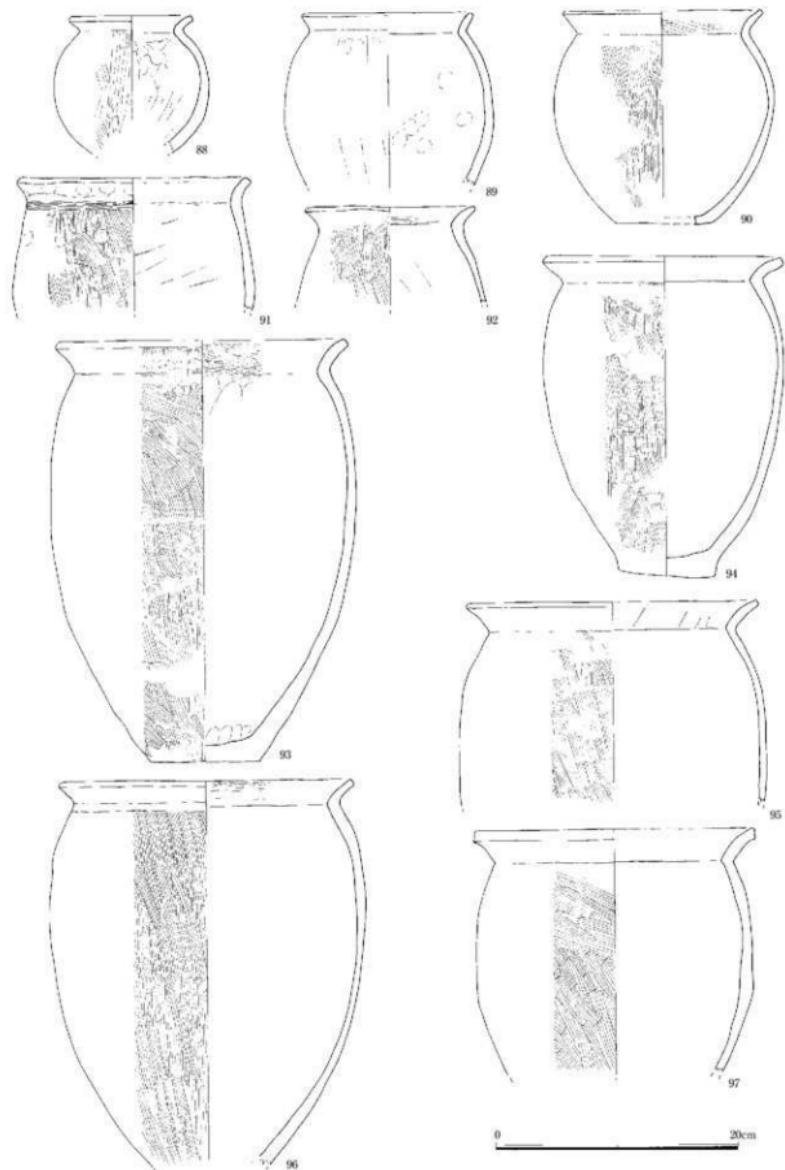


図 26 B-1・2区土器群11A出土土器実測図1 (1/4)

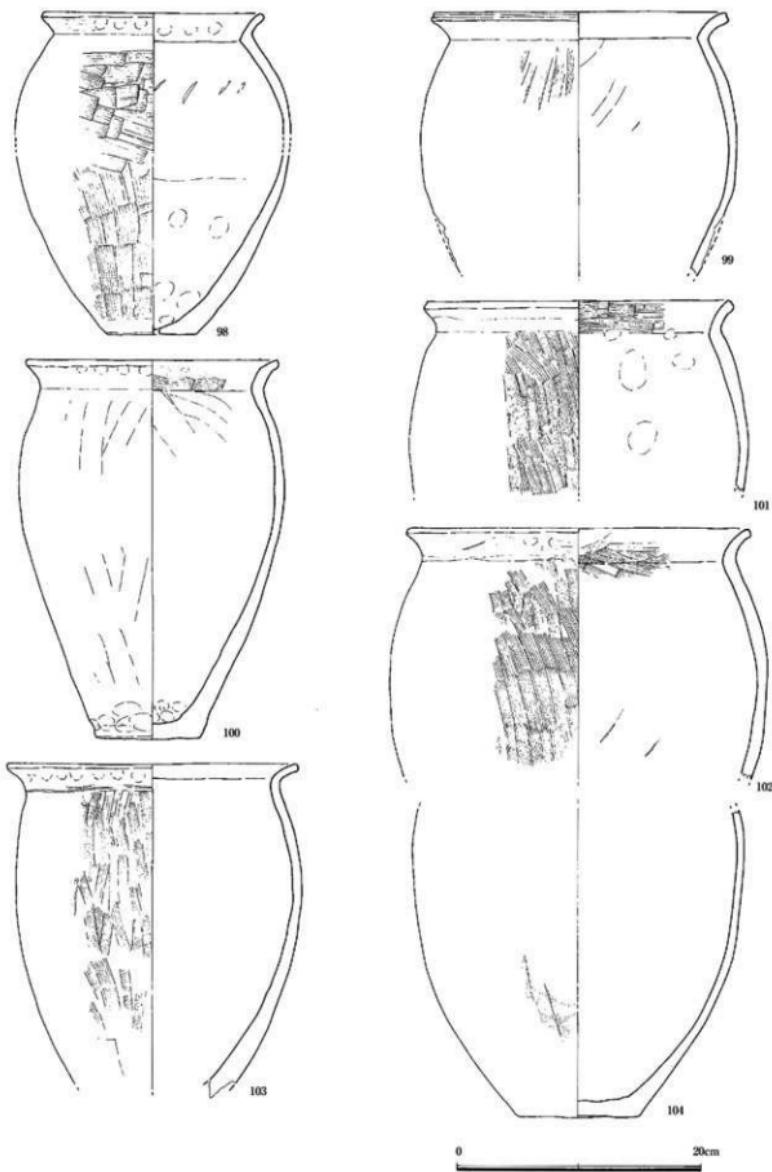


図 27 B-1・2区土器群11A出土土器実測図2 (1/4)

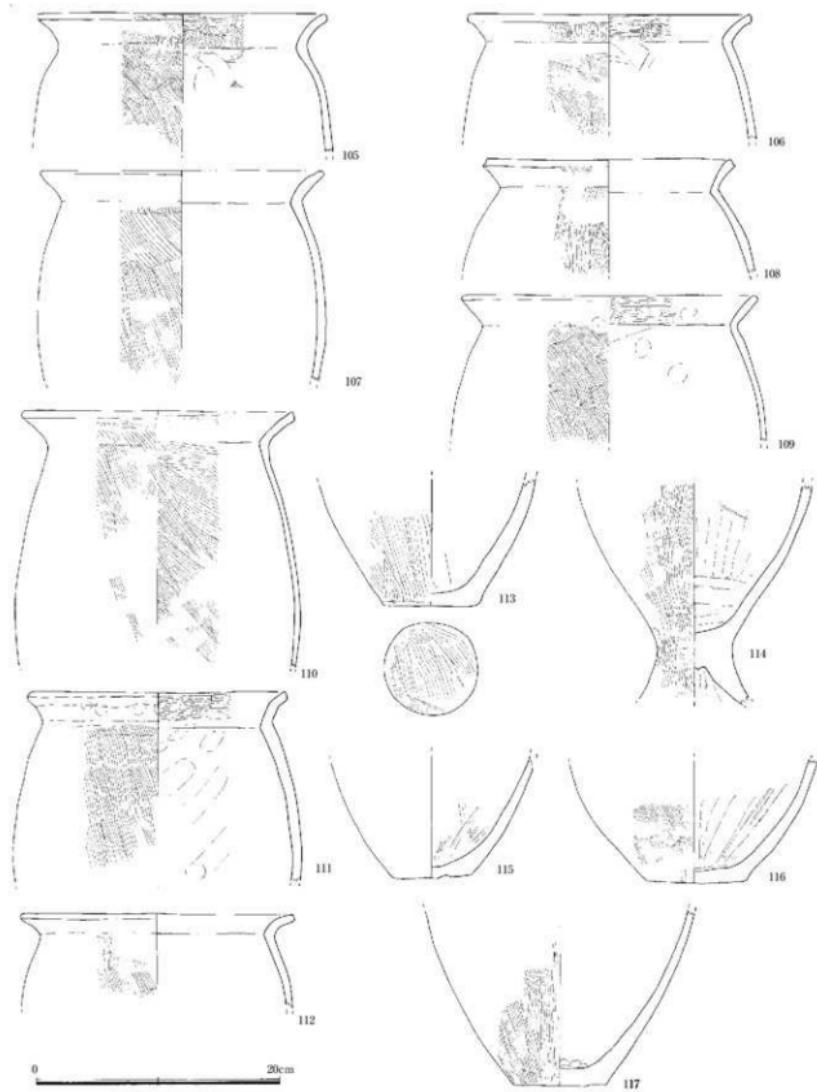


图 28 B-1·2区土器群11A出土土器实测图3 (1/4)

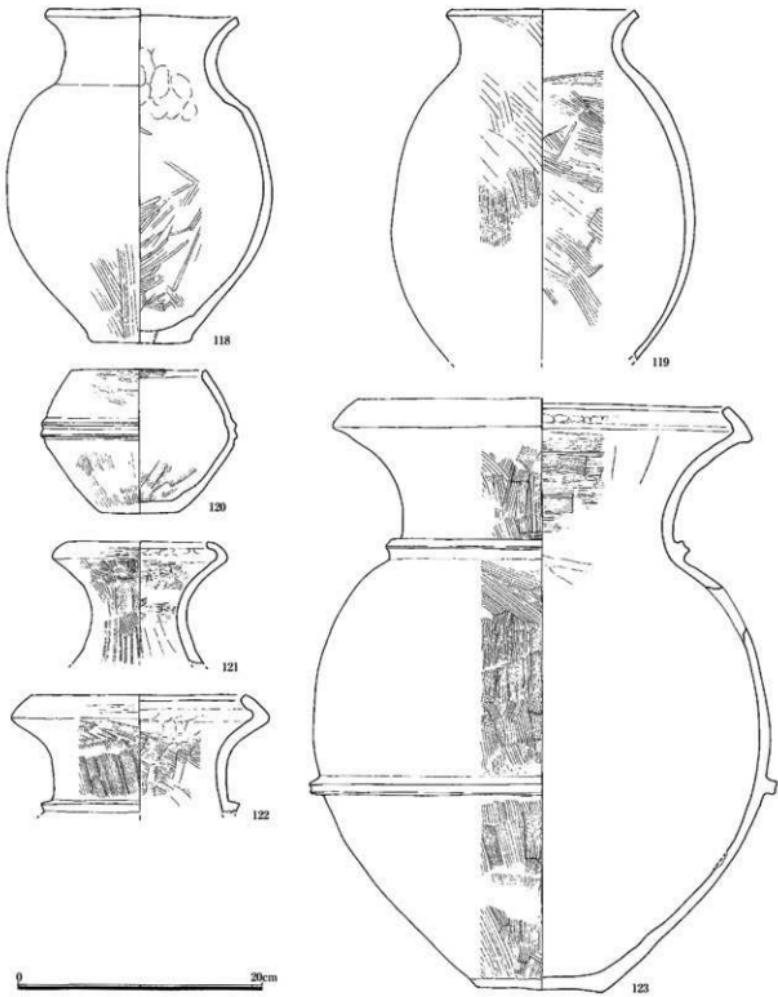


図 29 B-1・2区土器群11A出土土器実測図4 (1/4)

壺は多くない。118と119は甕とすべき器形かもしれないが、118は内面を磨研状にていねいに磨いている。120は当初から頸部を欠く無頸壺。121～123はするどく折れ曲がる袋状の口縁部である。123は高さ50cm近い大型の壺である。壺もハケメとナデで仕上げている。121・122は赤彩土器である。124～129は鉢で、無頸のものと外反する口縁部を持つものがある。130・131は蓋、134～138は器台、132・133・139は高杯である。131には口縁内面に黒い帯があり、133は赤彩している。

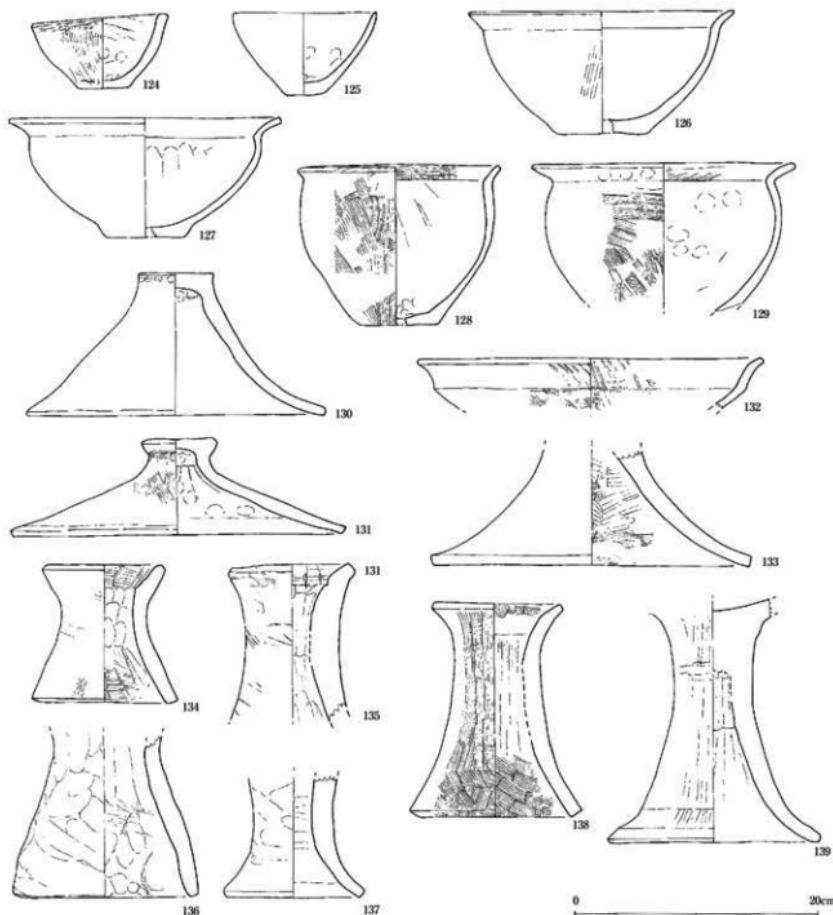


図 30 B-1・2区土器群11A出土土器実測図5 (1/4)

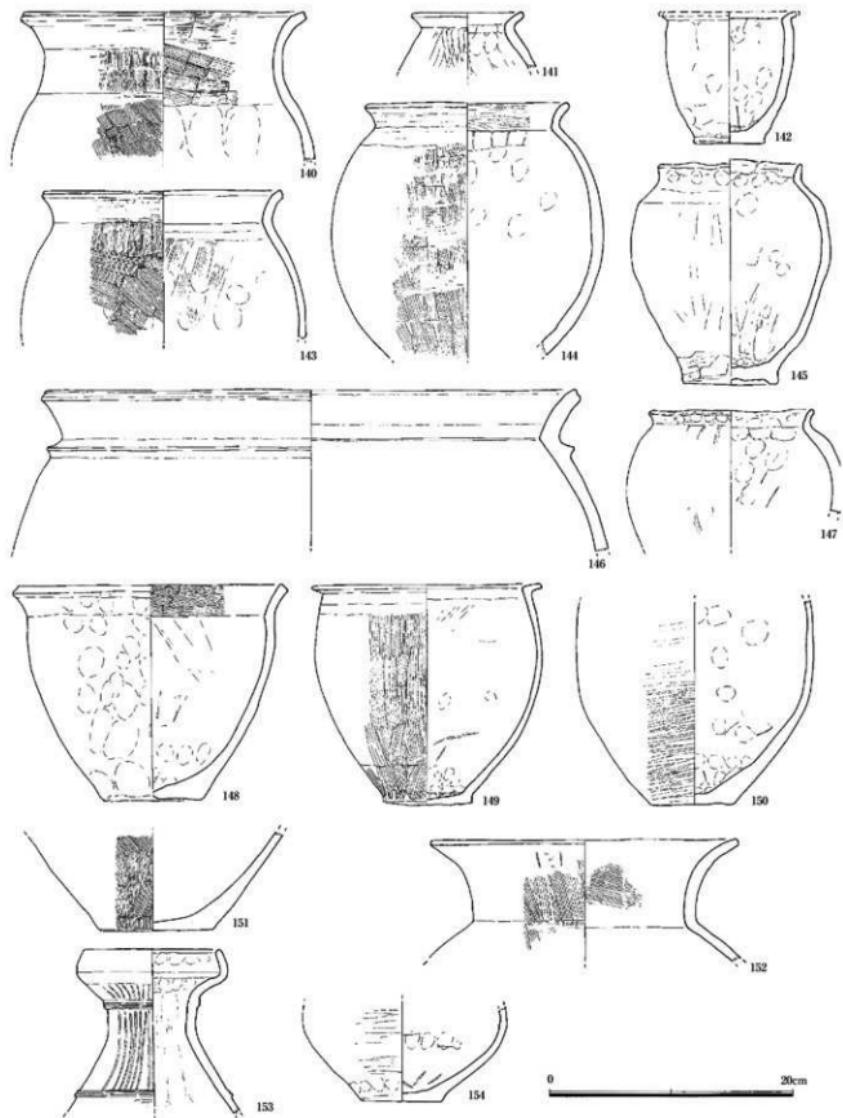


图 31 B-1·2区土器群11B出土土器实测图1 (1/4)

⑦ 土器群 11 B 出土土器 (図 31・32)

図31・32は土器群 11 B である。土器群 11 を全部取り上げた後の掘り下げ後、すぐ下から出土した。レベル的に見て一部土器群 11 に含むべきものもあると思われる。弥生時代後期の土器が大半であるが、一部中期の土器の大きな破片を含んでいる。140～154は甕・壺であるが、土器群 11 A に比べて、全体的に寸が短いものが多い。148・149は鉢に分類した方がいいかもしない。140は頸部が長い器形で、逆に頸部の短い 145 ような土器がある。145は全体的な造りが粗い。150・153・154が外面を磨いている他は、ハケメ・ナデ・指押さえで仕上げている。155～160は鉢で、155は甕の寸足らずの器形をしており、赤彩している。器台・高环等は量が少なく、163の高环は赤彩土器である。

⑧ 土器群 11 C 出土土器 (図 33)

土器群 11 B とはややレベル差を有し、2 層最下部近くに位置している。もちろん 11 B と 11 C の間にも土器片は多く含まれているが、大きな破片が集中するほどではない。11 A・B より出土範囲が狭く、量的にも A・B に比べられない。弥生時代中期土器を主体とし、一部後期土器を含む。164～168は甕で、168のみ外面ミガキ調整で赤彩である。169は細長い器形の壺で、赤彩している。170～172は鉢で、170・171は頸部に孔を有している。173は胴部内面中央に爪状の調整の痕跡が列点のようについており、赤彩している。173～175は小型の蓋・鉢・高环。176は口径 27.6cm、推定の高さ 50cm 前後を測る大型の甕である。

⑨ 土器群 12・13 出土遺物 (図 34)

土器群 11 の西側の S D 0 1 立ち上がり近くで、大破片を含む少量の土器のまとまりがあり、南側のまとまりを土器群 12、北側のまとまりを土器群 13 と名付けた。大半が弥生時代中期後半の土器である。大型の壺である 177 の他、赤彩土器が数点ある。



図 32 B-1・2 区土器群 11B 出土土器実測図 2 (1/4)

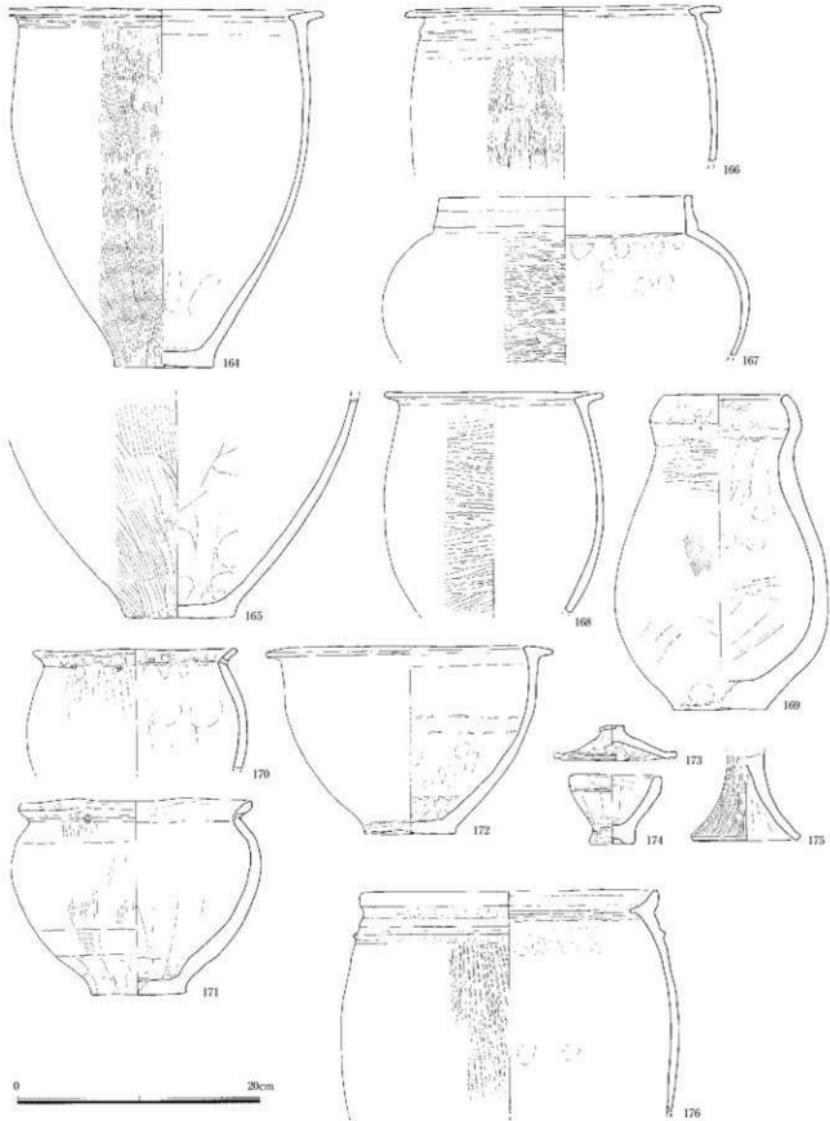


图 33 B-1·2区土器群 11C出土土器实测图 (1/4·1/6)

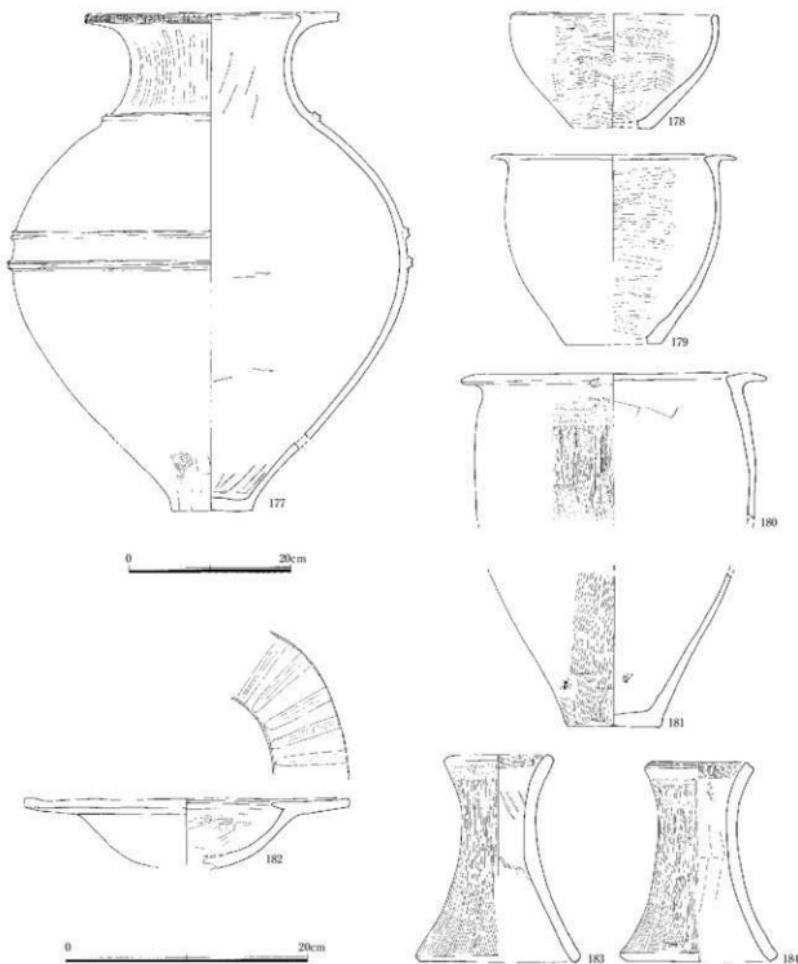


图 34 B-1·2区土器群12·13出土土器实测图 (1/4·1/6)

(3) C-1・2区出土遺物

ほぼ全域がSD01に含まれる。前述のようにB-1区の土器群11から、B-1・2区とC-1・2区間のベルト(C-1・2区西ベルト)を含めて土器群が続くが、C-1区のものを土器群10の名を付した。土器群10からさらに東側に続く土器群についてやや散漫な部分を土器群7とした。土器群10の南側にはやや土器の少ない部分を挟んで大型土器から成る土器群8があるが、レベル的には土器群8が上になる。

層位的には、B-1区と基本的には大きく変わらないが、1層(上層)である腐葉土層が厚くなり、その分1層の遺物が多い。1層の土器は、甕や壺の破片は大きく、器台・鉢などの完形品も少なくない。土器群8は1層中に含まれる。2層(中層)はB-1・2区と同様、C-1区南半は腐葉土層や土層に砂層が局部的に入った層で、C-2区は土の層を中心とするが、東側はC-1区に近くなっている。3層は各種の砂を中心とする層である。2層の出土土器は大半が土器群7(7B含む)・10(10B含む)に含まれている。D-1区西北部からC-1区の2層上部で、小銅鐸2点、土製勾玉5点、青銅製鋤先1点が出土した。いずれも土器の集中区である土器群7・10・11の南側の河川中心部付近からの出土である。1号小銅鐸はD-1区の西北隅、2号小銅鐸は土器群8の下約20cmのところから出土した。さらにその南側で青銅製鋤先、土器群8の西側で土製勾玉3点、貨泉1点が出土し、概ね長さ10mの範囲内からこれらの遺物群が出土している。2層の下の3層(下層)は大半が砂から成る層で、特に粗砂層が多く水が多く流れていたと推定でき、2層は砂層が極端に減っていることから、當時水が流れていなかった可能性が高い層である。上記の祭祀遺物群はこのような状況に対応している可能性も考えられる。

1・2層からはB-1区ではあまり出土しなかった木製品が出土している。最も多いのは1層中で、次いですぐ下の2層上部から多く出土している。またC-1区中央付近に土坑状の窪みがあり(SX10と命名)、その中から完形に近い鉢2点(261・262)などが出土した。

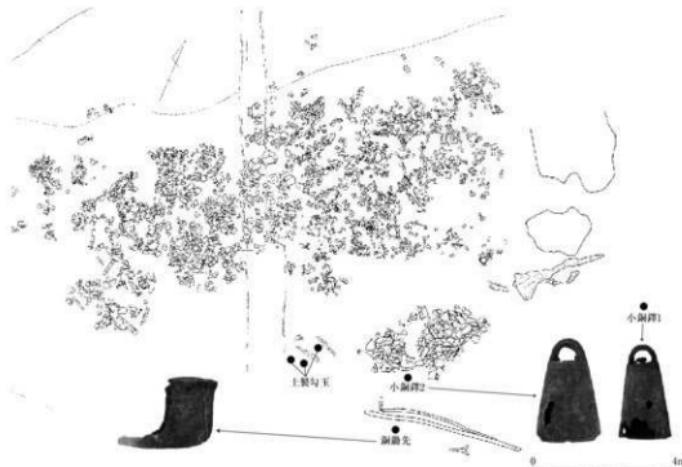


図35 小銅鐸・銅鋤先等出土位置図

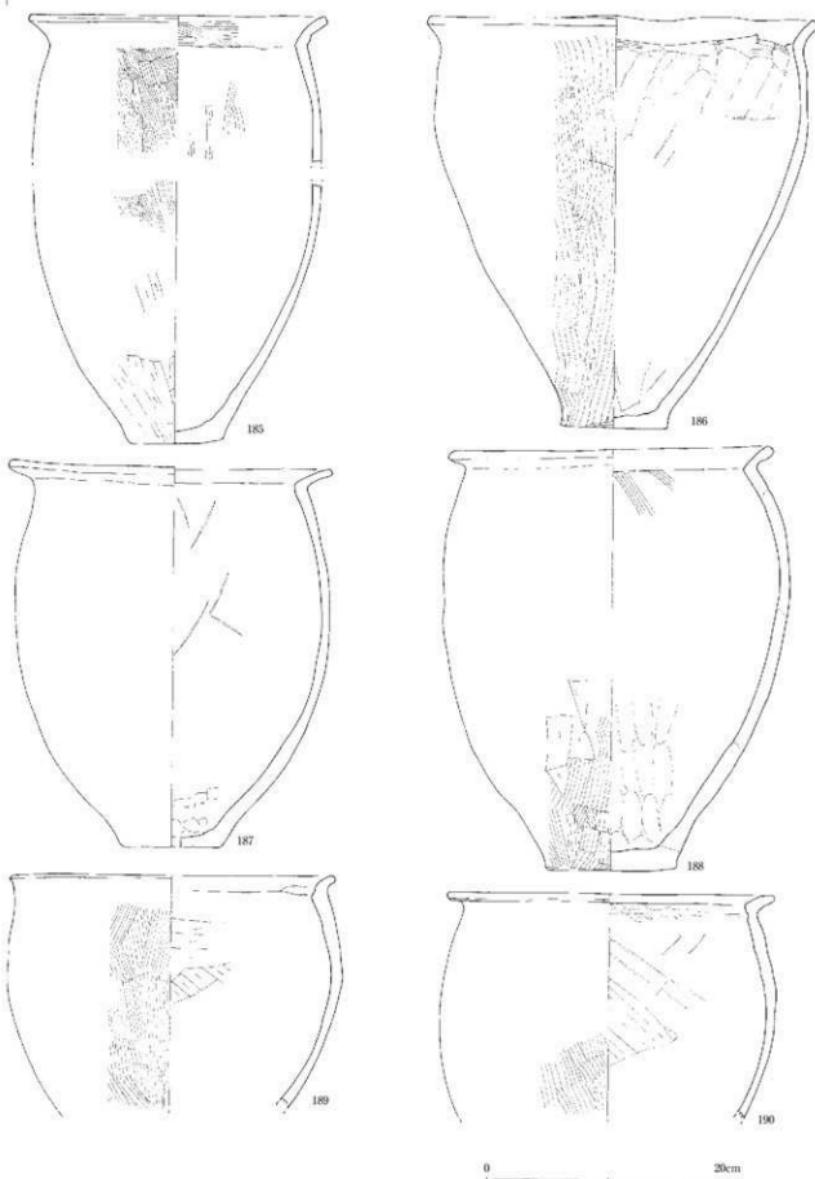


図 36 C-2区西ベルト出土土器実測図1 (1/4)

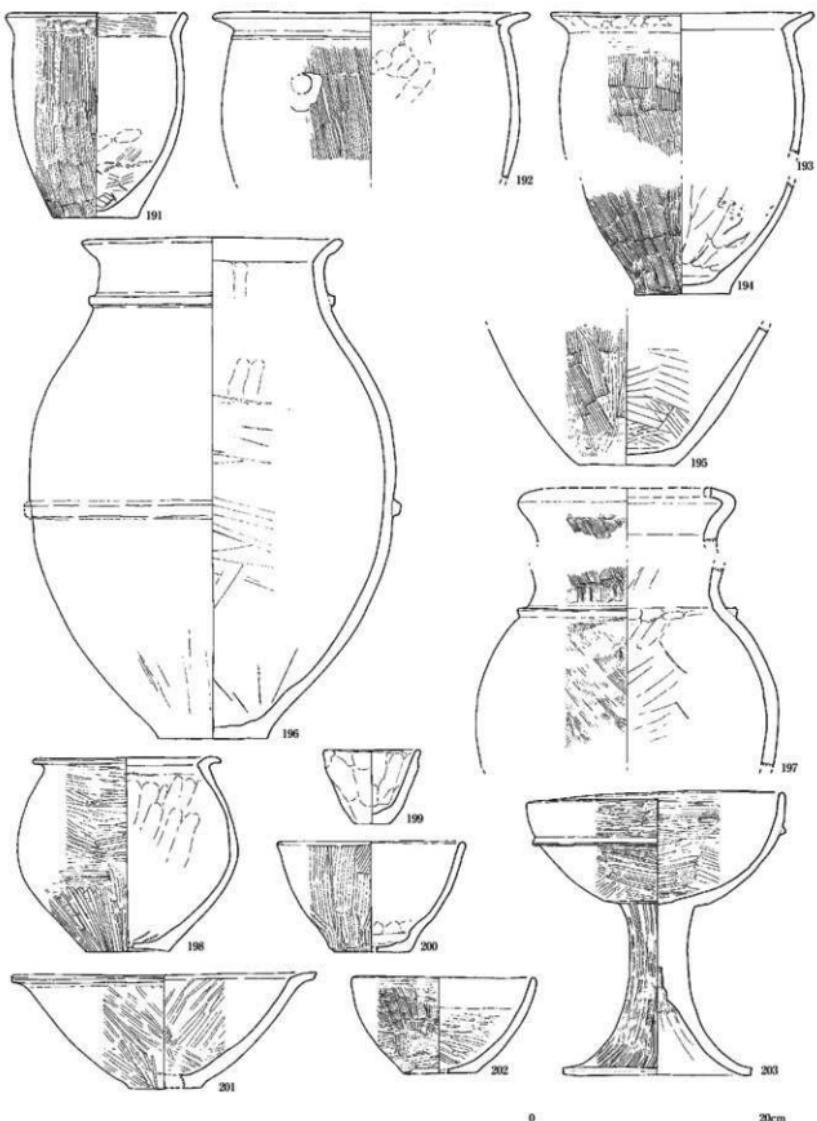


図 37 C-2区西ベルト出土土器実測図2 (1/4)

① C-1・2区西ベルト出土土器 (図36・37)

B-1・2区とC-1・2区間のベルトから出土した土器であるが、ベルトの1層部分は大半がすでに掘削済みのため、ここで掲載したのはほとんどが2層以下の土器である。またその大半がC-2区からの出土である。弥生時代後期の土器を主体に中期の土器を若干含んでいる。185～195は甕、196～198は壺である。196はやや胴長で頸部と胴中央部に2条の突帯を施している。突帯状に文様はない。199～202は鉢で、198は外面を、200は全面を、201はハケメの上から、それぞれヘラミガキで調整し赤彩している。199はナデ仕上げのミニチュアに近い土器である。203は高杯で、ミガキ調整で仕上げ、赤彩している。

② C-2区P1・P3出土土器 (図38)

C-2区の1層で出土した土器群であるが、土器群1以降の名を付ける前に出土した小さな土器のまとまりについては各区ごとにP1、P2・・・の名を付している。C-2区P1～3は1層中にある。204～209はP1出土で、甕2点、壺1点、器台3点を図化したが、そのうち5点に格子目タタキが施されている。204・205は甕で、両面ともハケメを基本としているが、胴中央部から頸部までは格子目タタキが施されている。204の胴下部はハケメ調整で、ハケメの後に格子目タタキを施している。内面の当て具の痕跡は確認できない。206～208はほぼ似た形態の器台で、頸部から下の体部外面に格子目タタキが施されている。内面はナデ仕上げのため、当て具の痕跡は確認できない。206・208は脚の接地面にも格子目タタキが施されている。209は大型の壺で、口唇部に櫛状施文具による刻みを施している。210はP3出土の手捏ね土器である。

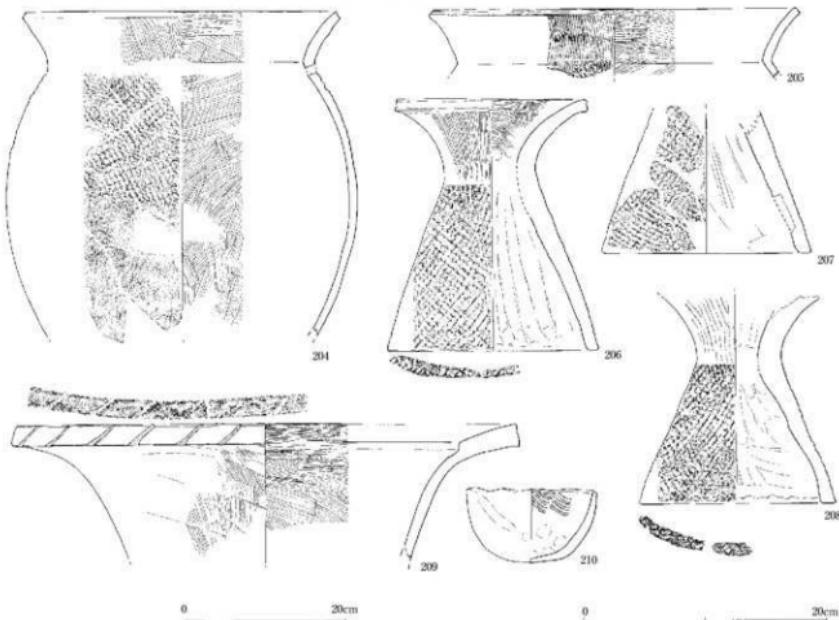


図38 C-1区上層出土土器(P1・3)実測図(1/4・1/6)

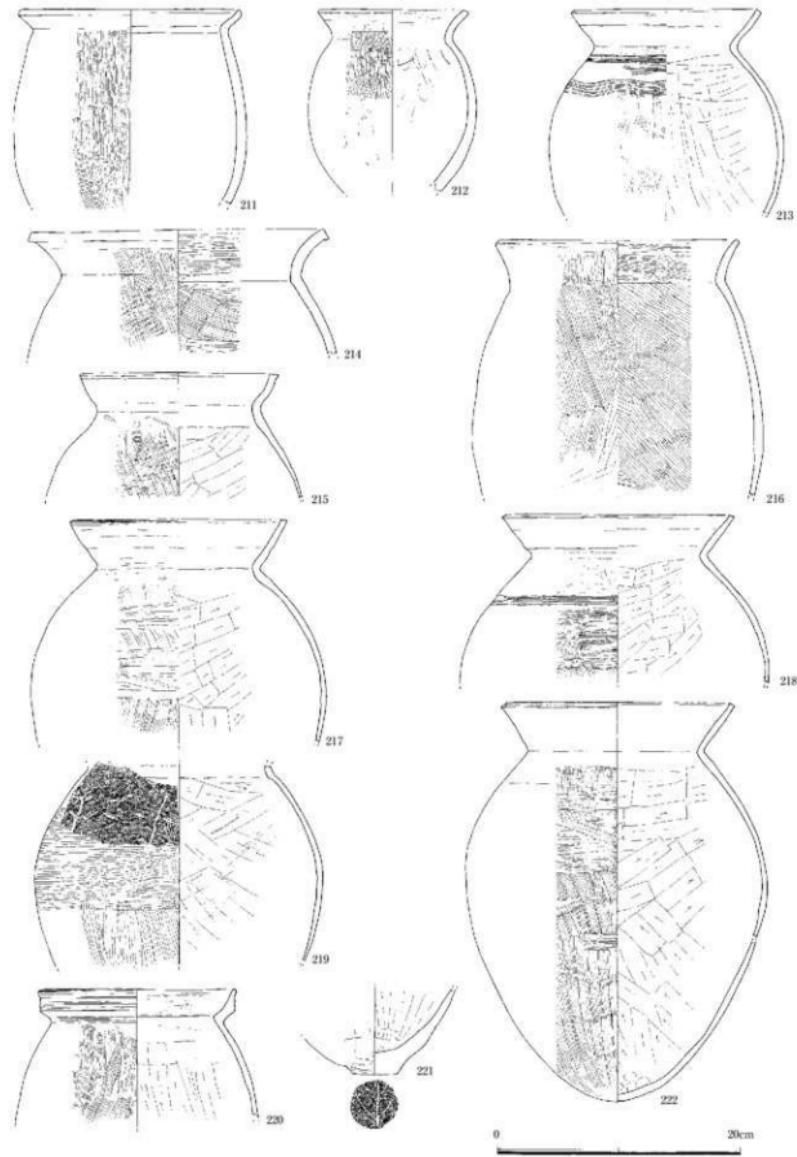


图 39 C-1区上层出土土器实测图1 (1/4)



图 40 C-1区上层出土土器实测图2 (1/4)

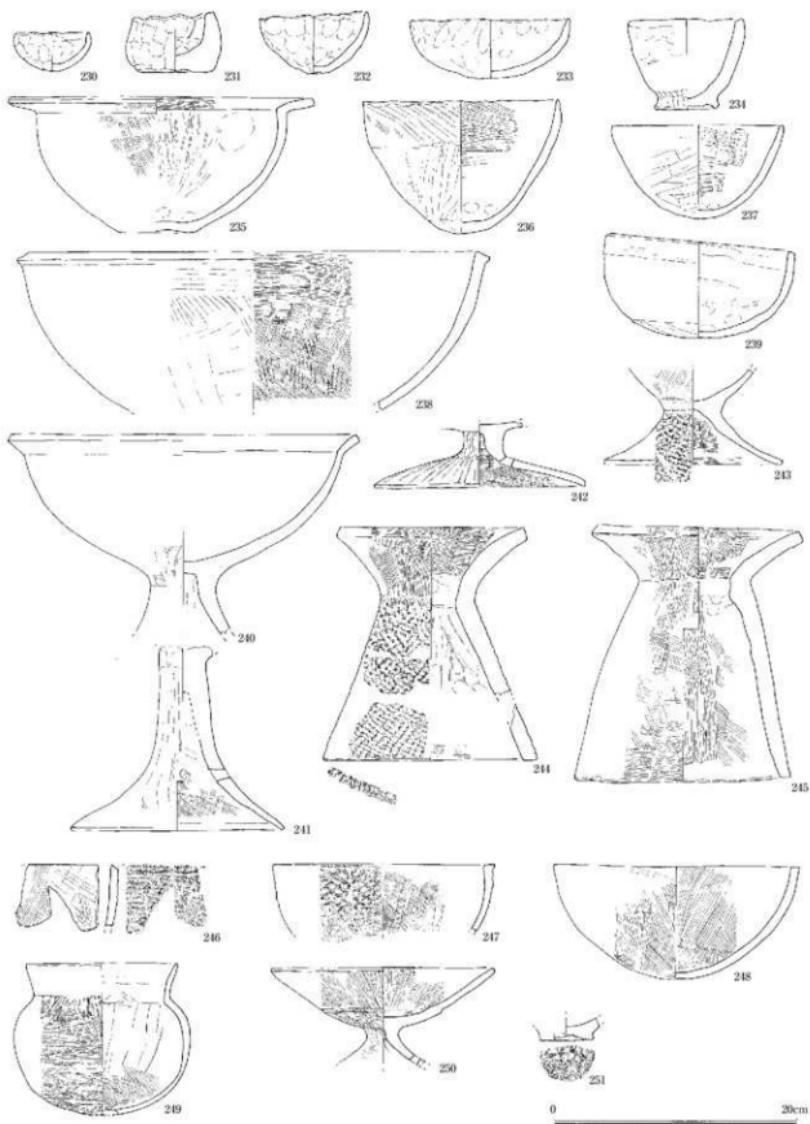


图 41 C-1区上层出土土器实测图3·C-2区上层出土土器实测图(1/4)

③ C-1・2区上層出土土器 (図 39～41)

弥生時代終末頃～古墳時代初頭を中心とする土器群と少量の弥生時代中・後期土器が出土した。甕は布留式系と在地系の両者があるが、布留式系が目立つ。波状文を持つもの (213) や列点文をもつもの (219) がある。220 は短い二重口縁を持ち、山陰系の土器であろう。221 の底部は凸レンズ気味で、外底部に葉の圧痕がある。222 は唯一全形がわかる。壺は長めの口縁部を持つものや、袋状

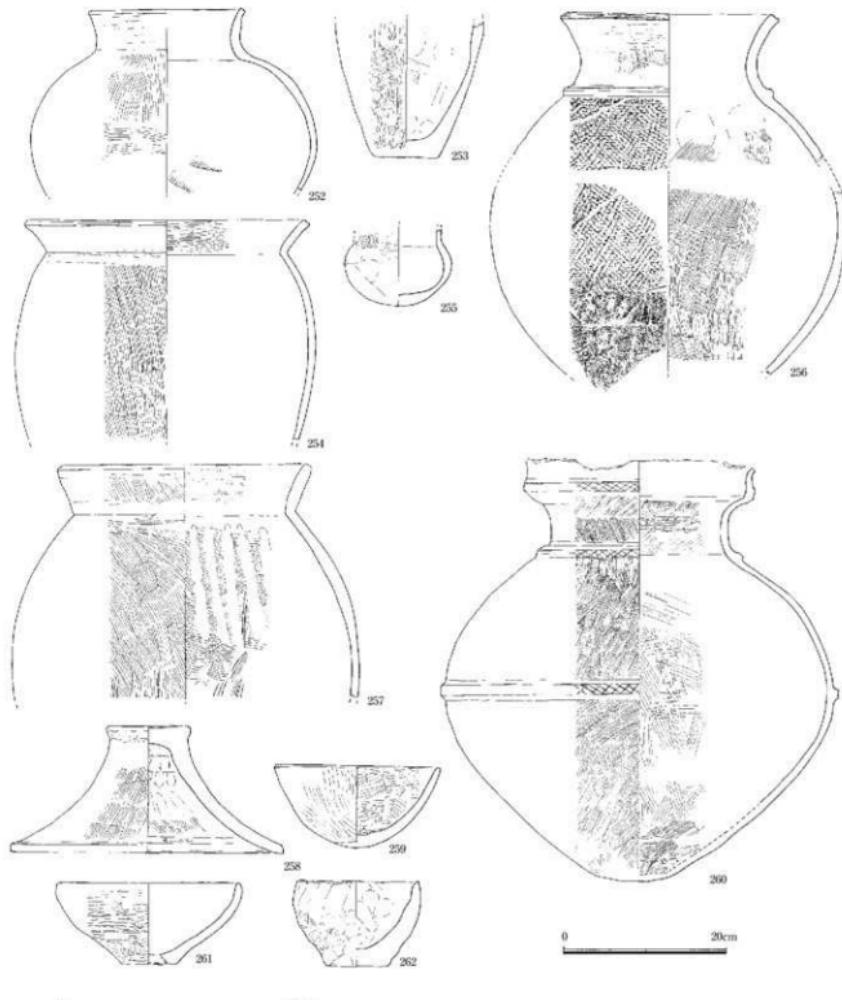


図 42 C-1・2区中層・下層出土土器実測図 (1/4・1/6)

口縁から変化した口縁部を持つ在地系の土器などが出土している。229の底部はほぼ丸底だが、平底部分がわずかにある。230～234はミニチュア土器。235～239は鉢で、237・239の鉢は外面にヘラケズリを施している。243は台付鉢ないしは甕で、脚台部分の外面に格子目タタキを施している。内面はハケメが施され、當て具の痕跡はわからない。244・245は器台で、244の外面には格子目タタキを施している。内面はナデとハケメで仕上げられている。246～251はC-2区1層出土の土器である。246は外面に平行タタキを施している。口唇部には櫛状施文具とによると思われる刻み目を施している。247の鉢の外面には格子目タタキを施している。内面にはハケメが施され、當て具の痕跡はわからない。249は丸底壺で、外面はヘラミガキで仕上げている。251の外底部は中央が押圧により窪んでいる。

④ C-1・2区中層・下層出土土器（図42）

中層は腐葉土・土・砂の各薄い層の互層である。明確に上層・下層と分離できないため、一部上層・下層の遺物も含まれている可能性もある。下層は砂を主体とする層である。252～256は中層出土の土器で、256は胴部外面中央から頸部に格子目タタキを施している。257～260は下層上部の出土土器で同じく弥生時代後期～終末期頃を主体としている。261・262はSDO1床面にある浅い土坑状の凹み（SX10の名を付した）内から出土した弥生土器の鉢である。

⑤ C-1・2区の肩部等出土土器（図43）

263～265は、流路SDO1の北側斜面の薄い包含層から出土した土器で、各時期の遺物を含んでいるが、図化したのは弥生時代中期の3点で、いずれも赤彩土器である。266～269はC-1区の排水路掘削時等に出土した土器や層位不明のC-1区出土の土器で、266は胴部外面中央～頸部に格子目タタキを施している。

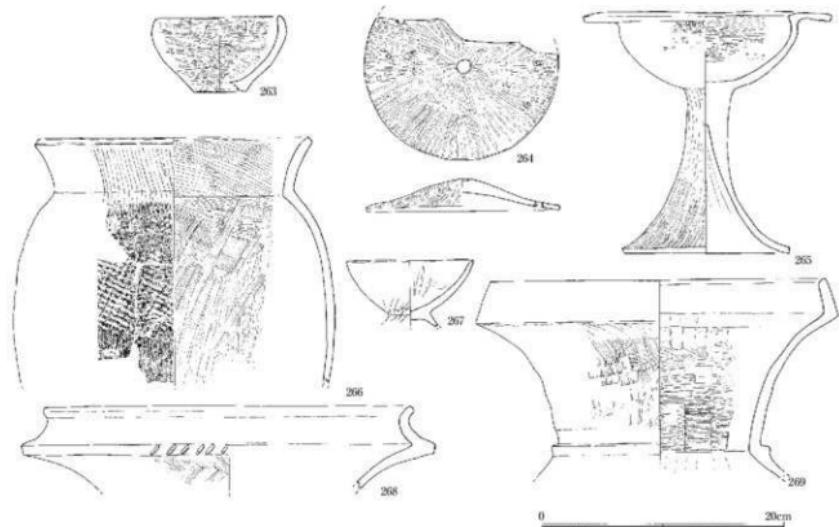


図43 C-1・2区肩部等出土土器実測図(1/4)

⑥ 土器群7 A・7 B出土土器（図44・45）

C-2区東側に位置するが、比較的散漫な分布の土器群である。一面の土器を取り除いた下もまとまっていたため、上の面を土器群7 A、下面をBとしたが、7 B出土の土器量は少ない。7 Aも7 Bも2層上部に含まれる。弥生時代中期から終末期頃の遺物を包含している。完形品はほとんどなく、大破片もさほど多くはない。270～280は弥生時代中期から後期の各種土器。281は口唇部に2列の刻目を施している。282は口縁部と胴部以下は同一個体と思われるが接点がない。3条の突帯のうち下2条には櫛状施文具による刻目を施している。底部は丸底である。284～287は土器群7 B出土の土器である。

⑦ 土器群8出土土器（図46・47）

土器群8はC-1区の土器群10から1m離れた南側に位置する。範囲は3.5×2mに収まる。層位的には上層（1層）中に含まれる。土器群の中央に空白部分を挟んで東西に分かれている。3個体分の壺棺級の大形土器を主体とする。最上部には大半が内面を下にした破片群が、その下には大半が内面を上にした破片群があり、あたかもその場で割れたような向きであるが、破片の位置はその場で

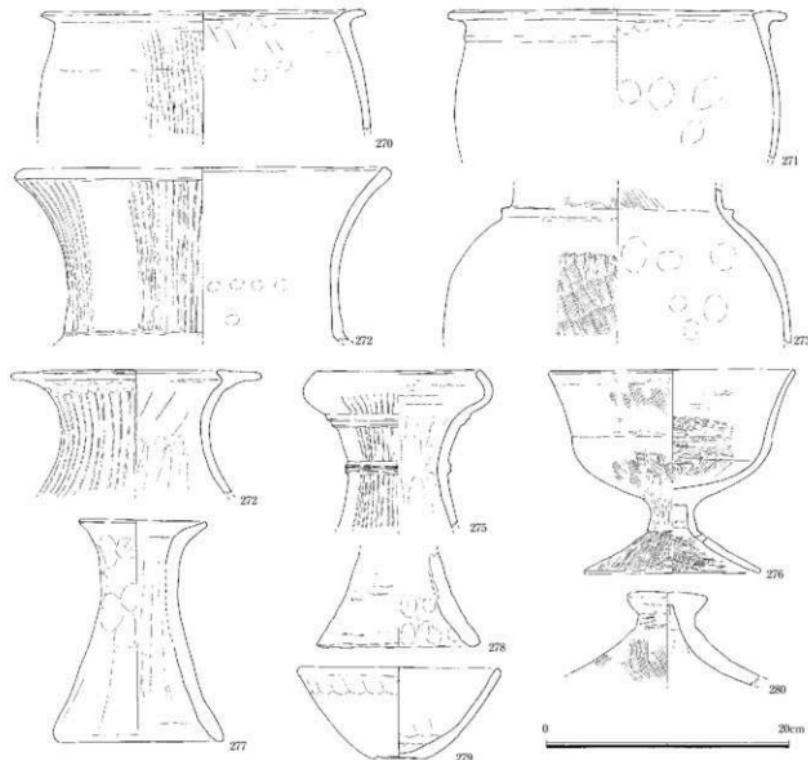


図44 C-2区土器群7出土土器実測図1(1/4)

割れた状況ではなく、大きな破片をまとめて遺棄した状況を呈している。これらの大型土器群とほぼ同じ位置か、すぐ下には大型土器以外の土器が若干含まれている。取り上げレベルによって土器群8 A・8 B・8 Cの名称を付した。なお、土器群8の南側隅の下20cmの2層（中層）上部から、2号小銅鐸が出土している。

288～290は最上面で出土した大型土器である。いずれも外傾する口縁部を持ち、やや平底気味の丸底であるが、器高や直径による相違の他、胴部最大径の位置、口縁部の傾きなど3点が異なった形態を示している。288はやや寸の短い器形で、頸部に1条と、288は3条、289と290は4条の

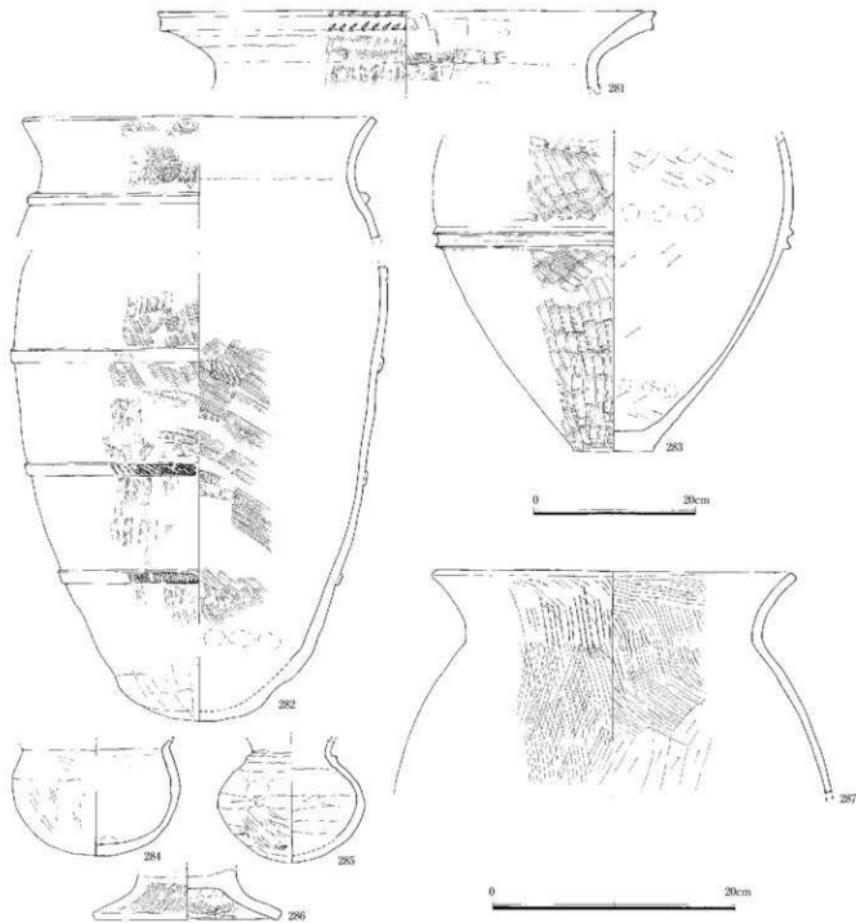


図45 C-2区土器群7出土土器実測図2・7B出土土器実測図(1/4・1/6)

突帯を胴部に施している。突帯の断面形は低平な台形であるが、288は特に高さが低い。胴部の突帯には横方向の平行タタキをを施し、頸部の突帯には、288は斜め方向の刻目、289と290は斜め方向の平行タタキを施す。口唇部には×文様の短沈線を連続して施している。291～299は大型土器群以外の土器である。291は朝鮮半島系の器形を呈した土器である。胴部外面には格子目タタキを施しているが、一部はその後にハケメを施している。内面はハケメとナデで仕上げられているが、一部指頭押圧状の謹責があるのは當て具痕か。焼成は良く、叩くとカンカンという音に近い音がする

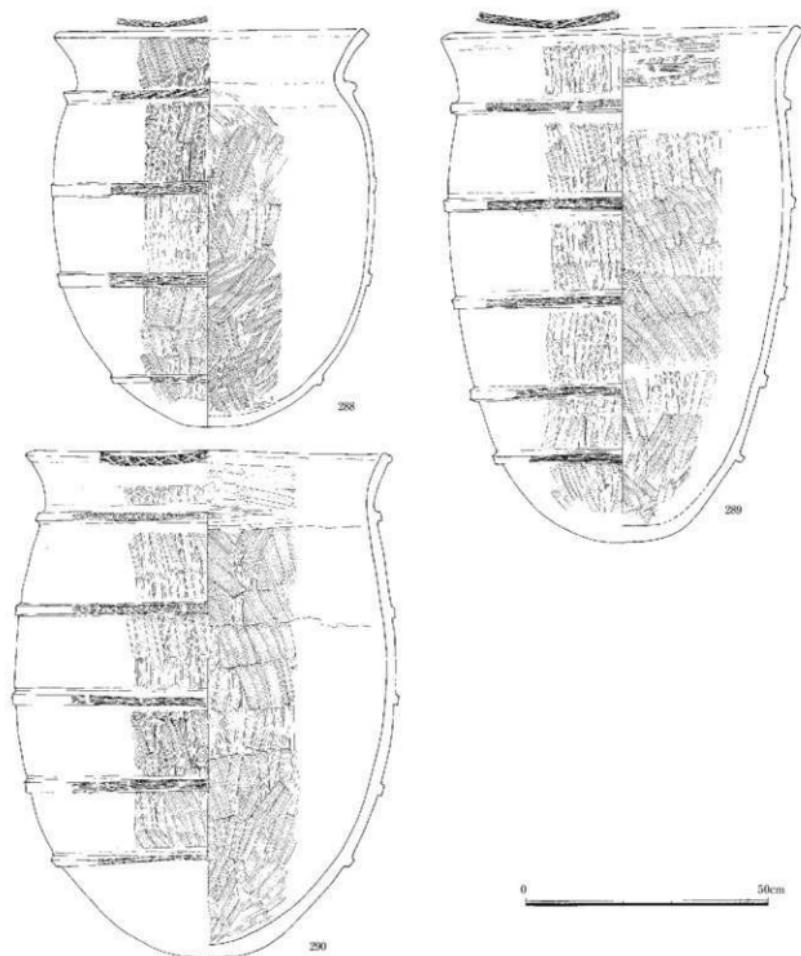


図 46 C-1区土器群8出土土器実測図1 (1/10)

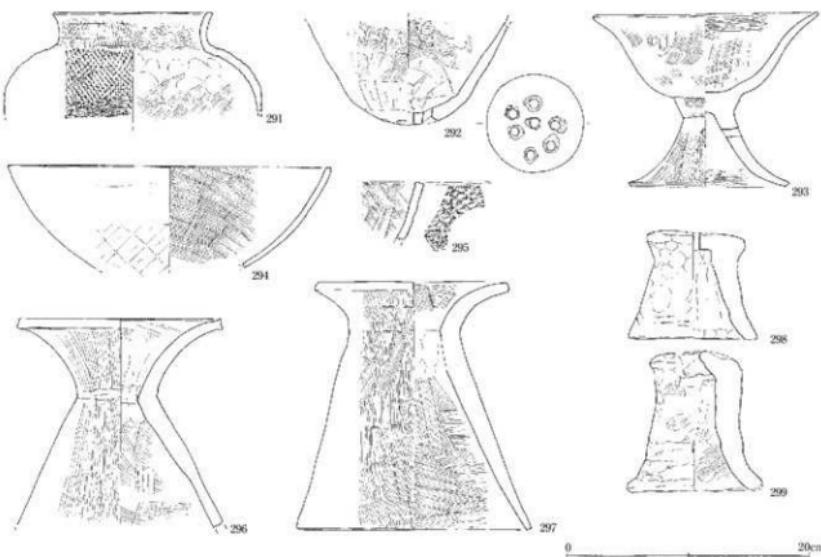
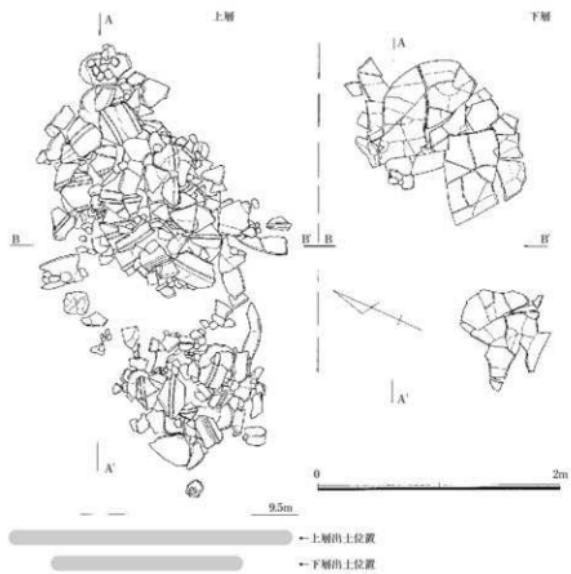


图 47 C-1区器群8出土状况实测图(1/40)
及同出土器实测图2 (1/4)

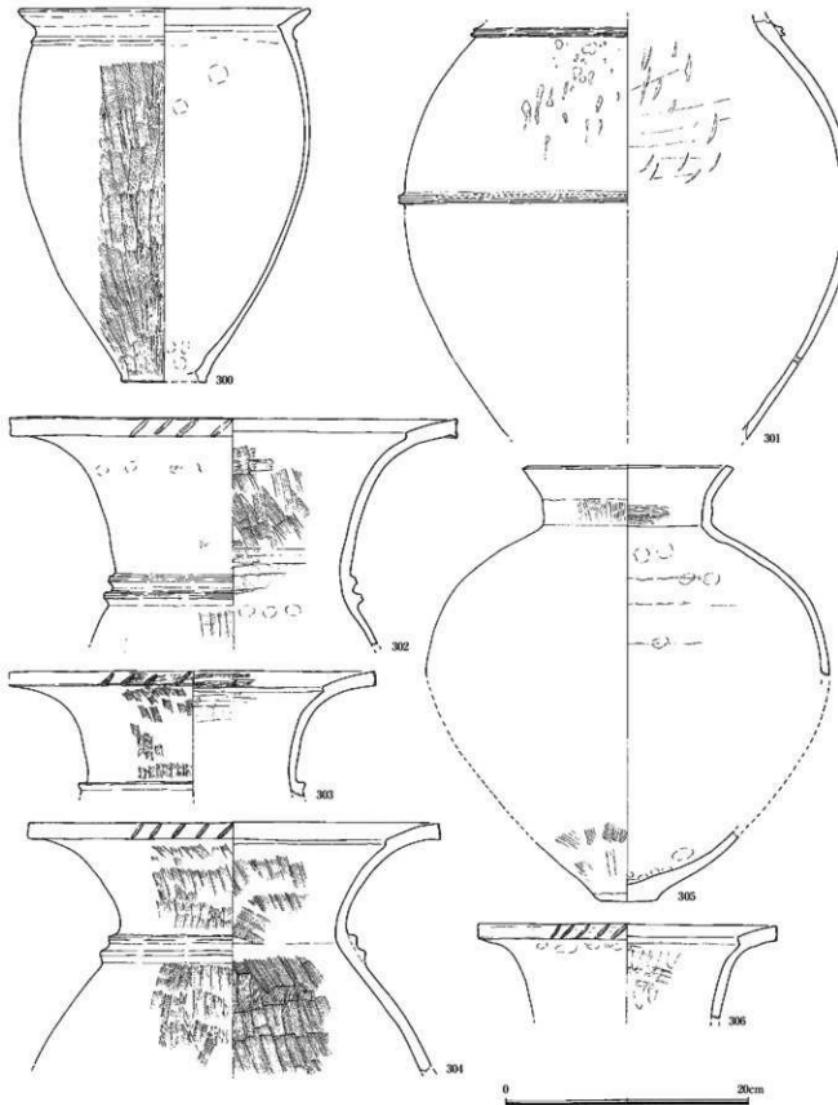


图 48 C-1·2区土器群10 出土土器实测图1 (1/4)

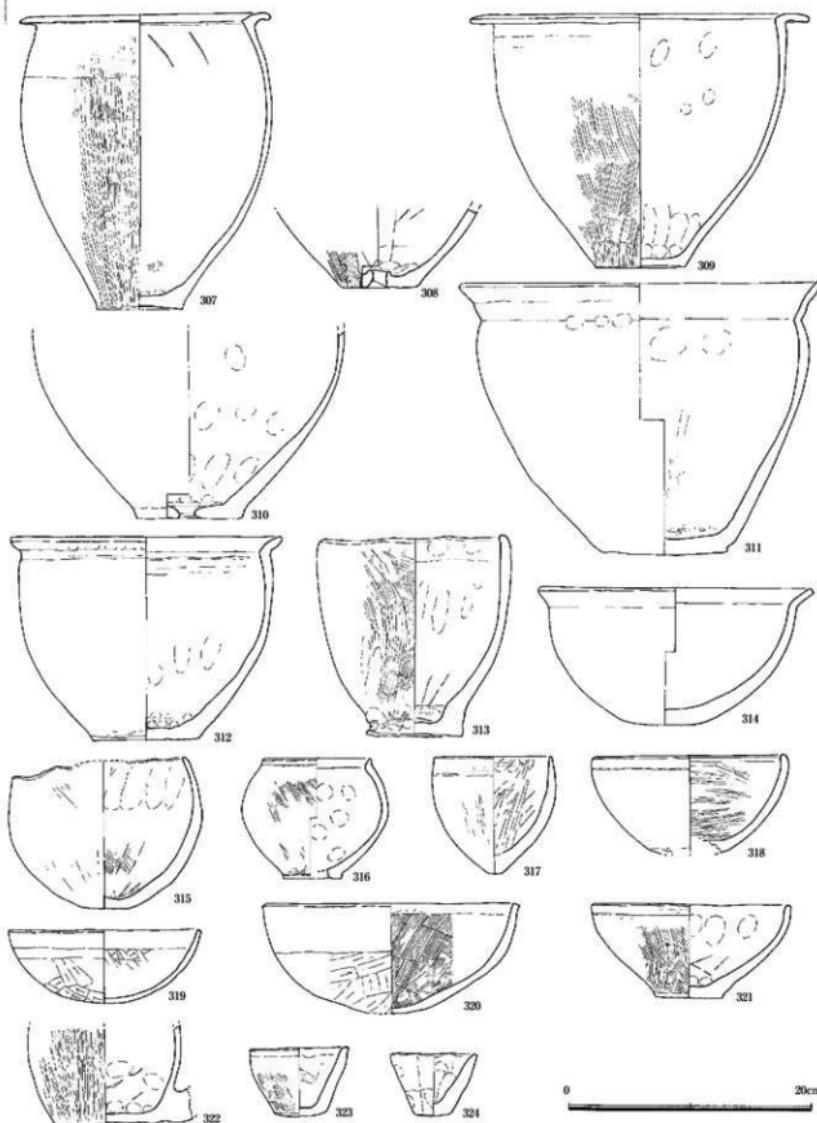


图 49 C-1·2区土器群10 出土土器实测图2 (1/4)

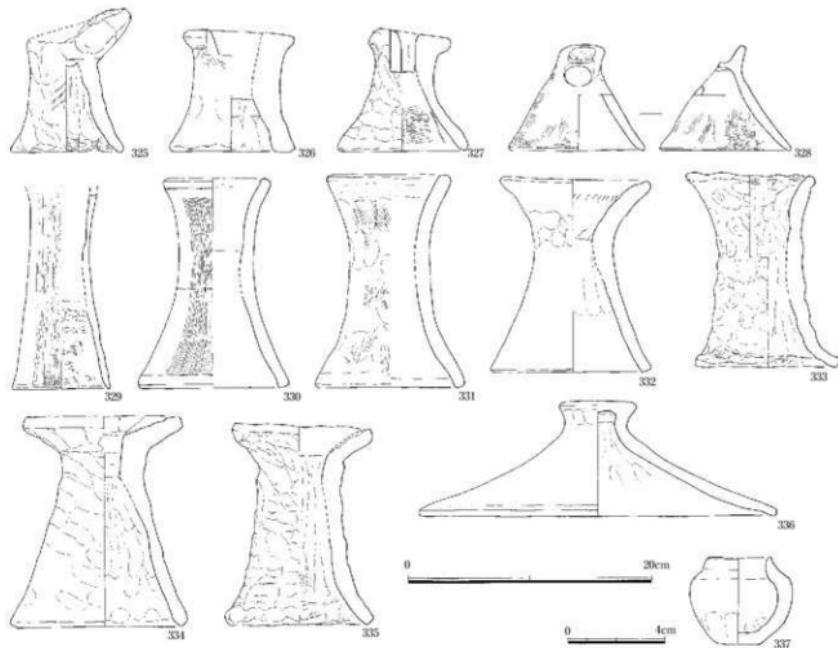


図 50 C-1・2区出土土器実測図3 (1/4・1/2)

が、焼きの良い弥生土器・土師器という印象を受ける。焼成は浅黄橙色を主体とし、胎土は他の弥生土器と大差ない。黒斑は確認できない。朝鮮半島から移入土器というよりは、国産のものと考えられる。292は丸底の底部に7孔を開けた瓶で、土器群8の最下部である8Cの出土であるが上層中に含まれる。295は鉢の破片と思われるが、外面に格子目タタキを施している。

⑧ 土器群10出土土器（図48～50）

B-1区の土器群11から、C-1区間とのベルトも含めてつながっている土器群で、土器群11と同じく中層(2層)を主体に出土したが、C-1区中央付近から東側はB-1区に比べて上層(1層)が厚く、一部上層の土器も含んでいる。土器群11と同じく土器群10Aと10Bで取り上げたが、10Bは小片がほとんどで、量も少なく、掲載したものは一部の接合資料を除いてすべて土器群10Aの出土である。弥生中期の土器から古墳時代初頭の土器までを含んでいる。300～310は弥生土器の甕・壺である。305は多くの破片があるが、あまり接合していない。300と309は赤彩らしい痕跡があるが、明確ではない。308・310は底部に穿孔があるが、ともに焼成前に穿孔している。311～321は鉢であるが、各時期のものが含まれている。315は底部がわずかに平底を呈している。317は砲弾形の器形である。319・320は体部下半部外面にヘラケズリを施している。322はジョウ牛形の土器か。

(4) D-1・2区出土土器

前述のように、D-1区の調査区南端部分にポンプを設置するため、約5×5m部分について先行掘削し、遺物の採集を行った。結果的にはこの約25m²から木製品を含む大量の遺物が出土した。掘削は一気に地山まで行ったため、層位的な把握はできなかった。D-1区の中央付近では、今回は報告できないが、上層（1層）・中層上部（2層）を中心に木製品がまとまって出土している。D-1区からE-1区の流路南岸近くでは弥生土器からなるまとまりが3カ所見つかり、それぞれ土器群1・2・3と名付けたが、土器群3は量も少なく、一部が流れてしまった。

E-1区からD-1・2区にかけて調査の始めにトレンチを入れ（No.1トレンチ）、その後もトレンチの西側にベルトを残した（No.1ベルト）。トレンチ・ベルトはいくつかのグリッドにまたがっており、このトレンチ・ベルトの出土遺物はまとめてここで報告する。これらのトレンチ・ベルトでは上層から弥生時代終末から古墳時代初頭頃の土器が大量に出土し、この後で報告するE-1・2区と同様の出土傾向であるが、ベルトの西側南部では比較的高い位置から弥生土器が出土しており、偶然ではあるが、ベルトを境に出土遺物の傾向が若干異なっている。ただし、上記のポンプ設置部分では古墳時代初頭前後の土器が大量に出土していることから、全体に際限なく土器を遺棄したのではなく、遺棄するときは1カ所にまとめて遺棄したものと考えられる。

流路北側の斜面上（D-2区・E-2区西端）でも土器がまとまって出土した。このまとまりを土器群9と名付けたが、土器群は途中とぎれることなく調査区北端のC・D-7区まで連なり、さらに北側に隣接する第52次調査につながっている。土器群9のうちここで報告するD-2区・E-2区部分及びD-3区においては、流路斜面というよりはほぼ流路を登り切ったところにあるため、最初に土器を投棄したあの上の堆積がほとんどなく、弥生時代中期～古墳時代初期までの土器が、あまりレベル差をもたずに出土している。

① ポンプ用地出土土器（図51～58）

ポンプ用地を先行掘削した時の遺物で、前述のように層位的な把握は出来ていない。調査時の箱数で約200箱あり、未図化分が約80箱、図化した点数が100点弱あり、これらが25m²内外から出土した。弥生時代中期後半以降古墳時代初頭までの土器が出土したが、その大半が弥生時代終末から古墳時代初頭頃の土器で、破片も大きく略完形品も少なくない。

338は赤彩を施した胎土の精良な弥生時代中期の壺で、348～362は弥生時代後期～古墳時代前期の壺である。340・342は丸底で、340は底部近くの外面にヘラケズリを施している。344・345は壺とすべきか。345の胴部には低平な突帯を巡らしている。346は平底であるが、外面に平行タタキを施し、内面には密にハケメで仕上げている。350～360はやや大型の二重口縁を持つ土器で、壺とすべきか。353の胴部はほぼ椭円形を成している。354～361は布留式系の土器で、356は肩部付近に波状文を施している。360の口縁部には穿孔が1カ所認められる。361は肩部と胴中央部に文様状に横方向のハケメを施している。

353～373は壺で、363は胴下半部が寸詰まりの器形である。364～367は二重口縁を持つやや大型の壺である。364～366は口縁端部を摘み上げたように外反させている。いずれも頸部屈曲部に突帯を持ち、364は断面M字形の頂部に櫛齒状施文具によって刻み状を成している。365は断面台形、366は断面三角形を成している。368は高さ40cm、口径21cmを測る。底部は丸底で、ほぼ全面ハケメで仕上げている。371・372は胴下半部に突帯を1条持ち、371は突帯に斜格子文を施し

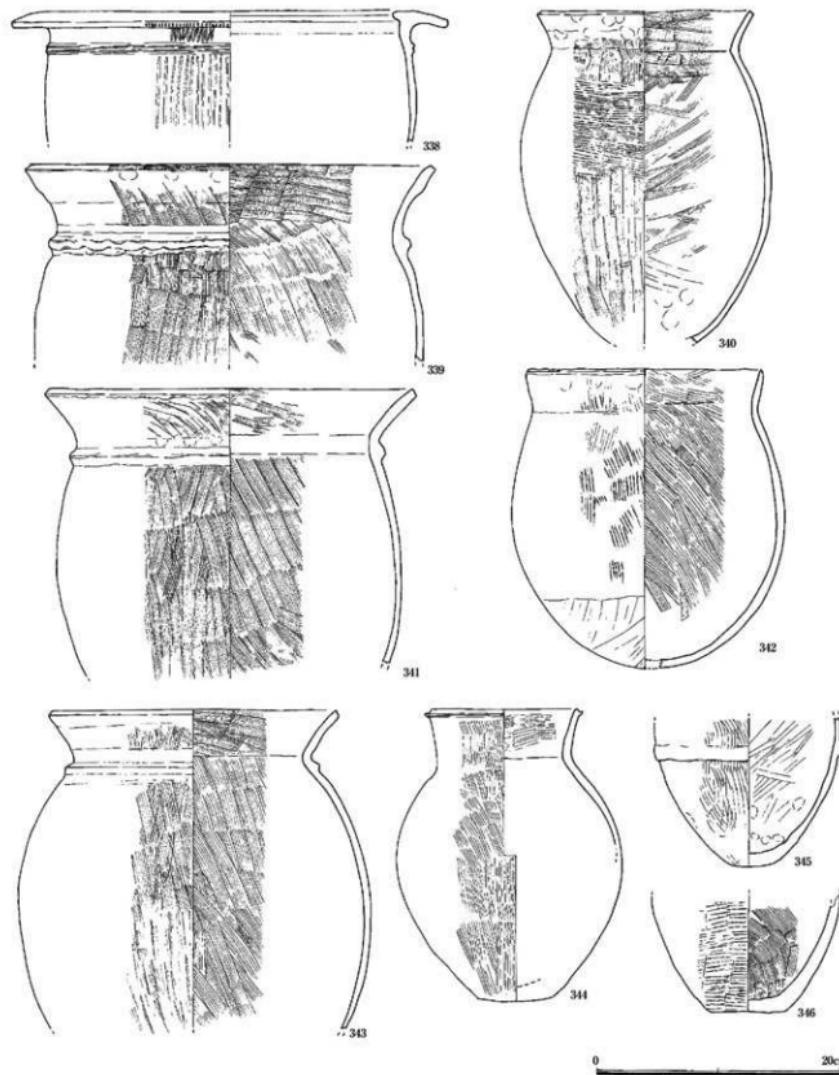


図 51 D-1区ポンプ用地出土土器実測図1 (1/4)

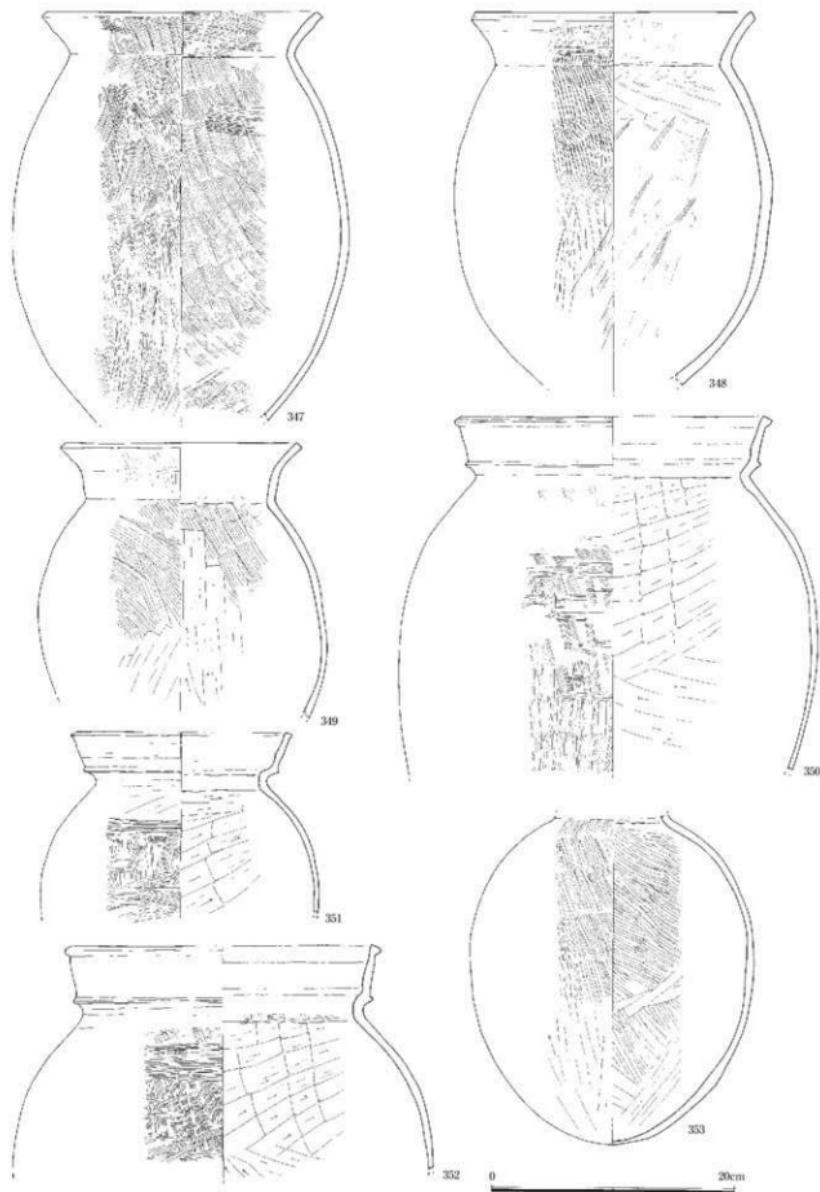


図 52 D-1区ポンプ用地出土土器実測図2 (1/4)

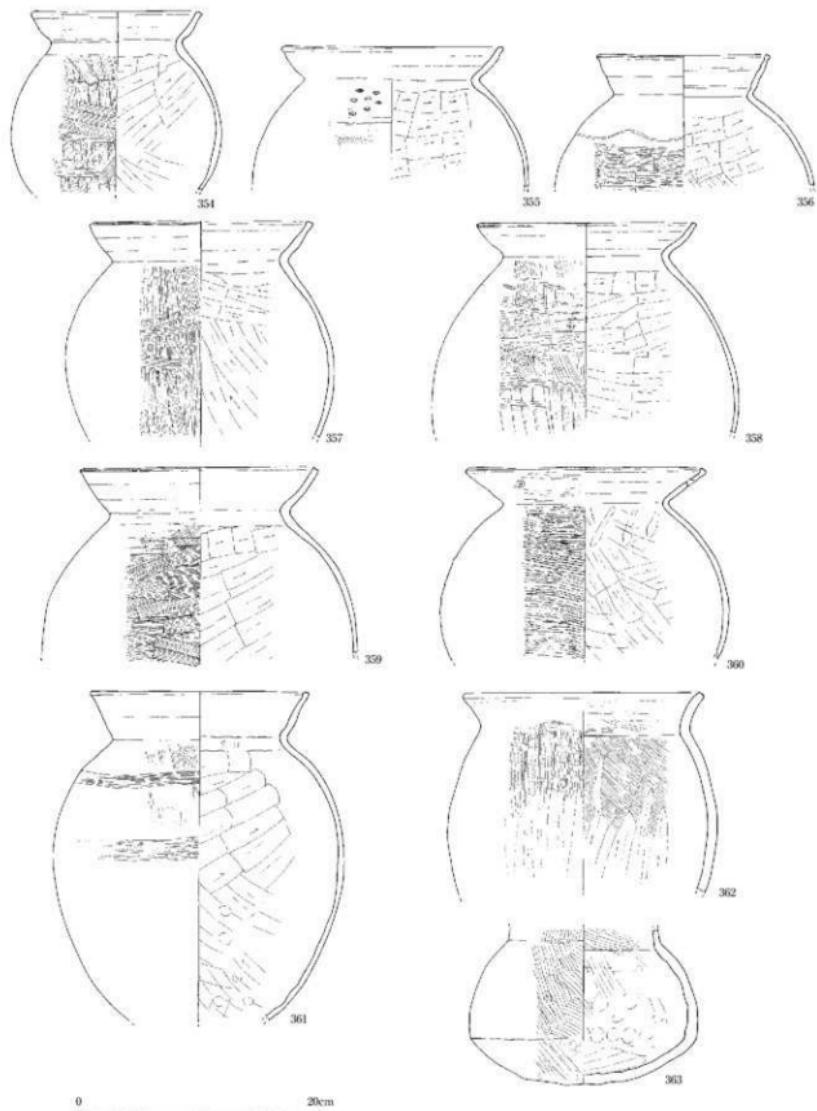


図 53 D-1区ポンプ用地出土土器実測図3 (1/4)

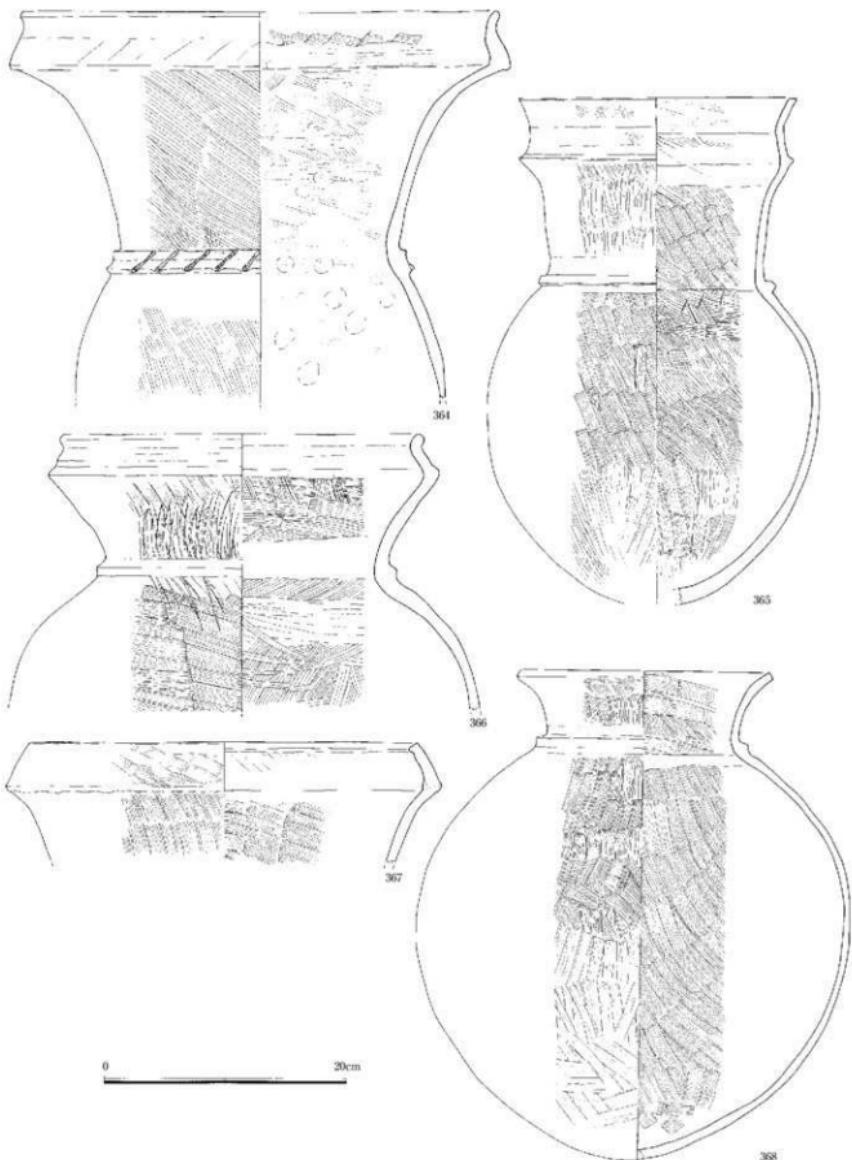


図 54 D-1区ポンプ用地出土土器実測図4 (1/4)

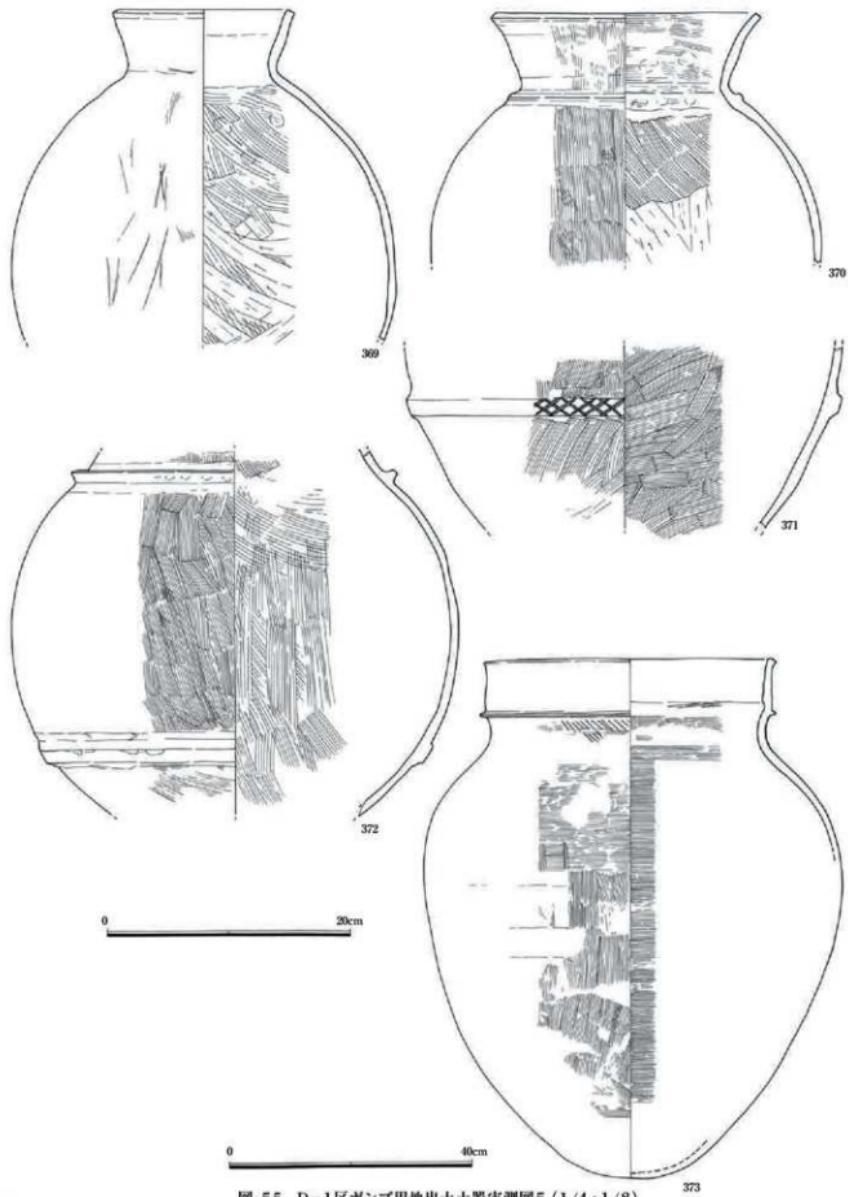


図 55 D-1区ポンプ用地出土土器実測図5 (1/4・1/8)



図 56 D-1区ポンプ用地出土土器実測図6 (1/4)

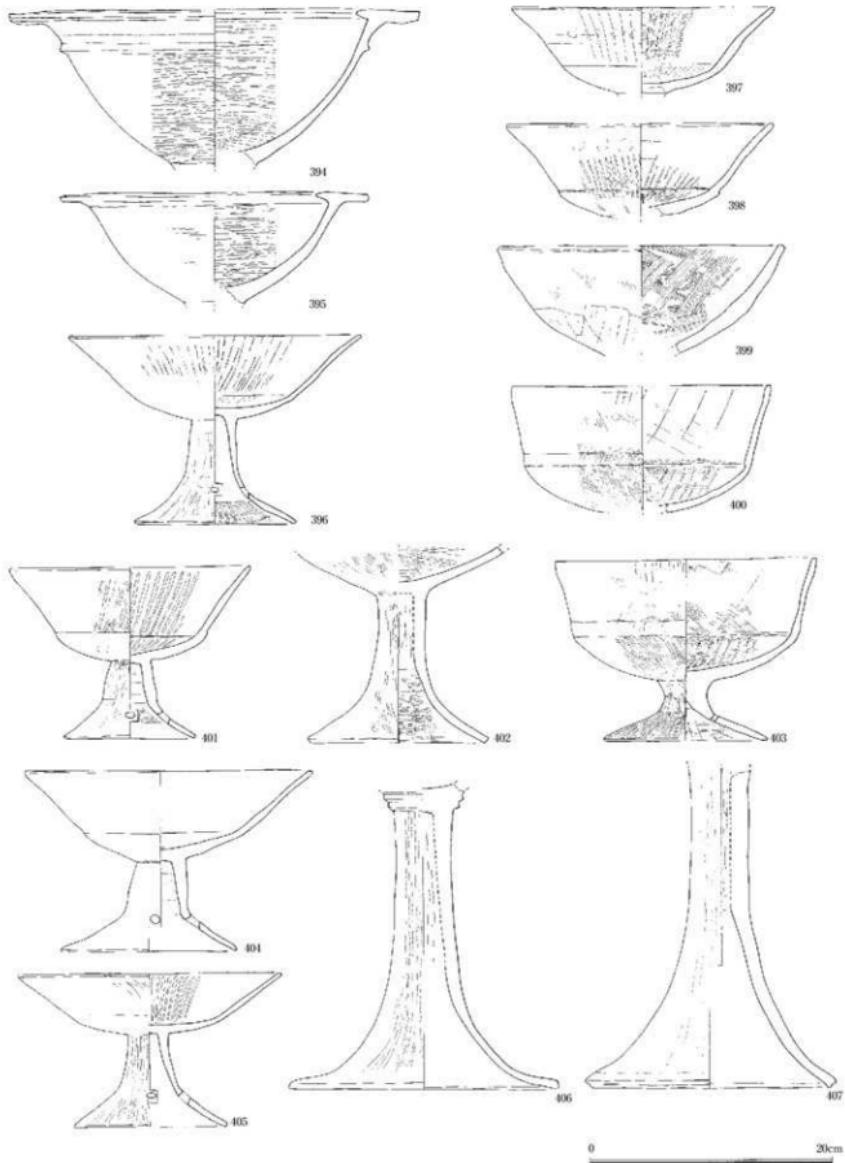


図 57 D-1区ポンプ用地出土土器実測図7 (1/4)

ている。373は完形に近い大型の土器である。高さ85cm、口径47.8cmを測る。口縁端部を摘み上げたように作った直立する二重口縁の土器である。ほぼ全面面の細かいハケメで仕上げている。頸部に斜方向の短沈線を連続的に全体の1/4周だけ施している。器壁が1.6cmとやや厚く、2人で持つてもかなり重たい土器である。374・375は無頸の土器で丸底である。375はやや歪んだ形をしており、胴上半部両面のハケメは別の原体を用いている。また胴下半部外面は、ヘラケズリである。376・377は小型の壺。378～381は外反する口縁部を持つ鉢であるが、378は平底で、380と381は丸底を呈し、380は内面に、381は両面にヘラケズリを施している。382・383は平底の鉢、391は丸底の鉢である。392と393はやや異質な形態の土器である。ともに平面形は菱形に近い形態の皿状の土器で、菱形の頂点部分を外側に摘みだしている。おそらく反対側の頂点も摘みだしているのではないかと思われ、1種の耳皿的な形態をとっている。全面ナデ・指押さえで調整しており、やや粗い造りの土器である。

394～407は高杯である。弥生時代中期～古墳時代前期のものを含み、古墳時代初頭前後のものが多い。400・403は直立気味の長い口縁部と短い脚部を持つもので、外面口縁部に縦方向の黒い線

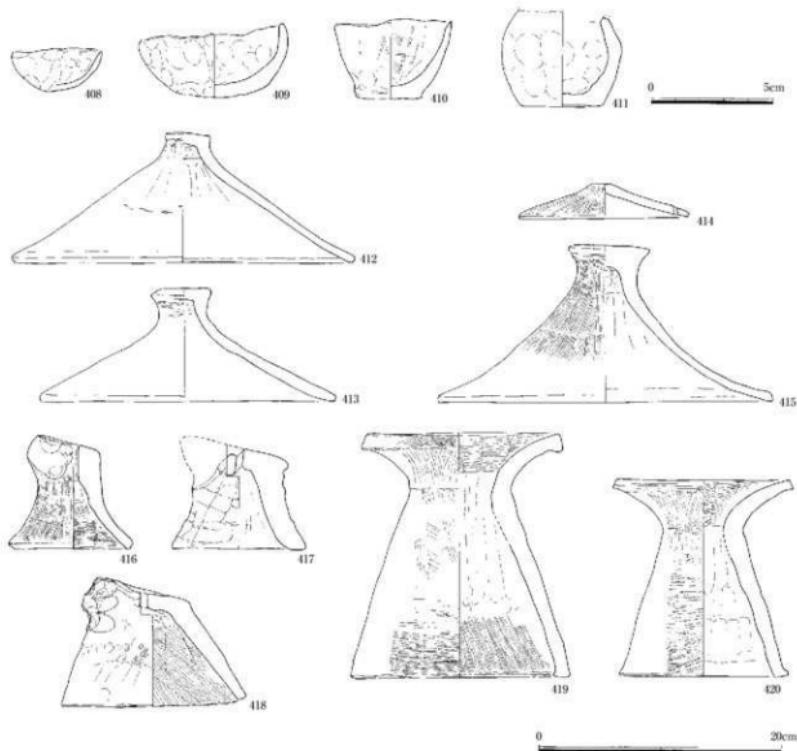


図 58 D-1区ポンプ用地出土土器実測図8 (1/4)

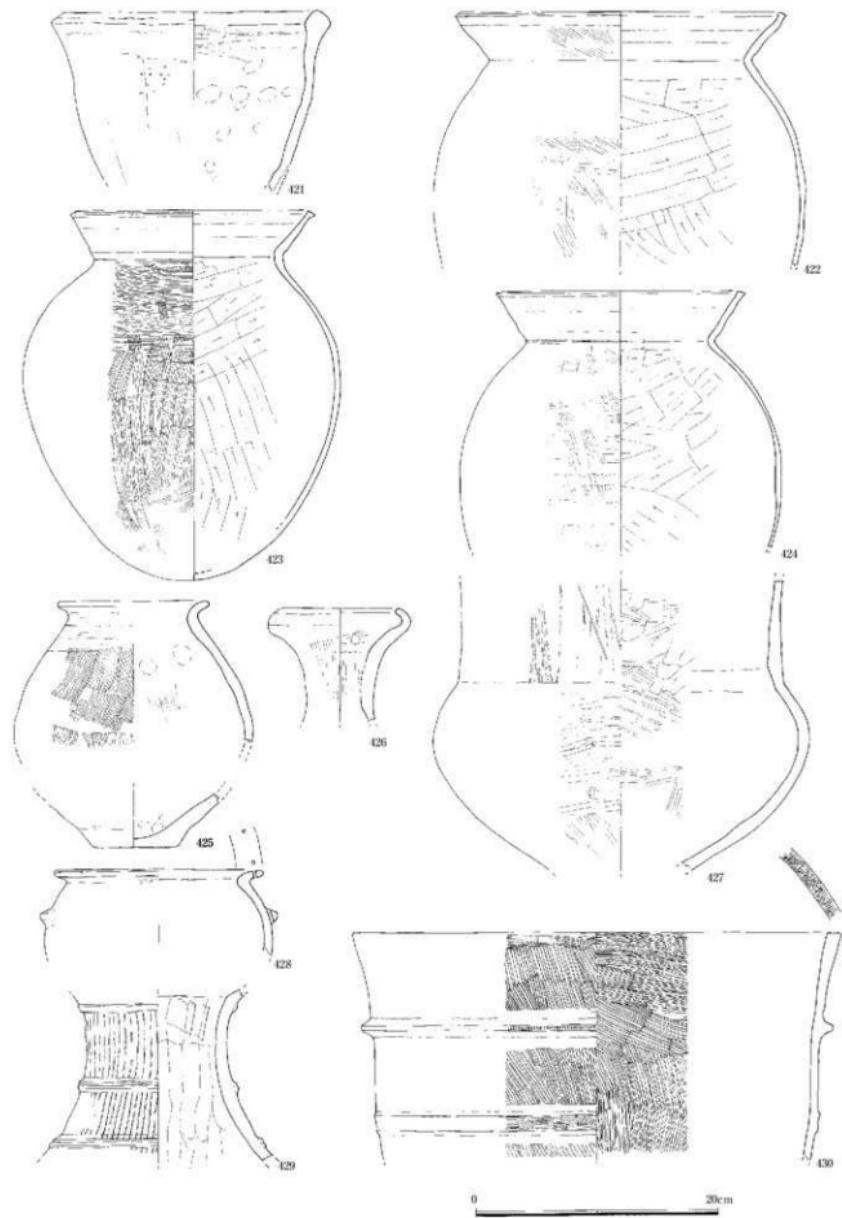


图 59 D-1区上层·中层出土器実測図1(1/4)

が数点かすかに確認できる。ミガキ・ていねいなナデで仕上げている土器が大半で、胎土も精良なものが多い。弥生時代中期の394・395・407は外面に赤彩が認められる。397には基部に黒色の線が縦方向に描かれている。401・405は基部の両面に縦方向の暗文が施されている。408～411はミニチュア土器で、411は平底の壺の形状を成している。412～415は蓋で、小型の414は外面をミガキ調整で仕上げ、胎土も精良である。416～418は支脚、419・420は器台である。

25m足らずのポンプ用地内からは以上のように多種多様な土器群が出土したが、B-1～C-1区で出土した格子目タタキを施した土器は、破片が少量ある以外は出土を見ない。後述するE-1では多くの格子目タタキ土器が出土しており、同じ時期の遺物でも地点ごとの差異が存在している。

② D-1区1・2層出土土器（図59・60）

D-1区は全体で約90mあり、そのうち25m分がポンプ用地で穿孔掘削したが、ポンプ部分はその後に壁面が崩れたりしたため、最終的に40m弱の大きさになった。そのため、人力掘削したのは50mほどにとどまり、さらにその一部が前述のNo.1トレントとベルトであったため、当初に層的に把握しながら掘削した部分は多くはない。従って、グリッドから出土した遺物も少ない。またポンプ東側付近は1層の厚さも薄い部分があり、1・2層の遺物を同時に取り上げた部分もあるため、ここでは1・2層の土器をあわせて掲載する。

421～430は甕・壺であるが、このうち明確に1層出土のものは430の大型土器だけである。421・425・429が2層出土で他は、1・2層出土の土器である。421は甕というより深い鉢形の器形で、胸部外面上部に10個の小さな刺突が見られる。425は一見前期の壺に似た形状の土器。428の短頸壺は胸部に耳を持っている。430は大型の土器で、2条の突帯があるが形状が異なっており、

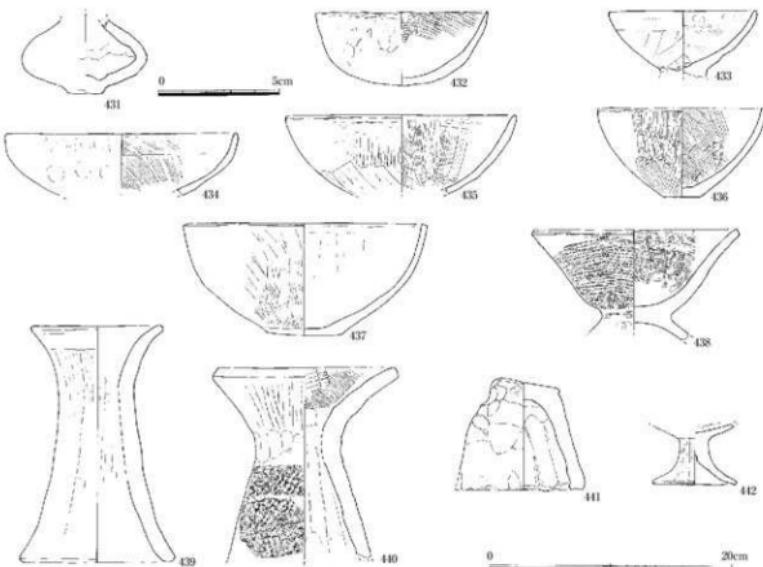


図 60 D-1区上層・中層出土土器実測図2 (1/4)

上の突帯には刻目が施され、口唇部には格子目状の調整が施されているが、遺存状況が悪くタタキなのかハケメを2回施しているのか別のものかよくわからない。431～442は2層もしくは1・2層出土である。431は弥生時代中期の壺のミニチュア土器。433は脚付の鉢か。438は脚付鉢で、外面に平行タタキを施している。439・440は器台で、440の外面には格子目タタキを施し、頸部付近はハケメとナデで消されている。441は支脚、442は小形の高壺である。

③ D-1区下層出土土器（図61）

3層である砂層を主体とする層から出土した土器で、出土量はあまり多くはない。443は包含層下部出土で、3層でない可能性もある。445は欠損部が多く、上半部と下半部が接合しない。446の無頸壺と449の高壺には赤彩が施されている。

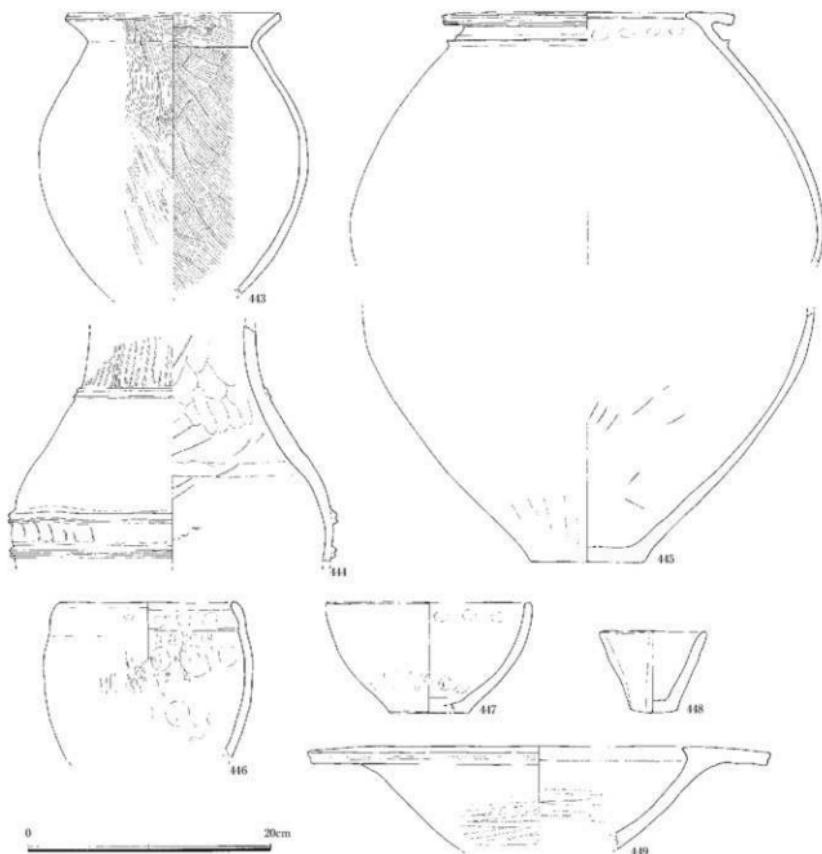


図 61 D-1区下層出土土器実測図 (1/4)

④ D-2区出土土器 (図62・63)

D-2区は南西側と南側の一部を除いて、ほとんどの部分がSDO1の北側斜面に含まれている。また前述のように、SDO1西岸に延々と続く土器群9がD-2区から始まっているため、土器群9を除いた出土遺物は多くない。さらに包含層が薄いため(D-2区北半では20cmに満たない)、縄文時代晩期と弥生時代中期以降の土器が、あまりレベル差がない状態で出土している。最上層からは須恵器が出土している。図62は肩部出土の土器。450～456は須恵器で、环身・壺・甕の破片が出土している。457～466は弥生土器で、464は小壺の破片であるが、胴部中央付近外面に格子目タタキが施されている。466は寸づまりの器台。467・468は縄文土器である。467は両面に条痕文を施している。468は底部の破片で、滑石を多量に含んでいる。図63は斜面直下の上層・中層出土土器。474・478は口縁端部と胴部の一部を欠き、476はほぼ完形品である。480は格子目タタキ

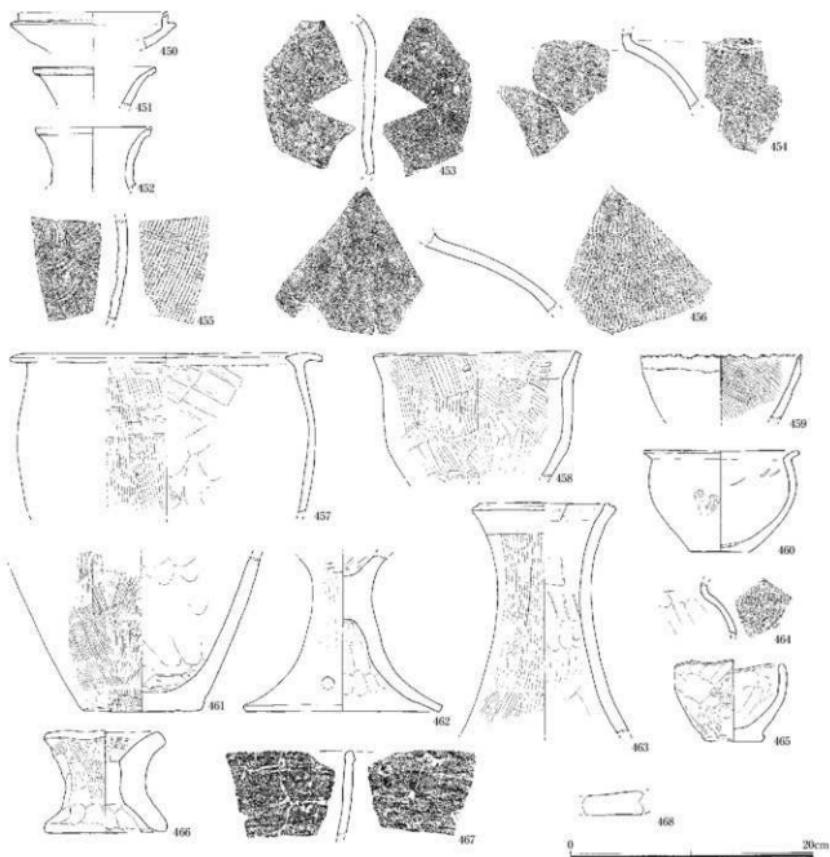


図62 D-2区出土土器実測図1(1/4)

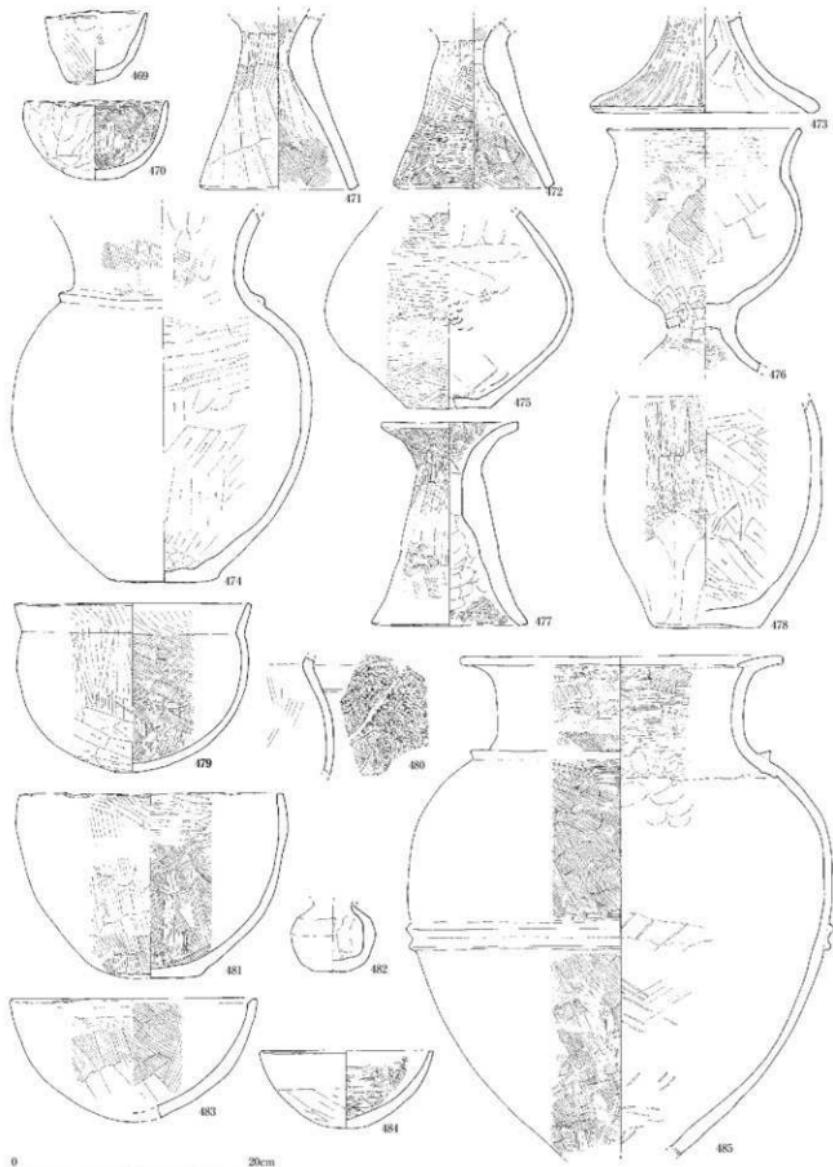


图 63 D-2区出土器实测图2 (1/4)

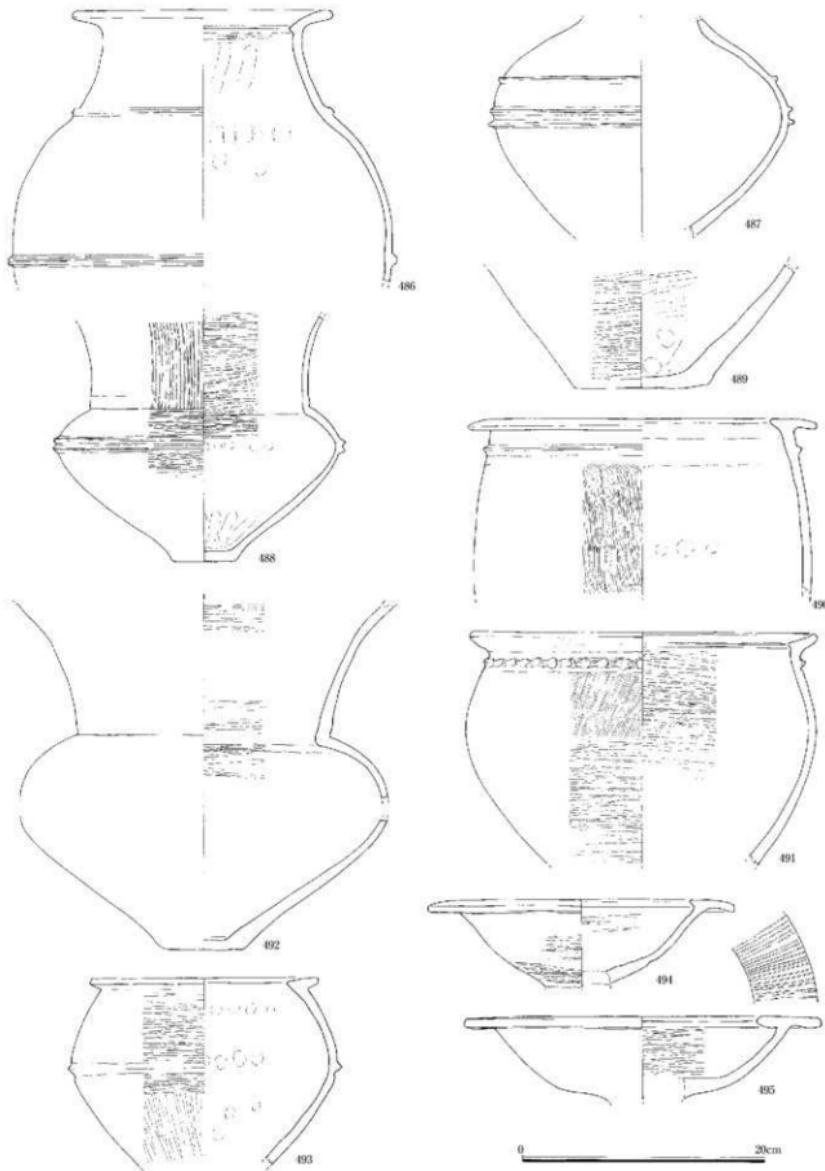


图 64 D-1区土器群1A·1B出土土器实测图 (1/4)

を施している。482は壺形のミニチュア土器で、厚い器壁を成している。

⑤ 土器群1・2出土土器（図64～66）

土器群1～3はNo.1ベルトすぐ西側で検出した群で、土器群1はS D O 1南斜面を登り切ったところ、土器群2は斜面直下、土器群3はそのやや西側であるが、土器群3は量も極端に少なく、ここでは土器群1と2を図化している。土器群1と2あわせて約30箱と量的にはそれほど多くなく、小片が多い。いずれも弥生時代中期の土器を主体としているが、後期の土器や土師器も含んでいる。486～491が土器群1A、492～495が土器群1B、496～507は土器群2、508～512が土器

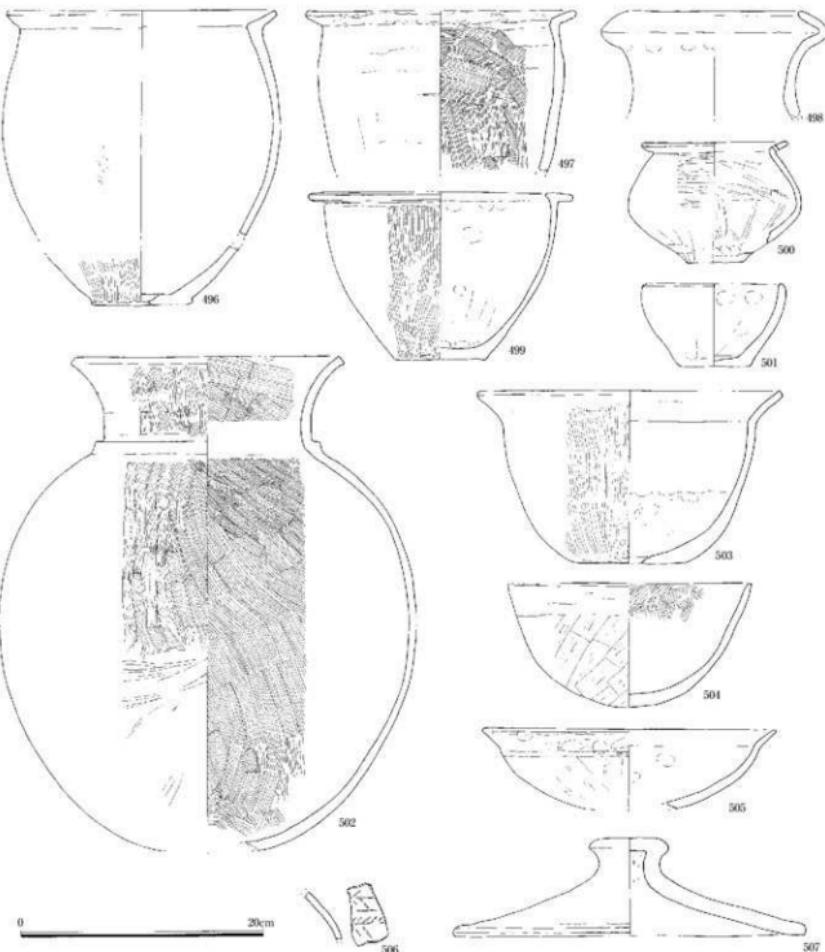


図 65 D-1区土器群2A・2B出土土器実測図(1/4)

群1～3のさらに下から出土した土器である。

土器群1・1Bは精製の土器が多くを占めている。壺・高坏の多くはヘラミガキで仕上げ、赤彩を施している。煮炊き用の甕は少なく、図化したのは509のみである。

土器群2は流路中央近くの土器群であるが、主体の弥生時代中期土器は川底近くで、この部分は上層が厚く堆積しており、土器群2にはこの上層の土器も含んでいる。496～501・503は弥生土器で、中期・後期を含んでいる。500は外面をミガキ調整、内面は下部に暗文状にハケメを施している。502は丸底もしくは小さな平底になる大型壺で、ほぼ全面ハケメ調整で仕上げている。土器群1と2の接合資料である。503は底部に焼成後穿孔を施している。504は外面にハケメを施した丸底の鉢である。506は当調査区で数少ない弥生時代前期の土器と思われ、壺の肩部に有軸羽状文を施している。

508～512は土器群最下層出土の土器である。509は焼成後に穿孔を施している。511はかなり造りの雑な深鉢形土器である。

⑥ D-2区土器群9出土土器（図67～70）

前述のように、SD01西岸（西斜面）にはD-2区から調査区北端まで延々と土器群が続いている。土器群9の名称を付した。土器群9は未図化分だけで500箱を越え、同じ位置でグリッド名を付したものや、土器群9と連続する各ベルト出土のもの、図化した分などを入れると2000箱を越えるものと思われる。集積結果としての土器群としては連続するが、もちろんそれぞれの位置における状況は異なっている。D-2・3区、E-2・3区では、SD01西側斜面を登り切ったところにあるため堆積土が少なく、弥生時代中期～古墳時代初頭の土器が、あまりレベル差がない状態で出土している。この地点では完形に近い土器はあまり多くはない。最初に検出した面を土器群9A、その下のレベルから出土した一群を土器群9Bとして取り上げた。

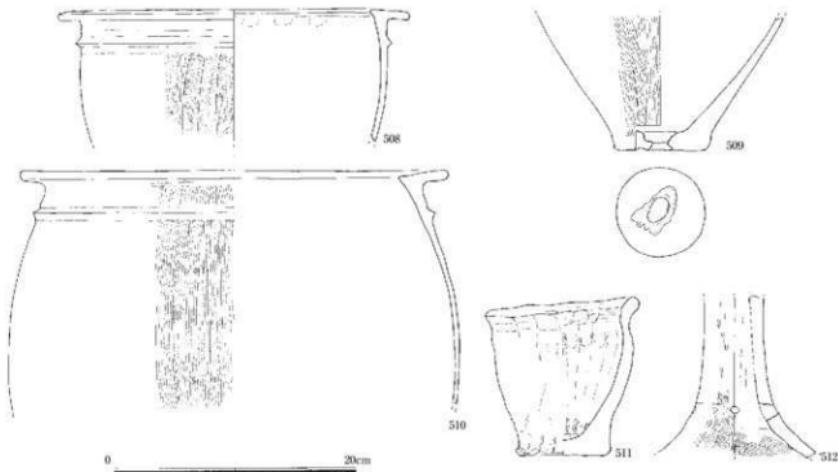


図66 D-2区土器群2出土土器実測図(1/4)

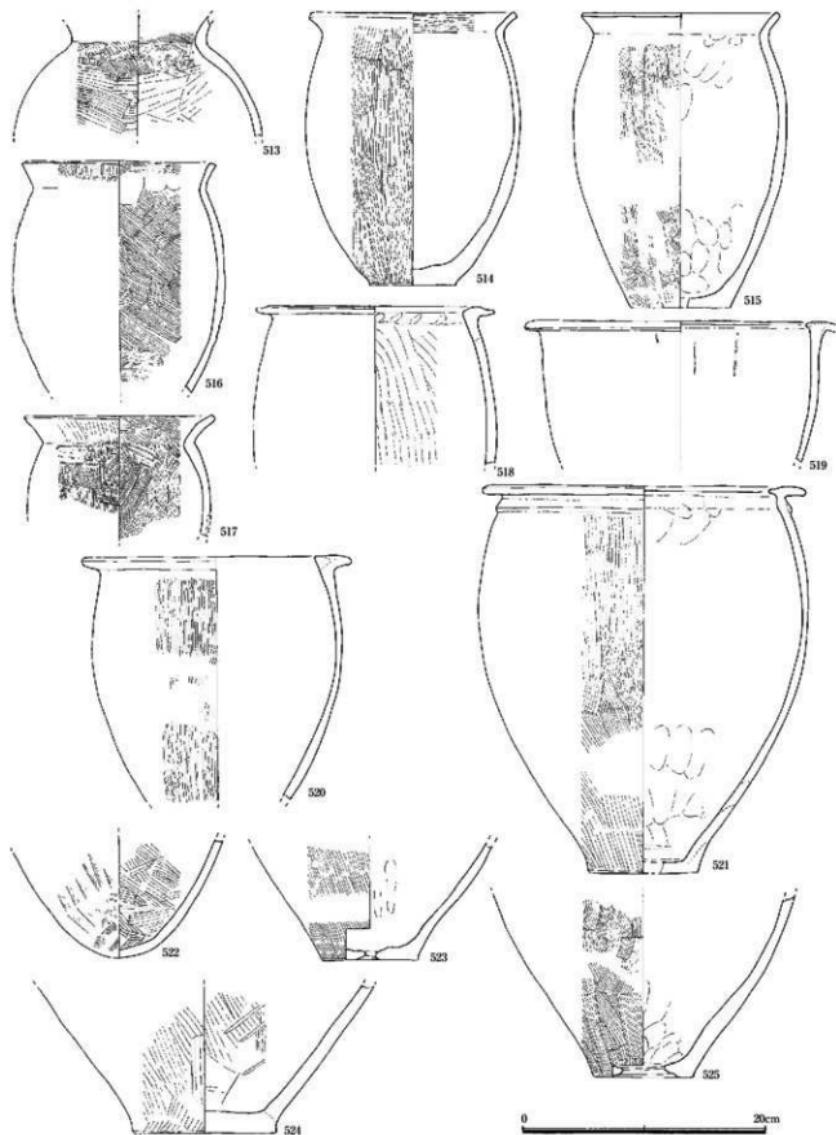


图 67 D-2区土器群9出土土器实测图1(1/4)

甕は弥生時代中期～古墳時代初頭のものが出土している。516は胸部外面上部に平行タタキを施している。下部はハケメで消している。518～520は鋤先口縁を持つ甕で、土器群の下部から出土している。521も鋤先口縁を持つ甕で、器高31.8cmを測る。522はほぼ丸底で、523は底部に焼成後に穿孔を施している。525も穿孔を施し、孔は径約3.5cmと大きく焼成後に穿孔している。

526～529は壺である。526は数少ない弥生時代前期の土器で、口径15.4cmを測る。かなり摩滅

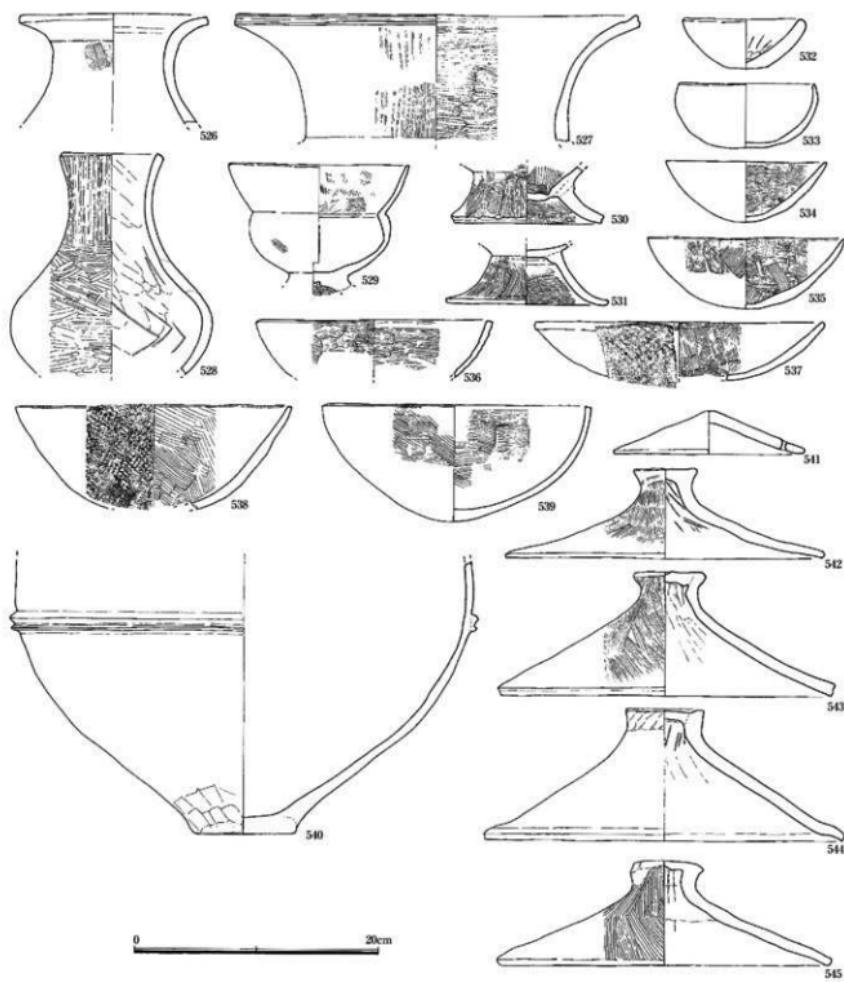


図 68 D-2区土器群9出土土器実測図2 (1/4・1/5)

がひどく、ローリングを受けている。528は徳利状の長頸壺で外面は、口縁部・頸部が縱方向のミガキ調整、胸部は横方向のミガキ調整で仕上げている。540は大型の壺で胸部最大径38cmを測る。532～539は鉢で、532・533は平底で、534以下は丸底を呈すると思われる。537は外面口縁部付近に、538はほぼ全体外面全面に格子目タタキを施している。541～545は蓋で、541はつまみ部の無い小型のもので、ていねいなナデ仕上げである。544のみ土器群9のすぐ南側の下層から出土した。546～551は器台である。546～548は外面に頸部付近は縱方向、頸部から下は横方向の平行タタキを施している。いずれも土器群9の最上部から出土している。549～551はハケメを施した弥生時代の器台である。552は平行タタキを施した支脚。553～556は高杯で、553はかすかに赤彩らしき痕跡があり、554は内面に赤彩が認められ、本来は2点とも坯部は前面赤彩を施したものと思われる。

557～562は土器群9の下層から出土した一群であるが、上部の土器群とのレベル差はわずかである。弥生時代中期を主体とする土器群で、558～560は壺で、559・560には赤彩が施されている。558は摩滅しているが、本来は赤彩土器であろう。562は完形の短頸壺で、外面はミガキ調整で仕上げている口縁部の相対する位置に2つずつの穴が穿たれている。

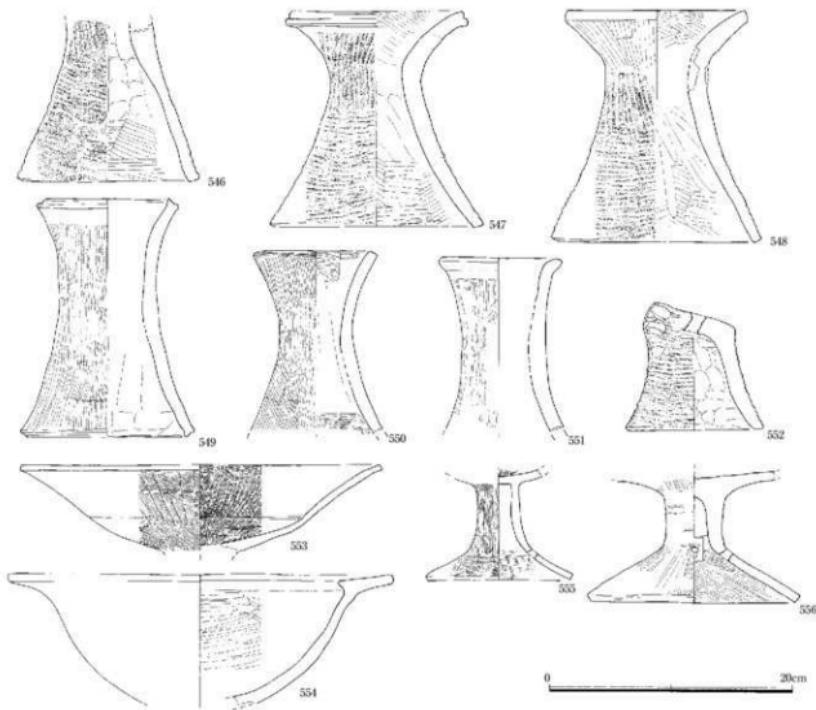


図 69 D-2区土器群9出土土器実測図3 (1/4)

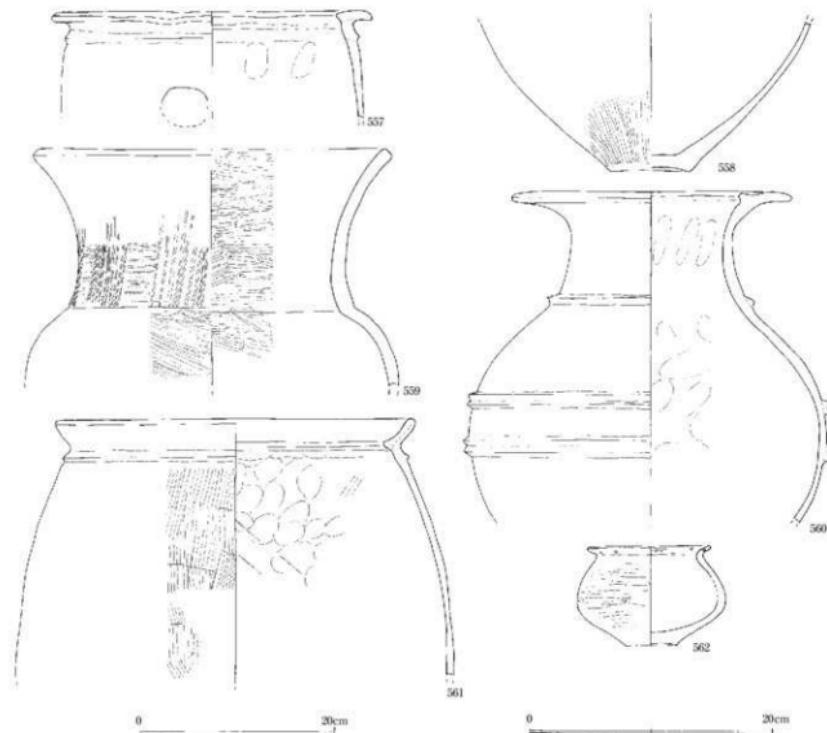


図 70 D-2区土器群9B～D出土土器実測図(1/4・1/2)

⑦ No.1 トレンチ出土土器 (図 71)

前述の S D 0 1 のコーナー部分に入れたトレンチの出土土器である。特に 1 層から古墳時代初頭前後の完形に近い土器がまとまって出土したため、トレンチは一部で下まで掘り下げていない。563 ～ 568 はトレンチ 1 層（上層）でまとまって出土した一群である。布留式系を主体に在地系（565）の彫を含んでいる。布留式系はいずれも肩部分に波状の沈線または波状のハケメを施している。564 は中心軸がずれ、片側胴部が大きく張り出した形状を呈している。568 は口縁部が大きく歪んでいる。569 は弥生土器甕の底部で、外底部に焼成後の穿孔がある。570 と 571 は 2 層出土で、570 は平行タタキを外面に施した支脚である。571 は壺形土器のミニチュアで最大径 5 cm ほどしかない。

⑧ No.1 ベルト出土土器 (図 72・73)

No.1 トレンチの西側に残したベルト出土の土器である。トレンチと隣接したベルトではあるが、古墳時代前期の遺物は比較的少なく、弥生土器が多い。土器群 1・2 につながる土器群である。572・573 は弥生時代後期、574・575 は同中期の甕、576～579 はやや大形の壺である。580 は 2 層から出土した土器で、全形はひょうたん形を呈している。高さ 31.1 cm、胴部最大径 22 cm を測る。胴部はほぼ円形に近く、胴上部に径約 7 cm の孔を穿っている。長頸壺のような頸・口縁部を連結

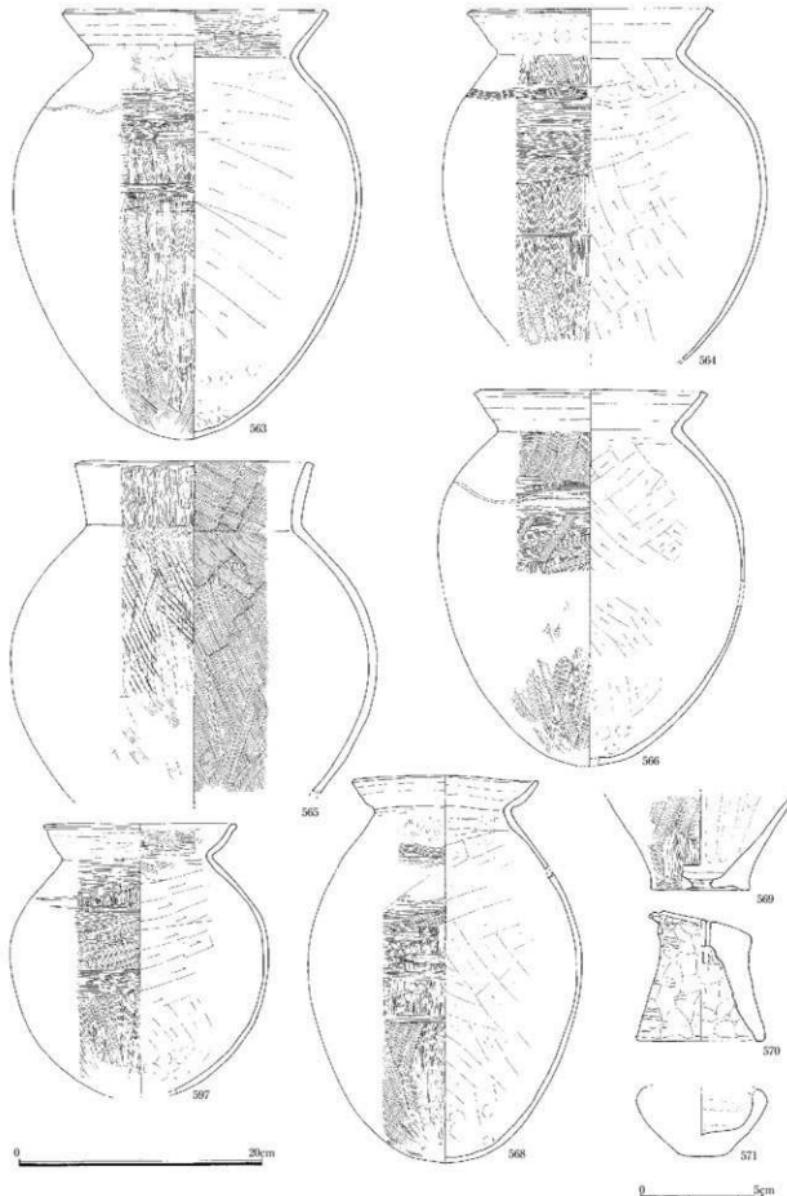


図 71 No.1トレンチ出土器実測図(1/2・1/4)

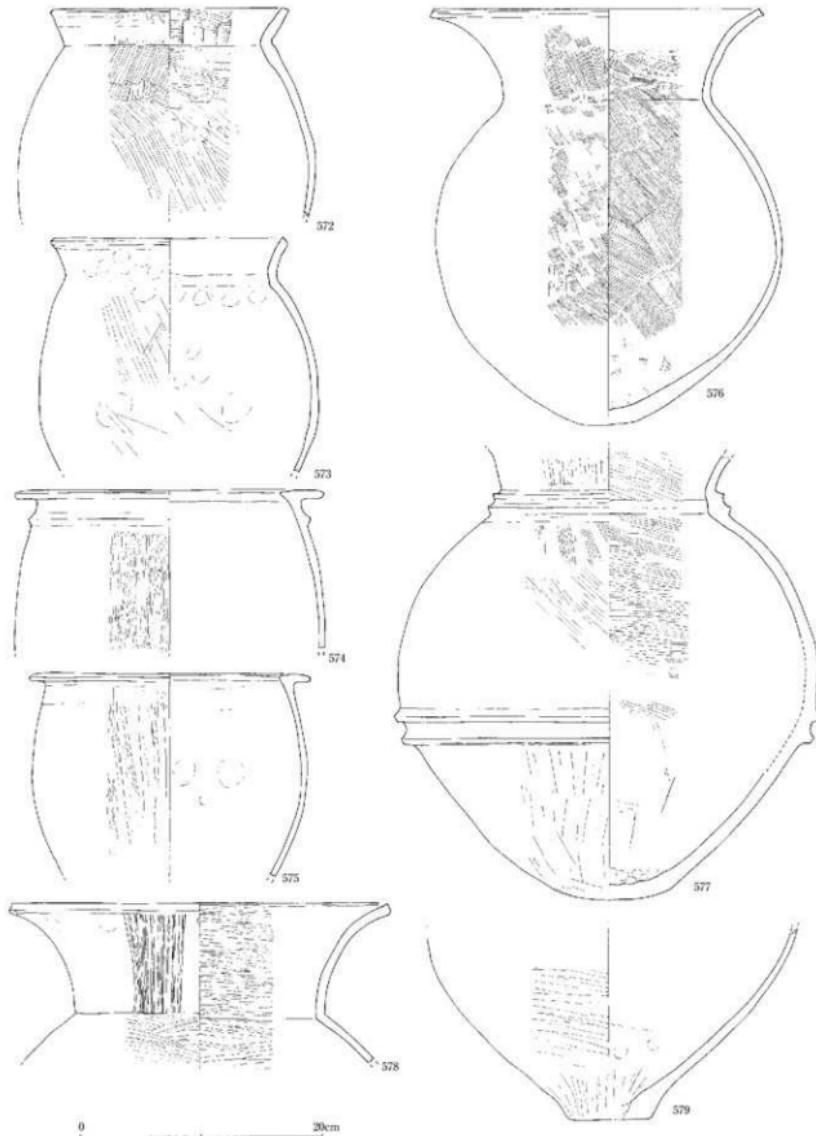


図 72 No.1ベルト出土器実測図1 (1/4)

させるが、端部は全面を覆い、その中心に径 0.5cm の小孔を空けている。この孔から 5 本の沈線を放射状に施している。焼成はやや良くないが、胎土は極めて精良で、外面はていねいにミガキ調整仕上げ、内面はしづらとナデ調整である。外面は全面に赤彩を施しており、極めて作りの良い土器である。581～584 は長頸壺・小型の壺で、581～583 は胎土が精良な赤彩土器である。584 は灰色を呈し、外面に縄席文状のタタキを施している。朝鮮半島系の土器と思われる。586 は寸の短い妻に幅広な脚が付いている。587・589 は鉢であるが、589 は脚が付いている。590・591 の高环はヘラミガキ調整で仕上げ、ともに赤彩を施している。

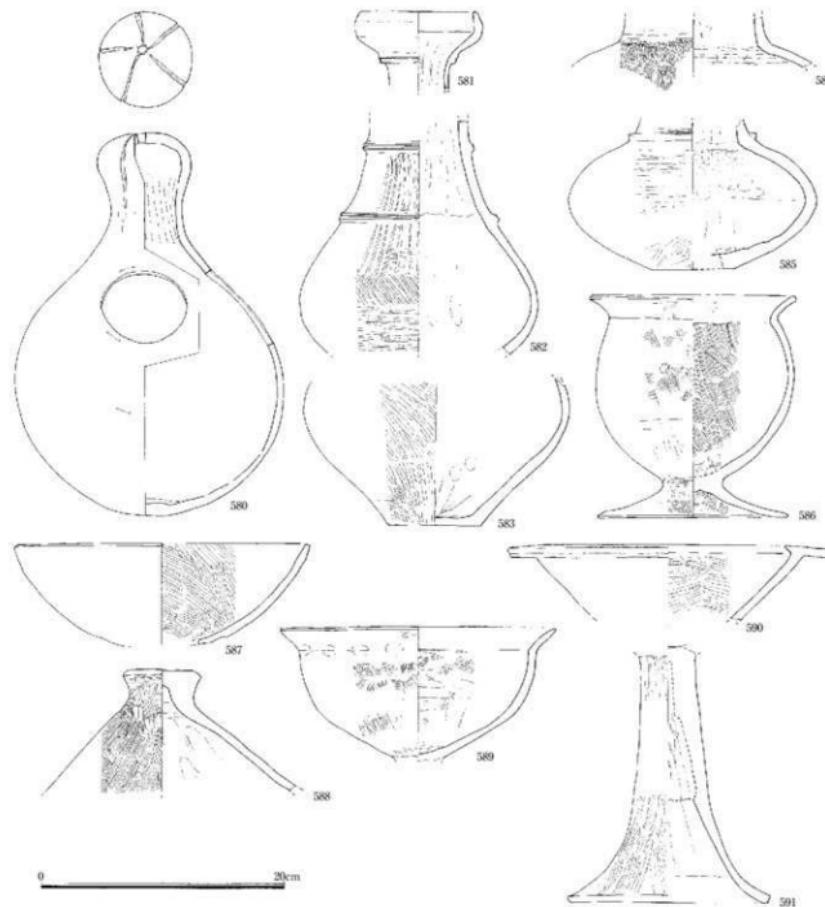


図 73 No.1ベルト出土土器実測図2 (1/4)

(4) E-0～2区出土遺物

調査区南東端のグリッドである。E-1区の北西隅とE-2区の大部分がSDO1流路内で、E-1の大半が同南側斜面、E-0区はSDO1の南側の外になる。E-1区の南斜面は他の地点に比べかなり緩やかに斜面になっており、溝の上端はかなり奥まで入り込んでいる。これはこの地点が流路の曲がり角付近に位置し、水の流れが地山を削ったためと考えられる。この地点の地山は全面花崗岩の岩盤である。この緩斜面上から大量の土器が出土した。これらの土器群はまとまりによって土器群4～6の名称を付した。

最初に検出したまとまりを土器群4～6に分け、その面の土器を除去後に検出したものを土器群4B・5B・6Bの名を付した。5Bの下からは數力所の小さなまとまりの群があり、これらを5C～5E、さらに5Cの下を5F、5Eの下を5Gとした。5F・5Gは小破片がほとんどである。このうち5E・5Gは土器群6Bの下に位置する。土器群4～6をまとめると4グループのレベル差がある。①4A・5A・6A、②4B・5B・6B、③5C・5E、④5F・5Gである。5A～Cの時期には大型土器が数点出土しているが、これらの大型土器の破片は土器群5A～5C内に含まれ、一部の土器は5Fとも接合する。5A～5G内の他の土器も大きな時期差がなく、5A～5Cは次々と遺棄されたものと推察できる。5B・5Cの土器の中には5D以下のレベルのものと接合したものも少なくなく、全体とした土器群5A～5G、土器群4・4B、6・6Bは大きな時期差がなく、次々と遺棄された結果ということができる。ただし最上部には古墳時代後期の須恵器や奈良時代の土器・鉄滓を含んでいる。

これらの群の下には厚さ10～20cmのわずかの土器片を含む橙色粘質土があり、この層の下には、さらに土器群があり、最上部から散漫に出てきた土器を5W、その下のまとまりを5Xと5Y、最下層のまとまりを5Zとした。このように、E-1区の土器群は、少量の土器を含む間層（橙色粘質土）を挟んで大きく2時期に分けられる。間層から下は弥生土器のみで占められ、5W～5Xと5Yには若干の後期前半土器を含むが、最下層の5Zには中期後半の土器のみで、5Zには完形の高杯数点を含む赤彩土器が多数含まれている。上層群と下層群の間の間層は橙色の粘質土で、山土と思われ、東側斜面からの崩落土と考えられる。なおこの土器群4～6だけでコンテナ500箱を越えている。

土器群4～6の最上部から流路南外のE-0区では古代の土器・鉄滓が出土した。これらの遺物は東側の小丘陵側から流れたか捨てられたものと思われる。調査区東側には里道が走り、里道の東が急斜面の尾根が走っていることから、この里道部分に製鉄関係の遺構があった可能性が考えられる。

E-2区の西側一部では、D-2区で検出した土器群9の続きが少量ある。SD-01の中央付近では木製品が多く出土している。木製品の中には焼けたネズミ返しや焼けた丸片などもあり、焼失した家屋を遺棄した可能性もある。

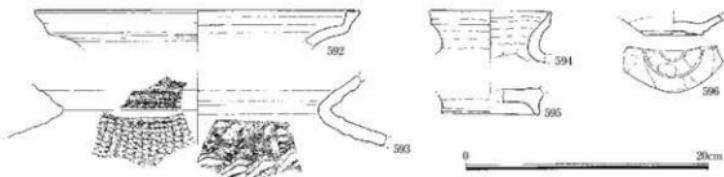


図 74 E-0区出土土器実測図(1/4)

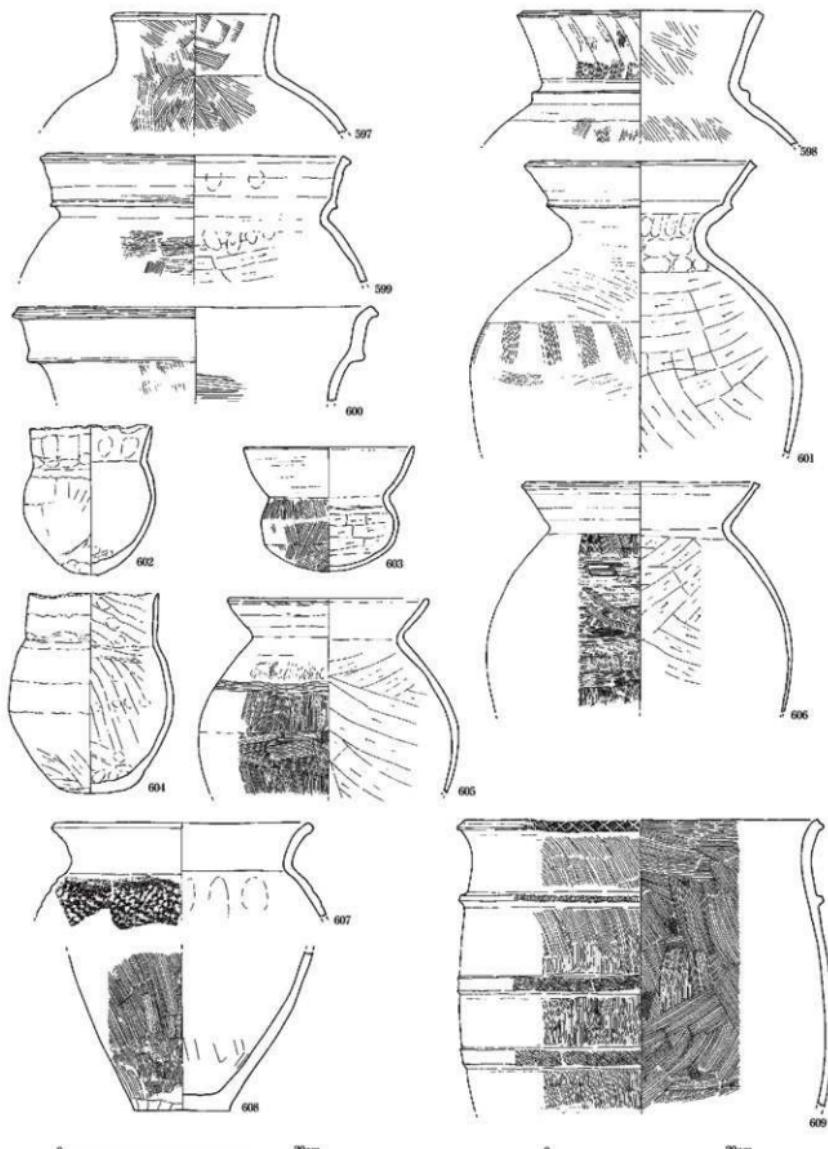


图 75 E-1区上层出土土器实测图1 (1/4·1/5)

E-1区から大量に遺物が出土したことから、I区調査の終わり頃にE-1・2区の一部を東側に拡張し、遺物の採集を行った（E-1拡張区）。

① E-0区出土土器・陶磁器（図74）

上述のようにE-0区はSD01の外側になるが、E-1区最上層からE-0区遺構面（地山面）上にかけて、古代の遺物が出土した。592～594は須恵器の壺で、595は土師器の高台付椀である。596は越州窯青磁碗である。鉄滓はE-0区からE-1区にかけて約10箱が出土した。鉄滓については、別の報告書で報告予定である。

② E-1区1層出土土器（図75・76）

1層の大半は後述する土器群4～6に含まれるため、それ以外の土器である。弥生時代終末～古墳時代初頭の土器を中心に出土した。597～601はやや大形の壺で、599～601は二重口縁を持つ壺である。600のみ内面にハケメを施している。601は外面胴部中央や上部でハケメの方向を変え、



図76 E-1区上層出土土器実測図2 (1/3 · 1/4)

文様状に縦方向のハケメを施している。602～604は小形の壺で、602・604は直立する口縁部を持ち、やや粗い作りの土器である。605～609は甕で、607は胴上部に格子目タタキを施している。609は口径74.6cmを測る大形の甕で、口唇部に斜格子状に沈線を施している。突帯の断面形は低平な台形で、最上部には刻目状に、下2条には平行タタキを施している。

610～614・617は手づくね土器で、614のみ底平の鉢形を呈している。615・616は浅い鉢で、616は底平である。620は619の器形に脚が付くものであろうか。623は鼓形器台で、両面ともハケメ調整の上に縦方向の暗文を施している。胎土は精良である。624の高環も胎土は精良で、ハケメ調整の上から縦方向の暗文を施している。627は厚手の底部を成す、一見椀形の土器である。

③ E-1区下層出土土器（図77）

1層（上層）・2層（中層）の土器の大半も後述する土器群4～6に含まれ、S D O 1の中央付近では、土器の出土量が比較的少なく、ここで掲載するのは下層（3層）として取り上げた土器で、弥生時代中期を主体に後期の土器が少量含まれる。629の逆く字状の袋状口縁壺は3層の最上層で出土している。628・630・631は下層中、632～636は下層下部～最下層で出土している。631と635は外面に赤彩を施している。636はE-2区のS D O 1川底から出土した縄文土器片で、両面とも条痕を施している。外面の条痕は摘み出した口縁端部まで及んでいる。

④ 土器群4出土土器（図78）

土器群4は後述する土器群5・6と同じ群ととらえられるが、その内の小さなまとまりである。上のレベルの群を土器群4A、下の面を土器群4Bとしたが、総量は多くなく、特に4Bはほとんどが小さな破片で、ここでは4Aの土器のみを実測・掲載した。637は手づくね土器。638は口径約50cmを測る大型の鉢で、2条の低平な無文の突帯を巡らせている。

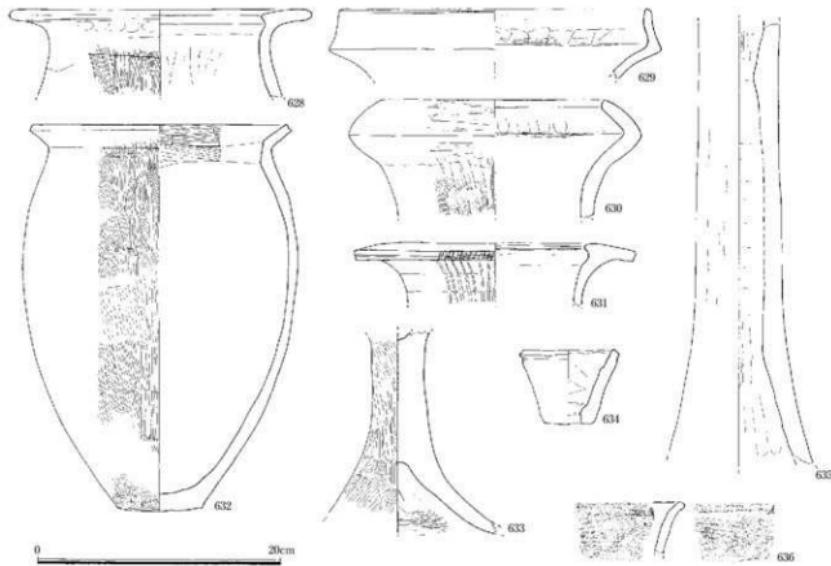


図 77 E-1・2区下層出土土器実測図 (1/4)

⑤ 土器群6 A・6 B出土土器（図81～84）

土器群4のすぐ北側の小群で、基本的には土器群4・5と一連の土器群である。レベルの差でA・Bと分けたが、6 Bは量的にかなり少ない。弥生時代終末から古墳時代初頭の土器が大半を占めている。土器群6 Bのさらに下には土器群5 E・5 Gとした。

641～653・655は古墳時代初頭前後の甕で、在地系が多く出土し、少量の布留式系を含んでいる。652は布留式系の甕で、胴上部に波状文を施している。655は垂直気味に立ち上がる口縁部と幅広な胴部を有し、胴中央付近から上部に格子目タタキを施している。内面に指押さえのような連続する痕跡があり、当て具痕か。654・656～659は壺で、654・657・658はほぼ直立する口縁部を持つ。657の胴部には平行タタキを施している。659は複合口縁の壺。662～664は無頸の土器である。665～672は鉢形の土器で、いずれも丸底である。670は底部に焼成前の穿孔を施しているため、結果として平底の形態を成している。調整はハケメ・ナデ・ヘラケズリと個体によって異なっている。673は平底を呈する、全面指押さえの粗い作りの土器である。やや深めの鉢形を呈するかと思われる。674～676は器台である。677～690は手づくねもしくは小形の上器で、他の土器群に比して、小形土器の占める割合がかなり高く、小形のせいもあるが完形品の割合も高い。677～685は浅い鉢形の手づくね土器、687・689はそれよりやや深いものである。686は小形丸底壺の手づくね土器である。

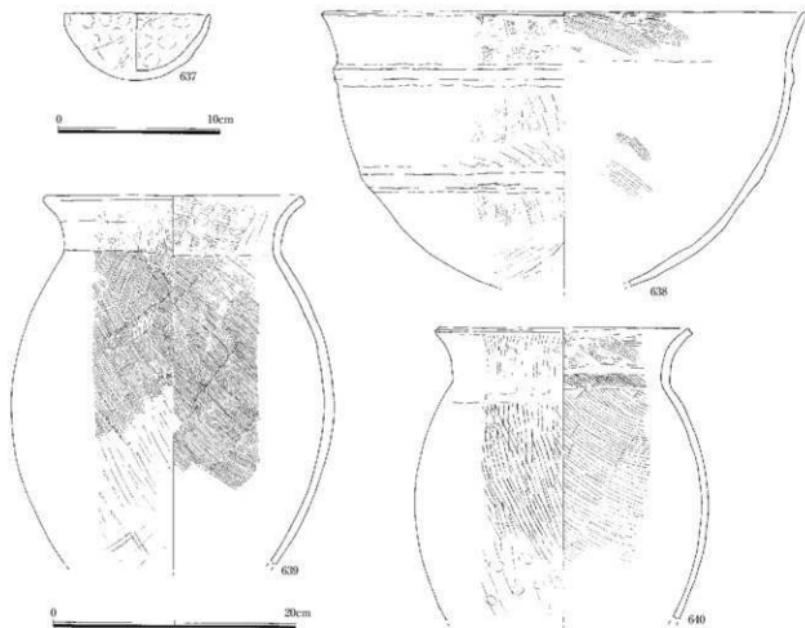


図 78 E-1区土器群4出土土器実測図(1/3・1/4)

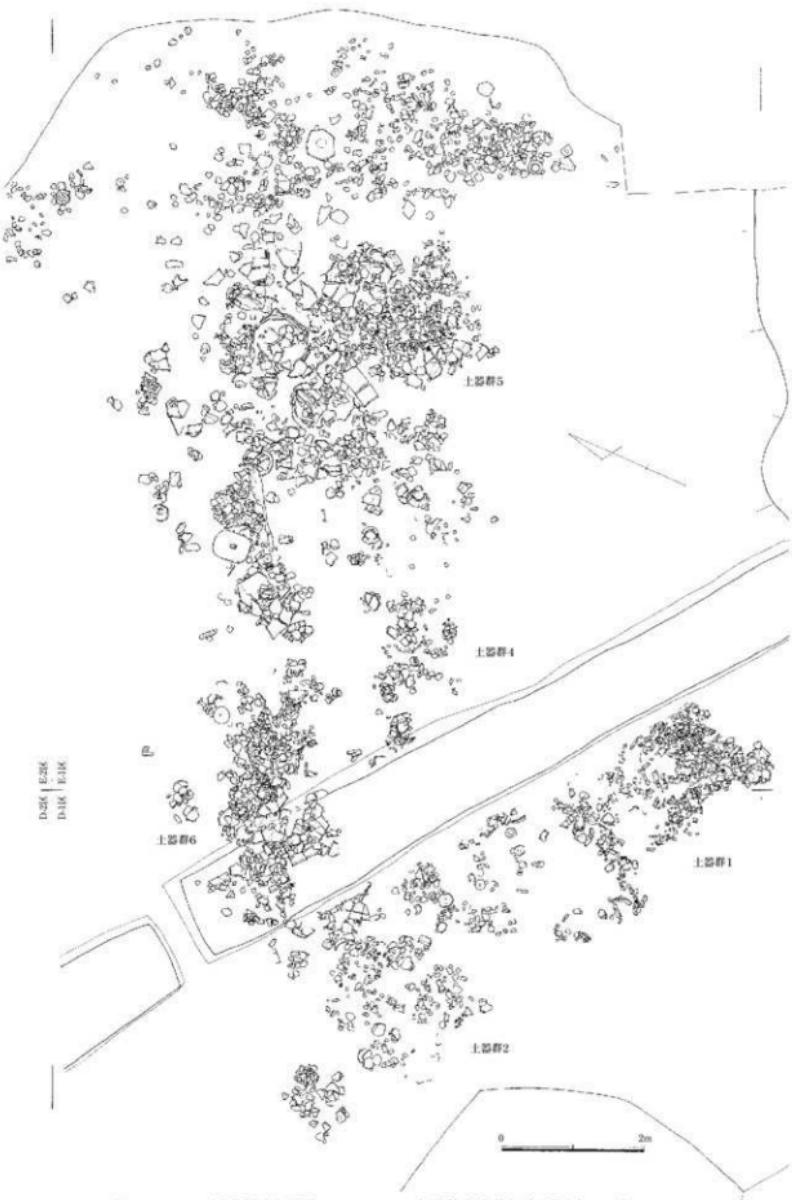


图 79 E-1区上层(土器群4·6·5A·5B) 遗物出土状况实测图(1/60)

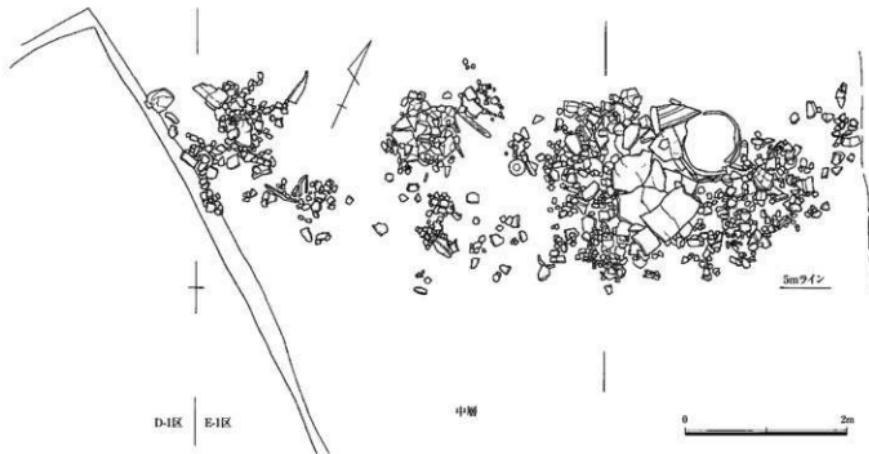


図 80 E-1区中層(土器群5C~G)・下層(同5W~Z) 遺物出土状況実測図(1/60)

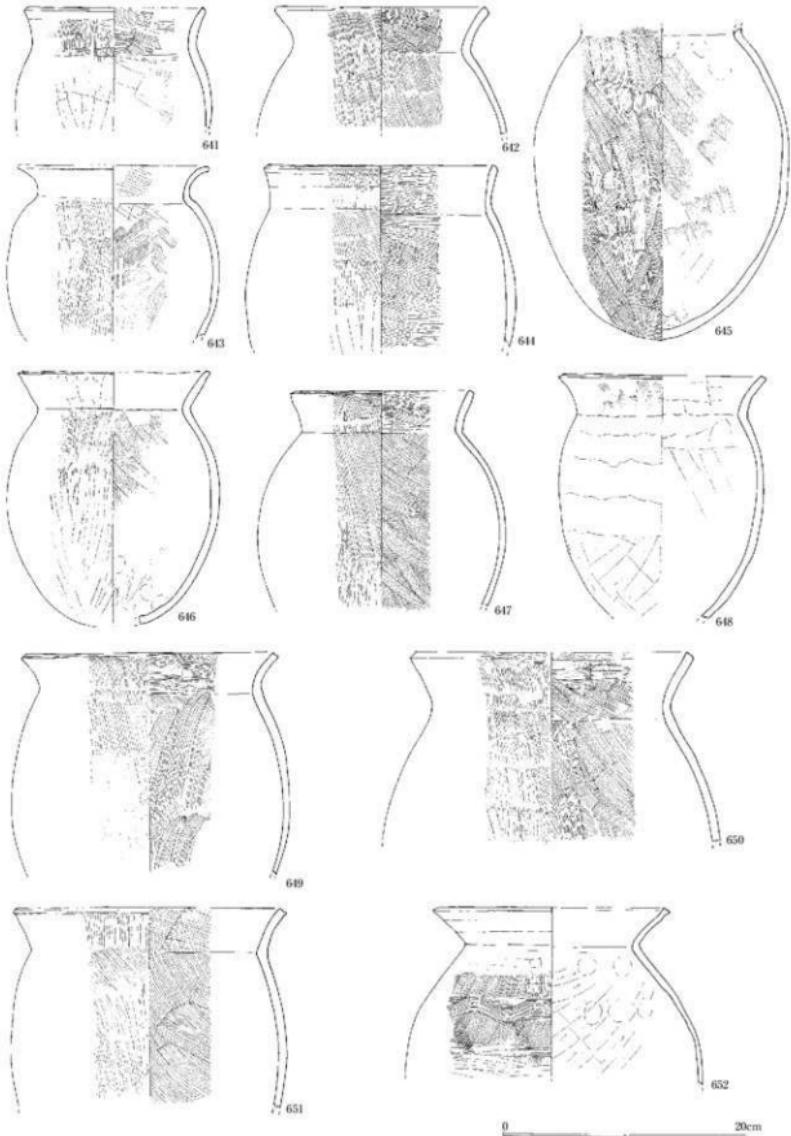


图 81 E-1区土器群6A出土土器实测图1(1/4)

691～695は土器群6Aのすぐ下から出土した土器群6Bの土器である。基本的な時期は6Aと変わらない。691・692は土器群6Aで量の多かった小形の鉢形の土器である。692は小形ではあるが、ハケメ調整をていねいに施している。693も小形の甕形土器で、口径11cm、器高も10数cmほどである。695はやや大形の壺で、口径22.3cm、器高は40cm前後を測る。

⑥ 土器群5A出土土器 (図85～90)

土器群5は前述のとおり、同じレベルで取り上げを行った面を上からA・B・Cと分けたが、結果的には土器群5A～5Fまで一連のまとまりと言える。ここでは土器群5Aの面で出土した土器を掲

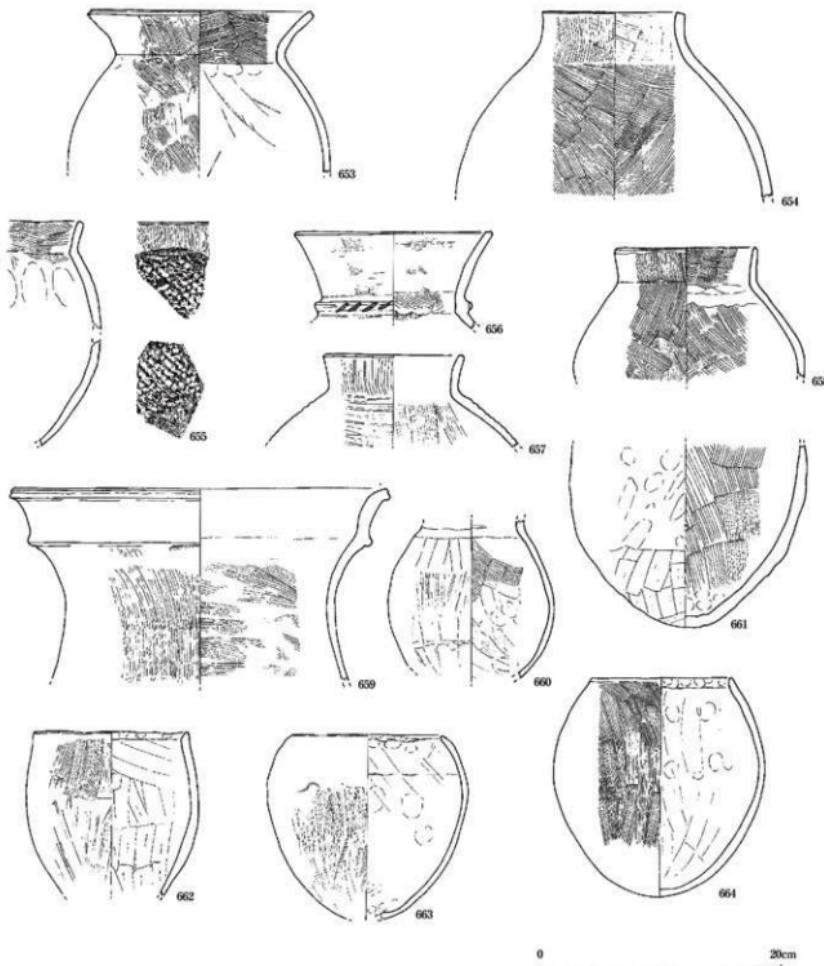


図82 E-1土器群6A出土土器実測図2(1/4)

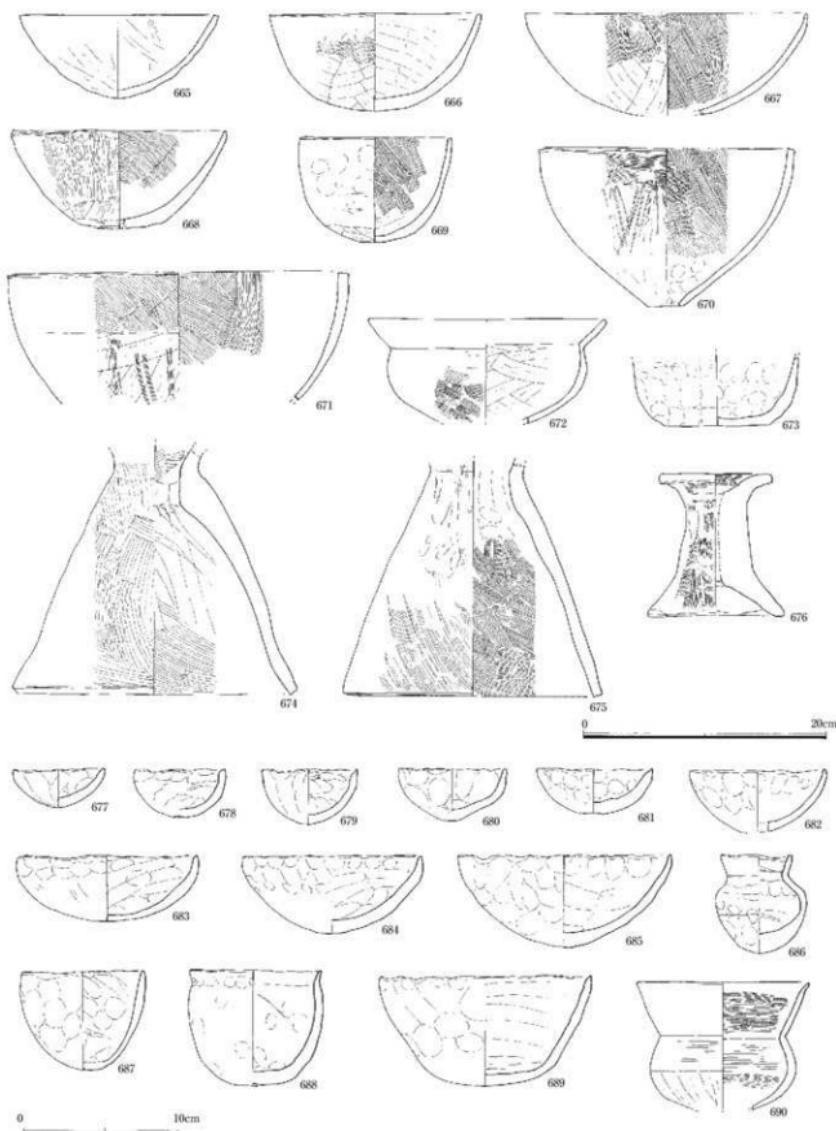


图 83 E-1区土器群6A出土土器实测图3 (1/4·1/3)

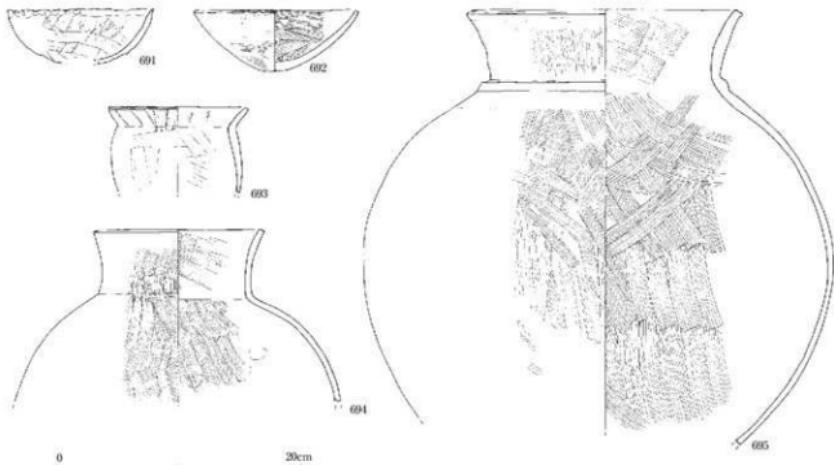


図 84 E-1区土器群6B出土土器実測図(1/4)

載しているが、一部5B・5Cなどと接合したもある。また土器群5Aでも破片が出土したが、破片群の主体が5Bや5Cにあるものは、それぞれの項で記載している。出土した土器内、目立つのは鉢・器台・支脚の多さで、しかもその多くが完形品もしくは完形品に近いものである。

696～713は甕である。696以外はすべて弥生時代終末期から古墳時代初期のものである。布留式系の甕(697・708～713)も在地系の甕も多く出土している。布留式系は外面ハケメ、内面ヘラケズリで調整をし、外面のハケメは胴部の途中で方向を変えている。710は肩部に沈線を1条、712は肩部にハケメを波状に施している。在地系の甕は両面ともハケメ調整を基本とするが、一部ナデやヘラケズリで仕上げているものもある。703・706・707は胴上部に平行タタキを施している。

714は広口の壺で、土器群5Aと5Dの破片が接合している。外面上部には平行たタタキを施し、横方向の沈線を数条引き、胴下部は縄席文を施している。内面はナデ・ヨコナデで仕上げているが、胴下部には當て具状の痕跡が残る。胎土は精良で、色調は灰白色を呈している。716は広口の壺で把手が付いている。白色や黒色などの石材を多量に含み、調整は外面にハケメ状の調整を施している。色調は灰白色で、焼成はやや軟質である。胴中央部から下には煤が付着している。715は716と同様の把手の破片である。これらは焼成や調整からも朝鮮半島製と思われる。717～724は壺形の土器で、在地系のものがほとんどで、両面ともハケメ調整を主体とする。724のみ胴部中央付近から上に格子目タタキが施されている。内面にはハケメが全面に施され、當て具の痕跡はない。

725～730はミニチュア土器で、725は高杯のミニチュアと思われる。726～730は手づくねの土器である。731～742は鉢で、丸底のものを主体に一部平底を含んでいる。739・740は

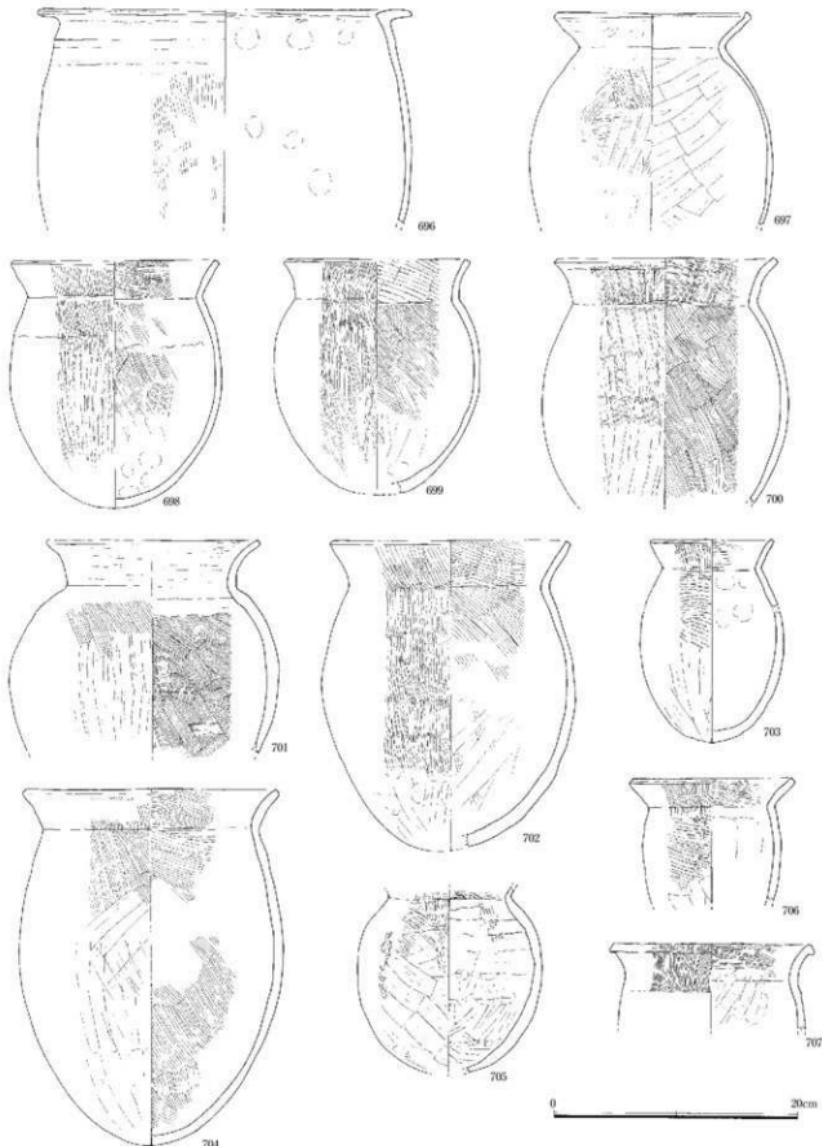


图 85 E-1区土器群5A出土土器实测图1 (1/4)

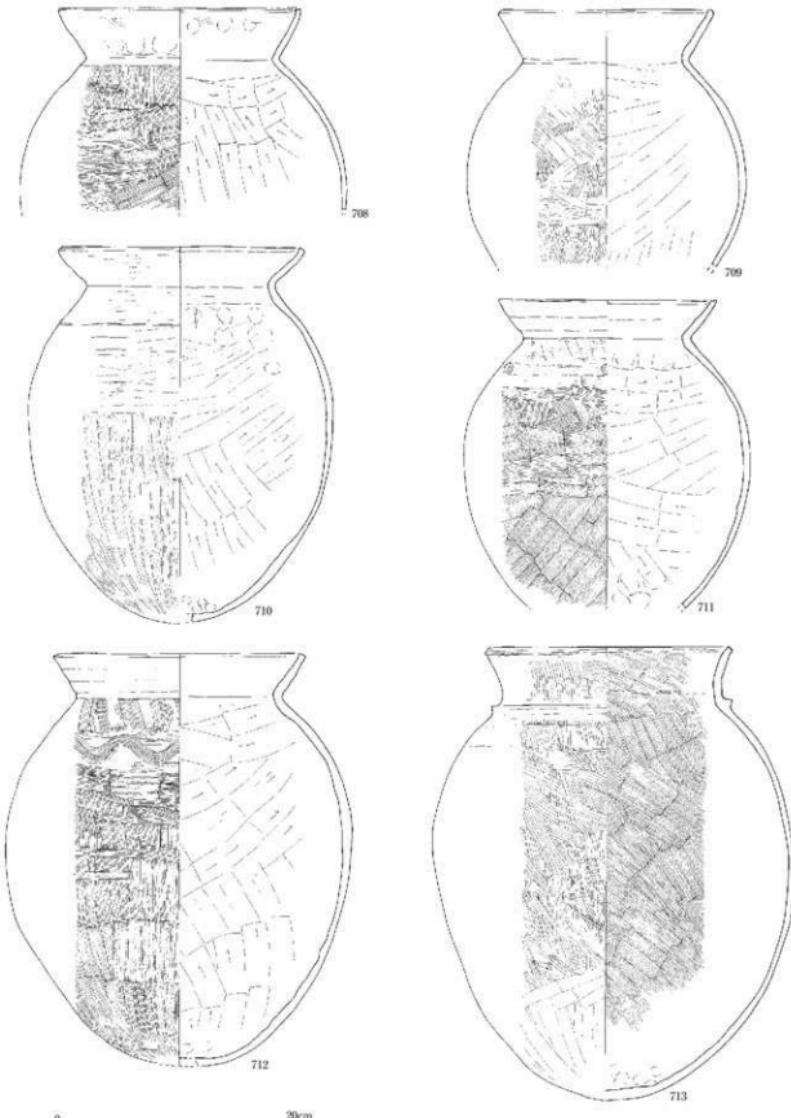


图 86 E-1区土器群5A出土土器实测图2 (1/4)

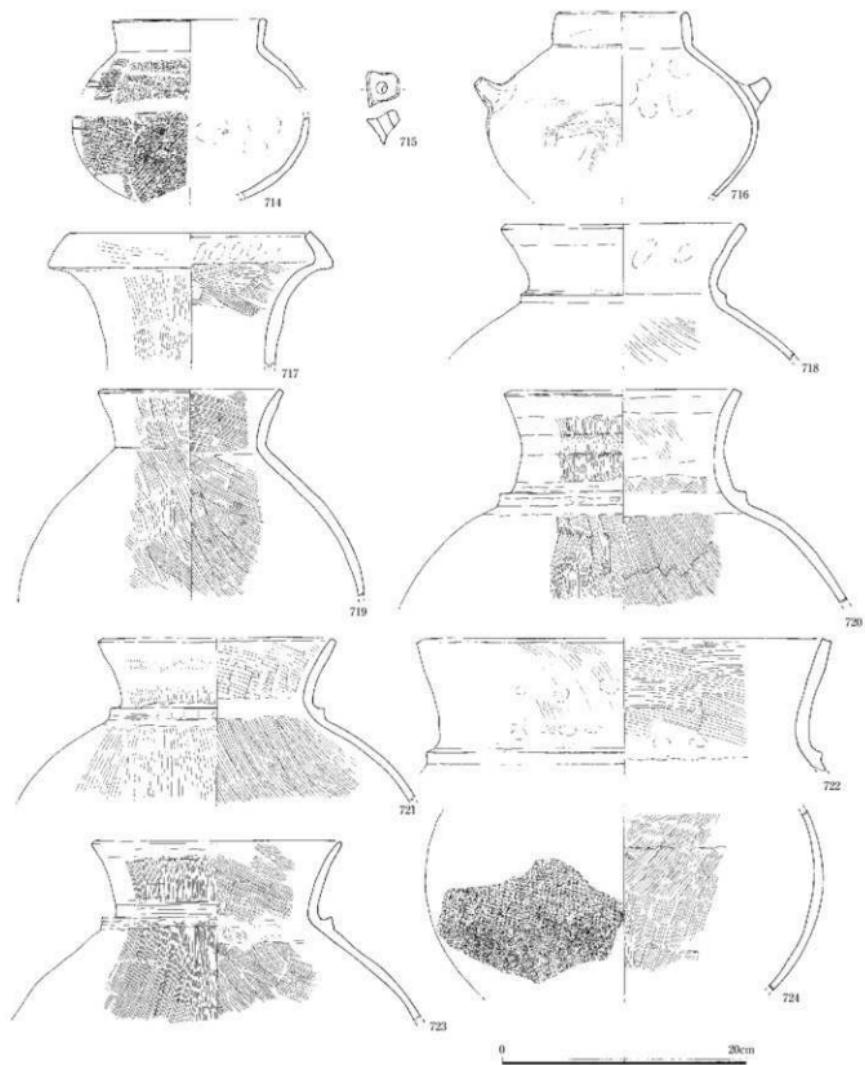


图 87 E-1区土器群5A出土土器实测图3 (1/4)

体部中央から上に格子目タタキが施され、下部はナデによって消されているようである。743～745は器台で、完形もしくは完形に近いものばかりを実測している。いずれも全体の上部で急激に折れ曲がる器形のもので、調整はハケメ・ナデで仕上げている。746は口唇部に刻目が施されている。750は高环の环部、751は脚部である。752～759は支脚で、いずれも完形品に近い遺存状況である。756～759は天井部にハケメ調整の痕迹が残されている。

⑥ 土器群5B出土土器 (図91～100)

前述のように土器群5の最上面である5Aを取り上げたすぐ下から出土した群で、基本的には5Aと一連のものである。5Aと接合した資料も少なくない。

760～765は表柏級の超大型の土器である。平底を持ち、胴中央部から上はほぼ直立し、緩やかに外反する口縁部である。全体の形状はかなり近い点があるが、細かい点では異同がある。760は

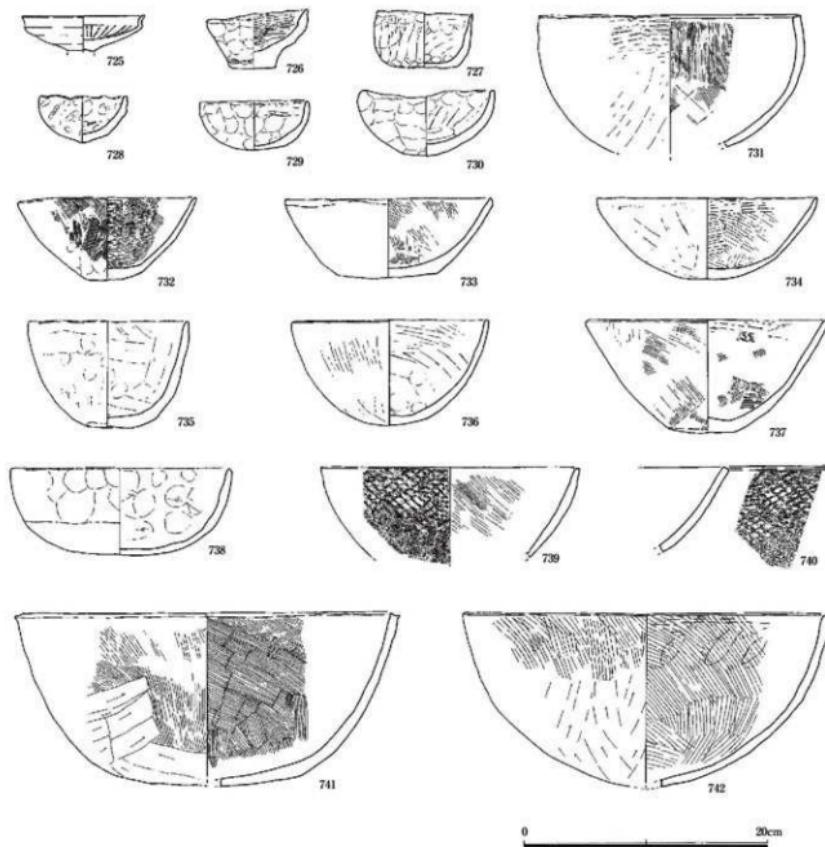


図 88 E-1区土器群5A出土土器実測図4 (1/4)

口径 79cm、器高 95cm を測る。頸部にやや高めの突帯を 1 条、胴部に低平な突帯 5 条を巡らし、突帯は下位に行くほど幅が狭くなっている。やや狭めの丸みを帯びた平底を持ち、全体の調整は両面ともハケメであるが、突帯にのみ格子目タタキを施している。761 は口径 78.5cm、器高 99.8cm を測る。突帯の状況や全体の調整は 760 に近い。ほぼ水平な平底で、他よりやや大きい底部である。全体の形状がやや歪んでいる。762 は口径 81cm、器高 98.4cm を測る。全体の調整は前 2 者と変わらないが、胴部の突帯は 6 条あり、突帯の幅は他の土器より幅が広く、6 条の幅はさほど変化はない。胴部の突帯には格子目タタキを施し、口唇部の上下に三角形状の連続沈線（鋸歯状）を施している。763 は底部を欠くが、高さは他の 3 点と同じ程度と思われるが、口径は 70cm と他より狭い。突帯も頸部に

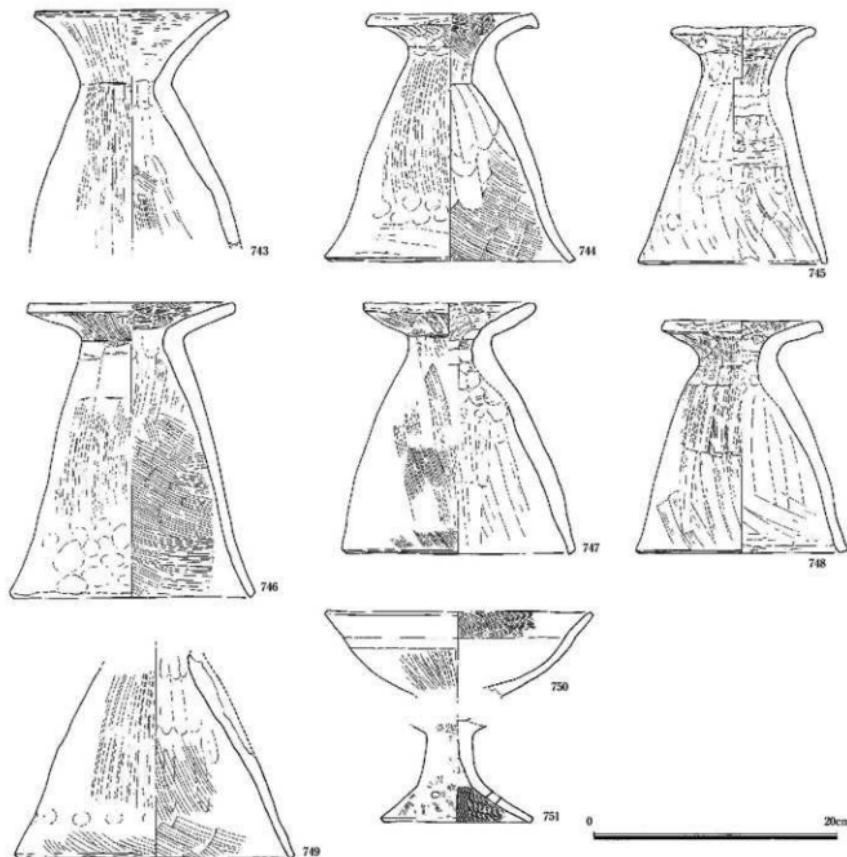


図 89 E-1区土器群5A出土土器実測図5 (1/4)

1条と胴部には2ないし3条と数が少ない。突帯の調整は平行タタキであるが、頸部と胴下部のタタキの方向と、胴中央部のタタキの方向が異なっている。764・765は胴部が張り、口縁部も反りがほとんどの器形である。764は器高76.3cm、口径60.2cmを測る。底部は完全な平底で、底径10cmを測る。突帯は頸部に1条と胴部に3条で、いずれも突帯の上部が波状を呈している。調整はほぼ全面ハケメで、突帯には760～762は格子目タタキ、763は平行タタキを施している。765は頸部に1条、胴部に4条の突帯を巡らし、突帶上部は波状を呈している。調整はほぼ全面ハケメである。

766～771も大形の甕である。いずれも頸部に突帯を1条巡らし、767・771は胴下部にも1条巡らしているが、767の突帯は断面三角形、771は断面台形を呈している。767は器高43cm、口径43cm、770は口径51cmを測る。両面ハケメ調整、一部ナデで仕上げ、突帯には、766は平行タタキ、769には刻目を施し、他はナデで仕上げている。767はやや丸みを帯びた平底で、771は丸底を呈している。772～785は中・小形の甕である。772は弥生時代中期の甕で、773以降は弥生時代終末前後～古墳時代初頭のものである。773・774は両面ハケメ調整、775は外面胴部に平行タタキを施している。776～779・784は胴部外面下部をヘラケズリで仕上げている。783の布留式土器は胴上部に沈線を1条を巡らせ、沈線から下にはかなり目の細かいハケメを施している。

786～790は壺である。786は口縁部外面に櫛歯状の押圧を連続的に施している。787は大型の複合口縁壺、788・789は壺とも甕ともとれる器形で、789は外面に平行タタキを施している。

791～800は外面に格子目タタキを施した甕・壺である。基本的には、外面は口縁部がハケメ、同中央部から頸部にかけて格子目タタキ、胴下部はナデ調整である。798は胴中央部のみにタタキが遺存し、胴上部はハケメで仕上げている。794のみ胴上部に平行タタキを施し、頸部の突帯にのみ格子目タタキを施している。799も突帯に、797は口唇部に格子目タタキを施している。内面は

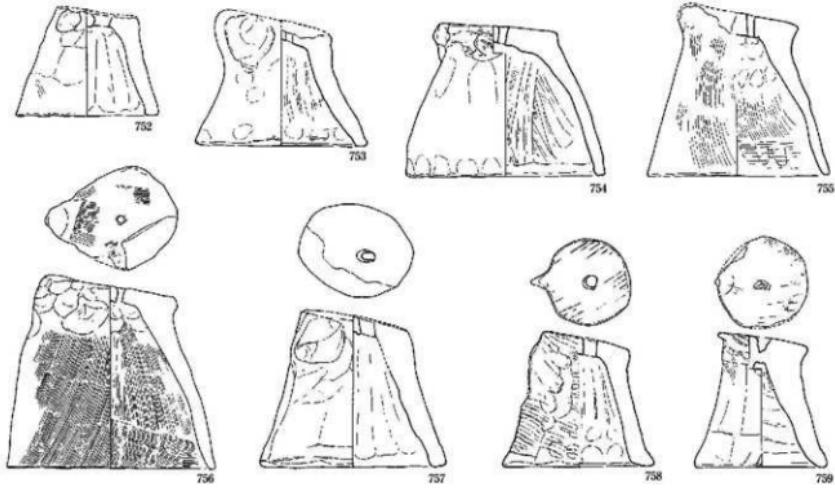
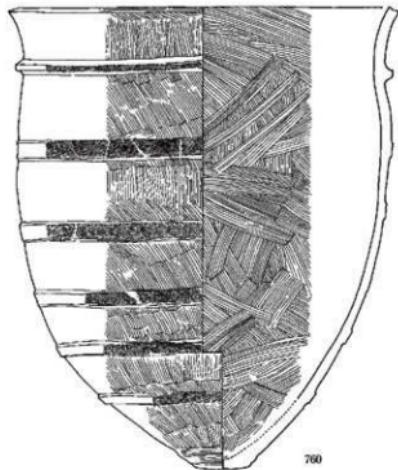
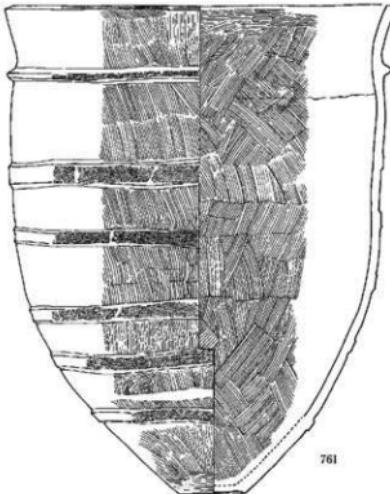


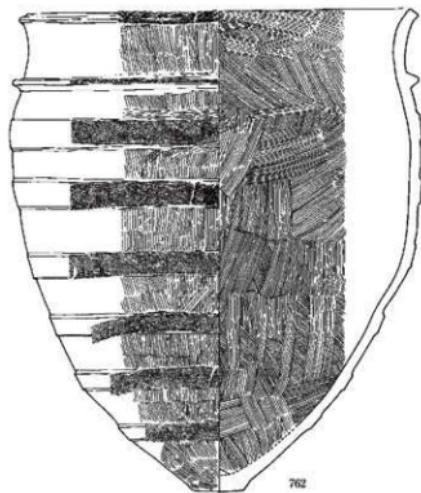
図 90 E-1区土器群5A出土土器実測図6(1/4)



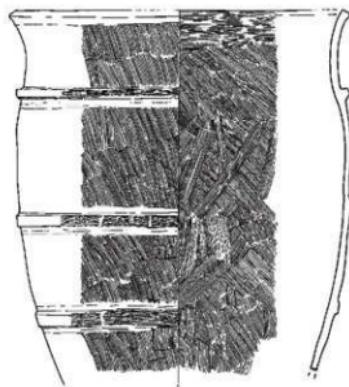
760



761



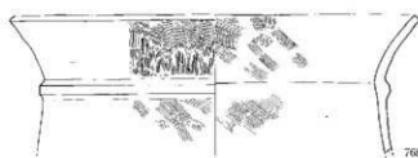
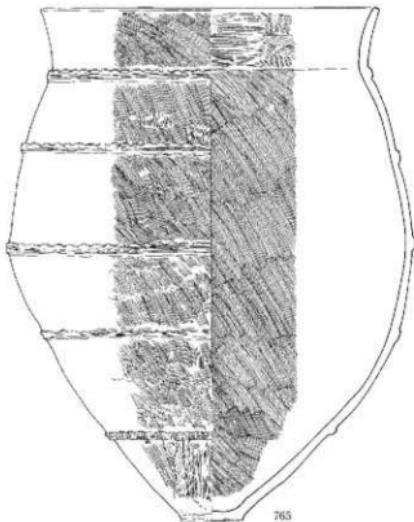
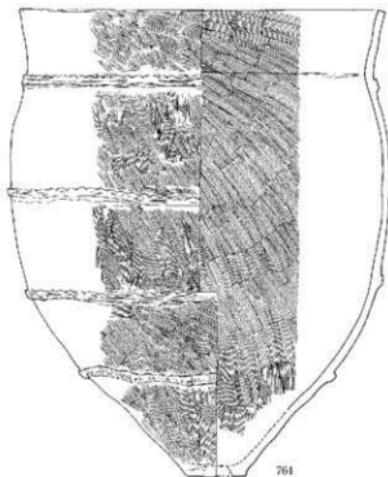
762



763

0 50cm

図 91 E-1区土器群5B出土土器実測図1 (1/10)



0 20cm

图 92 E-1区土器群5B出土土器实测图2 (1/6)

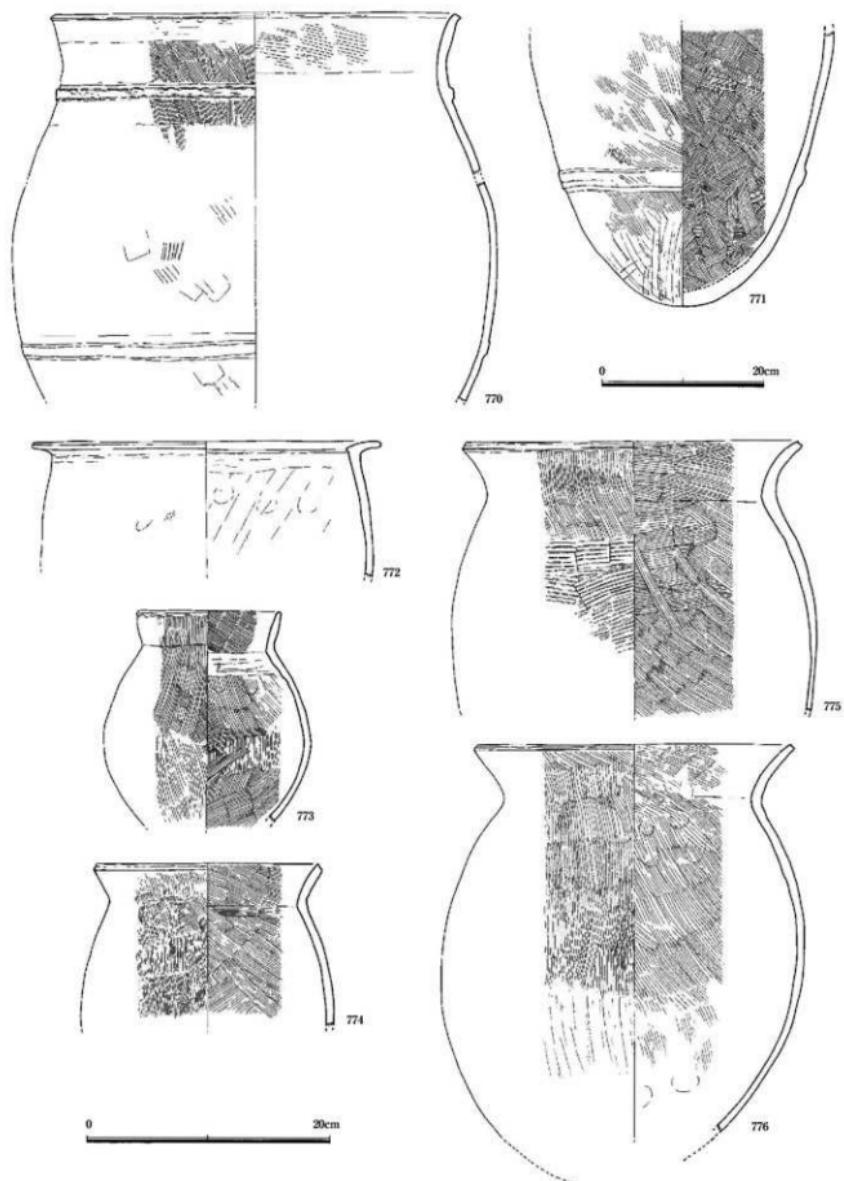


图 93 E-1区土器群5B出土土器实测图3 (1/4·1/6)

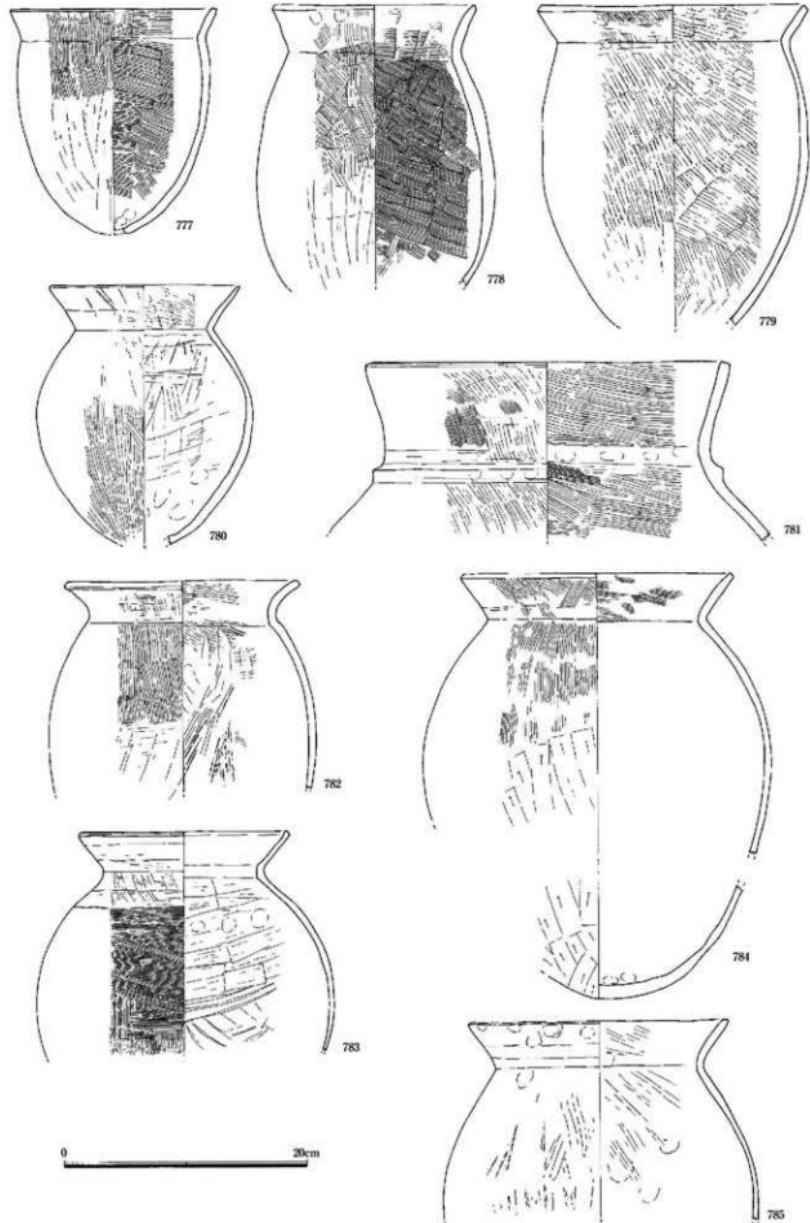


图 94 E-1区土器群5B出土土器实测图4 (1/4)

大半がハケメ調整で仕上げ、一部のものは径3cm前後の痕跡が認められ、あるいは當て具の痕跡かも知れない。器形や大きさは様々で底部は800のみ遺存しており、丸底である。

801～817は大小の鉢形土器である。801は手づくねの土器、802はわずかに口縁部を外反させている。803・809・810は外面に格子目タタキを施している。808は外面にヘラケズリ、内面にハケメを施しているが、全体に向心円を描くように調整を施している。814・815は丸底の先端に焼成前に穿孔を施している。816・817はほぼ同規模の大形の鉢で、口径32.2cm、器高13.7cmを測る。

822～838は器台である。外面の調整は、ハケメ、平行タタキ・格子目タタキの3種類がある。このうち、格子目タタキは4点(824・825・827・829)あるが、824・825には脚接地面にも施されている。タタキを施したもののは、部分的にハケメをタタキの上から施しているが、特に829・833・834はかなりの部分をハケメで仕上げている。器形的にはいくつかに分かれそうであるが、特

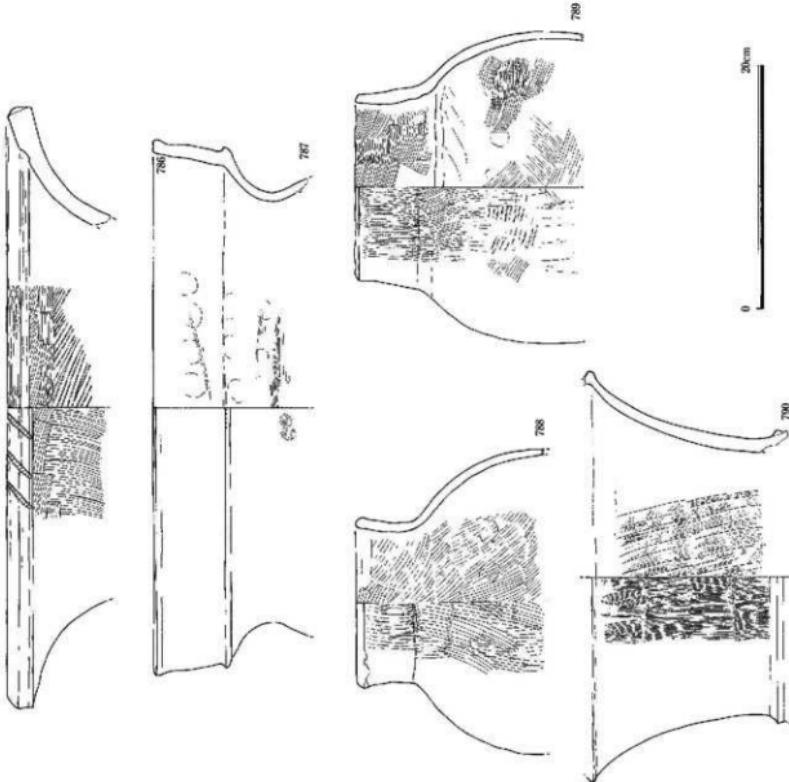


図 95 E-1区土器群5B出土土器実測図5(1/4)

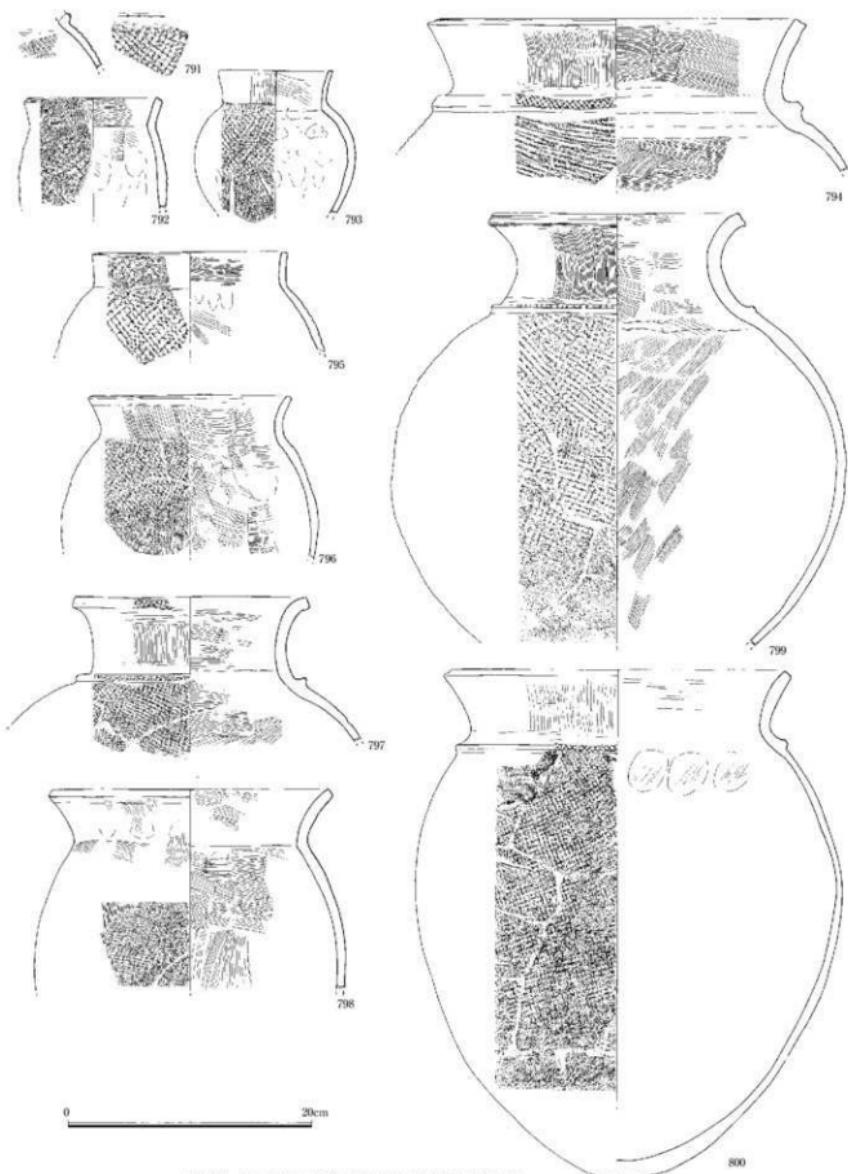


図 96 E-1区土器群5B出土土器実測図6(1/4)

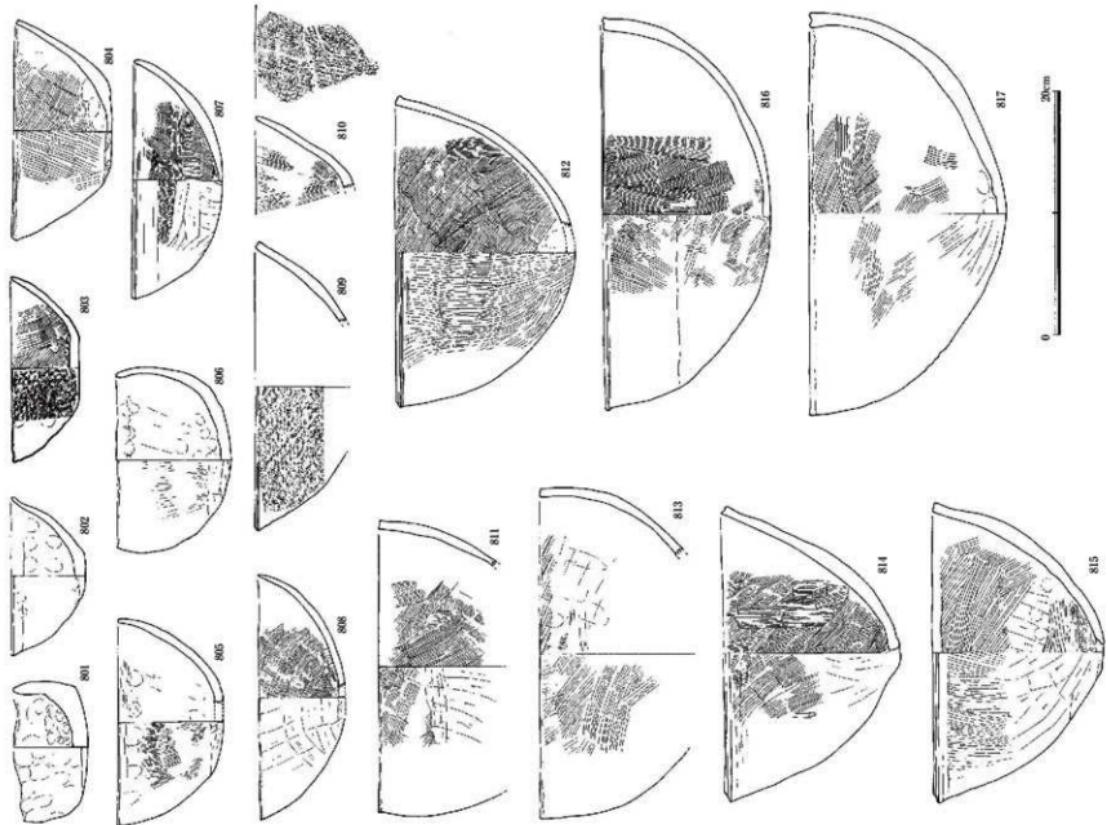


圖 97 E-1K+225m 5B 單孔岩心測圖 7 (1/4)

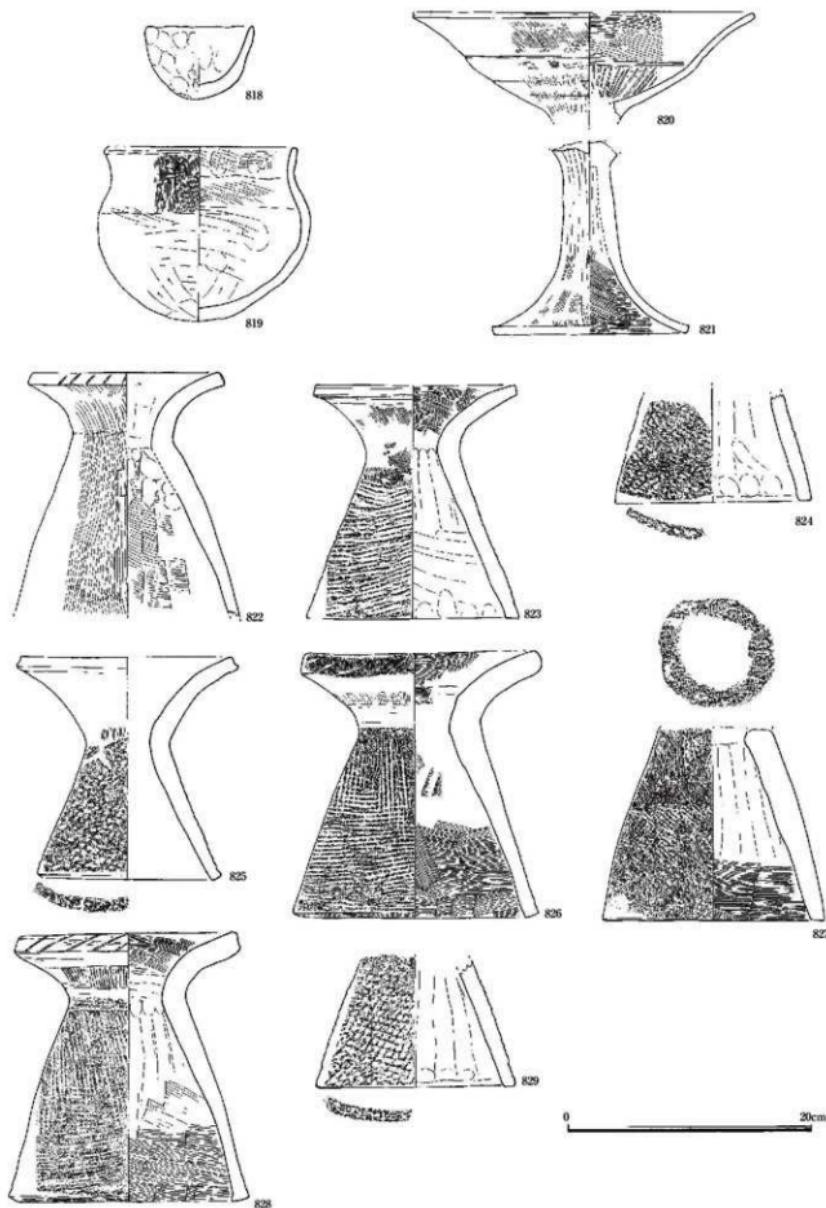


图 98 E-1区土器群5B出土土器实测图8 (1/4)

に受け部の高さが短い 830・836 はハケメの目が細かいのが特徴的である。839～848 は支脚である。天井部(最上部)中央に 1 穴を施し、1 点を除いて天井部を一方に飛び出した形のものであるが、飛び出している部分の下部を縦長に摘み出したものと、そうでないものの 2 種類がある。外部の調整はハケメ・平行タタキ・格子目タタキ・ナデ・指押さえと様々であるが、847 は体部と接地面に格子目タタキ、天井部に平行タタキを施している。

⑦ 土器群 5 C 出土土器(図 101)

土器群 5 B の東側下から出土した土器群であるが、土器群 5 A・5 B と接合したものが多く、基本

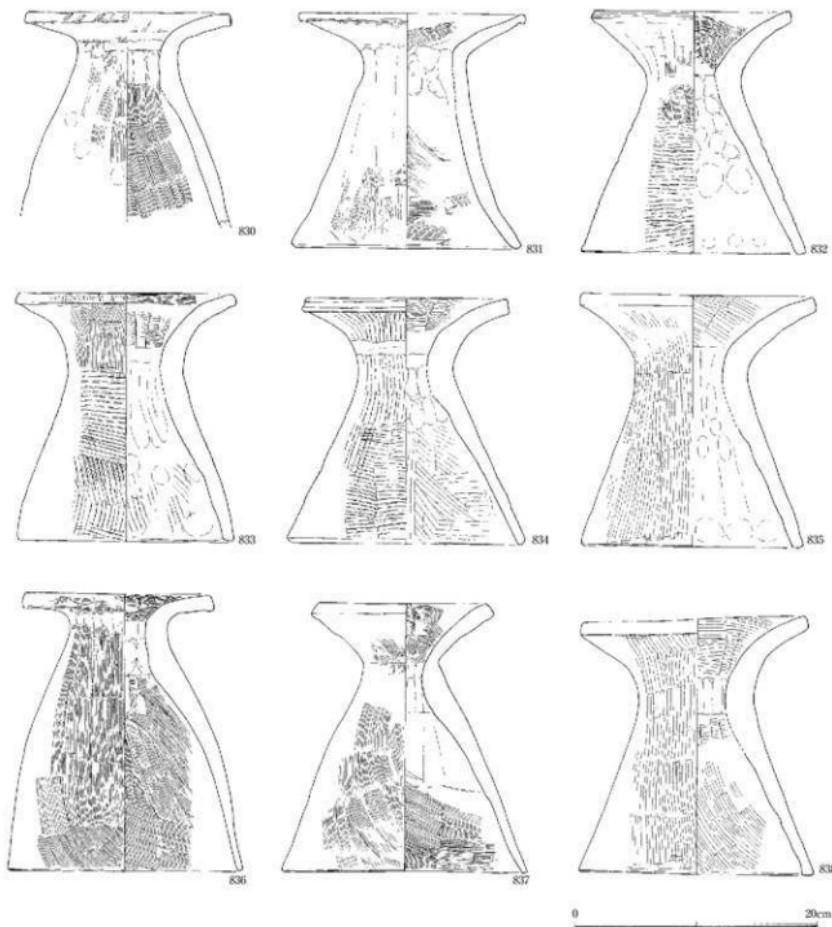


図 99 E-1 区土器群 5 B 出土土器実測図 9 (1/4)

的には同じ土器群と理解できる。出土量は5A・5Bに比して少なく、約10箱である。完形品もほとんどない。852は格子目タタキを施した壺で、外面は遺存部分のすべてにタタキが施されている。部分的にタタキの上からハケメが施されている。頸部の突帯には刻みを施している。853は細長い壺で、外面は胴中央から下はヘラケズリ、胴上部以上はハケメを施している。857は外面に格子目タタキを施した鉢であるが、タタキの上からナデ調整を施し、タタキはかなり見えづらくなっている。

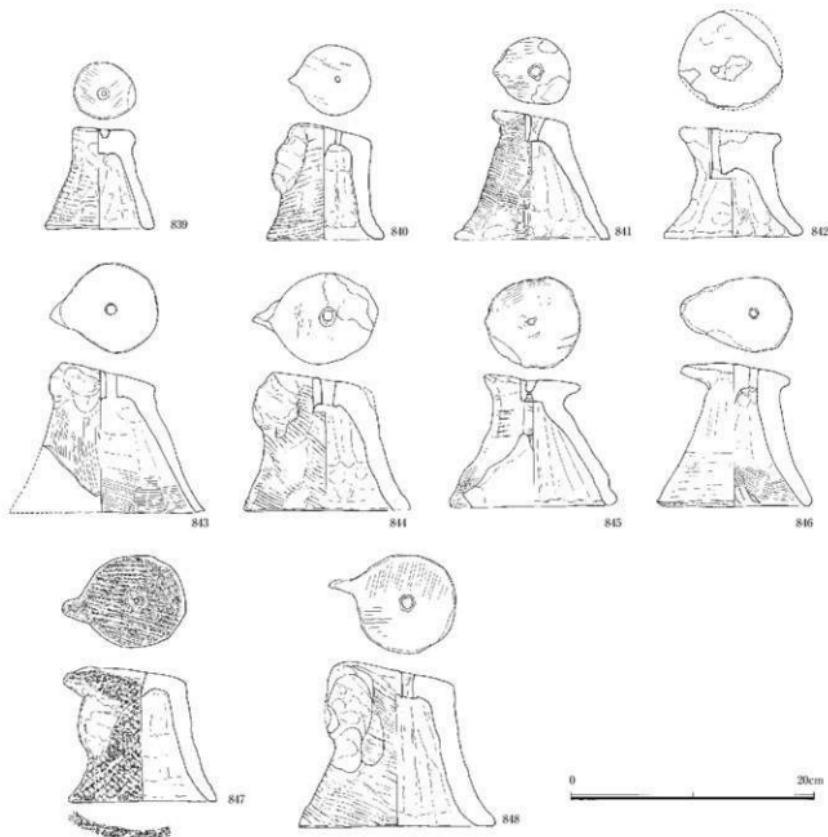


図 100 E-1区土器群5B出土土器実測図10 (1/4)

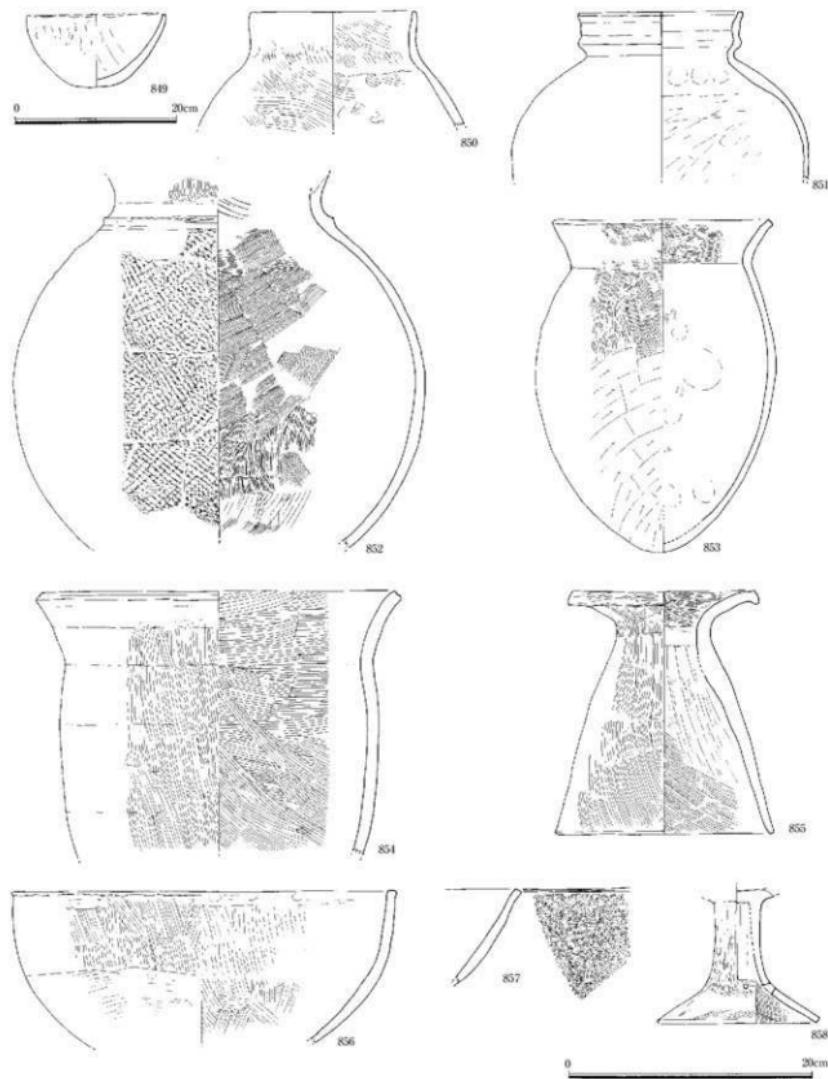


図 101 E-1区土器群5C出土土器実測図(1/3・1/4)

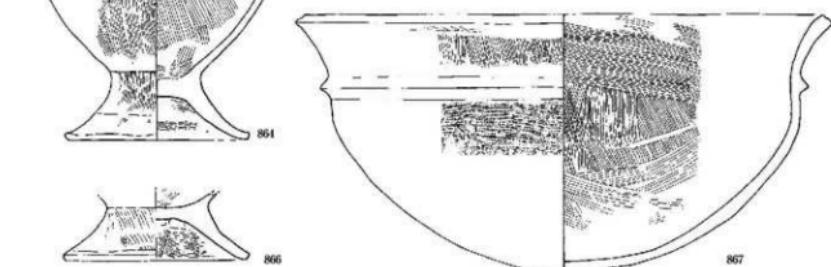
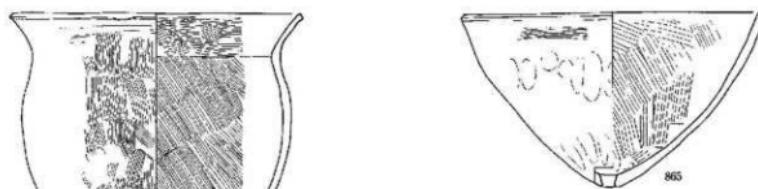
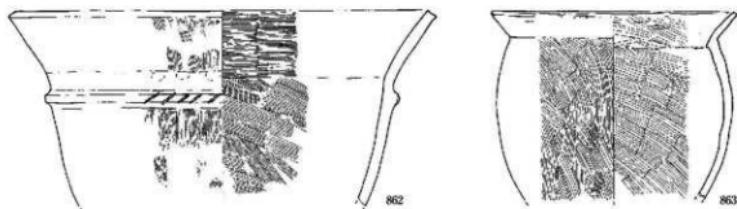
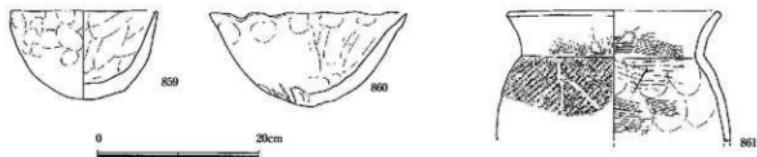


図 102 E-1区土器群5D出土土器実測図 (1/3・1/4)

⑧ 土器群5 D出土土器 (図102)

土器群5 Dは土器群5 B中央の下に位置する。量的は多くないが、手づくね2点を含めた完形に近い土器数点を含む。861は外面に格子目タタキを施している。内面には径3cm大の痕跡があり、当て具振かもしない。864は脚台を持つ鉢である。865の鉢は尖り気味の底部の先端を焼成前に穿孔を施している。867は大型の鉢で、口径24.8cmを測る。脚部中央の突帯の下に平行タタキが確認できる。

⑨ 土器群5 E出土土器 (図103)

出土量が少なく、大型の破片も多くない。868は大型の鉢で、刻み目を施した突帯の下部は平行タタキの後にハケメを施している。872は脚上部に格子目タタキを施した上からハケメを施している。

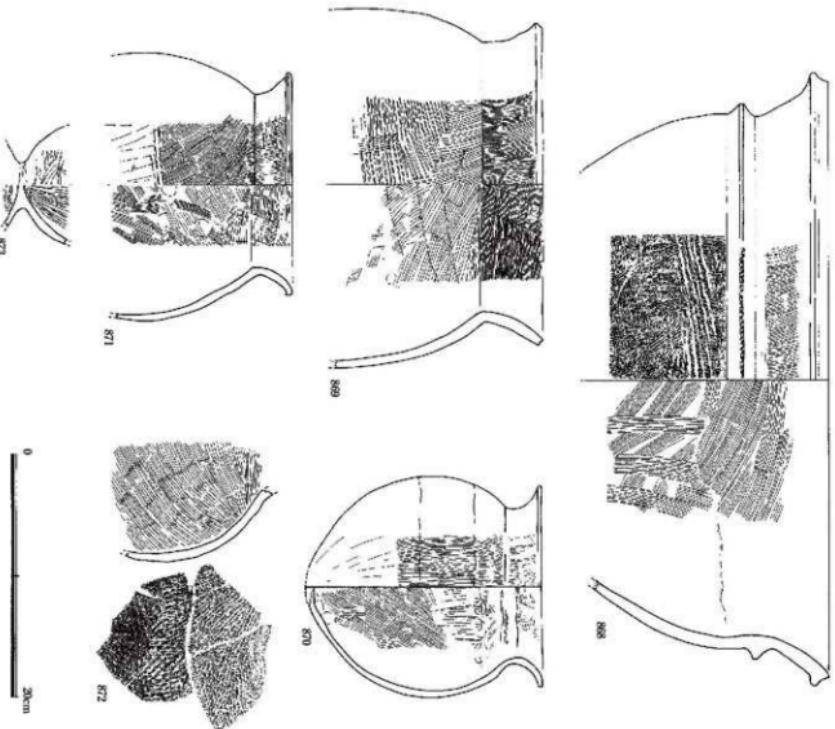


図103 E-1区土器群5E出土土器実測図(1/4)

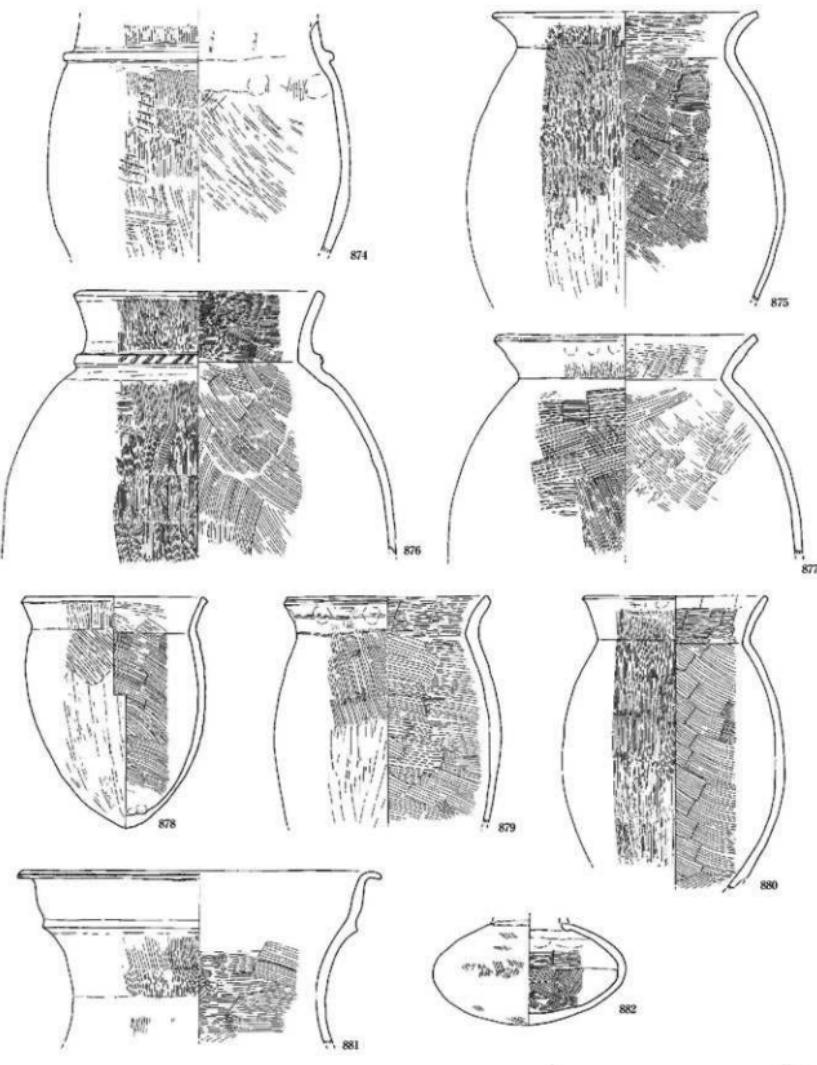


图 104 E-1区土器群5F出土土器实测图1 (1/4)

⑩ 土器群5F(図104・105)

土器群5Fは土器群5Cのすぐ下に位置する。約10箱が出土した。壺・鉢が多い。874～880は壺で、外側調整はハケメ・平行タタキ・ケズリ等から成る。876の頸部には低平な突帯があり、櫛状施文具による刻みを施している。877は外側に平行タタキを施した後にハケメで仕上げている。878は尖り気味の底部を持つやや歪んだ小形の壺である。胴中部よりしたはヘラケズリで、879も胴中部より下がヘラケズリである。881は複合口縁壺で、口縁端部を外に摘み出している。882は丸底の長頸壺と思われる。886は平底の格子目タタキを施した底部片であるが、壺にしろ壺や鉢にしろ底部まで格子目タタキが遺存しているものは少ない。887は平底の鉢で、底部近くに焼成前の穿孔が施されている。890は鉢の口縁部をそのまま垂直に伸ばしたような形態の壺である。892・893は支脚で平行タタキを施している。

⑪ 土器群5G(図106)

土器群5Gは土器群5D・5Eの下に位置する。10箱に満たない。895・896は手づくね土器。899～901は壺で、901はわずかに平底を呈する。底部から頸部にかけてヘラ状工具でケズリ気味にならでている。底部のやや上に焼成後の穿孔が施されている。902は口径52.4cmを測る大形の壺で、

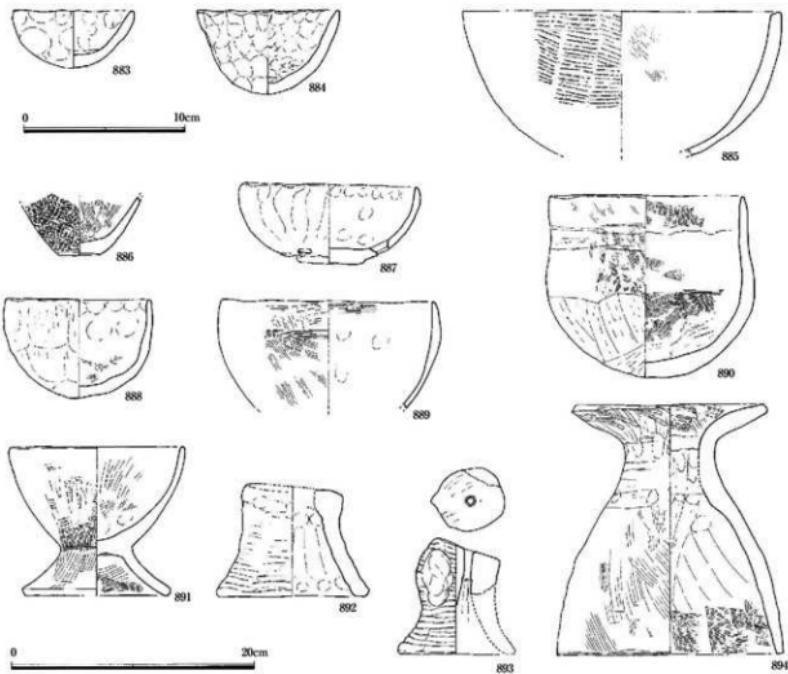


図105 E-1区土器群5F出土土器実測図2(1/4)

頸部に櫛歯状施文具による鋸歯文が施されている。

⑫ 間層（赤土層）出土土器（図 107）

前述のように、土器群 5 A～5 G の下には厚さ 10～20cm の粘質の赤土層があった。当初この層が地山と考えたが、少量ではあるが土器が含まれていることと、わずかにブロック状に別の土が入っていることから、サブトレーナーを入れて確認したところ、後述する土器群 5 W～5 Z を確認した。この層はこの付近の台地部を構成する土壤群の一部であることから、東側の小丘陵の崩壊土と思われる。この赤土の上下では出土土器の時期が異なっており、小丘陵が崩壊した時期は上下の土器群の時期の間に特定できる。

903～905 は赤土層に含まれていた少量の土器片である。903 は弥生土器壺の口縁部である。904 は外面に繩席文を施し、色調は灰色で、胎土が精良な土器である。朝鮮半島系の土器と思われる。905 は支脚で、天井部の穴は貫通していない。全面ナデで仕上げている。

⑬ 土器群 5 W 出土土器（図 107）

赤土層の下のすぐ下には E-1 区東半に大量の弥生土器の一群があり、この一群を土器群 5 X の名称を付したが、これとは別に N o. 1 ベルト際に土器群があり、土器群 5 W の名を付した。大形の土器破片が少量と小片 10 箱ほどが出土した。この付近は赤土の層も数 cm と薄く、赤土下の包含層の厚みも厚くなかった。906 は底部径約 3 cm の小さな平底を有する壺で、器高 32.3 cm を測る。907 は口径 36 cm を測る。

⑭ 土器群 5 X 出土土器（図 108）

赤土の直下では E-1 区東半にまとまった土器群があり、土器群 5 X の名称を付した。5 X は 10

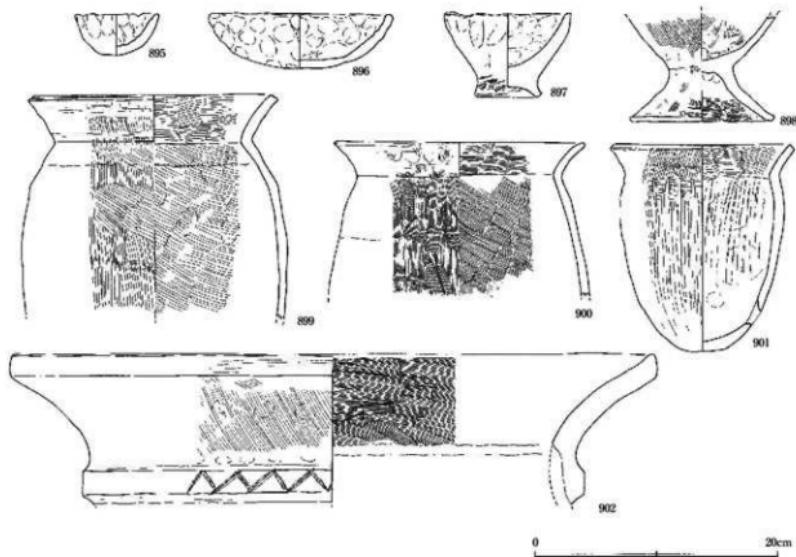


図106 E-1区土器群5G出土土器実測図(1/4)

箱程度であるが、5Xを取り上げた下には大量の土器群があり、土器群5Y、さらにその下の土器群を5Zと名称を付した。

908～921は土器群5X出土土器である。908・909は甕、910は全体を粗くなれて作った小形の甕である。911は底部中央に焼成前?に穿孔を施した甕の底部である。912は丸底に近い底部を持つ小形の甕で、外面はナデ調整で、内面はハケメで仕上げている。913は甕で、全体の器形から弥生時代前期後半から中期初頭頃のものと思われ、526とともに数少ない弥生時代前半の土器である。914外面の痕跡は格子目タタキか。917は口径26.8cmを測る大形の鉢。918～921は器台で、体部の最小径が中央部にあるもの(918)と、上部にある2タイプがある。

⑮ 土器群5Y(図109～113)

E-1区東半に広がる土器群で、土器群5Xの下から出土した。コンテナ50箱近くが出土した。923～940は甕である。923～925は口縁部がく字状に折れ曲がり、頸部がするどく内面に突きだし、口縁部内面がくぼむタイプのものである。926は各部位の破片はあるが、それぞれが接合しない。927～935はいわゆる鋤先口縁を持つ甕である。928は口縁部の歪みがひどい。930は口唇部に刻み目を施し、全体の調整は遺存状況が良くないものの、ヘラミガキで仕上げていると考えられ、赤彩している。931は内面がかなり黒化している。936には部分的に赤彩らしき痕跡が求められる。936を除いて煤が多く付着している。また多くの土器に、胴中央付近に大きな黒斑がついている。940は器高53.7cm、口径38.7cmの大形の土器である。

941・942、944～948は甕である。941は器高35cm、口径22cmを測る袋状口縁甕である。外面は全面ハケメで仕上げている。942はほぼ丸底の甕で、外面底部付近はヘラミガキ、胴中央から上はハケメで仕上げている。推定器高約30cmを測る。944・945は袋状口縁を呈する長頸甕で赤彩を施している。946は全体がゆるく外反する長頸甕である。

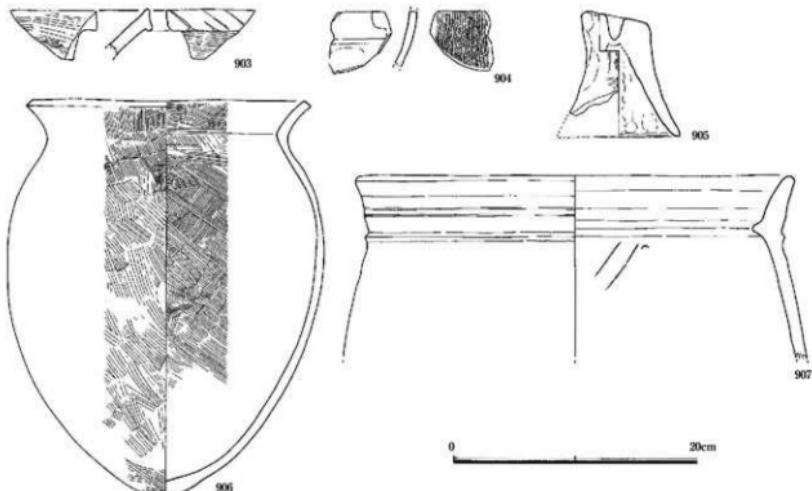


図107 E-1区土器群5Gと5W間層出土土器及び5W出土土器実測図(1/4)

943は短い口縁部と球形の胴部を持つ鉢で、平行タタキを外面に施している。949～953も鉢で、951は浅い皿状の器形で、全体が丸く作られ、底部はわずかに平底気味である。952は両面ともヘラミガキで仕上げ、958～963は赤彩を施している。954～956は蓋である。957～963は高杯で、杯部はヘラミガキで仕上げており、脚部はいずれもハケメ調整を施している。964～973は器台で、体部最小径部分に体部中央付近にあるタイプのものがほとんどであるが、972のみは体部上位にある。

973は高さ 11.7cm と径に比して寸が短い。

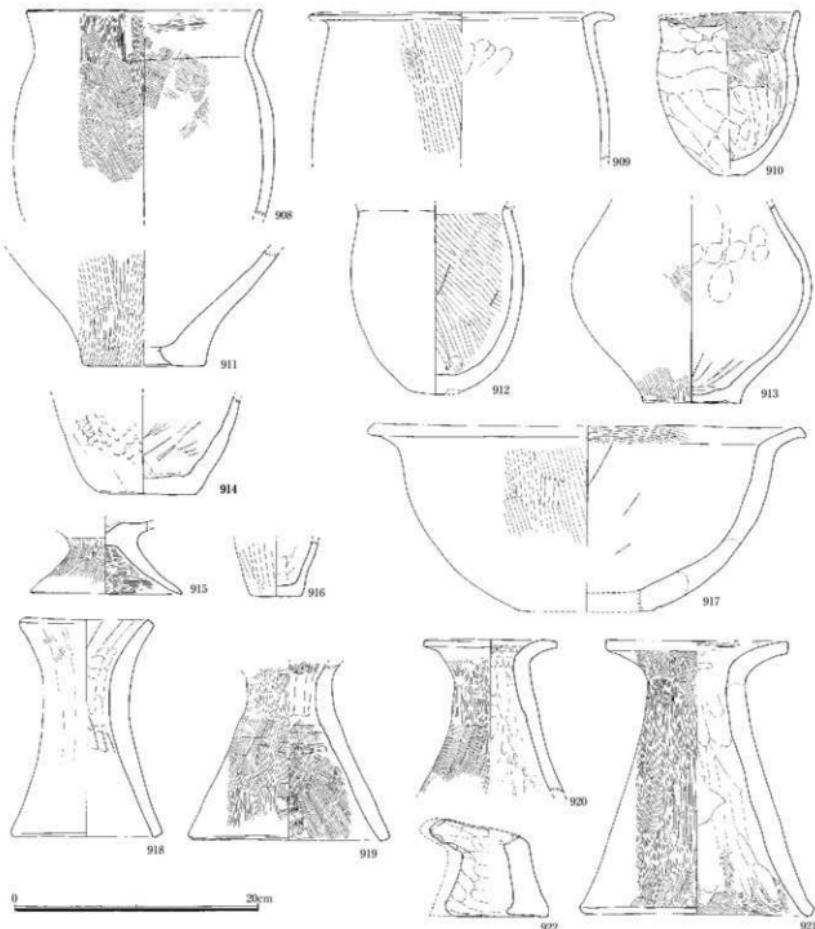


図 108 E-1区土器群5X出土土器実測図(1/4)



图 109 F-1区土器群5Y出土土器实测图1(1/4)

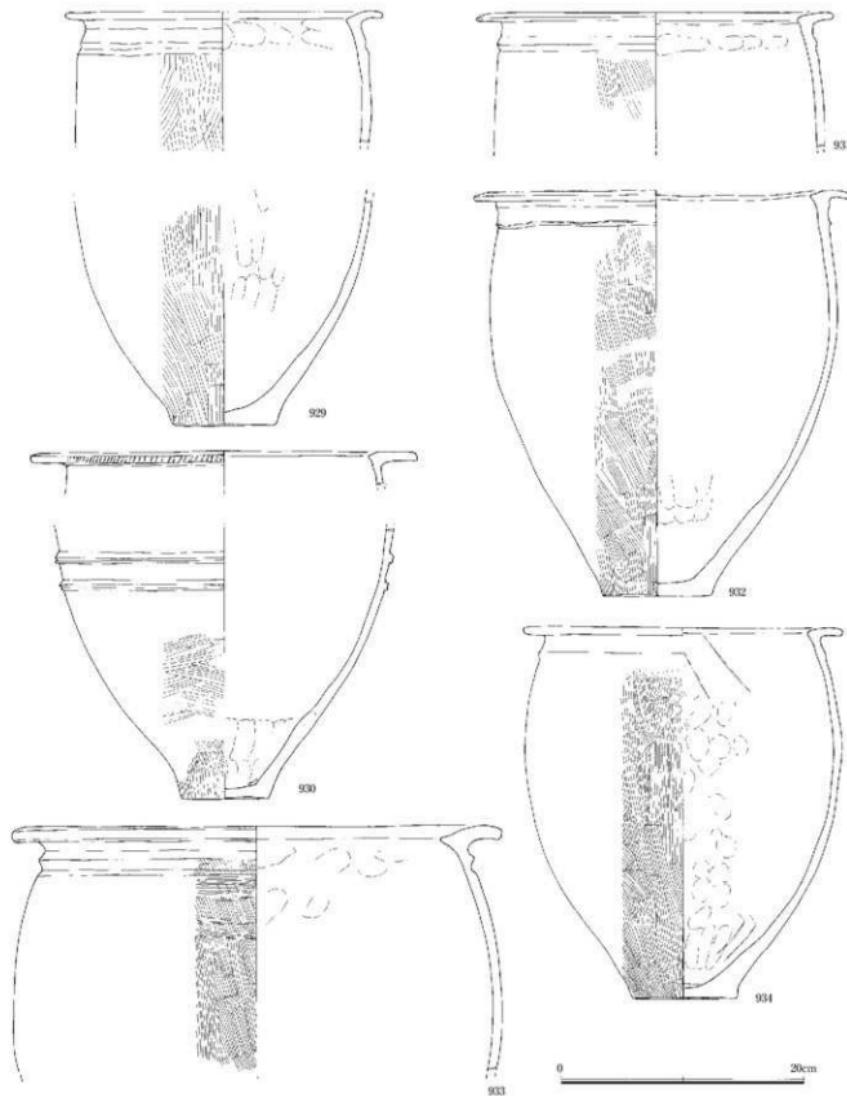
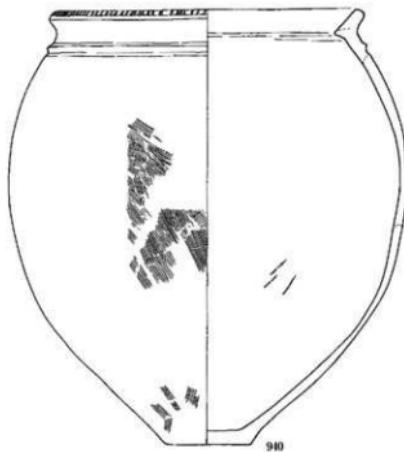
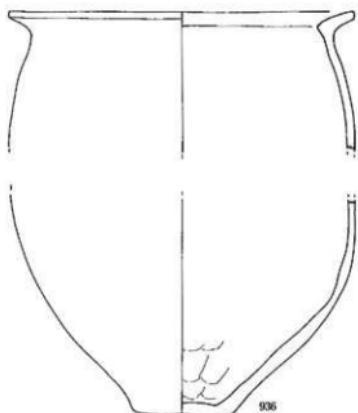
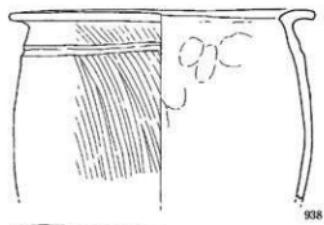
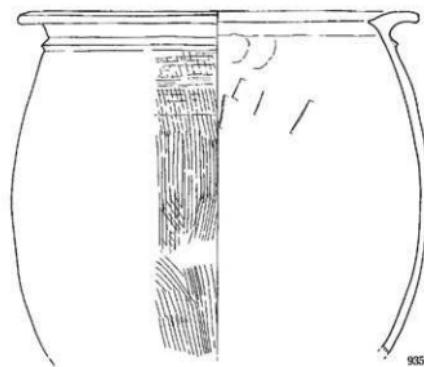


图110 E-1区土器群5Y出土土器实测图2(1/4)



0 20cm

0 20cm

图 111 E-1区土器群5Y出土土器实测图3 (1/4·1/6)

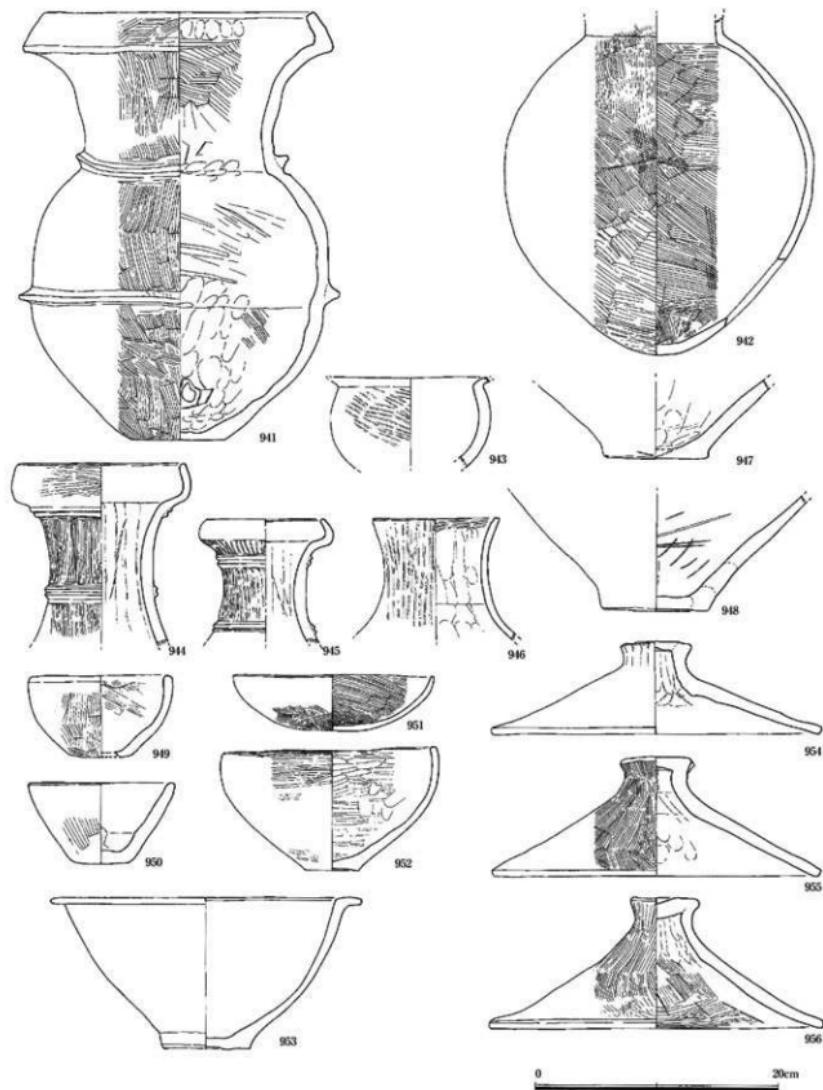


图112 E-1区土器群5Y出土土器实测图4(1/4)

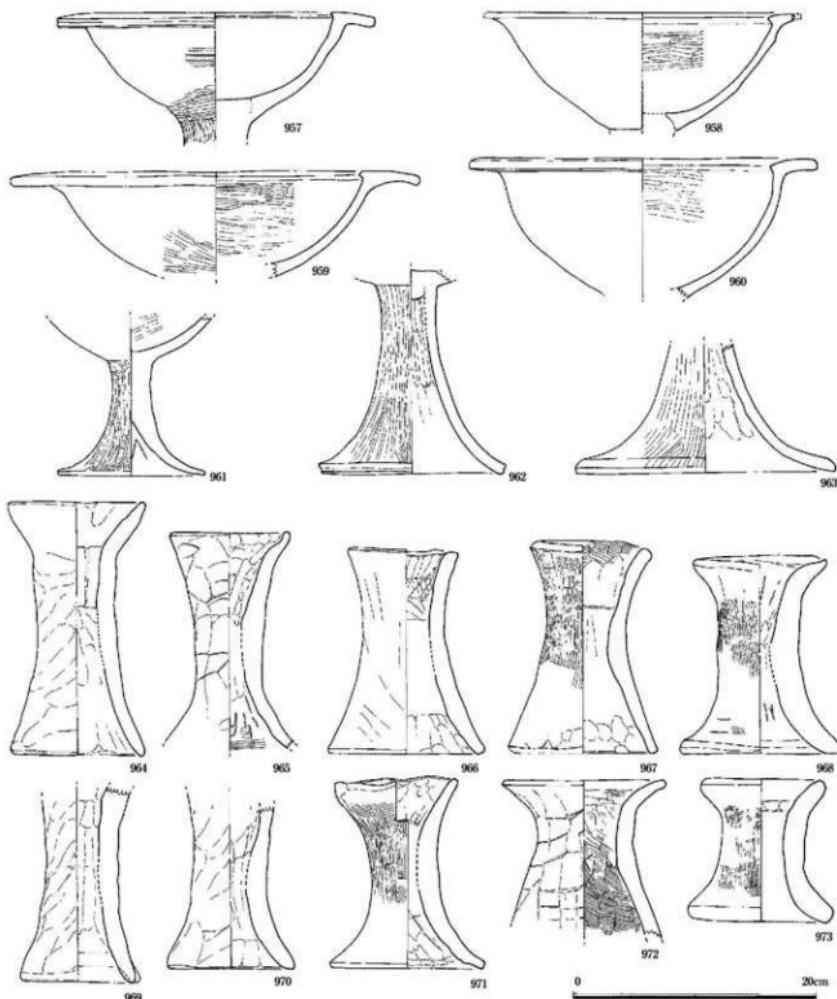
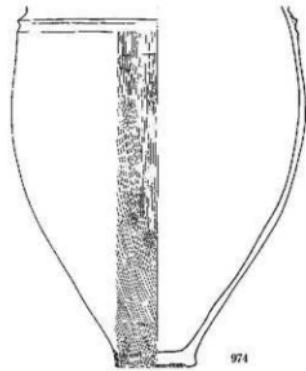
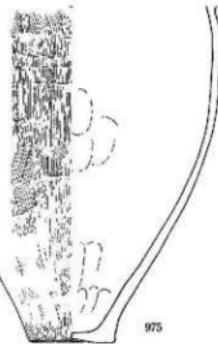


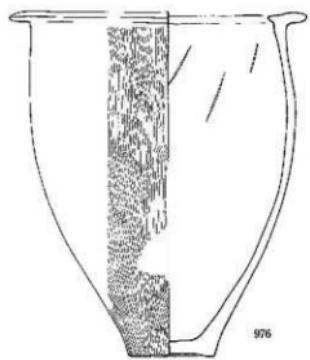
图 113 E-1区土器群5Y出土土器实测图5 (1/4)



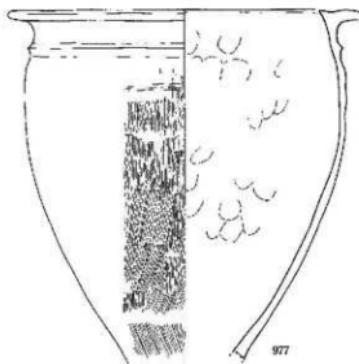
974



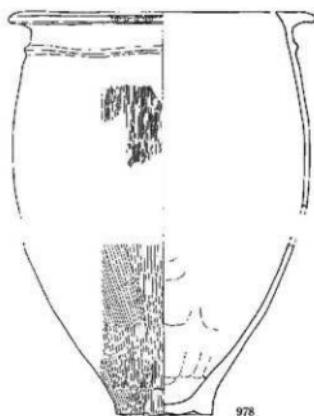
975



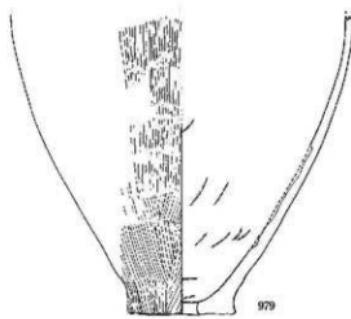
976



977



978



979

0 20cm

图 114 E-1区土器群5Z出土土器实测图1(1/4)

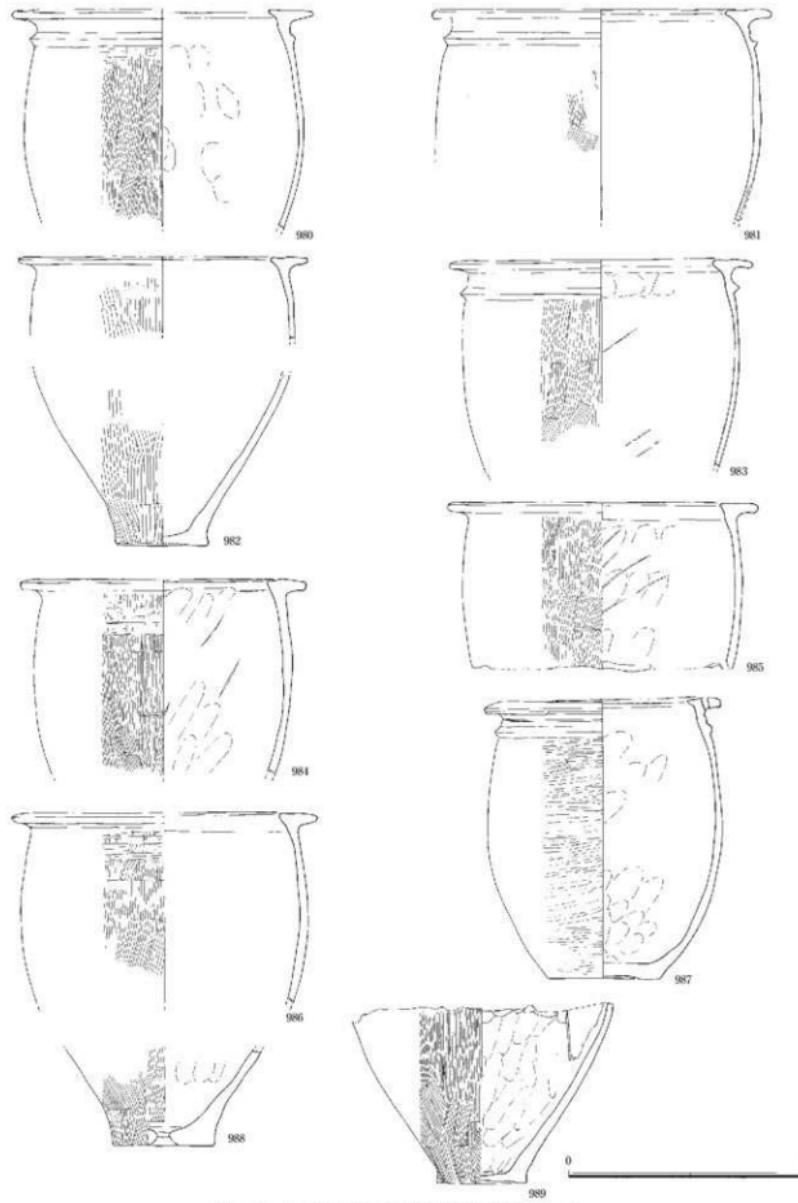
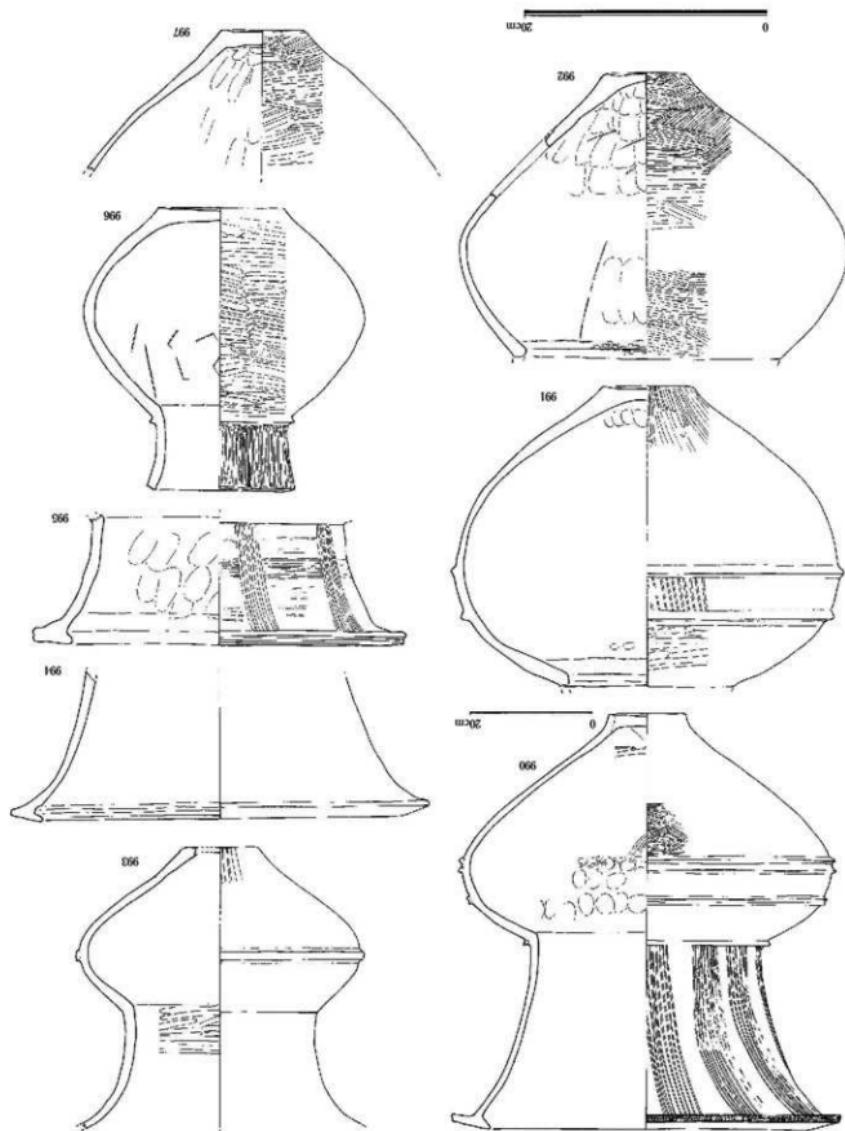


图 115 E-1区土器群5Z出土土器実測図2 (1/4)

圖 116 E-I 段土壤剖面圖 (1/4 · 1/6)



⑯ 壺群 5 Z 出土土器 (図 114 ~ 119)

壺群 5 Y の下に広がる土器群で、この下に若干の土器はあるが、ほぼ最下層に位置する土器群である。974 ~ 989 は蓋で、すべて動先口縁を持つものである。974 ~ 978 は概ね類似した全形がほぼ復元できる蓋で、口縁部直下に突帯を持つものがある。外面ハケメ、内面はナテ調整を施している。979 は底部中央に焼成後の穿孔を施している。980 ~ 989 も蓋である。987 は全体が寸胴の蓋で、全体にヘラミガキを施し、赤彩を施している。988 は底部中央に焼成前に穿孔を施している。989 は脚部中央付近で全体を打ち欠いている。

990 ~ 1000 は蓋である。ほとんどがヘラミガキで仕上げ、992・993・997・998 は赤彩が確認できる。990 は大形の蓋で、器高 69.1cm、口径 64.4cm を測る。口縁部に縱方向の凹文を施している。991・992 は無突縁で、991 は 2 条の突縁の間に縱方向の凹文を施している。999・1000 は器高 10cm 前後の小形の蓋で、ともに作りが粗くミニチュア的な土器である。1001・1002 はほぼ同形態のやや深めの鉢で、ほぼ倍のスケールである。1002 の内面下部には赤彩顔料が部分的に付着している。1004 ~ 1008 は浅い鉢である。いずれもナテ・指押さえで仕上げている。

1009 ~ 1015 は高杯である。1009・1010・1013 はほぼ完形に近い。1009 は器高 31.4cm、口径 26.4cm、1010 は器高 32.0、口径 27.9cm を測る。3 点ともヘラミガキで全面を仕上げ、赤彩している。1010 と 1014 は杯部直下に突帯を施している。1016 ~ 1020 は中形の蓋、1021・1022 は小形の蓋である。中形の蓋は外面ハケメで仕上げている。小形の蓋 2 点はヘラミガキで仕上げ、赤彩を施している。また相対した 2 カ所に穿孔を施している。1023 ~ 1031 は器台で、すべて体部最小径の位置が体部中央付近にある。

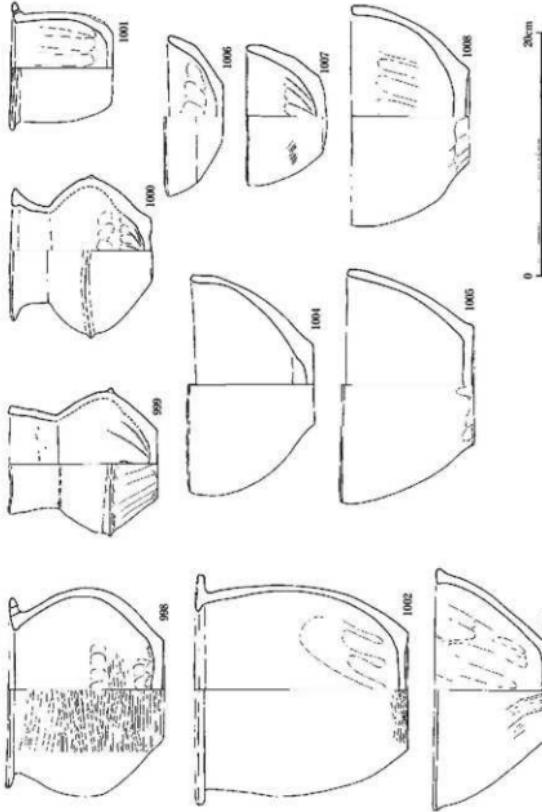


図 117 E-1 区土器群 5Z 出土土器実測図 4 (1/4)

⑰ E-2区上層出土土器(図120・121)

E-2区は北半が微高地部で、南半がSDOの北側斜面に含まれる。大形の土器片はほとんどが斜面上または斜面直下から出土している。掲載している上層の土器も同じである。1032～1037・1041～1043は壺で、1041は縦方向の暗文が施されている。1042・1043は長頸壺で、この3点はヘラミガキで仕上げられている。1038～1040は甕で、1039は無頸である。1044は小形丸底壺で、外面を全面ミガキ調整で仕上げている。1045はやや深めの無頸の鉢である。1049・1050は高杯で、1049は直線的に外傾する器形の杯部である。1054は異形の土器である。全体が歪んだ浅い鉢状を呈する。上から見ればやや歪んだ橢円形を呈し、短辺の中央断面形は左右相似形になっていない。底部中央には細長い穴が穿たれている。全体指押さえで整形されている。

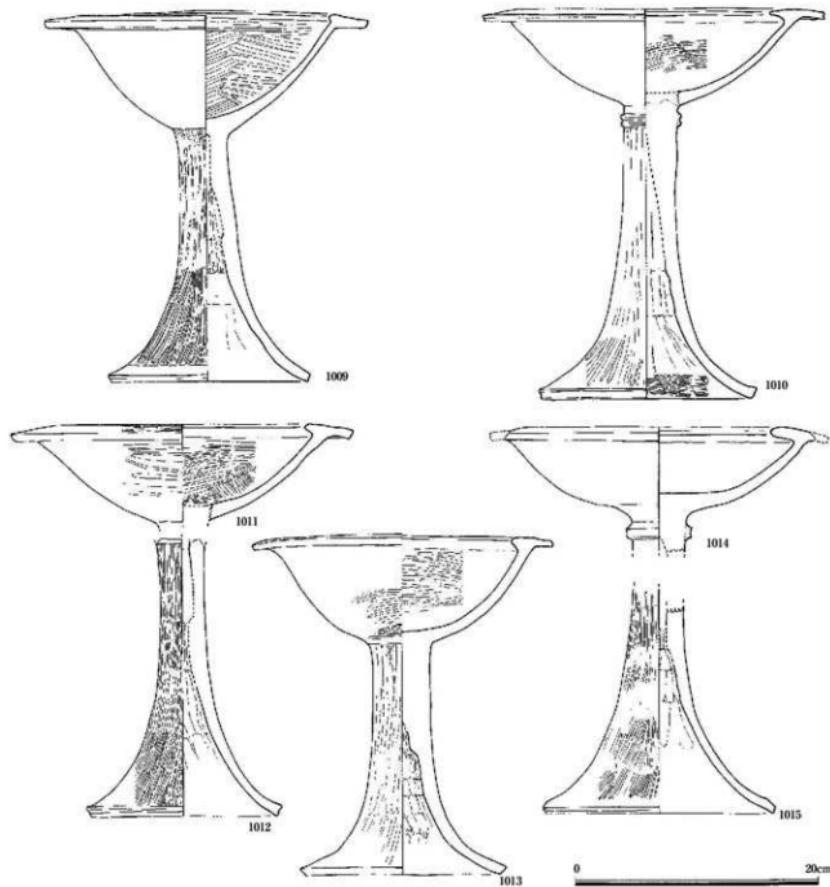


図118 E-1区土器群52出土土器実測図5(1/4)

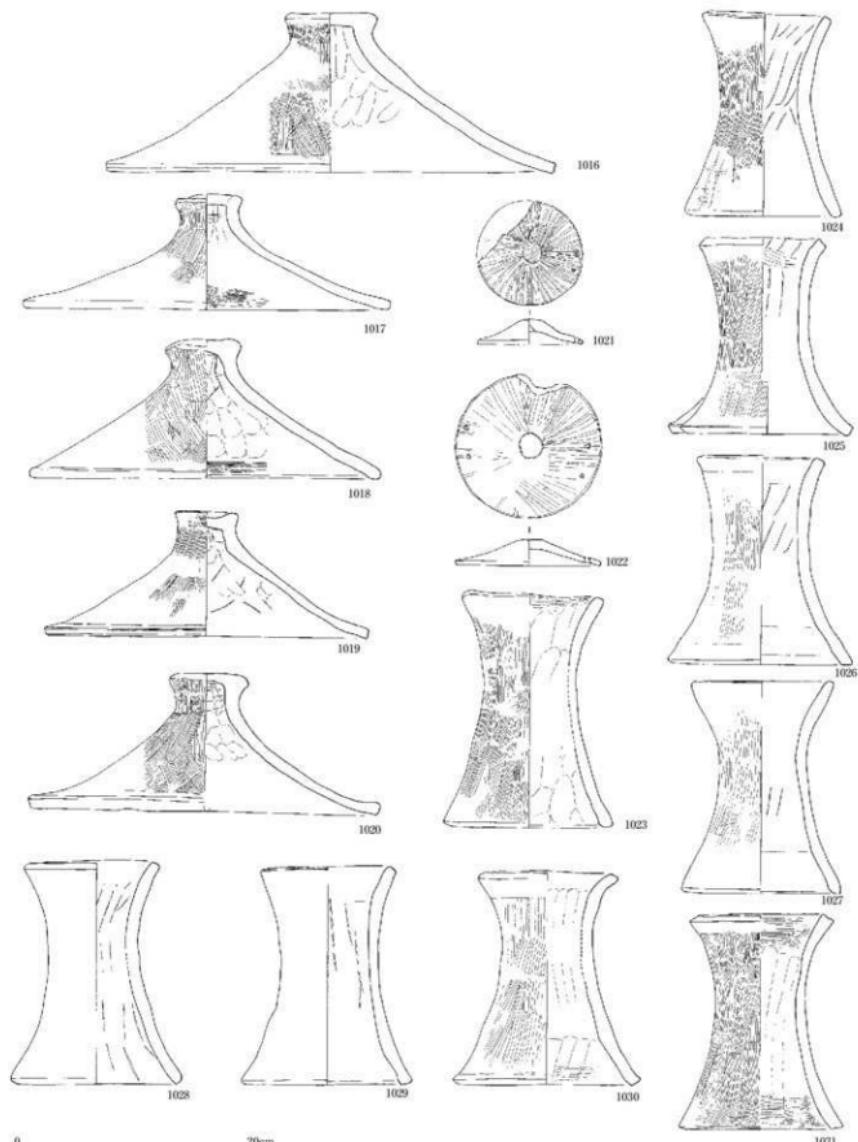


图 119 E-1区土器群5Z出土土器实测图6 (1/4)

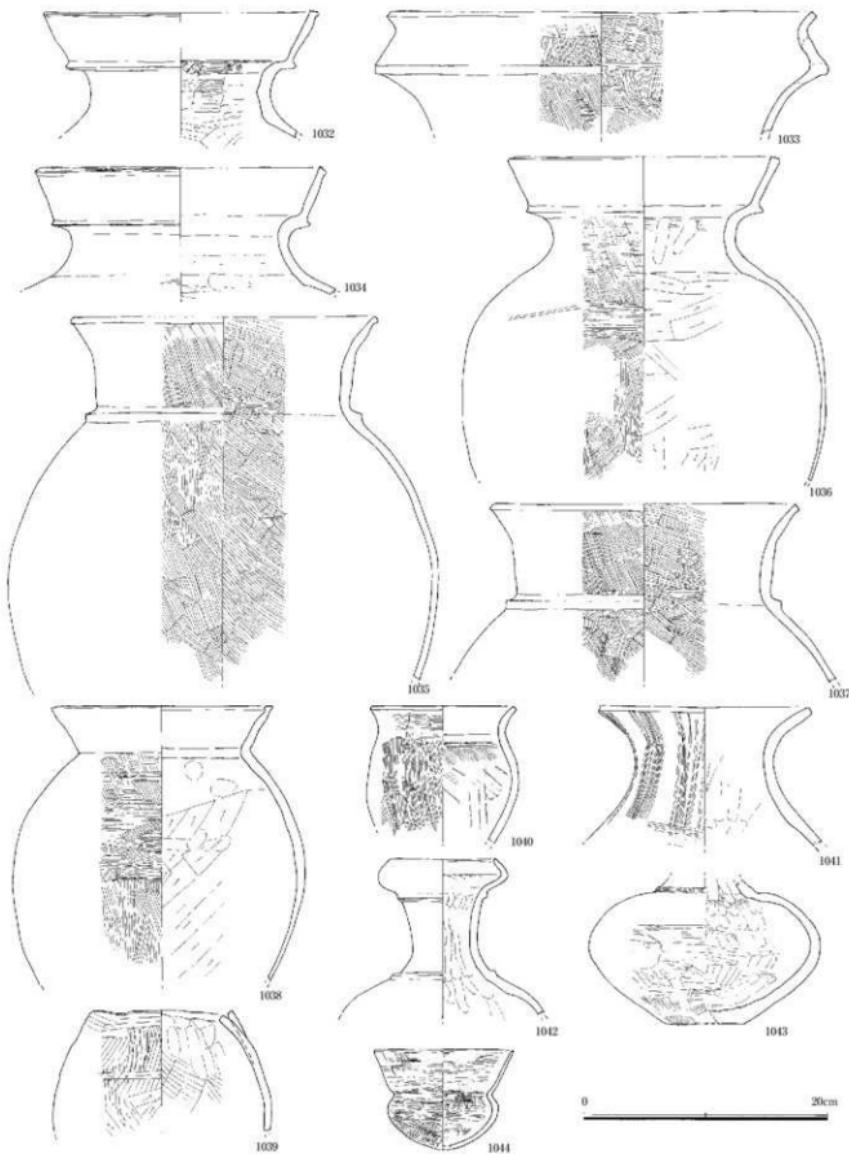


图 120 E-2区上层出土土器实测图1(1/4)

⑧ E-2区中・下層出土土器（図122）

上層と同じく大半がSD01斜面上と斜面直下から出土した。1057・1058・1060が中層出土、1068が微高地部分の地山上から出土した以外は、下層の出土である。1060はわずかに平底を呈する壺で、両面とも細かなハケメで全面を仕上げている。1066は大形の高环の脚部である。1067・1068は縄文土器で、1067は両面とも条痕文を施している。1068は底径9.2cmの縄文土器で、外面は条痕、内面はナデで仕上げている。

⑨ E-2区土器群9出土土器（図123）

D-2区土器群9から続く土器群である。E-2区部分は量は少ない。SD01の斜面を登り切ったところにあり、堆積土が少ないため、包含層の厚みは薄く、異なる時期の土器がレベルをあまり違えずに出土している。

⑩ 調査区南東拡張区出土土器（図124～128）

I区の調査がほぼ終了し、埋め戻す直前に、大量の土器が調査区断面に残されていたE-1・2区の東側壁面部分を、約10m東側に拡張し、土器の採取を行った。土器の大半は土器群5の一連の群の続きで上面のみ実測を行った。拡張の結果、東側に立ち上がっていく地山を検出し、この地点における遺物はほぼ採集することが出来た。ほとんどが斜面上に位置するため、下層の遺物は少なく、ほとんどが中・上層に含まれる土器である。1076は上層から出土した。色調は灰色を呈し、胎土は精良である。焼成はやや悪く、朝鮮半島系の瓦質土器と思われる。1077・1078はの高台付碗である。

1079は土師質土器の高台付き椀で、見込み中央にスタンプが押印されているが、内容はわからない。

1080～1097は甕で、1080～1086は弥生土器である。完形品に近いものが多い。1087～1097は弥生時代終末～古墳時代初頭前後の甕で、1097は口径34.8cm測る大形の土器である。

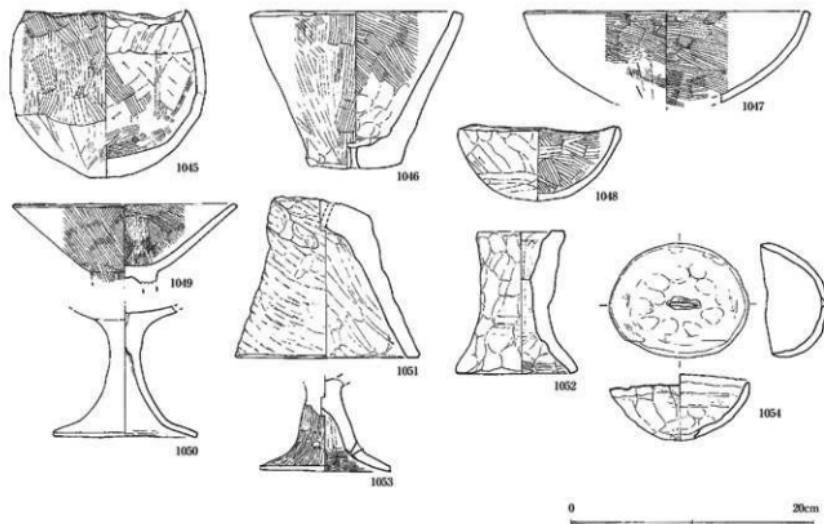


図121 E-2区上層出土土器実測図2(1/4)

1098～1110は壺で、1098はヘラミガキで全面を仕上げ、赤彩を施している。1102は口縁部下部に焼成後に穿孔を施しているが、用途はわからない。1104は復元完形であるが、器高35.4cmを測る。

両面ともハケメ調整を施している。1107・1108は山陰系の壺と思われる。1111～1118は大小の鉢である。1116は寸胴な器形を呈している。1119～1124は器台、1125は支脚である。1125は平行タタキを縦方向と横方向に施している。1126・1127は蓋、1128・1129は高环である。

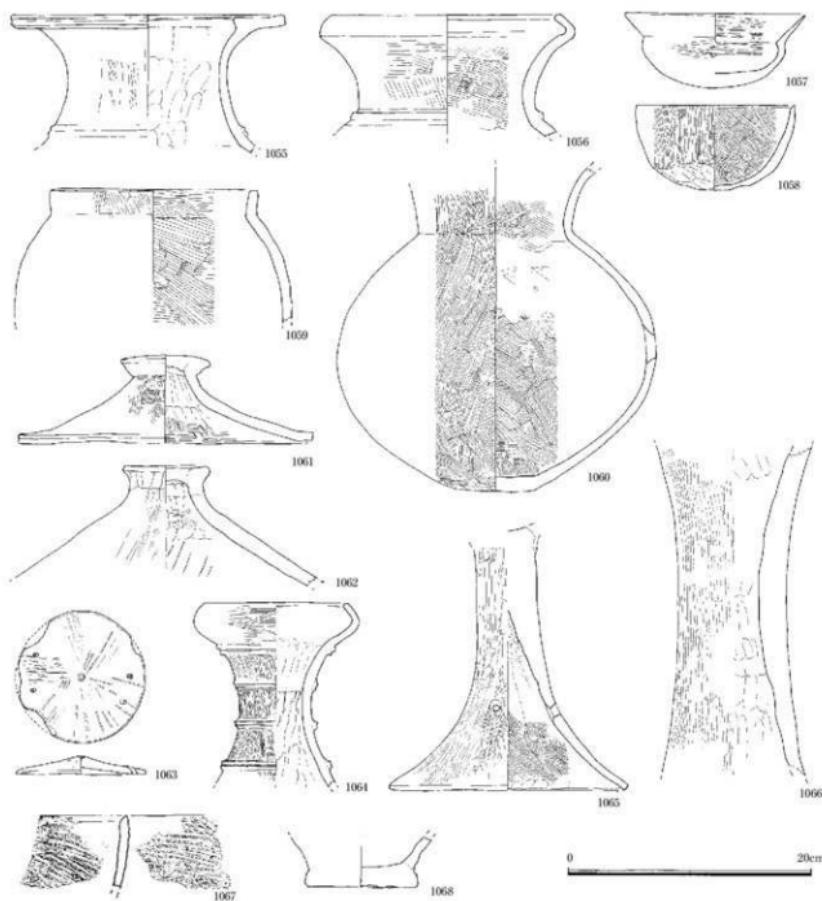


図 122 E-2区中・下層出土土器実測図(1/4)

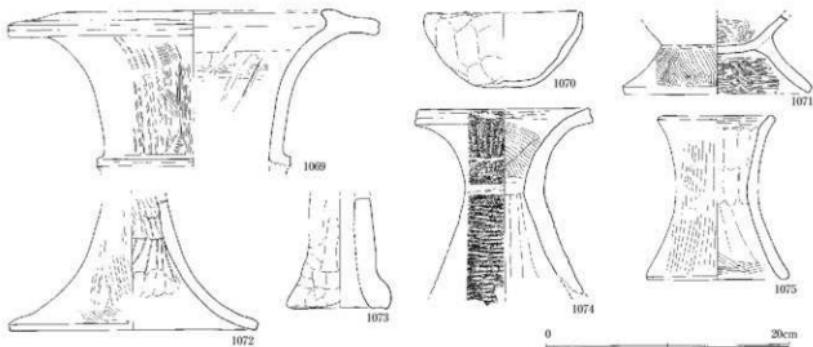


図123 E-2区土器群9出土土器実測図(1/4)

(6) 土製品

A 1・2区～E 0・1・2区から出土した土製品である。

① 館形・ひしゃく形土製品(図129)

当該地区から小破片も含めて約30点出土し、15点を実測・掲載した。多くが各区上層から出土しており、1135のみ下層出土、1135と1136が弥生時代中期～後期前半の土器を主体とする土器群10・11の出土である。全形がわかるものを見ると、柄の側面角度が平行に近いもの(1130・1138など)、角度が緩やかなもの(1131・1132など)、急角度なもの(1134・1135など)がある。柄の長さは短いもので13.7cm(1133)、長いもので26.7cm(1132)を測る。またつぼ部の大きさは、直径6.5～9.7cmを測る。1131は直径9.4cmのほぼ正円を成している。1132はつぼ部先端が急に立ち上がる形態で長い柄を持つ。1133は径9.7cm大きなつぼ部と短い柄を持つ。柄の裏側には切り込みが入っている。1134・1135は急角度の柄を持つもので、つぼ部は小さいが現代のおたま状の形態を成している。1137は破片のため匙状土製品かどうか判断が難しいが、柄の長さは短い。匙形・ひしゃく形土製品のほとんどがナデ・指押さえで整形しているが、1140は全面をていねいにミガキ調整で仕上げ、赤彩を施している。

② 鐸形土製品(図130)

確実なものは図示した2点であるが、素文で鐸形土製品の可能性がある小破片が数点ある。1145は現状の高さ6.2cmを測る。天井中央部には孔を穿っている。外面に縦方向の直線と、直線間に羽状文、

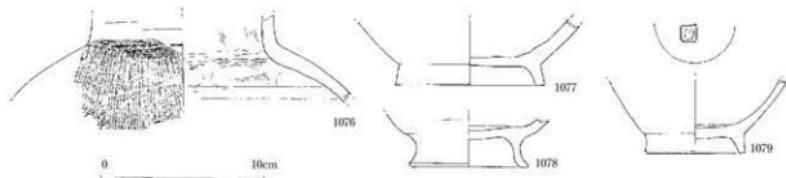


図124 調査区南東拡張区出土土器実測図1(1/3)

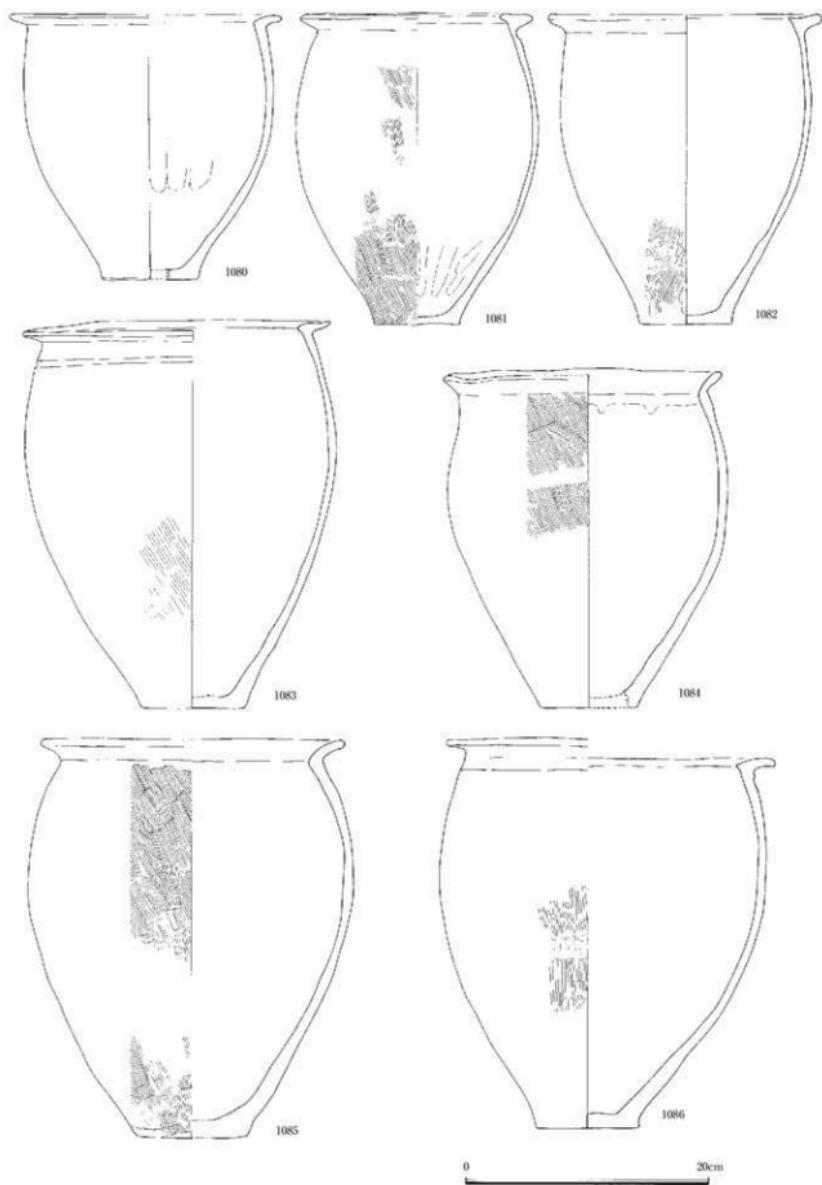


図 125 調査区南東拡張区出土土器実測図2(1/4)

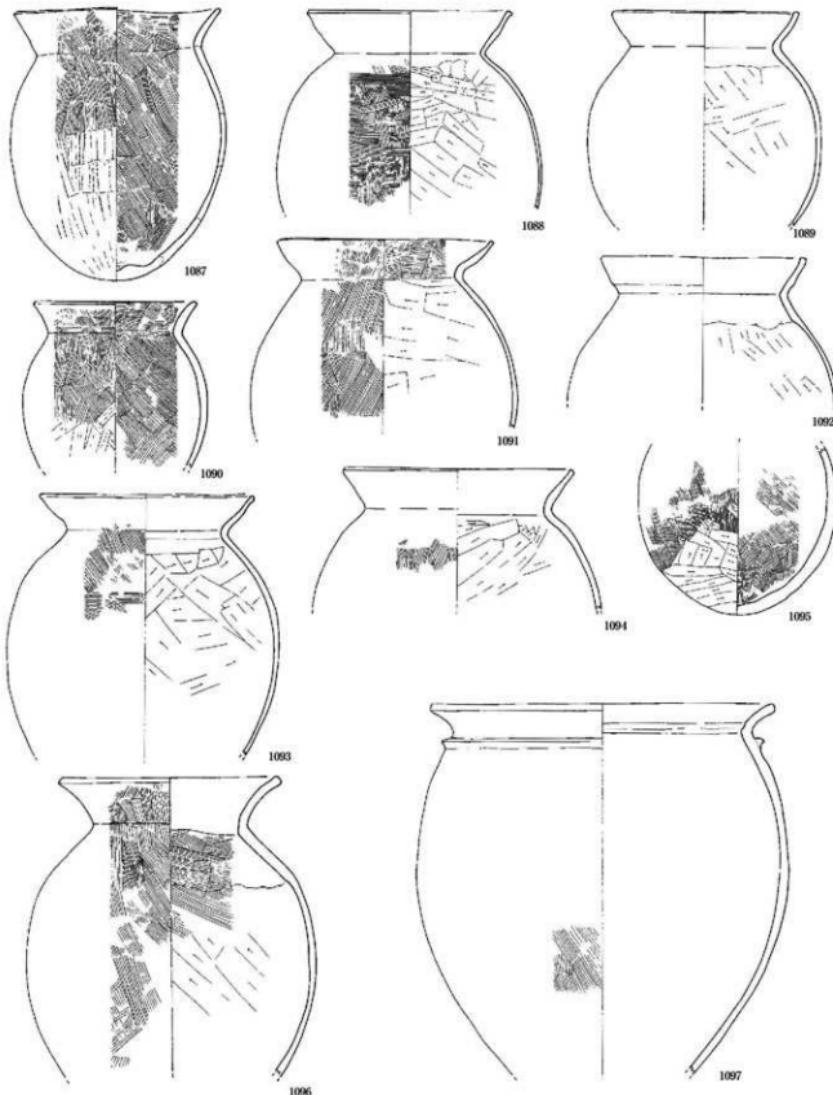


図 126 調査区南東拡張区出土土器実測図3 (1/6・1/4)

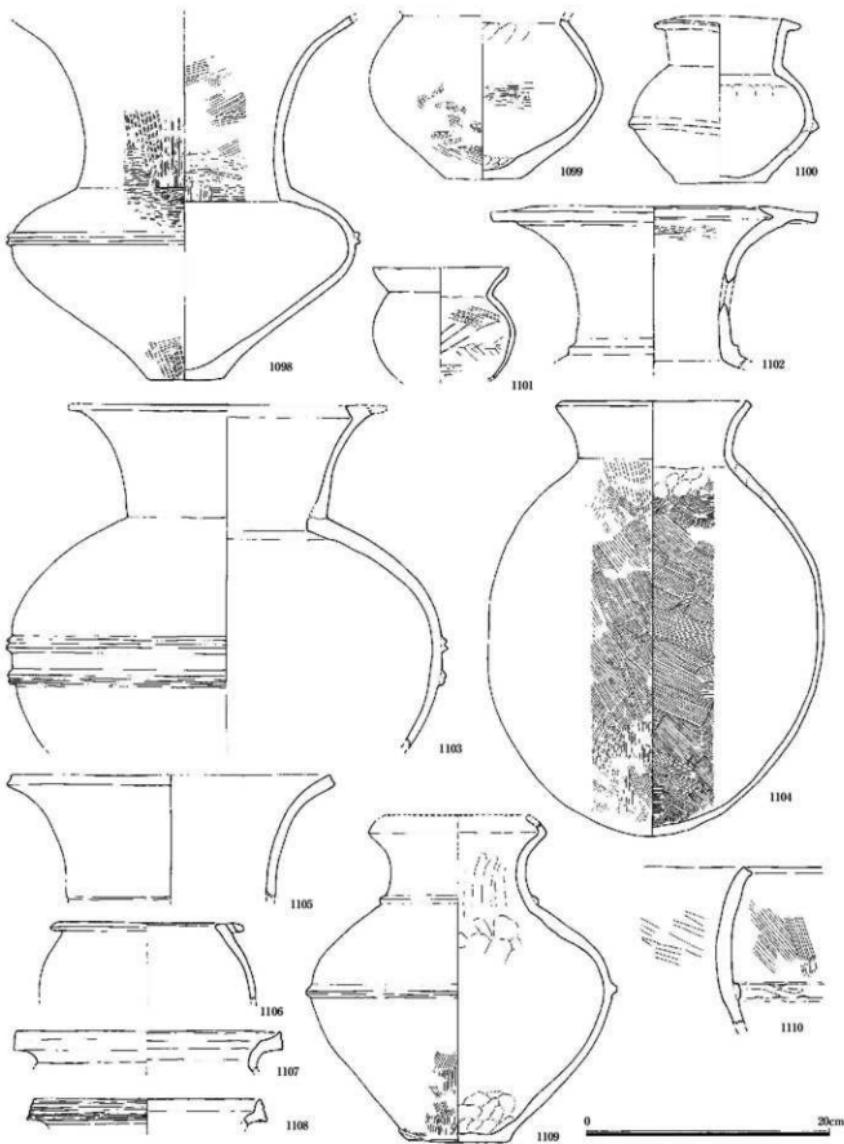


图 127 调查区南东扩张区出土土器实测图 4 (1/4)

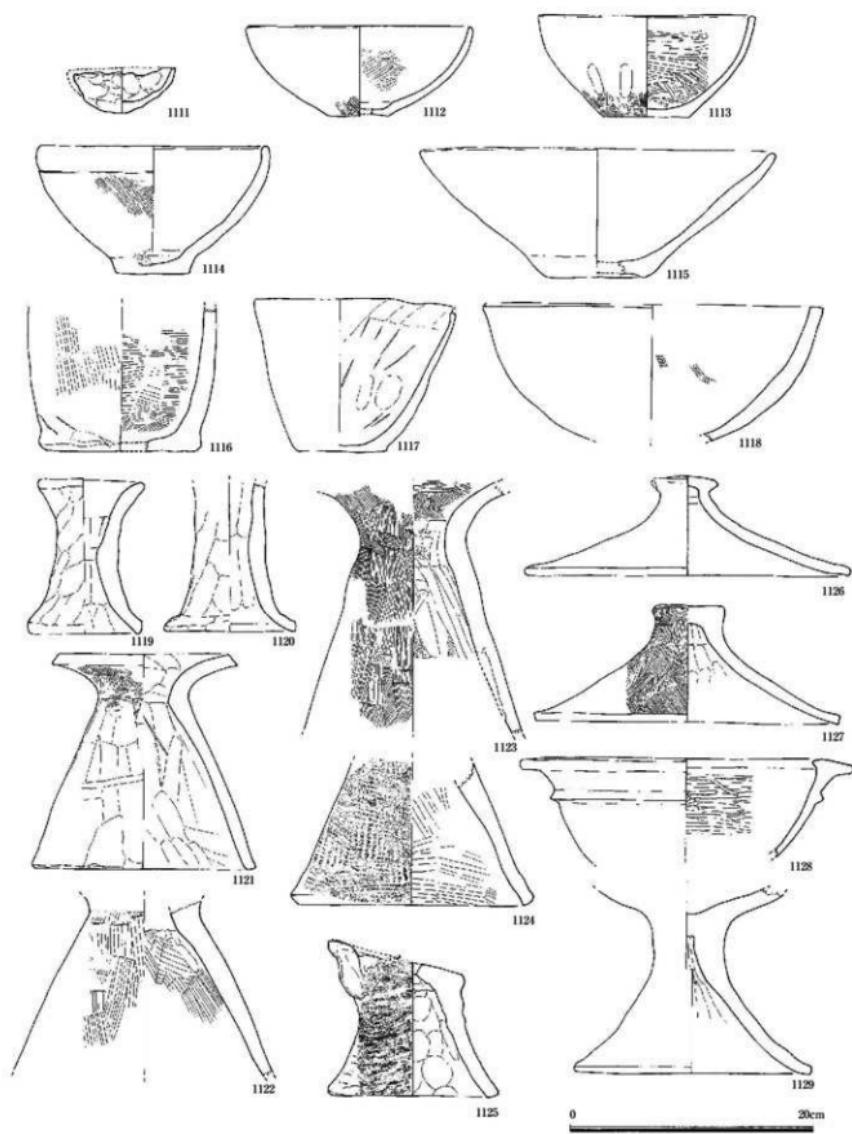


図 128 調査区南東擴張区出土土器実測図5 (1/4)

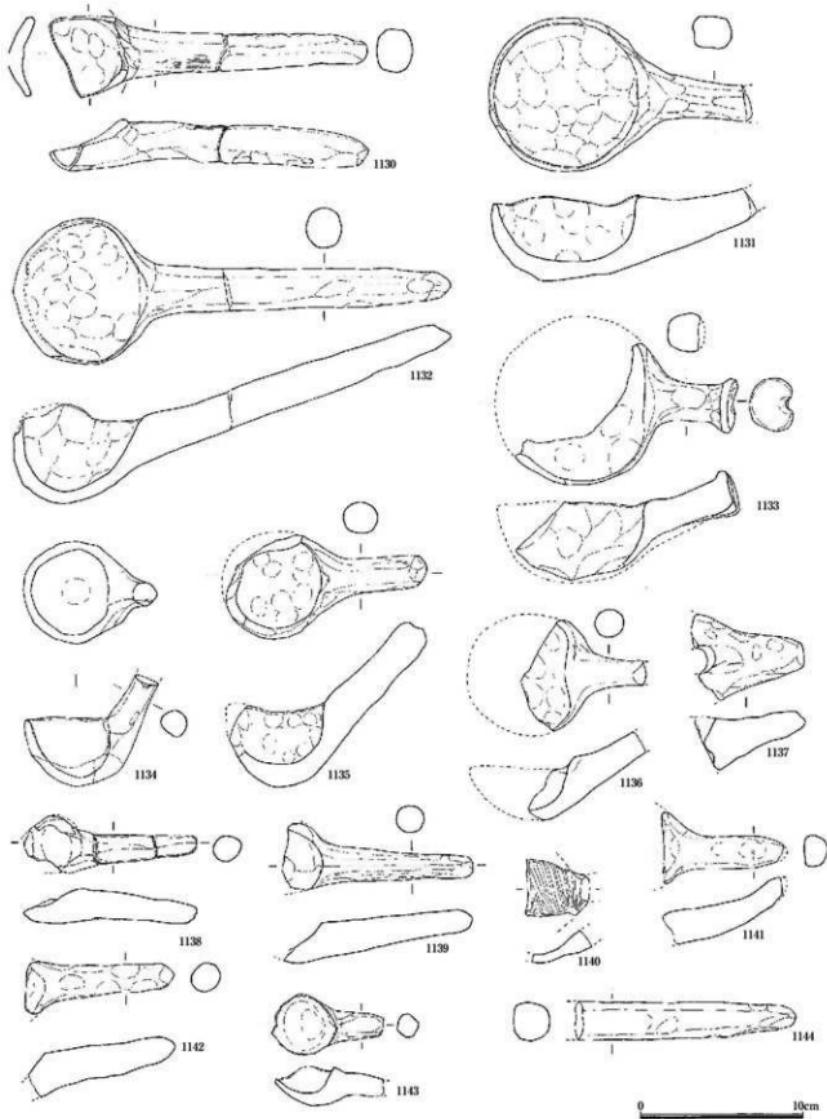


図 129 出土土製品実測図 (1/3)

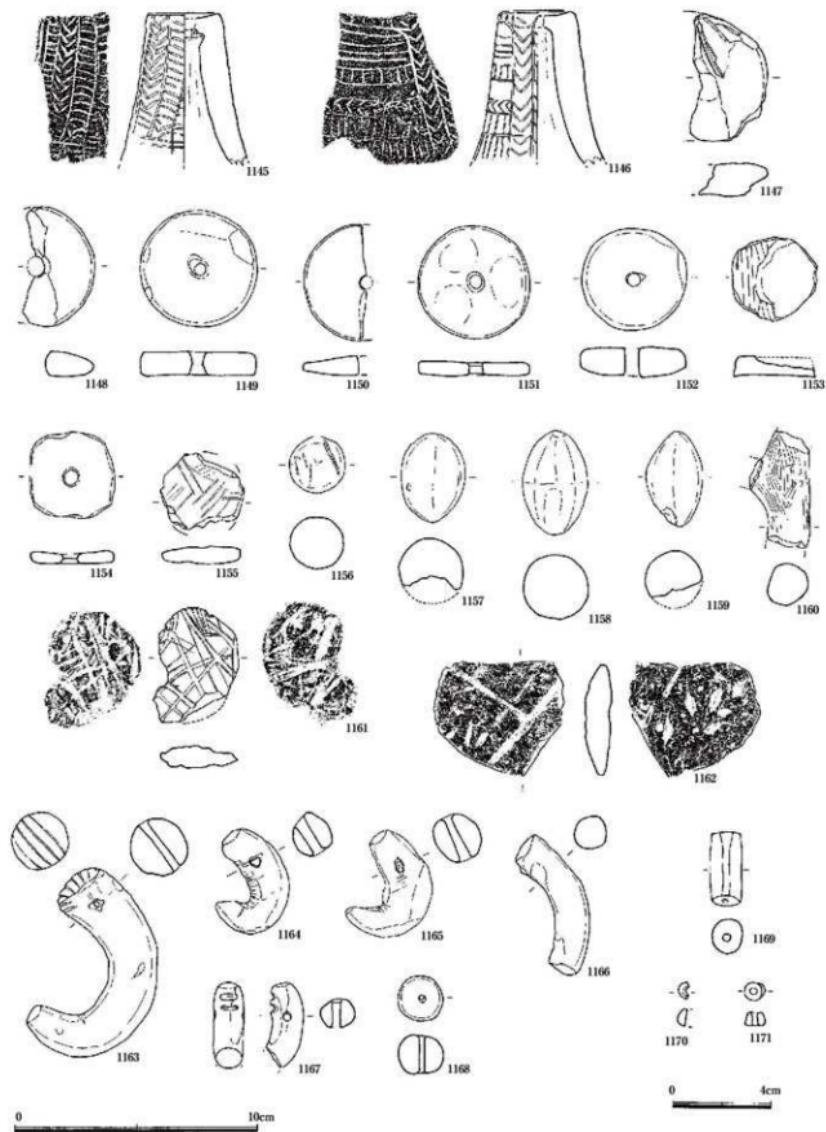


図 130 出土土製品・石製品・粘土塊・ガラス製品実測図 (1/2・1/1)

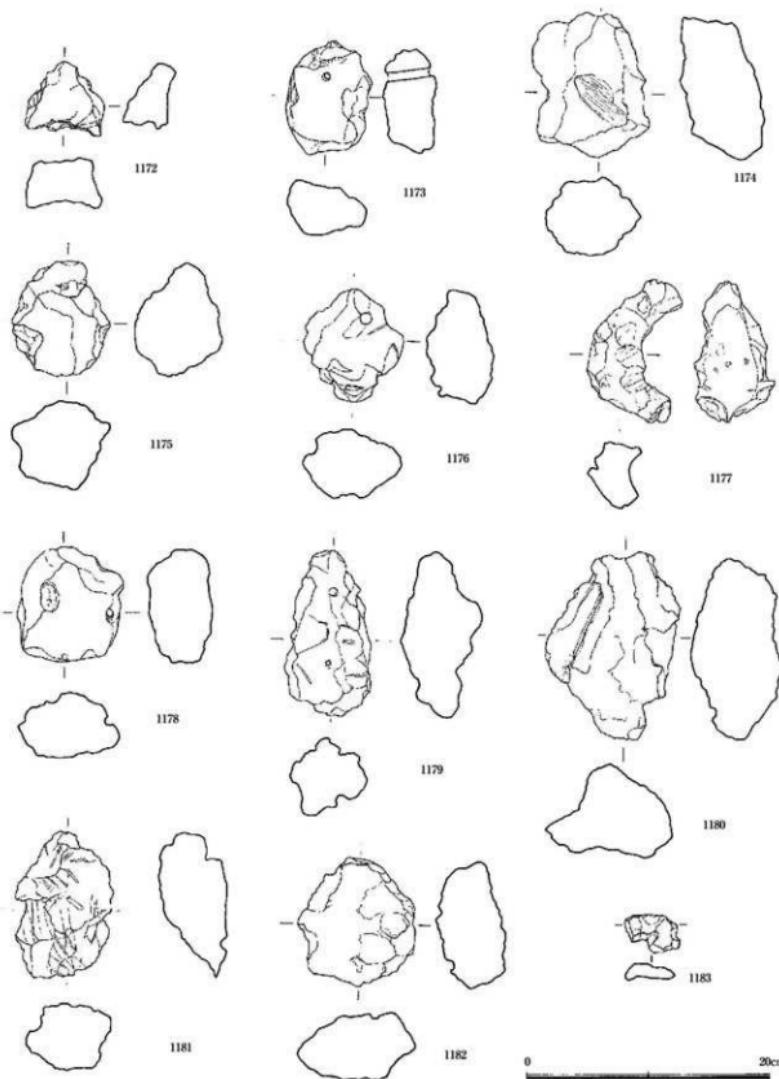


图 131 出土粘土块实测图 2 (1/4)

短沈線などを施している。1146は現状の高さ6.1cmを測る。天井中央部には孔を穿っている。外面文様構成は、縦と横の違いはあるが1145に類似した文様構成である。

② 紡錘車（図130）

土製の紡錘車で、他に石製の紡錘車（次年度以降報告予定）も多数出土している。1145は紡錘車というよりは有孔円盤としたほうが正しいかも知れない。

③ 土製円盤（図130）

1153は土器片を利用したもので、径3.4cmを測る。

④ 土弾（図130）

円形のもの1点（1156）とラグビーボール状のもの3点（1157～1159）が出土した。

⑤ 土製玉類（図130）

勾玉5点と丸玉1点が出土した。大形の勾玉（1163）は長さ7.8cmを測る。頭部には丁字頭のように沈線が施されているが、5本とやや数が多い。1166はあるいは勾玉ではない可能性もある。1167は湾曲部内面に2本の短沈線が施されている。

（7）石製品・ガラス製玉類

碧玉製管玉1点（1169）と、ガラス小玉2点（1170・1171）が出土した。管玉は土器群5A中、ガラス玉2点は土器群10の下から出土した。

（8）焼成粘土塊

C-1・2区からE-1・2区にかけて焼成粘土塊が計5箱出土した。粘土塊のなかにはいわゆるスサ入り粘土塊や何かに粘土を押しつけた跡らしきものが残っているものがある。

1161は厚さ5mm前後の薄いもので、片面に沈線状のものが多く走り、反対面にはスサ・草状の痕跡が認められる。図の点線部分は欠けているが、他は割れ口はない。ポンプ用地出土。1162はやはり薄めのもので、両面に禾のついた穀物の圧痕が無数にある。一部が欠失している。E-1区最上層出土。1172全体に焼成を受け、一部が黒化している。スサ等の痕跡はわからないが、小さな空隙がある。B-1区上層出土。1173は図の面は真っ赤に焼け、反対面は黒化している。図の上部に、径5mmほどの孔が両面を貫通している。植物質のものが焼失したものと思われる。他に比べ砂の量がかなり多い。土器群8の中から出土した。1174は図の面が赤化し、反対面の一部が黒化している。図の中央右下に、斜めにナデたような痕跡がある。スサ等の痕跡は認められない。612gあり、かなり重い。C-1区2層出土。1175は全体が橙色であるが、図の右側は灰白色を呈し、一部が黒化している。319gと大きさの割には軽い。土器群7出土。1176は表面に繊維質の痕跡が残っている。全面灰白色で、一部が黒化している。指頭状の痕跡が数箇所ある。C-2区土器群7出土。1177は異質な粘土塊である。左図の表面には指頭状の痕跡が多くついている。図の反対面はやや黒化している。左図の右側は何か押さえつけたような状況で、この部分は焼成を受けていない可能性がある。ポンプ用地出土。1178は片面が橙色で、反対面は黒化している。貫通していない孔が1ヶ所ある。D-2区1層出土。1179は表面は橙色で、反対面は黒化している。表面に貫通していない孔が2ヶ所ある。繊維状の痕跡がわずかに認められる。1180も図の表面は橙色で、裏面は黒化している。図の左側面は幅3cm、長さ10cm弱ほど何かに抑えつけた跡のような滑らかな面があり、その中央には幅5mm程、溝状に窪んでいる。E-2区上層下部出土。1181は両面ともわずかに赤味がかった灰白色で、黒化や赤化している部分はない。全面に繊維質の痕跡がある。E-2区下層出土。1182は表面が橙色、反対面が灰黄色を呈し、一部黒化している。また裏面に炭があたったような痕跡がある。E-2区上層出土。

表3 出土土器一覧表

図 No.	出土位置	基形	調 整				色調	敷土	赤彩 有無 内用	備考		
			基高	口径	底径	外面						
15 1 A-2	凹凸内 凹内	縦			7.6		青白地素面 青黄灰双頭之種	白色 精良	1			
15 2 A-2	凹凸内 凹内	縦			平行タキ	同心円に当れ具	明青灰色	1mm砂粒・黒色	1			
15 3 A-1	凹内	(縦)	9.8	6.0	ナデ		2mm砂粒	4				
16 4 A-1	研水溝	縦	25.5	9.0	ナデ	横ナド・ナデ	灰黄褐色	砂粒	2	馬糞又ス付有		
16 5 A-1	研水溝	縦	25.0	26.0	ナデ	横ナド・ハマメ	ハケヌ・ナデ	灰黄褐色	砂粒 1mm砂粒	2		
16 6 A-1	研水溝	縦	31.4	28.6	ナデ	横ナド・ハマメ	ナデ・指揮	灰黄褐色	砂粒	2		
16 7 A-1	研水溝	縦	27.4	31.4	ナガタ・横ナド	指揮・板ナデ	灰黄色	砂粒	3	口縁端に朝日		
16 8 A-1	研水溝	縦			ヨコナド・ナデ		にじ・黄褐色	1mm砂粒・赤色	2			
16 9 A-1	研水溝	縦	13.5	16.5	モニ滅	ナデ・指揮	にじ・黄褐色	2mm砂粒・赤色	2			
16 10 A-1	研水溝	縦	8.0	21.2	6.0	横ナド・ハマメ	ミガキ	灰黄色	精白・微細砂粒	2	赤彩は全面か 不明	
16 11 A-1	研水溝	高环	24.2		摩滅	ミガキ	にじ・黄褐色	砂粒 不○	赤彩は全面か 不明			
16 12 A-1	研水溝	沿沟	18.2	9.6	14.3	横ナド・ハマメ	ナデ・シボリ・ハマメ	褐色	砂粒	2		
16 13 A-1	研水溝	支脚	8.6	6.8	10.3	ナシメ	ナデ・シボリ	にじ・黄褐色	3mm砂粒・芸母	2		
18 14 B-1	東側	崩上端	21.8		ナシメ		灰黄色	砂粒	2			
18 15 B-1	右	崩	14.2		ナシメ・指揮・ナデ	ナシメ・指揮	灰黄褐色	砂粒	2	又ス付有		
18 16 B-1	右	崩?			横ナド・タキ	横ナド・タキ	灰黄色	精良・既	4	樂器形		
18 17 B-1	右・左	上層	縦		椅子目タキ・ナデ	指揮	2mm砂粒・黑色	2	口縁部に椅子目 タキ・ナシメ			
18 18 B-1	右	崩	21.2		ナシメ	ナシメ	灰褐色	砂粒	2	2次火付有		
18 19 B-1	右	1層	20.0		椅子目タキ・ナシメ	ナシメ	灰褐色	2mm砂粒・黑色	2	摩滅		
18 20 B-1	左側	1層	20.6		椅子目タキ・ナシメ	ナシメ	灰黄色	2mm砂粒	2			
18 22 B-1	左側	上層	20.6		椅子目タキ・ナシメ	ナシメ・指揮・ナデ	灰黄色	2mm砂粒	2			
18 23 B-1	左	1層	20.0		椅子目タキ・ナシメ	ナシメ	灰黄色	2mm砂粒	2			
18 24 B-1	右	高环	17.3		ナシメ	ナシメ	にじ・褐色	2mm砂粒・黑色	2			
18 25 B-1	1層	縦	25.8		椅子目タキ・ナシメ	ナシメ	灰黄色	2mm砂粒	2			
18 26 B-2	1層	高环	33.2		ミガキ・ナシメ	ミガキ	褐色	3mm砂粒・赤色	2	○△		
18 27 B-1	右	1層	12.2		ナシメ	ナシメ	灰黄色	砂粒	2			
18 28 B-1	右下	1層	高环		摩滅・ナシメ	シボリ・ナシメ	にじ・褐色	1mm砂粒・赤色	2			
18 29 B-1	左	上層			弓形ナシメ・スリ・指揮	指揮・ナシメ・文化様あり	灰黄色	精良・既・黑色	4	樂器形		
19 30 B-1	右	1層	縦	45.4	ナシメ	ナシメ	褐色	砂粒	2	口縁部に軽刷毛 目・外底3・ナシメ		
19 31 B-1	左	1層			10.0	ナシメ・摩滅	ナシメ・摩滅	褐色	2mm褐色・砂粒	2		
19 32 B-1	右・左	1層	47.0	21.3	ナシメ・椅子目タキ	ナシメ	浅黃褐色	2mm砂粒	2			
19 33 B-1	右	1層	縦		椅子目タキ	ナシメ	灰黄色	2mm砂粒・黑色	2			
20 34 B-1	左	2層	縦	4.5	8.4	3.6	横ナド	ナデ	灰黄色	砂粒	2	
20 35 B-1	左	2層	縦	5.2	8.0	3.0	横ナド・ナデ	指揮・ナデ	灰黄褐色	砂粒	2	
20 36 B-1	左	2層	縦	5.9	7.2	3.0	ナシメ	ナシメ・指揮	灰黄色	砂粒	3	内面にスズ付有
20 37 B-1	右	3層	縦	5.8	9.2	3.6	横ナド	指揮	灰黄色	精良・既・砂粒	2	口縁部に燒成前 導孔
20 38 B-1	右	2層	縦	5.7	7.0	3.6	横ナド	ナシメ・指揮	灰黄色	砂粒	2	
20 39 B-1	左	2層	縦	32.3	横ナド・ミガキ	横ナド・ナシメ	にじ・黄褐色	精良・既・砂粒	3	○口縁部に輪文		
20 40 B-1	左	2層	縦	20.0	ナシメ	横ナド	褐色	1mm褐色・砂粒	2			
20 41 B-1	左	1・2層	縦	26.2	23.6	7.1	ミガキ	ナシメ	にじ・褐色	砂粒	2	
20 42 B-1	左	2層	縦	7.7	ナシメ・ハマメ	横ナド・指揮・ナシメ	灰黄色	砂粒	2			
20 43 B-1	左	2層	長筒狀	8.4	ミガキ・輪文	ナシメ・ナシメ	にじ・褐色	1mm赤色・黑色	2			
20 44 B-1	左	2層	長筒狀	19.8	横ナド・輪文	横ナド・ナシメ	にじ・褐色	精良・既・砂粒	2	○△		
20 45 B-1	左	2層	縦	15.6	ナシメ・ナシメ	ナシメ	灰黄色	砂粒	2			
20 46 B-1	右	2層	縦	22.8	横ナド・ナシメ	横ナド・ナシメ	にじ・黄褐色	砂粒	2			
20 47 B-1	左	2層	縦	30.0	ミガキ・輪文	ナシメ・指揮	にじ・黄褐色	精良・既・砂粒	2	○口縁部に燒成前 導孔		
20 48 B-1	右・左	2層	縦	22.9	摩滅・輪文	横ナド	灰黄褐色	精良・既・白色	2			
20 49 B-1	左	2層	縦	22.8	ミガキ	ナシメ・指揮	灰黄褐色	精良・既・砂粒	2			
20 50 B-1	右	3層	無柄	7.2	横ナド	ナシメ・ナシメ	灰黄色	精良・既・砂粒	2			
21 51 B-1	南壁	縦		41.6	横ナド・ナシメ	横ナド・ナシメ	砂粒 2mm赤色	2				
21 52 B-1	左	2層	縦	10.0	摩滅	摩滅	褐色	1mm褐色・砂粒	2			
21 53 B-1	左	2層	縦	6.9	13.2	4.2ナド	横ナド	精良・既・砂粒	2			
21 54 B-1	左	2層	縦	8.9	15.8	6.3横ナド・ハマメ	ナシメ	灰黄褐色	白色	2		
21 55 B-1	P 1	縦		9.5	19.8	6.2ナシメ・指揮	ナシメ・指揮	にじ・黄褐色	砂粒	2		
21 56 B-1	左	灰黑粘	縦	9.7	12.5	6.5ナシメ	ナシメ・指揮	にじ・黄褐色	砂粒	2		
21 57 B-1	右	2層	縦	10.9	19.2	7.0ナシメ	横ナド・ナシメ	灰黄色	白色	2		
21 58 B-1	右	1・2層	縦	9.8	21.6	7.0摩滅	ナシメ・摩滅	にじ・黄褐色	砂粒	2		
21 59 B-1	左	2層	縦	14.4	23.4	6.4ナシメ・摩滅	ミガキ?	灰黄色	精良・既・砂粒	2	○△	
21 60 B-1	左	2層	高环		25.0	摩滅	ミガキ	精良・既・砂粒	2			
21 61 B-1	左	2層	高环		26.6	摩滅	ミガキ	にじ・褐色	精良・既・砂粒	2		
21 62 B-1	左	2層	高环	27.0	31.4	21.0ミガキ	ミガキ・シボリ・ナシメ	にじ・褐色	精良・既・砂粒	2	○口縁部は未剥	
21 63 B-1	右	2層	沿台	13.4	10.2	ナシメ	ナシメ・シボリ・ナシメ	褐色	白色	2		
21 64 B-1	左	2層	沿台	11.2	6.6	5.8指揮・ナシメ	指揮・ナシメ	にじ・褐色	1mm褐色・砂粒	2		
22 65 B-2	左下	黑粘	深溝			茶瓶	茶瓶・ナシメ	褐色	4mm砂粒	3		
22 66 B-2	右下	黑粘	手握	5.1	8.0	指揮	指揮	褐色	2mm砂粒・雲母	2		
22 67 B-2	右下	黑粘	手握	3.2	5.2	指揮	指揮	褐色	2mm砂粒・雲母	2		
22 68 B-2	右下	1層	縦		22.4	ナシメ・ナシメ	ナシメ・ナシメ	褐色	2mm砂粒・赤色	2		
22 69 B-2	右下	下脚粘	縦		17.6	7.7ミガキ	ナシメ・ヨコナデ	明青色	2mm砂粒・企畫面	2	○△	
22 70 B-2	右下	下脚粘	縦	137.7	30.7	8.9ヨコナデ・ナシメ	ヨコナデ・ナシメ	褐色	1mm砂粒・2mm砂	2		

*「調整」は主たる調整を示す。「焼成」は最も良いものを1とし、以下2~5のランクとした。「赤彩」はほぼ全面に施したものを○、部分的なものを△、不明瞭なものを持ったことを○、不明瞭なものを持ったことを△とした。

回	No.	出土地点						調査		色調	胎土	赤彩 或 内面	備考		
		区	土層部	位置	層位	器形	器高	口径	底様	外面	内面				
22	71	B-I			2層	鉢	38.6		ナメ・ミガキ	ミガキ	明赤褐色	3mm砂粒・雲母	2	△	
22	72	B-I			2層	鉢	6.5	9.4	3.7ナメ	ナメ・指揮	にぶい褐色	5mm砂粒・雲母	2		
22	73	B-I			2層	鉢	8.4	10.6	5.2ナメ	ナメ・指揮	灰褐色	1mm砂粒・雲母・黒色	2		
22	74	B-I			2層	高杯		11.8	ハケメ・ミガキ	ハケメ	にぶい褐色	5mm砂粒・赤褐色・雲母	2	△	
22	75	B-I			2層	高杯			ミガキ	ナメ・ヨコナデ	にぶい・黄褐色	3mm砂粒・赤褐色・雲母	2		
22	76	B-I			2層	鉢	6.0	11.6	5.0ナメ	ナメ・指揮	にぶい褐色	2mm砂粒・全雲母	2		
22	77	B-I	左下	下部	鉢	1.8	10.0	1.4	ミガキ	ナメ	にぶい赤褐色	1mm砂粒・全雲母	2	○	
22	78	B-I	左下斜	1層	鉢	2.2	15.6	1.3	ミガキ	ナメ	赤色	3mm砂粒・赤褐色・雲母	2	○	
22	79	B-I	右下	下部	盃	7.9	24.8	6.0	ハケメ・ヨコナデ	ナメ・ヨコナデ	にぶい褐色	2mm砂粒・雲母	2		
22	80	B-I	ペルト		高杯			14.8	ミガキ	ナメ	にぶい褐色	1mm砂粒・全雲母	2		
22	81	B-I			2層	盃			ハケメ	ナメ	にぶい赤褐色	3mm砂粒・赤褐色	2		
22	82	B-I			2層	高台	17.3	10.3	13.6ナメ	ハケメ・ナメ	にぶい・黄褐色	3mm砂粒・雲母	2		
23	83	B-I	左下斜	1層	鉢	14.7	16.4	6.8	ハケメ	ナメ・指揮	にぶい褐色	3mm砂粒	2		
23	84	B-I	左斜	2層	甕	34.6			ハケメ	礫ナメ・ハケメ	にぶい・黄褐色	砂粒	2		
23	85	B-I	左下斜	1層	鉢	17.5	16.5	8.5	ミガキ	ナメ	赤色	3mm砂粒・雲母	2	○	
23	86	B-I			鋸下斜	深鉢			8.7學園	ナメ	赤色	3mm砂粒・白色砂	3		
23	87	B-I			鋸下斜	深鉢			8.6鉢	ナメ	褐色	3mm砂粒	2		
26	88	B-2	IIA		中	10.4			ハケメ	ナメ・指揮	にぶい褐色	1mm白色砂・雲母	3		
26	89	B-2	IIA		甕	14.0			ハケメ	礫ナメ・ナデ	にぶい・黄褐色	砂粒	2		
26	90	B-2	IIA		甕	17.5	16.4	7.8	ハケメ・ハケメ	礫ナメ・ナデ	黄至褐色	1mm砂粒・5mm砂粒	2		
26	91	B-2	IIA		甕	19.0			ハケメ	ナメ・板ナメ	にぶい・褐色	砂粒	2		
26	92	B-2	IIA		甕	13.8			ハケメ	ナメ・ハケメ	板ナメ・ナデ	2mm砂粒・白褐色	2		
26	93	B-2	IIA		甕	24.3	24.6	8.0	ハケメ	ハケメ・ナメ・板ナメ	板ナメ・白褐色	3mm砂粒	3		
26	94	B-2	IIA		甕	26.4	19.5	7.7	ハケメ	礫ナメ・ナデ	葉緑化・褐色	3mm砂粒・赤褐色	2		
26	95	B-2	IIA		甕	23.8			ハケメ	ナメ・ハケメ	ナデ・板ナメ	2mm砂粒・全雲母	2		
26	96	B-2	IIA		甕	24.0			ハケメ	ナメ・ハケメ	褐色	3mm砂粒・黒褐色・白色	2		
26	97	B-2	IIA		甕	23.0			ハケメ	ナメ	赤褐色	1mm砂粒	3		
26	98	B-2	IIA		甕	26.5	18.2	7.2	ハケメ	礫ナメ・板ナメ・指揮	灰黃色	砂粒	2	岩山櫻定	
26	99	B-2	IIA		甕	24.4			ハケメ	ナメ・ハケメ	板ナメ・指・ナメ・ナデ	黑褐色	4mm砂粒・白褐色	2	
27	100	B-2	IIA		甕	31.2	20.6	8.0	ハケメ・ナメ・ナデ	ハケメ・ナメ・指・ナメ	灰黃褐色	砂粒多くむか	2	外面上半部入火付	
27	101	B-2	IIA		甕	25.4			ナメ・ハケメ	ハケメ・指・ナメ・ナデ	にぶい・黄褐色	砂砂粒	2		
27	102	B-2	IIA		甕	28.4			指・指・板ナメ・ハケメ	ハケメ・摩滅	にぶい・黄褐色	砂粒	2		
27	103	B-2	IIA		甕	23.8			指・指・板ナメ・ハケメ	ナメ	褐色	砂粒	2	全曲ス	
27	104	B-2	IIA		甕			9.5學園(ハケメ)	ナメ	赤褐色	4mm砂粒・雲母	2			
28	105	B-2	IIA		甕	23.7			ハケメ	ハケメ・ナメ・ナデ	暗褐色	2mm砂粒・白褐色・全雲母	内面にズヌ		
28	106	B-2	IIA		甕	23.2			ハケメ	ナメ・ナデ	暗褐色	2mm砂粒・雲母	2		
28	107	B-2	IIA		甕	23.3			ナメ	ナメ	赤褐色	2mm砂粒	2		
28	108	B-2	IIA		甕	20.6			ナメ・ハケメ	礫ナメ・ナデ	明茶褐色	3mm砂粒・白褐色・雲母	2		
28	109	B-2	IIA		甕	24.2			ナメ・ハケメ	ハケメ・指・ナメ・ナデ	黒褐色	砂粒	2		
28	110	B-2	IIA		甕	22.4			ナメ	ナメ	1mm砂粒・黒褐色・雲母	3			
28	111	B-2	IIA		甕	21.4			ナメ・ハケメ	ハケメ・指・ナメ・ナデ	浅黄色	砂粒	2		
28	112	B-2	IIA		甕	22.4			ナメ	ナメ・ナデ	赤褐色	2mm砂粒・黒褐色・白褐色	2		
28	113	B-2	IIA		甕			7.6学園(ハケメ)	板ナメ	板ナメ	赤褐色	2mm砂粒	2	内底部ハケメ	
28	114	B-2	IIA		甕				ハケメ	板ナメ	板ナメ	砂粒	2		
28	115	B-2	IIA		甕			6.3ナメナデ	板ナメ・ハケメ	淡赤褐色	薄紅色・赤褐色・全雲母	2			
28	116	B-2	IIA		甕			8.0ナメ	板ナメ	板ナメ	赤褐色	2mm砂粒・白褐色・雲母	2		
28	117	B-2	IIA		甕			7.6ナメ	ナメ・ナメ	ナメ・指・ナメ	暗褐色	5mm砂粒	2		
29	118	B-2	IIA	由		27.3	16.0	8.0	ハケメ・ナメ	指・指・ナメ	灰灰褐色	1mm砂粒・白色砂	3		
29	119	B-2	IIA	由		15.7			ナメ・ナメナデ	礫ナメ・ナメ	赤褐色	1mm白色砂・砂粒	2		
29	120	B-2	IIA	瓦礫堆		11.7	11.0	6.4	ハケメ	ハケメ・板ナメ	明茶褐色	3mm砂粒・白褐色・赤褐色・全雲母	2		
29	121	B-2	IIA	瓦礫堆		11.0			ハケメ・ミガキ	ハケメ・ガリ	赤褐色	2mm砂粒・鐵青色	2	○	
29	122	B-2	IIA	由		17.4			ハケメ	礫ナメ・指・指・ハケメ	赤褐色	2mm砂粒・雲母	2	内面に解離部分の有	
29	123	B-2	IIA	由		48.5	30.4	10.4	ナメ	ハケメ・ナメ・板ナメ	明茶褐色・暗褐色	2mm砂粒・白褐色・雲母	3		
30	124	B-2	IIA	甕		6.1	11.0	4.5	ハケメ・ナメ	指・指・ナメ	灰黃褐色	砂砂粒	2		
30	125	B-2	IIA	甕		6.8	11.8	3.1ナメ	ナメ	指・指・ナメ	1mm白色・赤褐色・全雲母	2			
30	126	B-2	IIA	甕		10.0	21.8	7.8	ハケメ(摩滅)	ナメ	灰赤褐色	1mm砂粒・全雲母	2		
30	127	B-2	IIA	甕		9.8	22.2	6.2ナメ	板ナメ	板ナメ・指・指	赤褐色	1mm砂粒・全雲母	2		
30	128	B-2	IIA	甕		13.3	16.7	6.4ナメ	ナメ	ナメ・ナデ	2mm砂粒・白褐色	3			
30	129	B-2	IIA	甕		21.6			ハケメ	ハケメ	指	4mm赤色・白褐色・油	2		
30	130	B-2	IIA	甕		11.6	24.2	6.0摩滅	摩滅		にぶい・黄褐色	砂粒	2		
30	131	B-2	IIA	甕		8.0	27.5	6.1ナメ	ナメ		にぶい・黄褐色	砂粒・全雲母	2	口縁内面黒い帯	
30	132	B-2	IIA	高杯		28.6			ミガキ・ハケメ	ミガキ	法蘭色	2mm砂粒・全雲母	2	△△	
30	133	B-2	IIA	甕?		26.0			ハケメ・ミガキ	ハケメ・ミガキ	黑褐色	3mm砂粒・全雲母	2		
30	134	B-2	IIA	甕台		11.2	10.0	12.0	12.0ナメ	ハケメ・指・指	赤茶褐色	1mm砂粒・全雲母	2		
30	135	B-2	IIA	甕台		10.3			ナメ・ナメナデ	ナメ・ナメボリ	暗褐色	2mm砂粒・全雲母	2		
30	136	B-2	IIA	甕台				15.1	ナメ	指・指・灰江継あり	赤褐色	3mm砂粒・全雲母	2		
30	136	B-2	IIA	甕台	右下	1層	甕台		10.2ナメ	指	暗茶褐色	茶色砂	2		

回	No.	出土地点			調査				地土	地 成 性 内 面	備考			
		区	土器部	位置	層位	器形	器高	口径	底径	外観	内面			
30	137	B-2	11A	路	台			11.6	8.9	指揮+上部のみケズリ	赤褐色	4mm砂粒+赤色	2	
30	138	B-2	11A	路	台	17.5	19.8	14.1	9.7	ハケ+メサボリ	褐色	4mm砂粒	2	
30	139	B-2	11A	高环				17.0	9.7	シボリ+ナデ	に赤い黒褐色	5mm砂粒+黑色	3	
31	140	B-2	11B	裏		23.2				指揮+ナデ+ケズリ	5mm砂粒+黑色	2		
31	141	B-2	11B	路	9.2					ナデ	褐色	褐色砂粒+雪白	2	
31	142	B-2	11B	路	10.8	11.5	5.7	5.7	指揮+ナデ	灰褐色	4mm砂粒+赤褐色	2		
31	143	B-2	11B	裏	19.5					指揮+ナデ+ハケ他	に赤い黄褐色	4mm砂粒+赤褐色	2	
31	144	B-2	11B	裏	16.6					ハケ+ナデ	深褐色	4mm砂粒+暗褐色	2	
31	145	B-2	11C	裏	18.4	11.7	7.7	7.7	指揮+ナデ	ナデ	4mm砂粒+黄褐色	2		
31	146	B-2	11B	裏	44.0					指揮+ナデ	に赤い黒褐色	4mm砂粒+暗褐色	2	
31	147	B-2	11BC	路	13.6					指揮+ナデ	灰褐色	4mm砂粒+深褐色	2	
31	148	B-2	11B	路	17.5	22.2	8.0	8.0	指揮+ナデ	ハケ+メサボリ+板ナデ	に赤い黒褐色	4mm砂粒+赤褐色	2	
31	149	B-2	11B	路	18.0	18.6	7.0	7.0	指揮+ナデ+ハケ他	ハケ+メサボリ+板ナデ	に赤い黒褐色	4mm砂粒	2 ? ?	
31	150	B-2?	11BC	路?	6.5	5.2				指揮+板ナデ	に赤い黄褐色	4mm砂粒+鐵褐色	2	
31	151	B-2	11	裏		9.5	9.5			指揮	摩滅	白色砂+露母等	2	
31	152	B-2	11B	路		25.2				ハケ	ハケ+ナデ	明黄色	3mm砂粒+露母	2
31	153	B-2	11	路		11.3				ミガキ	シボリ+ナデ+指揮	灰褐色	4mm砂粒	2
31	154	B-2	11B	路		6.5	5.2			指揮	指揮	精良	2	
32	155	B-2	11	路		3.8	3.8	2.8	2.8	ハケ+メナ+ナデ	ナデ	赤みを帯びた 黄褐色	3mm白色砂等	2
32	156	B-2	11B	路	8.1	11.6	5.0	5.0	ナデ+ナデ+ナデ	指揮+ナデ+ナデ	白っぽい	4mm砂粒+3mm赤色	2	
32	157	B-2		下層	路	4.1	9.0	2.6	2.6	指揮+ナデ	ナデ	に赤い黒褐色	4mm砂粒+深褐色	2
32	158	B-2	11B	路	11.0	15.0	7.0	7.0	ハケ	ハケ+ナデ+ナデ	に赤い黒褐色	4mm砂粒+露母	2	
32	159	B-2	11B	路	10.6	16.6	7.0	7.0	指揮+板+板ナデ	指揮+ナデ	に赤い黄褐色	4mm砂粒+露母	2	
32	160	B-2	11B	路	6.6	10.8	4.1	4.1	指揮+ナデ	指揮+ナデ	に赤い黒褐色	4mm砂粒+鐵褐色	2	
32	161	B-2	11B	路	2.1	16.2	1.2	1.2	指揮+ナデ	ナデ	浅黄色	4mm砂粒+2mm褐色	2	
32	162	B-2	11B	路	11.3	9.4	10.8	10.8	指揮+ナデ	指揮+ナデ	相続	4mm砂粒	2	
32	163	B-2	11B	高环	21.4	30.1	15.1	15.1	ハケ+メナ+ミカニ	ハケ+ミカニ+ミカニ	に赤い黒褐色	4mm砂粒+鐵褐色	2	
32	164	B-2	11C/13	裏	29.6	24.6	8.0	8.0	ナデ+ナデ+ハケ他	指揮+ナデ	褐色	4mm砂粒	2	
33	165	B-2	11	裏		9.4	9.4			指揮+ナデ	指揮+ナデ	明褐色+褐褐色	3mm砂粒+露母等	2
33	166	B-2	11C	裏		27.8				指揮+ナデ+ハケメ	ナデ	に赤い黒褐色	4mm砂粒	2
33	167	B-2	11C	路		20.8				ミガキ	ナデ	に赤い黒褐色	4mm砂粒	2
33	168	B-2	11C	裏		18.0				ミガキ	ナデ	灰褐色	4mm砂粒	2
33	169	B-2	11C	路		25.6	10.0	7.7	7.7	ハケ+ナデ+ナデ	指揮+ナデ	灰褐色	4mm砂粒	2
33	170	B-2	11C	路		16.6				ハケ	板ナデ	灰褐色	4mm砂粒	2
33	171	B-2	11C	路		15.6	18.8	7.6	7.6	ハケ+メナ+ナデ	ナデ	に赤い黒褐色	3mm砂粒+露母等	2
33	172	B-2	11C	路		15.3	23.4	7.5	7.5	ナデ	ナデ(工具跡が判明 せん)	相続	4mm砂粒	2
33	173	B-2	11C	路		2.9	9.8	2.1	2.1	指揮+板+ナデ	指揮+板+ナデ	に赤い黒褐色	4mm砂粒	1
33	174	B-2	11C	路		5.7	7.5	3.6	3.6	ハケ	ナデ	灰褐色	4mm砂粒	2
33	175	B-2	11C	高环		8.0	8.0	2.0	2.0	ミガキ	シボリ+ナデ	灰褐色	4mm砂粒+相続	2
33	176	B-2	11C	裏		27.6				指揮+ナデ+ハケメ	指揮+ナデ+指揮	灰褐色	4mm砂粒	2
34	177	B-1	12	路	約60	31.5	10.0	10.0	コナデ+ナデ	コナデ+ナデ	相続	2mm砂粒+赤色	2	
34	178	B-1	12	路		9.4	16.8	6.9	6.9	ミガキ	ミガキ	相続	4mm砂粒	2
34	179	B-1	13	路		15.6	20.0	15.6	15.6	ミガキ	ミガキ	に赤い黒褐色	4mm砂粒+露母等	2
34	180	B-1	13	裏		25.6				コナデ+ハケメ	コナデ+ナデ	に赤い褐色	2mm砂粒+赤色	2
34	181	B-1	13	裏		7.5	7.5	2.5	2.5	ミガキ	ナデ	相続	1mm砂粒+露母等	2
34	182	B-1	13	高环		26.6				ミガキ	ミガキ	相続	微細砂粒+赤色	2
34	183	B-1	13	路		16.9	8.9	13.9	13.9	ハケ+ナデ	ナデ	相続	4mm砂粒	2
34	184	B-1	13	路		16.3	8.8	12.8	12.8	ナデ+ナデ	ナデ	に赤い黒褐色	4mm砂粒+露母等	2
36	185	C-2	内(?)	路	約25	24.4	7.8	7.8	コナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	に赤い褐色	2mm砂粒+赤色	2	
36	186	C-2	内(?)	裏		33.6	32.0	8.9	8.9	コナデ+ナデ	ナデ	に赤い褐色	1mm砂粒	2
36	187	C-2	内(?)	路		31.6	26.5	8.0	8.0	ナデ	ナデ	に赤い褐色	3mm砂粒+露母等	2
36	188	C-2	内(?)	裏		34.6	26.6	10.6	10.6	コナデ+ハケメ	ナデ	に赤い黒褐色	2mm砂粒+赤色	2
36	189	C-2	内(?)	路		29.6				コナデ+ハケメ	コナデ+ナデ	黄褐色	2mm砂粒+赤色	2
36	190	C-2	内(?)	裏		26.8				コナデ+ナデ	コナデ+ナデ	に赤い褐色	2mm砂粒+赤色	2
37	191	C-2	内(?)	裏		16.8	14.7	6.0	6.0	ナデ+ナデ	ナデ+ナデ	に赤い黒褐色	2mm砂粒+赤色	2
37	192	C-2	内(?)	路		26.0				コナデ+ナデ	ナデ	相続	1mm砂粒+露母等	2
37	193	C-2	内(?)	路		21.4				コナデ+ナデ	コナデ+ナデ	灰褐色	1mm砂粒+露母等	2
37	194	C-2	内(?)	裏		7.8				ナデ	ナデ	に赤い褐色	2mm砂粒+露母等	2
37	195	C-2	内(?)	裏		7.9	7.9	2.5	2.5	ナデ	ナデ	に赤い黒褐色	2mm砂粒+赤色	2
37	196	C-2	内(?)	路		41.0	21.2	9.0	9.0	コナデ+ナデ	ミガキ+ナデ	に赤い褐色	1mm砂粒+露母等	2
37	197	C-2	内(?)	路						コナデ+ナデ	ミガキ	に赤い褐色	2mm砂粒+黒褐色	2
37	198	C-2	内(?)	路		15.9	15.3	6.0	6.0	ナデ	ナデ	相続	1mm砂粒+全雲母	2
37	199	C-2	内(?)	路		6.1	7.8	2.8	2.8	ナデ+ナデ	ナデ+ナデ	相続	1mm砂粒+全雲母	2
37	200	C-2	内(?)	路		9.1	15.4	6.2	6.2	ナデ	ナデ	に赤い褐色	1mm砂粒+全雲母	2
37	201	C-2	内(?)	路		9.4	25.0	6.0	6.0	ミガキ	ミガキ	相続	1mm砂粒+全雲母	2

図	No.	出土地点						調査		色調	胎土	赤彩 或 或 内面	備考		
		区	土層相	位置	層位	器形	高さ	口径	底様	外面	内面				
37	202	C-2	西ガト	跡	跡	7.5	15.6	6.0	ミガ牛	ミガ牛	灰黄褐色	1mm砂粒 蝶形	2	○○	
37	203	C-2	西ガト	高坪	Z3.3	21.3	15.6	ミガ牛	ミガ牛+ナデ	にぶい褐色	1mm砂粒 油砂粒	2	○○		
38	204	C-2	P1	裏	跡	26.2	ハケメ+粘子目タキ+ハケメ	ハケメ	にぶい褐色	2mm砂粒 油色砂	2				
38	205	C-2	P1	裏	跡	30.4	粘子目タキ+ハケメ	ハケメ	褐色	2mm砂粒 黑色砂	2				
38	206	C-2	P2	端台	20.5	15.7	17.2	粘子目タキ+ハケメ	ハケメ+粘子ナデ	褐色	2mm砂粒 黑色砂 金雲母	2			
38	207	C-2	P1	端台	17.2	粘子目タキ牛	ナデ			明赤褐色	2mm砂粒 油色砂 金雲母	2			
38	208	C-1	右	2層	端台	16.0	15.0	14.0	ミガ牛	ミガ牛	褐色	4mm砂粒 油色砂	2		
38	209	C-2	P1	曲	跡	62.4	ハケメ+ナデ	ハケメ	褐色	4mm砂粒 油色砂	2				
38	210	C-1	小坪跡	跡	6.0	10.7	4.5	ナデ	ハケメ+ナデ	褐色	砂粒	3			
39	211	C-1	1層	裏	17.8	ヨコナデ+ハケメ	ヨコナデ+ナデ			灰黄褐色	2mm砂粒	2			
39	212	C-1	左	1層	裏	116.2	モナデ+ハケメ	モナデ+ナデ		灰黄色	微細砂粒	2		上半付着	
39	213	C-1	右	1層・ 3層	裏	15.6	モナデ+ハケメ	モナデ+ケズリ		灰黄褐色	砂粒	2		保有者、浜田文・ 半井洋蔵	
39	214	C-1	左	1層	裏	24.4	モナデ面+ハケメ	ハケメ	にぶい褐色	1mm赤色砂・砂粒	2				
39	215	C-1	左	1層	裏	16.2	モナデ+ハケメ	モナデ+ケズリ		褐色	2mm褐色砂・砂粒	2			
39	216	C-1	1層	裏	20.0	ハケメ	ハケメ	にぶい褐色	2mm砂粒	3		全面にスス付着			
39	217	C-1	右・ 左上	1層	裏	17.7	モナデ+ハケメ	モナデ+ケズリ		浅黄褐色	2mm赤色砂・砂粒	2		口押部に凹陥	
39	218	C-1	右	1層	黒	18.8	モナデ+ハケメ	モナデ+ケズリ	にぶい褐色	1mm赤色砂・砂粒	2		全面スス付着		
39	219	C-1	北東	1層	裏	15.6	モナデ+ハケメ	ケズリ	褐色	精良、無色白色砂	2		朱松文書有り		
39	220	C-1	右	上層	曲	16.2	モナデ+ハケメ	モナデ+ヘラケズリ・ ナデ	にぶい褐色	3mm砂粒・金雲母	2		計量系		
39	221	C-1	左	1層	底底部	4.0	ナデ	ハラマテ	灰白色	精良、微細砂粒	3		成城木の實文様		
39	222	C-1	右	1層	農	32.7	19.6	モナデ+ハケメ	モナデ+ケズリ	黑褐色	精良	2		全面スス付着	
40	223	C-1	一括	1層	曲	27.2	モナデ+ハケメ	モナデ	灰黄褐色	砂粒・金雲母	2		口押部に刻印		
40	224	C-1	右	1層	曲	10.6	ヨコナデ	ヨコナデ+ケズリ	灰黃褐色	2mm砂粒・黒色 砂粒	2		計量系		
40	225	C-1	左	1層	農	13.0	ハケメ	モナデ+ハケメ	にぶい褐色	3mm白色砂・赤色 砂粒	2		動物の爪跡?有 り・脚上部に 埋?		
40	226	C-1	右	3層側	曲	15.6	ヨコナデ+ハケメ	ヨコナデ+ナデ	精良、無色白色砂	2mm砂粒・金雲母	2				
40	227	C-1	左・左	1層	曲	20.7	板ナデ+ハケメ	板ナデ	にぶい褐色	3mm白色砂・赤色 砂粒	2				
40	228	C-1	右	1層	曲	36.6	モナデ+ハケメ	モナデ+ハケメ	にぶい黄褐色	1mm赤色砂・砂粒	2				
40	229	C-1	南壁	曲	31.4	ハケメ+モナデ+ナデ	ナデ+モナデ	にぶい黄褐色	3mm砂粒	2					
41	230	C-1	左	1層	手探	3.6	6.0	曲押+ナデ	曲押+ナデ	灰黄褐色	砂粒	2			
41	231	C-1	右	1層	手探	5.0	7.0	6.0	曲押+ナデ	曲押+ナデ	灰黄褐色	砂粒・金雲母	2		
41	232	C-1	右	1層	手探	5.0	8.8	1.6曲押+ナデ	曲押+ナデ	にぶい褐色	2mm白色砂	2			
41	233	C-1	左	1層	跡	4.8	13.0	曲押+ナデ	曲押+ナデ	灰黄褐色	砂粒	2			
41	234	C-1	左	1層	行付跡	7.4	9.5	5.2ナデ	ナデ	灰黄褐色	砂粒	3			
41	235	C-1	右	1層	跡	10.9	24.8	6.5ナデ+モナデトナリ	モナデ+モナデトナリ	にぶい黄褐色	砂粒	2	??		
41	236	C-1	右	1層	跡	10.8	16.0	ハケメ+モナデ	モナデ+ナデ	灰白色	4mm砂粒・無色 砂粒	2			
41	237	C-1	右	1層	跡	7.6	14.0	ナデ+ケズリ	ナデ	灰黄褐色	2mm砂粒・赤色砂	2			
41	238	C-1	右	1層	跡	115.1	32.8	上:ハケメ下:板ナデ	ハケメ	灰黄褐色	4mm砂粒	2			
41	239	C-1	2層	腐葉土	跡	8.2	15.5	モナデ+ナデ	モナデ+ナデ+曲押	にぶい褐色	砂粒	2			
41	240	C-1	左下	1層	高坪	29.0	摩麗+ハケメ	摩麗	褐色	3mm褐色砂・砂粒	2				
41	241	C-1	左	1層	高坪	17.2	ハケメ	シボリ+ハケメ	にぶい黄褐色	6mm砂粒	3				
41	242	C-1	左	1層	高坪	17.1	18.0万石	シボリ+ハケメ	褐色	精良、1mm赤色砂	3				
41	243	C-1	1層	高坪	15.6	15.6万石子目タキ+ハケメ	モナデ+ハケメ	にぶい黄褐色	2mm砂粒	2					
41	244	C-1	右	1層	端台	15.0	17.5	17.5万石子目タキ+ハケメ	モナデ+モナデ	褐色	4mm砂粒	2			
41	245	C-1	1層	端台	21.5	17.2	17.5万石子目タキ+ハケメ(?)	モナデ+モナデ	灰黄褐色	6mm砂粒	2				
41	246	C-2	左下	1層	跡	5.2	28.0	モナデ+頭+ハケメ	モナデ+頭+ハケメ	にぶい褐色	2mm砂粒・赤色砂 砂粒	2		到日あり	
41	247	C-2	下中	1層	跡	18.0	粘子目タキ	ハケメ	褐色	1mm砂粒・金雲母	2				
41	248	C-2	下中	1層	跡	9.3	20.0	ハケメ	ハケメ	灰黄褐色	1mm砂粒・金雲母	2			
41	249	C-2	下中	1層	跡	12.5	12.4	ミガ牛	モナデ+ハケメ	にぶい黄褐色	精良、砂粒・碧青 砂粒	2			
41	250	C-2	下中	1層	高坪	18.2	ミガ牛	ミガ牛	にぶい黄褐色	1mm砂粒・金雲母	2				
41	251	C-2	右上	1層	跡	4.2	ナデ	ナデ	にぶい褐色	2mm砂粒・碧青 砂粒	2		外壁面のみ		
42	252	C-1	右	2層	曲	12.5	ヨコナデ+ハケメ	ヨコナデ+板ナデ	にぶい褐色	3mm砂粒	3				
42	253	C-1	左	1層	底底部	8.0	ナデ	曲押+ナデ	曲押+ナデ	にぶい黄褐色	2mm砂粒・無色 砂粒	2		壁面・底底部?・ 寸付着	
42	254	C-1	右上	2層	黒	23.2	モナデ+ハケメ	モナデ+ナデ	にぶい褐色	1mm赤色砂・砂粒	2		スス付着		
42	255	C-1	右	腐葉土	小空曲	8.2	ナデ	ナデ+曲押	ナデ+曲押	灰黄褐色	1mm砂粒・碧青 砂粒	2			
42	256	C-1	右上	2層	曲	17.7	ナデ+モナデ	モナデ+モナデ	にぶい褐色	3mm砂粒・碧青 砂粒	2		口押部に刻印		
42	257	C-1	右	3層側	黒	20.7	ハケメ	ハケメ+ナデ	暗灰褐色	和砂粒	2				
42	258	C-1	右	3層側	黒	10.2	6.8	22.6ナデ	ナデ+ナデ	にぶい褐色	6mm砂粒	2			
42	259	C-1	右	3層側	跡	6.2	13.6	ナデ	ナデ	灰黄褐色	精良、砂粒	2			
42	260	C-1	南壁	1層	跡	5.2	28.0	モナデ+頭+ハケメ	モナデ+頭+ハケメ	灰黄褐色	砂粒	2			
42	261	C-2	右	2層	跡	6.6	14.8	4.5ミガ牛	ミガ牛	明赤褐色	1mm砂粒・碧青 砂粒	2	△△		
42	262	C-2	右	2層	跡	7.6	9.6	7.0曲押+ナデ	ナデ+曲押	灰黄褐色	2mm砂粒・碧青 砂粒	2			
43	263	C-2	右	2層	跡	6.1	10.4	4.2ミガ牛	ミガ牛	明赤褐色	精良、砂粒・碧青 砂粒	2	△△		
43	264	C-2	右	上2層	高坪	19.8	20.4	13.8ミガ牛	ミガ牛+ナデ	褐色	明赤褐色	精良、砂粒・碧青 砂粒	2	△△	
43	265	C-2	右上2層	高坪	19.8	20.4	13.8ミガ牛	モナデ+ナデ	褐色	1mm砂粒・赤色砂	2	○○			
43	266	C-1	左	1層	黒	22.8	粘子目タキ+ハケメ	ハケメ	灰黄褐色	2mm砂粒	2		保有者		
43	267	C-1	左	1層	行付跡	約5.5	10.4	ナデ	体+板ナデ+ 頭+ハケメ	灰黄褐色	精良、砂粒	2			

回 回	No.	出土地点			調査				地土	燒 成 度 外 部 内 部	備考			
		区 区	土器部	位置	層位	器形	器高	口径	底径	外面	内面			
43	268	C-1		赤		横ナデ・ハケメ	30.0			灰黄色	1mm赤色+砂粒	3	鍋面部に削り	
43	269	C-1	南壁 一級	赤		横ナデ・ハケメ	27.6			に赤い褐色	陶器砂粒	2		
44	270	C-2	7	黒		横ナデ・ハケメ	26.8			に赤い褐色	砂粒	2	火炎付着	
44	271	C-2	7	7.7		横ナデ・ナデ	28.0			横ナデ・ナデ	陶器砂粒	2	火炎付着	
44	272	C-2	7	7の下	赤	摩減	31.0			摩減	砂粒を含む砂	2	○?	
44	273	C-2	7	赤		ハケメ				ハケメ	砂粒	3		
44	274	C-2	7	赤		三毛キ・輪辺	20.5			三毛キ・輪辺	砂粒	2	火炎付着	
44	275	C-2	7	長頸壺		横ナデ・シヨリ	13.6			横ナデ・シヨリ	砂粒	2	内部赤色(?)	
44	276	C-2	7	付持	16.5	20.0	14.5×14.5cm(一部落酒)	14.5×14.5cm(一部落酒)		灰黄色	陶器砂粒	2		
44	277	C-2	7	器台	18.3	10.2	13.8×14.5cm(指揮・ナデ)	ナデシヨリ		に赤い褐色	陶器砂粒	2		
44	278	C-2	7	器台			13.2×13.2cm	指揮		に赤い褐色	砂粒, 1mm白色	2		
44	279	B-2	7	鉢	7.5	16.5	4.5×4.5cm	ナデ		灰灰褐色	砂粒, 白色砂	3		
44	280	C-2	7	7の下	赤	ナデ	6.8			ナデ	褐色砂粒を含む砂	2		
45	281	C-2	7	赤		ハケメ	62.0			ハケメ	陶器砂粒を含む砂	2		
45	282	C-2	7	黒	約70	44.0	ハケメ・尖突・磨削	ハケメ		に赤い褐色	砂粒, 3mm褐色	2	周囲2枚に分かれれる	
45	283	C-2	7	黒		ナデ・工具	9.8×7.5cm			ナデ・工具	灰黄色	2		
45	284	C-2	7B	鉢		ナデ・ハケメ				ナデ・ハケメ	陶器砂粒	2		
45	285	C-2	7B	赤		ナデ・ハケメ				ナデ	に赤い褐色	砂粒, 陶器砂粒	2	底部近くに焼成堆存
45	286	C-2	7B	黒		ナデ	30.0			ナデ	砂粒	2		
45	287	C-2	7B	(同)		ナデ	15.6×15.6cm			ナデ	砂粒	2		
46	288	C-1	8A-C	大底	81.8	62.0	ハケメ	ヨコナデ・ハケメ		に赤い褐色	2mm砂粒	2	表面に格子目タッキ	
46	289	B-1	8-BB	大底	108.5	75.5	ハケメ	ヨコナデ・ハケメ		に赤い褐色	2mm砂粒	2	表面に格子目タッキ	
46	290	B-1	8A-C	大底	104.0	75.0	ハケメ・ヨコナデ	ハケメ		に赤い褐色	2mm砂粒	2	表面に格子目タッキ	
47	291	C-1	8	右	2層	赤	13.0			ハケメ・ナデ・ナデ目タッキ	ナデ・ナデ・指揮・ハケメ	2	側面半周の擦痕・調整	
47	292	C-1	8C	黒		ナデ				ナデ・底・タッキリナデ	ナデ・底・タッキリナデ	2		
47	293	C-1	8	高环	14.3	18.5	13.5×14.5cm	ハケメ		灰黄色	砂粒, 1mm赤色	不		
47	294	C-1	8	鉢	約10	26.6	摩減・ケズリ	ハケメ		褐色	砂粒, 1mm赤色	2		
47	295	C-1	8	赤		硝子目タッキ	ハケメ			に赤い褐色	砂粒, 黑色砂	2		
47	296	C-1	8A	溶行	16.8		ハケメ	ハケメ・ナデ		灰黄色	砂粒	2		
47	297	C-1	8A	溶行	20.2	16.0	19.2×19.2cm	ハケメ・ナデ		灰黄色	砂粒	2		
47	298	C-1	8	支脚	8.6	8.2	13.5×13.5cm	指揮・ナデ		灰黄色	砂粒	2		
47	299	C-1	8	支脚	11.3	7.8	11.2×10.8cm	指揮・ナデ		灰黄色	砂粒	2		
48	300	C-2	10	黒	45.3	36.0	10.3×10.3cm	ナデ・ハケメ		に赤い褐色	2mm砂粒, 黑色砂	3		
48	301	C-2	10	黒		ナデ				ナデ・ナデ	陶器砂粒	2	全面スクリュー	
48	302	C-2	10	黒		ナデ	55.6			ナデ・ナデ	陶器砂粒	3		
48	303	C-2	10	黒		ナデ	46.5			ナデ・モリ	2mm砂粒	2		
48	304	C-2	10	黒		ナデ	51.2			ナデ	2mm砂粒	2	(口部)削り	
48	305	C-2	10	黒		ナデ	26.6			ナデ・モリ・ナデ・摩減	1mm砂粒	2		
48	306	B-2	10	赤		ナデ	37.2			ナデ	陶器砂粒, 布地・褐色	2		
49	307	C-2	10	黒	24.4	20.5	7.0×7.0cm	ナデ・ハラマ		に赤い褐色	陶器砂粒	2		
49	308	C-1	10	黒		6.2×6.2cm	ナデ・ナデ			ナデ・指揮	1mm砂粒, 黑色	2	底部に焼成跡	
49	309	C-2	10	鉢	20.7	27.8	7.4×7.4cm	ナデ・ハケメ		褐色	陶器砂粒, 2mm褐色	2	?	
49	310	C-2	10	黒		8.4	ナデ・指揮	ナデ・指揮		に赤い褐色	2mm黑色砂・砂粒	3	底部に焼成跡	
49	311	C-2	10	鉢	22.2	29.6	10.2×10.2cm	摩減		灰黄色	砂粒	2		
49	312	C-2	10	黒	16.7	22.0	8.5×8.5cm	ナデ・指揮		に赤い褐色	砂粒	2		
49	313	C-2	10	黒	16.2	15.8	7.8×7.8cm	ナデ・指揮		に赤い褐色	1mm褐色砂・砂粒	2		
49	314	C-2	10	鉢	11.3	22.4	6.0×6.0cm	ナデ		灰黄色	砂粒	3		
49	315	C-2	10	無縫壺	12.2	14.4	3.6×3.6cm	ナデ・ハケメ		に赤い褐色	1mm褐色砂・砂粒	3		
49	316	C-2	10	無縫壺	9.9	8.8	4.7×4.7cm	ナデ・指揮		に赤い褐色	2mm白色砂	3		
49	317	C-1	10	鉢	9.5	9.6	11.2×11.2cm	横ナデ・ナデ		に赤い褐色	4mm白色砂	3		
49	318	C-2	10 F	黒		15.8	横ナデ・摩減	ミヨリ		横ナデ・摩減	1mm白色砂	2	○○	
49	319	C-2	10	鉢	5.9	15.5	2.0×2.0cm	横ナデ・底・クセリ		に赤い褐色	砂粒, 金合母	3		
49	320	C-1	10 B	鉢	8.0	21.4	3.0×3.0cm	横ナデ・底・クセリ		に赤い褐色	砂粒, 金合母	2		
49	321	C-2	10 F	鉢	7.6	16.2	5.7×5.7cm	ナデ・ハケメ		に赤い褐色	2mm砂粒, 黑色砂	3		
49	322	C-1	10	把手		6.2×6.2cm	ナデ・ハラマ			ナデ・ハラマ	1mm褐色砂	2	外底部に黒斑	
49	323	C-2	10	鉢	5.5	8.0	4.3×4.3cm	ナデ・指揮		ナデ・指揮	砂粒	3		
49	324	B-2	10 F	黒10下	5.1	3.0	7.0×7.0cm	ナデ		に赤い褐色	砂粒	2		
50	325	C-2	10	溶行	11.7	8.5	9.2×9.2cm	ナデ・指揮		シボリ・ハケメ	褐色	1mm白色・褐色	不	
50	326	B-2	10	溶行	10.0	8.8	10.0×10.0cm	ナデ・指揮		ナデ・指揮	砂粒	3		
50	327	C-2	10	支撑	10.0	6.0	10.5×10.5cm	ナデ・ハケメ		ナデ・ハケメ	砂粒	3		
50	328	C-2	10	眞形 土器	8.5		11.2×11.2cm	ナデ・ナデ		ナデ・ナデ	砂粒	2		
50	329	C-2	10	溶行			7.8	ヘラ?		ナデ・ナデ	砂粒	2		
50	330	C-2	10	溶行	17.1	8.6	12.2×12.2cm	ナデ・ナデ		ナデ・ナデ	砂粒	2		

図	No.	出土地点			器形	調査			色調	胎土	赤彩 或 外 面 色	備考	
		区	土器部	位置		層位	器高	口径	底径	外面	内面		
50	331	C-2	10		器台	17.4	10.1	12.2	9.6	鐵ナデ・ハケメ	鐵ナデ・ナデ	赤色 (赤)	2mm赤・1mm白 砂粒
50	332	B-2	10		器台	16.0	12.3	13.0	ナデ・鉢押	ナデ・鉢押	赤色	砂粒	2mm鉄・2mm白色 砂粒
50	333	C-2	10		器台	15.7	11.0	11.8	ナデ・鉢押	ナデ・鉢押・ナデ	赤色	1mm白色・1mm黑色 砂粒	2
50	334	C-2	10	器台	17.5	12.6	14.8	ナデ・鉢押	ナデ・鉢押	に赤い褐色	7mm砂粒	3	
50	335	B-2	10	器台	16.5	11.5	12.0	ナデ・鉢押	ナデ・鉢押・シホリハ ケメ	赤色	2mm褐色・1mm砂粒	4	
50	336	C-2	10	10下	蓋	9.4	6.3	2.9	ナデ	ナデ・鉢押	に赤い黃褐色	2mm褐色・砂粒	2
50	337	C-2	10	小底	3.6	2.5	1.8	ナデ・ナデ	ナデ	に赤い黃褐色	微細砂粒	2	
51	338	D-1	ボンブ	裏		36.0			ミガキ	ナデ	に赤い黃褐色	精良	3
51	339	D-1	ボンブ	裏		33.6			ハケメ	ナデ	褐色	砂粒	2
51	340	D-1	ボンブ	裏	約29	17.6		ナデ・ハケメ	ハケメ	灰黃褐色	1mm砂粒・微細砂	2	
51	341	D-1	ボンブ	裏		30.4			ハケメ	ナデ	褐色	砂粒・砂粒・2mm砂 粒	2
51	342	D-1	ボンブ	裏	24.6	19.3		ハケメ	ナデ	に赤い黃褐色	砂粒	2	
51	343	D-1	ボンブ	裏		23.8			ハケメ	ナデ	褐色	砂粒	2
51	344	D-1	ボンブ	底?	23.9	12.8		ハケメ	ハケメ・ナデ	浅黃褐色	3mm砂粒・2mm赤色 砂粒	2	
51	345	D-1	ボンブ	底?				ハケメ	ナデ	に赤い黃褐色	6mm全雲母	2	
51	346	D-1	ボンブ	裏		6.0	平行タキ		ハケメ	ナデ	相手	相手・1mm赤色砂 粒砂粒	2
52	347	D-1	ボンブ	裏	約36	23.0		ハケメ	ハケメ	褐色	砂粒・2mm白色 砂粒	2	
52	348	D-1	ボンブ	裏	約32	23.2		ハケメ	ナデ・鉢押	褐色	砂粒	2	
52	349	D-1	ボンブ	底	19.8			ナデ・ナデ・ハケメ	ナデ・ナデ・ハケメ	褐色	砂粒	2	
52	350	D-1	ボンブ	底	26.8			ナデ・ナデ・ハケメ	ナデ・ナデ・ハケメ	褐色	3mm砂粒	2	
52	351	D-1	ボンブ	裏	17.8			ナデ・ナデ・ハケメ	ナデ・ナデ・ハケメ	精良・微細砂粒赤 色砂粒	2		
52	352	D-1	ボンブ	底	26.5			ナデ・ナデ・ハケメ	ナデ・ナデ・ハケメ	に赤い黃褐色	4mm砂粒	2	
52	353	D-1	ボンブ	底				ハケメ・ナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ・ハケメ	に赤い黃褐色	6mm砂粒	2	
53	354	D-1	ボンブ	裏	13.9			ナデ・ナデ・ハケメ	ナデ・ナデ・ハケメ	に赤い黃褐色	1mm白色・1mm白 色砂粒	2	
53	355	D-1	ボンブ	裏	18.6			ナデ・ナデ・ハケメ	ナデ・ナデ・ハケメ	に赤い黃褐色	6mm白色・6mm白 色砂粒	2	
53	356	D-1	ボンブ	裏	14.1			ナデ・ナデ・ハケメ	ナデ・ナデ・ハケメ	に赤い黃褐色	精良・砂粒全雲母	2	
53	357	D-1	ボンブ	鉢	9.5	15.0		ナデ・ナデ・ハケメ	ナデ・ナデ・ハケメ	褐色	砂粒	2	
53	358	D-1	ボンブ	裏	18.0			ナデ・ナデ・ハケメ	ナデ・ナデ・ハケメ	浅黃褐色	6mm・1mm赤色砂 粒	2	
53	359	D-1	ボンブ	裏	19.3			ナデ・ナデ・ハケメ	ナデ・ナデ・ハケメ	浅黃褐色	6mm・1mm赤色砂 粒	2	
53	360	D-1	ボンブ	裏	19.4			ナデ・ナデ・ハケメ	ナデ・ナデ・ハケメ	に赤い黃褐色	精良・微細砂粒	2	
53	361	D-1	ボンブ	裏	約25	17.8		ナデ・ナデ・ハケメ	ナデ・ナデ・ハケメ	淡褐色	砂粒・2mm白色砂 粒	2	
53	362	D-1	ボンブ	裏	19.6			ナデ・ナデ・ハケメ	ナデ・ナデ・ハケメ	褐色	砂粒	2	
53	363	D-1	ボンブ	底				ハケメ	ナデ・ナデ・鉢押	灰黃褐色	6mm砂粒	2	
54	364	D-1	ボンブ	底	39.2			ハケメ	ナデ・ナデ・鉢押	灰白色	砂粒	2	
54	365	D-1	ボンブ	底	41.5	23.0		ハケメ・横ナデ	ハケメ・横ナデ	に赤い黃褐色	6mm白色砂粒	2	
54	366	D-1	ボンブ	底	29.0			ナデ・ナデ・ハケメ	ナデ・ナデ・ハケメ	褐色	砂粒	2	
54	367	D-1	ボンブ	底	31.8			ナデ・ナデ・ハケメ	ナデ・ナデ・ハケメ	に赤い黃褐色	砂粒	2	
54	368	D-1	ボンブ	底	40.0	21.0		ナデ・ナデ	ナデ・ナデ	褐色	砂粒	2mm白色砂・砂粒	
55	369	D-1	ボンブ	底	15.0			ナデ・板ナデ	ナデ・板ナデ	浅黃褐色	3mm砂粒	2	
55	370	D-1	ボンブ	底?	22.2			ナデ	ナデ・ナデ・ハケメ	褐色	5mm砂粒・1mm褐色 砂粒	2	
55	371	D-1	ボンブ	底?	18.0	16.0		ナデ・ナデ・ナデ	ナデ・ナデ・ナデ	に赤い黃褐色	砂粒	2	
56	375	D-1	ボンブ	鉢	18.1	19.1		ナデ・ナデ・ナデ・底面	ナデ・ナデ・ナデ・底面	赤褐色	砂粒・2mm白色砂 粒	2	
56	376	D-1	ボンブ	鉢	12.4	12.7		ナデ・ナデ・ハケメ	ナデ・ナデ・ハケメ	褐色	砂粒・砂粒	2	
56	377	D-1	ボンブ	小型器	9.5			ナデ・ナデ・ハケメ	ナデ・ナデ・ハケメ	に赤い黃褐色	精良・砂粒全雲母	2	
56	378	D-1	ボンブ	鉢	11.5	17.3	4.8	ナデ	ナデ	灰黃褐色	砂粒	2	
56	379	D-1	ボンブ	鉢	15.4			ナデ・ナデ・ハケメ	ナデ・ナデ・ハケメ	浅黃褐色	微細砂粒・赤色砂 粒	2	
56	380	D-1	ボンブ	鉢	4.5	14.0		ナデ・ナデ・ハケメ	ナデ・ナデ・ハケメ	褐色	2mm白色・微細砂 粒	2	
56	381	D-1	ボンブ	鉢	7.1	16.0		ナデ・ナデ・ケズリ	ナデ・ナデ・ケズリ	に赤い黃褐色	精良・1mm白色砂 粒	2	
56	382	D-1	ボンブ	鉢	0.5	18.2	7.5	ナデ	ナデ	に赤い黃褐色	1mm白色砂・砂粒	2	
56	383	D-1	ボンブ	鉢	8.5	16.0	5.0	ナデ・ナデ・ナデ	ナデ・ナデ	褐色	1mm白色砂・砂粒	2	
56	384	D-1	ボンブ	鉢	7.5	18.5		ナデ・鉢押	ナデ・鉢押	灰オーバー色	精良・微細全雲母	2	
56	385	D-1	ボンブ	鉢	19.6			ナデ	ナデ・ナデ	灰黃褐色	砂粒	2	
56	386	D-1	ボンブ	裏	18.0			ナデ・ナデ・ハケメ	ナデ・ナデ・ハケメ	に赤い黃褐色	砂粒	2	
56	387	D-1	ボンブ	鉢	6.7	19.0		板ナデ	ナデ	に赤い黃褐色	1mm白色砂・白砂 粒	2	
56	388	D-1	ボンブ	鉢	10.6	24.6		鉢押・板ナデ	鉢押・板ナデ	灰褐色	砂粒	2	
56	389	D-1	ボンブ	鉢	8.0	14.4		ナデ	ナデ	精良・微細全雲母	砂粒	2	
56	390	D-1	ボンブ	鉢	5.9	11.7		ナデ・鉢押	ナデ・鉢押	灰褐色	精良	2	
56	391	D-1	ボンブ	鉢	12.0	23.6		ナデ・ナデ・ハケメ	ナデ・ナデ・ハケメ	に赤い黃褐色	砂粒	2	
56	392	D-1	ボンブ	鉢				鉢押・ナデ	鉢押・ナデ	精良・圓錐白色砂	2		
56	393	D-1	ボンブ	鉢				鉢押・ナデ・ナデ・ハケメ	鉢押・ナデ・ナデ・ハケメ	灰褐色	精良	2	
57	394	D-1	ボンブ	高杯				ミガキ	ミガキ	灰褐色	砂粒	2	
57	395	D-1	ボンブ	高杯				ミガキ	ミガキ	2mm白色砂	砂粒	2	
57	396	D-1	ボンブ	高杯				ミガキ	ミガキ	に赤い黃褐色	砂粒	2	

回 数	No.	出土地点			調査				地土	被 成	赤 色 内 面	備 考		
		区	土器部	位置	層位	器形	器高	口径	底径	外觀	内面	色調		
57	396	D-1	ボンブ	高坪	15.4	23.8	13.0	横ナデ・ミガキ ハ・ハメ	环-横ナデ・ミガキ ハ・ハメ	にぶい・褐色	2mm褐色・赤色粒	2	环部内面に縦の 皱纹	
57	397	D-1	ボンブ	高坪	22.6			ナデ・ミガキ	ミガキ	灰黃褐色	稍目・微細砂粒	2	外面に黑色斑紋	
57	398	D-1	ボンブ	高坪	22.6			ミガキ・ナデ・昭文	ミガキ・ナデ・昭文	稍色	稍砂粒	2		
57	399	D-1	ボンブ	高坪	21.0									
57	400	D-1	ボンブ	高坪	13.9	19.6	10.7	ハ・ケメ・ミガキ ハ・カク	ハ・ケメ・横ナデ	灰褐色	砂粒	2	环部内面に縦の 皱纹	
57	402	D-1	ボンブ	高坪	14.1	20.6	11.4	ハ・ケメ	ハ・ケメ	明黃褐色	砂粒・角閃石・雲母	2		
57	403	D-1	ボンブ	高坪	14.7	22.9	13.2	ハ・ケメ・ヨ・コナデ	ハ・ケメ・横ナデ	灰黃褐色	砂粒・微細砂粒	2		
57	404	D-1	ボンブ	高坪	14.8	23.4	14.0	ナデ	ナデ	にぶい・褐色	稍目・微細砂粒	2		
57	405	D-1	ボンブ	高坪	12.5	21.2	12.45	摩滅・脚ナデ	环-摩滅・脚ナデ	にぶい・褐色	2mm褐色・赤色粒	2	环部内面に縦の 皱纹	
57	406	D-1	ボンブ	高坪	22.0			ヨ・ヨ・ガリ	ヨ・ヨ・ガリ	稍色	稍目・微細砂粒	2		
57	407	D-1	ボンブ	高坪	22.0			ミガキ	ミガキ	褐色	3mm白色・赤色粒	2		
58	408	D-1	ボンブ	(手探 所)	2.7	5.6		角押・ナデ	角押・ナデ	灰黃褐色	稍目・微細砂粒	2		
58	409	D-1	ボンブ	鉢	4.6	9.0		ナデ・指押	ナデ・指押	灰黃褐色	砂粒	2		
58	410	D-1	ボンブ	小切鉢	4.8	7.0	3.80	ハ・ケメ・指押・ナデ	ハ・ケメ・ナデ	灰黃褐色	砂粒	2		
58	411	D-1	ボンブ	鉢?			6.0	ハ・ケメ・指押	ナデ・指押	にぶい・褐色	砂粒	2		
58	412	D-1	ボンブ	鉢	10.5	28.0	3.3?	ナデ	ナデ	褐色	砂粒・赤色粒	2		
58	413	D-1	ボンブ	鉢	9.7	24.0	4.0?	ナデ	ナデ	褐色	砂粒・赤色粒	2		
58	414	D-1	ボンブ	鉢	2.8	13.8	2.8	ミガキ	ナデ	にぶい・褐色	稍目	2		
58	415	D-1	ボンブ	鉢	12.1	27.4	6.7?	ハ・ケメ・メナデ	ナデ	にぶい・褐色	砂粒	2		
58	416	D-1	ボンブ	支脚	9.2	5.0	10.0	ハ・ケメ	ハ・ケメ・シギリ	にぶい・褐色	砂粒	2		
58	417	D-1	ボンブ	支脚	10.6	8.0	15.0?	ナデ・指押	ナデ・指押	灰黃褐色	2mm褐色・赤色粒	2		
58	418	D-1	ボンブ	支脚	10.6	8.0	15.0?	ハ・ケメ・指押	ハ・ケメ	灰黃褐色	雲母	2		
58	419	D-1	ボンブ	器台	20.9	15.5	17.80	ハ・ケメ・平行タキ	ハ・ケメ・ナデ	にぶい・褐色	砂粒	2	脚部に繊維状の 断跡	
58	420	D-1	ボンブ	器台	16.0	14.1	13.80	ハ・ケメ・タタキ	ハ・ケメ・ナデ・指押	灰黃褐色	砂粒	2		
59	421	D-1		2層 下部	黒	22.6		ナデ	ナデ・指押	浅黃褐色	1mm砂粒	2	10個の小側突	
59	422	D-1		上層	黒	27.2		ハ・ケメ・ヨ・コナデ	横ナデ・ヘラケズリ	にぶい・黃褐色	稍目・微細砂粒	2	探付有	
59	423	D-1		右上 1-2層 右下	黒	30.3	20.0	横ナデ・ハ・ハメ	横ナデ・ハ・ハメ	浅黃褐色	2mm凹凸・赤色 砂粒	2	探付有	
59	424	D-1		右上 1-2層 左下	黒	20.4	26.4	横ナデ・ハ・ハメ	横ナデ・ケズリ	にぶい・黃褐色	砂粒・2mm褐色	2		
59	425	D-1		左下 2層	曲	12.4	7.0	ナデ・ナデ・ハ・ハメ	ナデ・指押	灰褐色	砂粒	2		
59	426	D-1		左下 1層	直曲鉢	9.6		ナデ・ミガキ	ナデ・指押・シボリ	灰褐色	砂粒	2		
59	427	D-1		右下 1-2層 左下	黒	17.2		ナデ・指押	ナデ・指押	にぶい・褐色	1mm砂粒・金雲母	2		
59	428	D-1		左下 2層	直曲	17.2		横ナデ	横ナデ	灰黃褐色	砂粒	2		
59	429	D-1		2層	曲			ミガキ・ナデ	ナデ・シギリ	褐色	2mm砂粒・赤色 砂粒	2		
59	430	D-1	P3+4 北壁 下-3層	黒	8.0			ハ・ケメ	ハ・ケメ	にぶい・黃褐色	3mm砂粒・1mm褐色 砂粒	2	側面突起・口沿 部に格子文	
60	431	D-1		2層 ミニ チア	(3.0)			ナデ	ナデ	灰褐色・黒褐色	2mm砂粒・金雲母	2		
60	432	D-1		上層	鉢	7.0	14.0	1.0?	ナデ・指押	ハ・ケメ・ナデ	灰黃褐色	1mm赤色・砂粒	2	
60	433	D-1		右下 1-2層	鉢	12.0		横ナデ・ナデ	ハ・ケメ・ナデ	灰黃褐色	砂粒	2		
60	434	D-1		右下 2層	鉢	16.0	19.0	ナデ・指押	ナデ・指押	にぶい・黃褐色	1mm赤色・砂粒	2		
60	435	D-1		2層	鉢	19.0		上部・ハ・ケメ・下部・ケ ズリ	ハ・ケメ	にぶい・褐色	纖細砂粒	2		
60	436	D-1		中層	鉢	7.2	13.8	3.2?・ハメ	ハ・ケメ	明黃褐色	纖細砂粒	2		
60	437	D-1		中層	鉢	9.1	20.0	7.0?・ハメ	横ナデ・ナデ	にぶい・褐色	砂粒	2		
60	438	D-1		2層 右上 下層	鉢	17.0		平行タキ・ハ・ケメ	ハ・ケメ	灰オリーブ色	3mm砂粒・纖細砂 粒	3	内面下部に黒い 円丸	
60	439	D-1		右下 1-2層	鉢	19.3	10.6	12.0?・摩滅	ナデ・シギリ	浅黃褐色	砂粒	2		
60	440	D-1		P-1	鉢	14.6		硝子目タキ・ハ・ケメ	ハ・ケメ・ナデ・指押	褐色	3mm砂粒・赤色 砂粒	2		
60	441	D-1		左下 2層	鉢	12.0		指押・ナデ	指押・ナデ	灰褐色	稍目・金雲母	2		
61	442	D-1		左上 1層	高坪	6.8		ミガキ	环-ミガキ・脚ナデ	灰褐色	稍目	2	△ 内面環部のみ 探付有	
61	443	D-1		北壁 1層	黒	27.5	17.8	ナデ	ナデ	にぶい・黃褐色	砂粒	2		
61	444	D-1		3層	黒			ミガキ・ナデ	ナデ・指押	灰褐色	砂粒	2		
61	445	D-1		3層	黒	24.2	9.3?	ナデ	ナデ	にぶい・褐色	纖細砂粒	3	背面は2枚	
61	446	D-1		右下	3層	14.3		横ナデ・ナデ	ナデ	にぶい・黃褐色	砂粒	2		
61	447	D-1		右下	3層	鉢	0.0	17.0	6.0?	ナデ・指押	にぶい・黃褐色	稍目・砂粒	2	
61	448	D-1		左上 3層	鉢	6.6	3.6	8.8?	ナデ	灰褐色	砂粒・角閃石	2		
61	449	D-1		右下 3層	高坪	28.4		ヨコナデ・ミガキ	ミガキ	にぶい・褐色	纖細砂粒	2		
62	450	D-2	左上	1層	高坪	12.0		白陶ナデ	白陶ナデ	和灰色	纖細白色・黒色粒	1		
62	451	D-2	左上	1層	鉢	10.0		白陶ナデ	白陶ナデ	和灰色	纖細白色	2		
62	452	D-2	左上	1層	鉢	9.4		白陶ナデ	白陶ナデ	和灰色	2mm白色	2		
62	453	D-2	右上	1層	陶瓶	ナギ		ナギ	ナギ	1mm白色	赤色	1		
62	454	D-2	右上	1層	陶瓶	ナギ		ナギ	ナギ	1mm白色	赤色	1		
62	455	D-2	右上	1層	黒			平行タキ	同心円当て具	杏灰色	1mm白色	1		
62	456	D-2	右上	1層	黒			平行タキ	ナデ	灰白色	3mm砂粒	1		
62	457	D-2	右上	1層	黒	25.6		ナデ	にぶい・褐色	2mm砂粒・赤色 砂粒	2			
62	458	D-2	右上	1層	鉢	17.0		ハ・ケメ・ナデ	ハ・ケメ・ナデ	黑色	2mm砂粒・雲母	2		
62	459	D-2	右下	1層	鉢	13.2		ナデ	ハ・ケメ	にぶい・黃褐色	2mm砂粒・雲母 角閃石	2	△ 液浸液状	
62	460	D-2	右下	1層	鉢	8.3	12.8	5.0?・摩滅	摩滅	にぶい・褐色	2mm砂粒・雲母 角閃石	2	△ ○	
62	461	D-2	右上	1層	黒		9.7?・ハメ	ナデ・指押	明闇灰褐色	3mm砂粒・赤色 砂粒	2			
62	462	D-2	右下	鉢	16.0		16.0?・摩滅・ナデ	ナデ	にぶい・黃褐色	3mm砂粒・金雲母	2			

回	No.	出土地点				調査			色調	胎土	赤彩 或 内面	備考	
		区	土器部	位置	層位	器形	器高	口径	底径	外面	内面		
62	463	D-2	糸	1層	器台	11.8	ヨコナナメ・ハケヌ	ヨコナナメ・ナデ	にふい・穠色	3mm砂粒・赤色・ 雲母	2		
62	464	D-2	右上・斜	曲			ハケメ・硝子目タマキ	ナデ・指押	にふい・黄褐色	4mm砂粒・雲母	2		
62	465	D-2	糸	2層	跡	6.7	8.8	6.7ナナメ・指押	ナデ・指押	灰黃褐色	2mm砂粒・雲母	2	
62	466	D-2	糸	1層	器台	8.2	10.6	10.6ヨコナナメ・指押	ハケメナナメ・指押	にふい・穠色	2mm砂粒・雲母	2	
62	467	D-2	糸	1層	深鉢			基底ナナメ	基底ナナメ	にふい・穠色	1mm砂粒	2	
60	468	D-2	右下・斜下	深鉢				ナナメ	ナナメ	穠色	滑石	2	
63	469	D-2	右下	1層	上ナナメ	6.0	8.7	2.0ヨコナナメ・ナナメ	ハケメナナメ	にふい・穠色	1mm砂粒	2	
63	470	D-2	P1	跡	6.5	11.8	ナナメ・指押	ハケメ	にふい・穠色	2mm砂粒・雲母	2		
63	471	D-2	P2	器台		13.0ヨコナナメ・ナナメ	ハケメ・シリオリ	灰白色	2mm砂粒・赤色・ 雲母	2	保有者?		
63	472	D-2	P2	器台		13.0ヨコナナメ・平行タマキ	ハケメ・指押	にふい・穠色	2mm砂粒・雲母・角 閃石	2			
63	473	D-2	右下	1層	高杯	18.8ヨコガキ	ナナメ	明赤褐色	3mm砂粒・全雲母	2			
63	474	D-2	P4-5 右上	2層	曲	約32	9.0ヨコナメ・摩滅	ナナメ・指押	にふい・穠色	3mm砂粒・赤色・ 雲母	2		
63	475	D-2	P4右上	2層	曲	6.8ヨコガキ	ナナメ・指押	明赤褐色	1mm砂粒・雲母・赤 色	2	○		
63	476	D-2		2層	曲	約21	16.0	ハケメナナメ	ハケメナナメ	にふい・穠色	1mm砂粒・雲母・角 閃石	2	
63	477	D-2		2層	器台	16.7	11.2	12.8ヨコメ	ハケメナナメ	にふい・穠色	3mm砂粒・赤色・ 雲母	2	
63	478	D-2	P4-P5		曲		9.0ヨコナメ・ナナメ	ケズリ	灰黃褐色	3mm砂粒・赤色	2		
63	479	D-2	右下	2層	跡	13.9	19.4	ハケメ・ナナメ	ハケメ	にふい・穠色	2mm砂粒・雲母	2	
63	480	D-2										2	
63	481	D-2		2層	跡	19.2	22.6	ハケメナナメ	ハケメナナメ	穠色	微細白色・雲母	2	
63	482	D-2		2層	上ナナメ			ナナメ・指押	ナナメ・指押	明闇灰色	1mm砂粒・全雲母	2	
63	483	D-2		2層	跡	約9.5	20.2	ハケメ・ナナメ	ハケメナナメ	灰黃褐色	3mm砂粒・雲母	2	
63	484	D-2		2層	跡	6.8	14.2	3.0ナナメ・ケズリ	ハケメ	灰黃褐色	微細白色	2	
63	485	D-2	P6	大壺								2	
64	486	D-1	1・2 山上	曲		21.2	摩滅	ナデ・指押	にふい・穠色	微細砂粒	2		
64	487	D-1	1	曲			ナナメ	摩滅(剥離)	にふい・穠色	6mm砂粒	3		
64	488	D-1	1B	曲	30形	6.7横ナナメ・ミガキ	ミガキ・ナナメ	にふい・穠色	類似砂粒	2	△ 内面細密凹なし		
64	489	D-1	1・2	曲		8.2ヨコガキ	ミガキ	灰黃褐色	6mm砂粒	2	○		
64	490	D-1	1	壺		28.8	横ナナメ・ハケヌ	横ナナメ・ハケヌ	にふい・穠色	微細砂粒	3		
64	491	D-1	1B	跡	20形	27.8	上部ハケメ・下部摩滅	上部ハケメ・下部摩滅	浅黄褐色	砂粒	4	赤?	
64	492	D-1	1B	曲	約30	7.0横摩滅(ミガキ)	摩滅(ミガキ)	にふい・穠色	4mm白色砂・砂粒	2	△ 内面細密凹不平		
64	493	D-1	1B	跡	約17	18.8ヨコガキ	ミガキ	ナナメ・指押	にふい・穠色	精良	2		
64	494	D-1	1b	高杯	25.0	ミガキ	ミガキ	にふい・穠色	和卵粒	2	○		
64	495	D-1	1B	高杯	14.2	摩滅	ミガキ	浅黃褐色	精良砂粒	3			
65	496	D-1	2	壺	約24	22.0ヨコナナメ・ハケヌ	横ナナメ・ナナメ	にふい・穠色	3mm赤色・砂粒	2			
65	497	D-1	2	壺	22.0	剥離	ハケメ	にふい・穠色	6mm砂粒	4			
65	498	D-1	2	跡	13.6	21.6	7.5ヨコメ	ナナメ	にふい・穠色	6mm砂粒	2		
65	499	D-1	2	曲	18.5	摩滅	ナナメ	にふい・穠色	6mm砂粒	3			
65	500	D-1	2	跡	9.8	11.9	4.6ヨコガキ	ミガキ・ナナメ	にふい・穠色	精良	2	△ 内面にへらによ る文様状	
65	501	D-1	2a	2a下	跡	6.6	1.8	5.0ヨコガキ	ナナメ・指押	穠色	6mm砂粒	2	○
65	502	D-1	右下	1・2層	曲	約41	21.4	ハケメ	ハケメ	にふい・穠色	6mm砂粒	2	
65	503	D-1	2	跡	14.0	24.8	9.5ヨコメ	横ナナメ・ナナメ	灰黃褐色	6mm砂粒	2	焼成後、底部中 空に生ず	
65	504	D-1	2	跡	10.0	19.9	ツブリ	ハケメ・ナナメ	にふい・穠色	6mm砂粒	2	?	
65	505	D-1	2	跡	24.0	24.6	剥離・指押・ナナメ	ナナメ	灰黃褐色	6mm砂粒	3		
65	506	D-1	2	曲		ナナメ	ナナメ	指押	指押	6mm砂粒	2		
65	507	D-1	2b	器	8.0	29.8	6.5摩滅	摩滅	穠色	精良	3		
66	508	D-1		壺		29.0	横ナナメ・ハケヌ	横ナナメ・ナナメ	にふい・穠色	6mm砂粒	2		
66	509	D-1		壺		7.5ヨコメ	ナナメ	ナナメ	にふい・穠色	6mm砂粒	2	底面地成後空孔	
66	510	D-1	1P. 壺	壺		35.2	横ナナメ・ハケヌ	横ナナメ・ナナメ	灰黃褐色	微細砂粒	2	保有者	
66	511	D-1	左下	最下層	跡	13.0	12.5	7.6指押	指押・ナナメ	にふい・穠色	2mm砂粒・黒色	2	古な形底部に工 具痕
66	512	D-1	溝端中 (砂崩)	高杯		ハケメ・ナナメ	シボリ・ハケメ	にふい・穠色	5mm白色砂・砂粒	2	存在は焼成後、 4穴		
67	513	D-2	9	壺		22.4	16.5	7.0ヨコナナメ・ハケヌ	ハケメ・ナナメ	にふい・穠色	4mm砂粒・赤色・ 雲母	2	
67	514	D-2	9	壺		18.2	12.0ヨコナナメ・ナナメ	ナナメ・指押	にふい・穠色	3mm砂粒	2		
67	515	D-2	9	壺	24.2	16.2	8.2ヨコナナメ・ナナメ	ナナメ・指押	相色	4mm砂粒・赤色・ 雲母	2		
67	516	D-2	9	壺	16.0	21.6	平行タマキ・ハケヌ	ハケヌ	にふい・穠色	4mm砂粒・雲母	2		
67	517	D-2	9	壺	15.8	21.7	ツブリ・ハケヌ	ハケヌ	にふい・穠色	4mm砂粒・雲母	2		
67	518	D-2	9	壺	19.2	摩滅	ハケヌ	河床褐色	2mm砂粒・雲母	2			
67	519	D-2	9	壺	25.5	ナナメ	ナナメ	相色	1mm砂粒・全雲母	2			
67	520	D-2	9	壺	22.5	32ヨコナナメ・ハケヌ	ヨコナナメ・ナナメ	にふい・穠色	2mm砂粒・雲母	2			
67	521	D-2	9	壺	31.8	26.4	9.0ヨコナナメ・ハケヌ	ナナメ・指押	相灰色	1mm砂粒・雲母	2		
67	522	D-2	9	壺		ナナメ・ナナメ	ナナメ	相色	2mm砂粒・雲母	2			
67	523	D-2	9	壺		7.5ヨコメ	ヨコナナメ・ナナメ	相色	1mm砂粒・雲母	2	?		
67	524	D-2	9	壺		11ヨコメ	ヨコナナメ	にふい・穠色	3mm砂粒・赤色・ 雲母	2			
67	525	D-2	9	壺		8.0ヨコメ	ナナメ	ナナメ・指押	にふい・穠色	4mm砂粒・全雲母	2	焼成後?空孔	
68	526	D-2	9	曲		15.4	ハケメ・ナナメ	ナナメ	相色	3mm砂粒・雲母	2	○○	
68	527	D-2	9	曲		33.4	摩滅	ミガキ	明赤褐色	微細砂粒・赤色 ・雲母	2	○○	
68	528	D-2	9	左	曲	8.6	ヨコガキ	ナナメ・指押	明赤褐色	3mm砂粒・赤色・ 雲母	2	○△	

回	No.	出土地点	区	土器部	位置	層位	器形	調査				色調	胎土	焼成	赤彩 内面	備考
								器高	口径	底径	外面					
68	529	D-2	9		赤		11.0	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ		浅黃褐色	1mm砂粒		2		
68	530	D-2	9	縹			12.0	ハケメ・ナデ	ハケメ		にぶい・褐色	2mm砂粒・赤色系・ 雲母		2		
68	531	D-2	9	縹			13.0	ハケメ	ハケメ		にぶい・黃褐色	2mm砂粒・雲母		2		
68	532	D-2	9B	縹	4.0	9.5	3.3	ハケメ	ナデ		にぶい・黃褐色	1mm砂粒		2		
68	533	D-2	9	縹	5.1	11.0	4.0	ナデ	ナデ		黄褐色	1mm砂粒・企鵝斑		2		
68	534	D-2	9	縹	4.9	13.1		ナデ	ナデ		にぶい・黃褐色	2mm砂粒・赤色系		2		
68	535	D-2	9	縹	5.8	16.2		ハケメ	ハケメ		にぶい・褐色	1mm砂粒		2		
68	536	D-2	9	縹			19.3	ハケメ	ハケメ		にぶい・黃褐色	1mm砂粒・企鵝斑		2		
68	537	D-2	9	縹			23.7	柄子目タキ・ナデ	ハケメ		にぶい・黃褐色	2mm砂粒・2mm白		2		
68	538	D-2	9	縹			22.4	柄子目タキ・ナデ	ハケメ		明赤褐色	1mm砂粒・雲母・白		2		
68	539	D-2	9	縹	9.5	22.3		ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ		褐色	2mm砂粒・雲母		2		
68	540	D-2	9	赤			3.2	ココナド・ナデ	ナデ		にぶい・黃褐色	3mm砂粒・雲母		2		
68	541	D-2	9	縹	3.5	15.6		ナデ	ナデ		褐色	1mm砂粒・雲母・金 雲母		2	△	
68	542	D-2	9	縹	7.3	26.2		ココナド・ナメ	ココナド・ナメ		褐色	3mm砂粒・雲母		2		
68	543	D-2	9	縹	10.1	27.8		ハケメ・ココナド	シボリ・ナデ		褐色	1mm砂粒・赤色系		2		
68	544	D-2	9	縹	10.8	29.6		ナデ	ナデ		明赤褐色	2mm砂粒・雲母		2		
68	545	D-2	9	縹	8.6	27.5		ハケメ・ココナド	シボリ・ナデ		褐色	1mm砂粒・赤色系 雲母		2		
69	546	D-2	9	縹			15.0	ハケメ・平行タキ	ハケメ・平行タキ		にぶい・褐色	6mm砂粒・雲母		2		
69	547	D-2	9	縹	17.6	44.4	17.6	平行タキ	ハケメ・ナデ		にぶい・褐色	3mm砂粒・赤色系 雲母		2		
69	548	D-2	9	縹	19.0	44.6	17.2	ココナド・平行タキ	ハケメ・ナデ		にぶい・褐色	3mm砂粒・赤色系		2		
69	549	D-2	9	縹	19.5	11.5	14.3	ココナド・ハケメ	ココナド・ナデ		褐色	1mm砂粒・雲母・全 雲母		2		
69	550	D-2	9	縹	10.1			ハケメ	ハケメ		褐色	2mm砂粒・雲母		2		
69	551	D-2	9	縹	10.0			ココナド・ハケメ	ココナド・ナデ		褐色	2mm砂粒・雲母		2		
69	552	D-2	9	支脚	10.5	6.5	10.2	平行タキ	ナデ・指揮		褐色	3mm砂粒・雲母		2		
69	553	D-2	9	高环			29.7	ハケメ	ハケメ		黄褐色	薄面白・赤色系 雲母		2		
69	554	D-2	9	高环	31.6			摩滅	ミテキ		にぶい・褐色	2mm砂粒・赤色系 雲母		2	△ ○	
69	555	D-2	9	高环			12.0	ハケメ	ナデ・ハケメ		にぶい・褐色	1mm砂粒・赤色系 雲母		2		
69	556	D-2	9	高环			12.0	ハケメ	ハケメ・ナデ		にぶい・褐色	1mm砂粒・雲母		2	△ ○	
70	557	D-2	9B	縹			26.2	摩滅	ナデ		にぶい・褐色	3mm砂粒・赤色系 雲母		2		
70	558	D-2	9B	赤			6.4	毛打牛	ナデ		褐色	薄面白・赤色系 雲母		2		
70	559	D-2	9B	縹			29.4	毛打牛	ミテキ・ナデ		明赤褐色	2mm砂粒・赤色系 雲母		2	○ △	
70	560	D-2	9B	縹			23.0	ナデ・ココナド	ナデ・指揮		褐色	2mm砂粒・赤色系		2	△	
70	561	D-2	9B	縹			37.0	ココナド・ハケメ	ナデ		にぶい・褐色	2mm砂粒・赤色系 雲母		2		
70	562	D-2	9B	縹			8.2	10.1	4.1	万年	ナデ	褐色	稍且良・雲母	2		
71	563	D-1	No1	1 縷	裏	35.0	21.8	横ナデ・ハケメ	ハケメ・ケズリ		灰黃褐色	砂粒		2	保付教、波状文	
71	564	D-1	No1	1 縷	裏	30.9	19.8	横ナデ・ハケメ	横ナデ・ケズリ		灰黃褐色	砂粒		2	保付教、波状文	
71	565	D-1	No1	1	裏	19.6		ハケメ・平行タキ・ナデ	ハケメ		にぶい・褐色	微細砂粒		2		
71	566	D-1	No1	1	裏	19.1		横ナデ・ハケメ	横ナデ・ケズリ		にぶい・黃褐色	微細砂粒		2		
71	567	D-1	No1	1	裏	22.0	15.8	横ナデ・ハケメ	ハケメ・ケズリ		にぶい・黃褐色	白色粒		2		
71	568	D-1	No1	1	裏	30.9	15.1	横ナデ・ハケメ	横ナデ・ケズリ		にぶい・黃褐色	微細砂粒・砂粒		2	保付教、波状文	
71	569	D-1	No1	1 南半	裏		8.0	ナデ	ナデ		褐色	微細砂粒		2	保付教、波状文	
71	570	D-1	No1	2 縷	小窓	約5	2.1	△・ラナデ	ヘラナデ		にぶい・黃褐色	微細砂粒		2	保付教、波状文	
71	571	D-1	No1	2 縷	支脚	10.5	8.4	10.7	平行タキ・ナデ	指揮	にぶい・褐色	砂粒		2	△ ○	
72	572	D-1	No1	バカルト	縹		19.2	ハケメ	ハケメ		にぶい・褐色	2mm砂粒		2		
72	573	D-1	No1	バカルト	縹		19.4	ハケメ・指揮	指揮・板ナデ		にぶい・黃褐色	3mm砂粒		2	スス付着	
72	574	D-1	No1	バカルト	縹		25.5	ヨコナド・ハケメ	ヨコナド・ナデ		灰黃色	2mm砂粒		2	スス付着	
72	575	D-1	No1	バカルト	縹		22.8	横ナデ・ハケメ	横ナデ・ナデ		明黃褐色	1mm赤色・砂粒		2	保付教	
72	576	D-1	No1	バカルト	縹		33.0	28.4	4.5	ハケメ	明黃褐色	2mm砂粒		2		
72	577	D-1	No1	バカルト	縹			10.0	ケズリ・ハケメ	ハケメ・ナデ		にぶい・褐色	2mm砂粒		2	
72	578	D-1	No1	バカルト	縹		31.4	ミテキ	ミテキ		褐色	稍且・1mm白色		2	△ ○	
72	579	D-1	No1	バカルト	縹		6.0	△・ナデ	ナデ		外・褐色	6mm白色粒		2	内面黒色	
73	580	D-1	No1	バカルト かん組	31.1			ナデ	ナデ		赤色	穀良	4	○	L上に鉛垂線等 5条の紋様	
73	581	D-1	No1	バカルト	長崎市	8.3		横ナデ・摩滅	横ナデ・シボリ		浅黃褐色	穀良	4	○ △	内面赤色は口縁 ジル	
73	582	D-1	No1	バカルト	長崎市			ミテキ	ナデ・シボリ		穀良	3	○			
73	583	D-1	No1	バカルト	縹		7.5	ミテキ	ナデ		にぶい・黃褐色	微細砂粒・穀良	3	○		
73	584	D-1	No1	バカルト	縹			ナデ・開底文(タキ)	ハケメ・ナデ・ナデ		灰褐色	2mm砂粒・白	4	○	半島系	
73	585	D-1	No1	バカルト	縹			6.7	ナデ・ハケメ	しぶり・ナデ・ヨコナド	にぶい・黄色	2mm砂粒	2	○		
73	586	D-1	No1	バカルト	御付賃	18.2	13.5	15.5	ハケメ	ハケメ	褐色	3mm砂粒・4mm砂粒	3			
73	587	D-1	No1	バカルト	縹		52.0	24.2	柄子目タキ・ナデ	ハケメ	にぶい・黃褐色	2mm砂粒・赤色系 角閃石	2			

図	No.	出土地点		器形	器高	口径	底径	調査		色調	胎土	赤彩 或 内面	備考		
		区	上部層	層位				外面	内面						
73	588	D-1	No.1 ベルト	高杯		6.5	ハケメ	ナデ	にふい・褐色	1mm粉・赤色 墨粉	2				
73	589	D-1	No.1 ベルト	台付鉢	約15	22.5	ハケメ	横ナデ・ハケメ	灰黄褐色	精良	2				
73	590	D-1	No.1 ベルト	高杯		26.5	ミガキ	ミガキ	明赤褐色	1mm粉・赤色 墨粉	2	?	○		
73	591	D-1	No.1 ベルト	高杯		16.0	ミガキ	シボリ・ナデ	にふい・褐色	1mm粉・金雲母	2	○			
74	592	E-0	遺構面	曲		26.8	回転ナ・	回転ナデ	灰色	黒色粒子	1				
74	593	E-0	出土内	曲		22.0	回転ナ・柄子目付	回転ナ・	当て具	3mm白・褐色	1				
74	594	E-0	遺構面	曲		10.0	回転ナ・	回転ナデ	灰色	2mm白・黑色	1				
74	595	E-0	遺構面	碗		8.0	底	摩滅	褐色	褐色粘合物	4				
74	596	E-0	遺構面	碗		5.0	底面部	剥込み	オーリーブ褐色	青みを帯び灰褐色	1				
75	597	E-1	右上	上層	曲	12.0	ハケメ	ハケメ	褐色	砂利	2				
75	598	E-1	北壁	上層	曲	18.8	ハケメ	ハケメ	灰黄褐色	2mm粉	3				
75	599	E-1	北平	1層	曲	25.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ケズリ	にふい・褐色	1mm粉・擦傷角 閃石・雲母・褐色 粉	2	二道口縫			
75	600	E-1	南壁土	曲	30.0	ヨコナデ・ハケメ・	ヨコナデ・ハケメ・	にふい・褐色	精良・微細砂利	2					
75	601	E-1	5 北平	上層	曲	19.1	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	褐色	微細白色	2				
75	602	E-1	右上	上層	手捏	11.5	9.4	ナデ・押捏	ナデ・押捏	にふい・褐色	精良・白色	2			
75	603	E-1	曲	9.5	13.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	にふい・褐色	精良	2					
75	604	E-1	右上	上層	曲	15.3	10.2	ナデ・底部ケズリ	ナデ・	灰黄褐色	精良・白色	2	外側全体に火炎 付着		
75	605	E-1	北平	上層	曲	15.4	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	にふい・褐色	精良・白色・泥	2				
75	606	E-1	左	上層	變	19.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ケズリ	褐色	砂利・微細白色	2				
75	607	E-1	上層	曲	20.0	ナデ・筋子目タキナ	当て具	褐色	3mm粉・赤色	4					
75	608	E-1	變			7.9	ハケメ	ナデ	にふい・褐色	2mm粉・雲母	2				
75	609	E-1	土壁5. 6.北	大透		74.0	ハケメ(?) 手捏タキナ)	ハケメ	にふい・褐色	2mm粉	2				
76	610	E-1	南	3層	上7.7	4.3	7.2	3.周輪押・ナデ	押捏・ナデ	灰黄色	砂利	2			
76	611	E-1	土壁5. 北	手捏		3.3	6.5	押	押	にふい・褐色	精良・白色・泥	2			
76	612	E-1	北平	上層	手捏	3.1	6.4	ナデ・押	ナデ・押	にふい・褐色	精良	2			
76	613	E-1			手捏	3.0	6.2	押	押	にふい・褐色	2mm粉・雲母・黑 色	2			
76	614	E-1			鉢	3.3	7.6	2.5周輪押	摩滅	灰黄色	砂利	3			
76	615	E-1	E-1区	1層	浅鉢	14.6	上部ナ・下部ケズリ	上部ナ・ケメ・下部ケズ リ	にふい・褐色	微細白色	2				
76	616	E-1	北平	上層	鉢	7.5	14.6	4.2ナ・	ナデ	褐色	3mm粉・全雲母	3			
76	617	E-1	土壁5. 北	手捏		9.5		押	押	にふい・褐色	2mm粉・赤色	2			
76	618	E-1	上	上層	残鉢?		7.8	ミガキ	ハケメ・押・ナデ	にふい・褐色	精良	2			
76	619	E-1			鉢	14.5	20.8	ヨコナデ・板ナ・ナデ	ハケメ	灰黄色	微細白色・精良	2			
76	620	E-1	左上	上層	台付鉢			ハケメ	ハケメ	にふい・褐色	砂利・微細赤色	3			
76	621	E-1		上層	高杯			ハケメ・筋文	ハケメ・筋文	にふい・褐色	精良	2			
76	622	E-1	上	1層	浅鉢	8.3	22.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ケズリ	にふい・褐色	砂利・赤色・雲母	2			
76	623	E-1	土壁5. 南	麻葉土	器台	8.5	14.8	13.5 [正・横ナ・ハケ メ・筋文]	ハケメ(?) ナデ(?)	褐色	精良・微細砂利	3			
76	624	E-1	土壁5. 6.北	高杯		12.7	ミガキ	ナデ	浅黄褐色	精良	3				
76	625	E-1	麻葉土	高杯		10.6	ハケメ	ナデ・繩ナ・ナデ	にふい・褐色	2mm粉・雲母	2				
76	626	E-1	左上	支脚	12.8	15.5	ナデ	ハケメ・ナ・	にふい・褐色	砂利	2				
76	627	E-1	5.北	柳形	7.3	10.6	4.0ナ・	ハケメ(?) ナデ(?)	にふい・褐色	精良・紗利	2				
77	628	E-1		砂鉢	曲	25.0		押	押	にふい・褐色	微細白色・茶色	2			
77	629	E-1		舟型	曲	25.6		ヨコナ・	ヨコナ・ナ・	にふい・褐色	砂利	2			
77	630	E-1	南	下層	砂鉢	曲	18.0	ハケメ	ナデ・押	灰黄色	砂利	3			
77	631	E-1		砂鉢	曲	23.2	ミガキ	ヨコナ・ナ・	にふい・褐色	砂利	2				
77	632	E-1		鍋下層	鉢	31.8	21.4	7.0ナ・ケズリ	ハケメ・摩滅	灰黄色	3mm粉・全雲母	2			
77	633	E-1		鍋下層	高杯			ミガキ	ナデ・ハケメ	1mm粉・黒褐色	2				
77	634	E-1	上	砂下層	鉢	8.0	6.0	3.6ナ・	ナデ	にふい・褐色	砂利	2			
77	635	E-1	左上	砂下層	高杯			モリ	シボリ・ナ・	にふい・褐色	砂利	3	○		
77	636	E-1	鍋文	川底	深鉢			象皮	象皮	1mm粉	2				
78	637	E-1	4		手捏	4.1	8.9	押	押	褐色	2mm粉	4			
78	638	E-1	4		鉢	約30	50.2	ハケメ	ハケメ・ナ・	にふい・褐色	2mm粉	2			
78	639	E-1	4		鉢	21.4	ハケメ・ナ・	ハケメ	灰黄色	3mm粉	2				
78	640	E-1	4		鉢	21.5	ハケメ・ナ・	ハケメ・ナ・	にふい・褐色	微細白色・赤色	2				
81	641	E-1	6		鉢	14.8	ハケメ・ナ・	ハケメ	灰黄色	砂利	2				
81	642	E-1	6		鉢	17.7		ハケメ	ハケメ	明黄色	砂利・微細褐色	2			
81	643	E-1	6		鉢	15.4	ヨコナ・ナ・	ハケメ	にふい・褐色	砂利	3				
81	644	E-1	6		鉢	19.2	ハケメ・ナ・	ハケメ	灰黄色	砂利	2				
81	645	E-1	6		鉢	19.4	ハケメ・ナ・	ハケメ・ナ・	灰黄色	精良・紗利	2				
81	646	E-1	6		鉢	21.0	15.8	ハケメ・ナ・	ハケメ・ナ・	灰黄色	2mm粉	2			
81	647	E-1	6		鉢	15.3	ハケメ	ハケメ	にふい・褐色	2mm粉	2				
81	648	E-1	6		鉢	17.1	ナ・	ヨコナ・ナ・	灰黄褐色	2mm粉	2	外側に粘土附着 付着?			
81	649	E-1	6		鉢	21.0	ナ・	ナ・	にふい・褐色	2mm粉	2				
81	650	E-1	6		鉢	23.2	ハケメ	ハケメ	灰黄褐色	微細砂利	2				
81	651	E-1	6	右上斜	2層	高杯	19.8	22.5	13.8ハケメ・板ナ・	ハケメ	にふい・褐色	砂利	2	○○	

回 数	No.	出土地点			調査				地土	地 成 性	赤 彩 外 面 内 面	備 考			
		区	土器部	位置	層位	器形	器高	口径	底径						
81	652	E-I	6	裏		ハケメ	19.4			ナデ・ハケメ	横ナデ・ケズリ	にふい・褐色	砂質粘土, 黄褐色灰土, 粘土	2 □ 波状模様 5本あ り(?)	
82	653	E-I	6	裏		ハケメ	19.0			ハケメ・板ナデ	にふい・黄褐色		砂質粘土	2 ○	
82	654	E-I	6	裏		ハケメ	11.8			ハケメ	にふい・黄褐色		1~5mm砂粒, 黄褐色 赤褐色	2	
82	655	E-I	6	裏		稻子目タキ				稻子目タキ	可て具ハケメ	褐色	2mm砂粒, 黑褐色, 全苔母		
82	656	E-I	6	裏		ハケメ+横ナデ	16.3			ハケメ+横ナデ	灰黄褐色	砂粒	2 □ ?	突然に帶状模様	
82	657	E-I	6	裏		ハケメ・平行タキ	11.5			ハケメ	淡褐色, 褐色	2mm砂粒, 3mm赤色 砂粒	4		
82	658	E-I	6	裏		ハケメ	11.8			ハケメ	にふい・黃褐色	砂質粘土, 黄褐色 灰土	2mm砂粒, 黄褐色 灰土	2	
82	659	E-I	6	裏		ヨコナデ・ハケメ	30.8			ナデ・ハケメ	赤褐色, 深褐色 ナデ・ハケメ	2mm砂粒, 黄褐色 灰土	2 □ 二重口縁		
82	660	E-I	6	裏		ケズリ・ナデ				ナデ・ハケメ	灰黄褐色	砂粒, 2mm赤色灰 土			
82	661	E-I	6	裏?		ナデ・底部ケズリ				ナデ	にふい・黄褐色	砂粒, 砂粒	3		
82	662	E-I	6	跡		上部ハケメ下平・板ナデ	12.6			上部・ナデ・下平・ハ ケメ	にふい・褐色	砂粒	2		
82	663	E-I	6	無頭部		ナデ	15.5	12.4		ナデ	にふい・黃褐色	粘土	2		
82	664	E-I	6	無頭部		ハケメ・底部ナデ	18.0	11.2		ナデ・指揮	灰褐色, 本 色	砂質粘土, 黄褐色 灰土	2mm砂粒, 黄褐色 灰土	2	
83	665	E-I	6	淺鉢		ハケメ	6.8	16.4		上部ナデ・下部ケズリ	板ナデ	にふい・褐色	粘土, 3mm白色灰 土	2	
83	666	E-I	6	手探		ハケメ・指揮・下探	8.0	17.5		ハケメ	灰黄褐色	砂粒, 淡褐色赤色 砂粒	2		
83	667	E-I	6	跡		下部ハケメ・下部・ハ ケメ	23.0			ハケメ	にふい・褐色	砂粒	2		
83	668	E-I	6	跡		ナデ・底部ケズリ	8.0	17.8		ナデ	にふい・褐色	砂粒, 砂粒	2		
83	669	E-I	6	跡		ハケメ	8.6	12.5		ハケメ	灰黄褐色	砂粒	2		
83	670	E-I	6	跡		ハケメ	13.0	21.0		ハケメ	にふい・褐色	砂質粘土	2	底部焼成帯穿孔	
83	671	E-I	6	跡		ハケメ	28.0			ハケメ	明褐色, にふい・ 褐色	砂粒, 淡褐色赤色 砂粒	2		
83	672	E-I	6	跡		ハケメ	19.5			ハケメ	褐色	砂質粘土	2		
83	673	E-I	6	跡		8.8cm押				横ナデ・ケズリ	褐色	3mm砂粒, 黑褐色 砂粒	2		
83	674	E-I	6	沿台		23.7cmハケメ				ナデ・ナデ	にふい・褐色	砂質粘土, 布色化 砂粒, 粘土	2		
83	675	E-I	6	沿台		21.5cmナデ・ナデ				ナデ・指揮	にふい・黃褐色	2mm砂粒	2		
83	676	E-I	6	沿台		11.9	9.2	11.2cmハケメ		ナデ・ナデ	にふい・黃褐色	2mm砂粒	2		
83	677	E-I	6	手探		ナデ・指揮	2.3	5.6		ナデ・指揮	灰黄褐色	粘土, 砂粒	2		
83	678	E-I	6	手探		ナデ・指揮	3.0	5.6		ナデ・指揮	灰黄褐色	粘土, 淡褐色白色彩 砂粒	2		
83	679	E-I	6	手探		ナデ・指揮	3.4	5.8		ナデ・指揮	にふい・褐色	2mm砂粒	2		
83	680	E-I	6	手探		ナデ・指揮	3.2	6.6		ナデ・指揮	にふい・黃褐色	粘土, 淡褐色白色彩 砂粒	2		
83	681	E-I	6	手探		ナデ・指揮	2.8	7.1		ナデ・指揮	灰黄褐色	砂粒	2		
83	682	E-I	6	手探		ナデ・指揮	8.2			ナデ・指揮	にふい・褐色	粘土, 砂粒	2		
83	683	E-I	6	淺鉢		手探	4.0	11.0		ナデ・指揮	ナデ・指揮	にふい・赤褐色, 褐色	2mm砂粒	2	
83	684	E-I	6	手探		手探	4.7	11.0		ナデ・指揮	にふい・褐色	砂質粘土, 合成 砂粒	2		
83	685	E-I	6	手探		手探	5.7	13.0		ナデ・指揮	にふい・褐色	3mm砂粒	2 ?		
83	686	E-I	6	小型箱		ナデ・指揮	6.0	4.3		ナデ・指揮	ヨコナデ・指揮・ナデ	浅黄色, 黄褐色 粘土, 粘土	2mm砂粒, 黄褐色 白色, 粘土	2	
83	687	E-I	6	手探		手探	6.0	7.5		ナデ・指揮	ナデ・指揮	にふい・褐色	2mm砂粒, 黃褐色 砂粒	2	
83	688	E-I	6	跡		手探	7.1	8.0		ナデ・指揮	ナデ・指揮	にふい・褐色	砂質粘土	3	
83	689	E-I	6	手探		手探	6.7	13.0		ナデ・指揮	ナデ・指揮	浅黃褐色 砂粒	2mm砂粒	3	
83	690	E-I	6	小切丸 底底		手探	10.6			ハケメ・ケズリ	ハケメ	灰白色	3mm白色砂粒	4	
84	691	E-I	6B	跡		砂押・板ナデ	12.0			砂押・ケズリ	にふい・褐色	粘土, 砂的砂粒	2		
84	692	E-I	6B	浅鉢		ナデ・ハケメ	5.1	13.5		ナデ・ハケメ	にふい・褐色	砂粒	2		
84	693	E-I	6B	裏		ハケメ・工具前・ナデ	11.4			ハケメ・工具前・ナデ	にふい・黃褐色	砂粒	3		
84	694	E-I	6B	裏		ナデ・指揮	14.0			ナデ・指揮	褐色	2mm砂粒	2		
84	695	E-I	6B	底		ナデ・指揮	約40	22.3		ナデ・指揮	ナデ・指揮	にふい・褐色	2mm砂粒	2	
85	696	E-I	5A	裏		ヨコナデ・ハケメ	30.8			ヨコナデ・ハケメ	板ナデ	褐色, 黄褐色	2mm砂粒, 茶色 砂粒	2	深付着
85	697	E-I	5	裏		ヨコナデ・ハケメ	16.2			ヨコナデ・ハケメ	板ナデ	浅黄褐色	1mm砂粒, 黄褐色 砂粒	2	
85	698	E-I	5A	裏		ハケメ	20.5	17.0		ハケメ・ナデ	ナデ	2mm砂粒, 黄褐色 砂粒	2	深付着	
85	699	E-I	5A	裏		ハケメ	19.5	15.2		ハケメ・ナデ	にふい・黃褐色	2mm砂粒, 黄褐色 砂粒	2	深付着	
85	700	E-I	5A	裏		ハケメ	18.2			ハケメ	にふい・黃褐色	2mm砂粒, 黄褐色 砂粒	2	深付着	
85	701	E-I	5A	裏		ヨコナデ・ハケメ・ナデ	17.4			ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ	灰褐色	深褐色砂粒	2	深付着
85	702	E-I	5A	北半	上顎	裏	25.6	19.5		ハケメ・ケズリ	ハケメ・ナデ	褐色, 黄褐色	2mm砂粒, 黄褐色 砂粒	2	深付着
85	703	E-I	5A	裏		ハケメ・平行タキ	16.5	10.0		ハケメ・ナデ	にふい・黃褐色	2mm砂粒, 黑褐色 砂粒	2	深付着	
85	704	E-I	5A	裏		ハケメ	29.2	21.0		ハケメ・板ナデ	ナデ	2mm砂粒, 黄褐色 砂粒	2	深付着	
85	705	E-I	5A	裏		ハケメ・板ナデ				ハケメ・ナデ	にふい・黃褐色	2mm砂粒, 黑褐色 砂粒	2		
85	706	E-I	5A	裏		ハケメ・平行タキ	13.6			ハケメ・指揮・ナデ	にふい・黃褐色	2mm砂粒, 黄褐色 砂粒	2	深付着	
85	707	E-I	5A	裏		ハケメ・平行タキ	16.6			ハケメ・板ナデ	褐色	2mm砂粒, 黄褐色 砂粒	2		
86	708	E-I	5A	裏		ヨコナデ・ハケメ	19.8			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	褐色	2mm砂粒, 黄褐色 砂粒	2	
86	709	E-I	5A	裏		ヨコナデ・ハケメ	17.6			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	にふい・黃褐色	2mm砂粒, 黄褐色 砂粒	2	

図	No.	出土地点				調査				色調	胎土	赤彩 或 外表面	備考	
		区	土器部	位置	層位	器形	高さ	口径	底径	外面	内面			
86	710	E-1	SA	裏	斐	31.0	20.2	—	ヨコナデ+ハケメ	ヨコナデ+指揮+ケズリ	明黄褐色	2mm砂粒, 濃褐色 赤鉄	2	保付着
86	711	E-1	SA	裏	斐	17.8	—	—	ヨコナデ+ハケメ	ヨコナデ+ケズリ	明黄褐色に赤 褐色	2mm砂粒, 茶色, 黑 鉄	2	保付着
86	712	E-1	SA	裏	斐	33.8	20.6	—	ヨコナデ+ハケメ	ヨコナデ+ケズリ	ふくらみ青褐色	2mm砂粒, 濃褐色 赤鉄	2	
86	713	E-1	SA	裏	斐	46.5	25.2	—	ハケメ+ナデ	ハケメ+指揮	浅黃褐色	3mm砂粒, 赤鉄	2	
87	714	E-1	SA	由	斐格子タタキ	—	—	—	—	—	灰白色	精良3mm白色 砂	4	半島系
87	715	E-1	5	上層	把手	—	—	—	摩滅	摩滅	灰白色	精良, 鮮白色 砂	4	
87	716	E-1	5	由	斐	10.6	—	—	ナデ+ハケメ	ナデ+ハケメ	灰白色	濃褐色, 黒色和 白色, 露銀	4	半島系か
87	717	E-1	5AB	古墳	由	20.6	—	—	ハケメ	指揮+ハケメ+ナデ	淡黄色	3mm砂粒	3	
87	718	E-1	SA	由	斐	20.0	—	—	ハケメ+ナデ	ハケメ+ナデ	褐色	2mm砂粒, 赤色 砂	2	
87	719	E-1	SA	由	斐	15.2	—	—	ハケメ	ハケメ	ふくらみ黄褐色 砂	2mm砂粒, 濃褐色 砂	2	
87	720	E-1	SA	由	斐	19.5	—	—	ヨコナデ+ハケメ	ヨコナデ+ハケメ	ふくらみ, 棕褐色 砂	1mm砂粒, 濃褐色 砂	2	
87	721	E-1	SA	由	斐	19.4	—	—	ハケメ	ハケメ	褐色	2mm砂粒	2	
87	722	E-1	SA	斐	斐	34.0	—	—	ハケメ+ナデ	ハケメ	褐色	砂	2	
87	723	E-1	SA	由	斐	20.6	—	—	ハケメ	ハケメ	褐色	4mm砂粒, 2mm赤色 砂	2	
87	724	E-1	5AC	由	斐格子タタキ+ハケメ	—	—	—	ハケメ	ハケメ	灰黃褐色	2mm砂粒	2	
88	725	E-1	5	北平	上層	高坪 (小)	10.0	—	ナデ	ナデ+ミガキ	精良	2	林部のみ に附文あり	
88	726	E-1	5	跡	跡	4.8	8.2	3.7	ハケメ+指揮	ハケメ+指揮	灰褐色	1mm砂粒, 濃褐色 砂, 白色, 露銀	2	
88	727	E-1	5	跡	跡	6.0	10.8	7.0	指揮+ナデ	指揮+ナデ	灰黃褐色	2mm砂粒	2	
88	728	E-1	5	手押	跡	3.8	7.1	—	指揮	指揮	褐色	2mm砂粒, 金雲母	2	
88	729	E-1	5	手押	跡	4.0	8.6	—	指揮	指揮	灰黃褐色	2mm砂粒	2	
88	730	E-1	5	手押	跡	5.2	11.8	—	指揮+ナデ	指揮+ナデ	褐色	2mm砂粒	2	
88	731	E-1	5AB	跡	跡	21.6	—	平行タタキ+ケズリ	ハケメ	ふくらみ, 黄褐色 砂	2mm砂粒, 赤色, 亦 砂	2		
88	732	E-1	5	跡	跡	6.6	14.5	3.5	ハケメ	ハケメ	灰黃褐色	2mm砂粒, 赤色砂	2	
88	733	E-1	5A	跡	跡	6.5	17.0	8.0	ハケメ	ハケメ	灰黃褐色	2mm砂粒, 茶色砂 露銀	2	
88	734	E-1	5	跡	跡	6.6	18.0	—	ナデ+ケズリ	ハケメ	ふくらみ, 黄褐色 砂	3mm砂粒, 濃褐色 砂	3	
88	735	E-1	5	跡	跡	8.6	13.1	3.0	ナデ	ナデ+板ナデ	にふくらみ, 黄褐色 砂	3mm砂粒	2	
88	736	E-1	5	跡	跡	5.1	8.8	—	ハケメ+ケズリ	ハケメ+ナデ	灰黃褐色	2mm砂粒, 黄褐色 砂	2	
88	737	E-1	5	跡	跡	9.2	19.8	5.0	板状工具	板状工具+ナデ	指揮色, にふくらみ, 褐色	砂	2	
88	738	E-1	5	跡	跡	7.0	18.0	6.0	指揮+ナデ	指揮	褐色	2mm砂粒	2	
88	739	E-1	5	1層	跡	21.0	—	硝子目タタキ+ナデ	モザイク	摩滅(ハケメ?)	淡黄色	3mm砂粒, 2mm黑色 砂	3	
88	740	E-1	5	跡	跡	14.3	31.6	—	硝子目タタキ	モザイク	にふくらみ, 黄褐色 砂	2mm砂粒, 赤色砂	2	
88	741	E-1	5A	北平	上層	跡	14.3	31.6	ハケメ+ケズリ	ハケメ	褐色	2mm砂粒, 褐色砂, 角質石	2	
88	742	E-1	5A	跡	跡	14.3	30.7	—	ハケメ+ケズリ	ハケメ	褐色	2mm砂粒	2	近側付近黒色
88	743	E-1	5	器台	跡	15.8	—	ハケメ	ハケメ+ナデ+指揮	にふくらみ, 棕褐色 砂	2mm砂粒, 砂母, 相 砂	2		
88	744	E-1	5	器台	跡	20.2	13.2	20.6	ハケメ+ナデ+指揮	ハケメ+ナデ+指揮	にふくらみ, 黄褐色 砂	2mm砂粒, 砂母, 相 砂	2	
89	745	E-1	5	器台	斐	19.2	11.6	13.6	ナデ	ナデ+ナデ	にふくらみ, 黄褐色 砂	2mm砂粒	2	
89	746	E-1	5	器台	斐	24.0	16.9	20.0	ハケメ+ナデ+指揮	ハケメ+ナデ	にふくらみ, 黄褐色 砂	2mm砂粒	2	
89	747	E-1	5	器台	斐	20.3	14.0	19.2	ハケメ+ナデ+指揮	ハケメ+ナデ+指揮	濃褐色的粘和白色 砂, 金雲母	2mm砂粒, 褐色 砂	2	
89	748	E-1	5	器台	斐	19.0	13.0	17.2	ナデ	ナデ	灰黄色	2mm砂粒, 赤色砂, 相砂	2	
89	749	E-1	5	器台	斐	—	—	22.8	ハケメ	ハケメ+ナデ	にふくらみ, 棕褐色 砂	2mm砂粒, 砂母, 相 砂	2	
89	750	E-1	SE	高坪	斐	22.0	—	ナデ+ミガキ	ハケメ+ナデ	にふくらみ, 黄褐色 砂	2mm砂粒, 濃褐色 砂, 砂母, 相砂	2		
89	751	E-1	5	高坪	斐	—	12.0	—	ハケメ+ナデ	シボナデ+ハケメ	にふくらみ, 黄褐色 砂	精良, 濃褐色砂	2	
90	752	E-1	5	文鏡	斐	9.0	6.5	11.7	ナデ+ナデ	ナデ+ナデ	にふくらみ, 黄褐色 砂	2mm砂粒	3	
90	753	E-1	5	文鏡	斐	11.0	9.6	14.0	指揮+ナデ	ナデ+ナデ	にふくらみ, 棕褐色 砂	2mm砂粒, 砂母, 相 砂	3	
90	754	E-1	5	文鏡	斐	12.5	9.3	16.3	指揮+ナデ	ナデ+ナデ	にふくらみ, 棕褐色 砂	精良, 白色砂	2	
90	755	E-1	5	文鏡	斐	14.0	10.0	15.0	ハケメ+ナデ	ハケメ+ナデ	淡黄色	2mm砂粒	3	
90	756	E-1	5	文鏡	斐	15.8	11.0	17.0	ナデ	ナデ	にふくらみ, 黄褐色 砂	3mm砂粒	2	
90	757	E-1	5	文鏡	斐	15.0	8.4	15.3	指揮+ナデ	ナデ+ナデ	にふくらみ, 黄褐色 砂	2mm砂粒, 黑色砂	3	
90	758	E-1	5	支脚	斐	11.0	7.6	12.5	行打タタキ	指揮+ナデ	にふくらみ, 黄褐色 砂	2mm砂粒, 赤色砂	3	
90	759	E-1	5	支脚	斐	11.0	7.5	10.8	ナデ	ナデ	褐色	2mm砂粒, 黄褐色 砂	2	
91	760	E-1	5BCF	大甕	斐	95.0	79.0	12.0	+ハケメ	ハケメ	褐色	2mm砂粒	2	尖端に硝子目タタ キ
91	761	E-1	5ABC	大甕	斐	99.8	78.5	14.0	+ハケメ	ハケメ	浅黃褐色	2mm砂粒	2	尖端に硝子目タタ キ
91	762	E-1	5B	大甕	斐	98.4	81.0	10.6	+ハケメ	ハケメ	浅黃褐色	2mm砂粒	2	尖端に行打タタ キ
91	763	E-1	5BD	大甕	斐	70.8	—	—	+ハケメ	ハケメ	にふくらみ, 黄褐色 砂	2mm砂粒, 黑色砂	2	尖端に行打タタ キ
92	764	E-1	5B+ 6B	大甕	斐	76.3	60.2	10.0	+ハケメ	ハケメ	にふくらみ, 棕褐色 砂	2mm砂粒, 黑色砂	2	口部は波状を呈す
92	765	E-1	5A+B	大甕	斐	84.0	55.5	10.0	+ハケメ	ハケメ	浅黃褐色	2mm砂粒	2	口部は波状を呈す
92	766	E-1	5BCF	赤甕	斐	38.5	—	—	+ハケメ+白帯平行タタ キ	+ハケメ	にふくらみ, 棕褐色 砂	2mm砂粒	2	尖端に平行タタ キ
92	767	E-1	5BG	赤甕	斐	43.0	43.0	—	+ハケメ+底部近赤ぐ な	+ハケメ+底部近赤ぐ な	にふくらみ, 棕褐色 砂	2mm砂粒	2	白レンズ底
92	768	E-1	5	由	斐	49.6	—	—	+ハケメ	+ハケメ	褐色	細小砂粒	2	尖端に柱状物
92	769	E-1	5BG	斐	6.6	50.5	4.4	ナデ+キ	+ハケメ	浅黃褐色	4mm砂粒	2	尖端に柱状物	

回	No.	出土地点	器形	調査				地土	被 燒 成	赤 銹 内 面	備考				
				区	土器部	位置	層位	器高	口径	底径	外面	内面			
93	770	E-I 5B-6	甕					51.0	横ナメ・ハメナデ	ハケメ・ナデ	褐色	黒い・砂利	2		
93	771	E-I 5B	甕						ハケメ・ケズリ	ハケメ	褐色	淡黄褐色	2		
93	772	E-I 5B	甕					28.8	摩減	ナデ	にぶい・黃褐色	2mm砂利・鐵錆斑	2		
93	773	E-I 5B	甕					11.8	ハケメ	ハケメ・ヨコナデ	にぶい・黃褐色	2mm砂利・鐵錆斑・空穴	2		
93	774	E-I 5B	甕					18.6	ハケメ	ハケメ	褐色	2mm砂利・鐵錆斑・空穴	2		
93	775	E-I 5B	甕					27.6	ハケメ・平行タキ	ハケメ	灰黄色	2mm砂利・鐵錆斑・空穴	2	保付着	
93	776	E-I 5B	甕					26.2	ハケメ・板ナデ	ハケメ	灰黄褐色	2mm砂利・赤色	2	保付着	
94	777	E-I 5B	甕					16.8	ハケメ・ケズリ	ハケメ	にぶい・黃褐色	2mm砂利・3mm系色 鐵錆斑	2	保付着	
94	778	E-I 5B	甕					16.6	ハケメ・板ナデ	ハケメ	灰黄色	2mm砂利・黑色和 褐色	2	保付着	
94	779	E-I 5B	甕					22.0	ハケメ	ハケメ	にぶい・褐色・相 色	2mm砂利・鐵錆斑・空 穴	2	保付着	
94	780	E-I 5B	甕					15.5	ハケメ(一部ナデ消)	ハケメ・指揮・ナデ	にぶい・黃褐色	2mm砂利・鐵錆斑	2	保付着	
94	781	E-I 5B	甕					30.0	ハケメ	ハケメ	褐色	2mm砂利・黑色和 褐色	2		
94	782	E-I 5B	甕					17.3	ヨコナデ・ナデ・ハメ	ヨコナデ・ケズリ	淡黄褐色	2mm砂利・空洞	2		
94	783	E-I 5B	甕					19.2	ハケメ・板ナデ	ハケメ	にぶい・褐色	5mm砂利	2	保付着	
94	784	E-I 5AB 5AB	甕					22.3	ハケメ・ケズリ	ハケメ・ナデ	褐色	2mm砂利	2		
94	785	E-I 5B	甕					21.2	ハラナギ	ハラナギ	にぶい・黃褐色	2mm砂利	2	口に附に無用	
95	786	E-I 5B	甕					47.4	ハケメ	ハケメ	褐色	點・砂利	2	口に附に無用	
95	787	E-I 5B	甕					44.0	ヨコナデ・ハケメ・ナデ ナデ・指揮・ハケメ	ハケメ	褐色	鐵錆斑・空洞・相 色	2		
95	788	E-I 5B	甕					14.0	ハケメ	ハケメ	にぶい・褐色	4mm砂利・鐵錆斑	2		
95	789	E-I 5B	甕					14.0	ハケメ・ケズリ	ハケメ・ナデ	褐色	2mm砂利	2		
95	790	E-I 5BG	甕						ハケメ	ハケメ	にぶい・褐色	5mm砂利・白色和 褐色	2		
96	791	E-I 5B	甕						硝子目タキ	硝子目タキ	褐色	2mm砂利	2		
96	792	E-I 5B 4110	甕(變)					11.2	ハケメ・格子目タキナ ナデ	ハケメ・ナデ	灰黄色	2mm砂利	2		
96	793	E-I 5B 62	小甕	約15	9.3				ハメ・格子目タキナ	ハメ・指揮	にぶい・褐色	鐵錆斑・黑色 色・空洞	2		
96	794	E-I 5B 77.78	甕(廣)					31.0	ハメ・格子目タキナ 白硝子目タキナ	ハメ・ナデ	淡黄褐色	4mm砂利	2	表面に平行	
96	795	E-I 5B 102	甕(廣)					16.0	硝子目タキナ・ハ メ	ハメ・指揮	にぶい・黃褐色	2mm砂利	2		
96	796	E-I 5B	甕					16.6	ハメ・格子目タキナ ナデ	ハメ・ナデ・指揮	淡黃色	2mm砂利	2		
96	797	E-I 5BF	甕					14.4	ハケメ・硝子目タキナ	ハケメ・ナデ	浅黄褐色	2mm砂利	2	口に附硝子目199	
96	798	E-I 5B	甕					22.6	ハメ・格子目タキナ	西向貝	灰黄色	2mm砂利・表面・黑 色	2		
96	799	E-I 5B	甕(大)					21.0	ハメ・格子目タキナ ナデ	ハメ	相色・黃灰色	2mm砂利・鐵錆斑 色	2		
96	800	E-I 5B 12	甕					41.4	28.4	タキ	褐色・淡褐色	3mm砂利・黑色和 褐色	4	鐵錆斑に付	
97	801	E-I 5B	甕	手	6.0	11.0			ハ押	ハ押	灰黃褐色	7mm砂利・鐵錆斑	2		
97	802	E-I 5B	甕(小)		6.1	13.0			ナデ	ハ押・ナデ	にぶい・褐色	3mm砂利・鐵錆斑	2		
97	804	E-I 5B	甕					7.8	18.0	6.2・ハケメ・ケズリ	ハケメ	淡褐色	2mm砂利・黑色和 褐色	2	
97	805	E-I 5B	甕(中)		8.5	17.0			ハケメ・ケズリ	ハケメ・ナデ	褐色	2mm砂利・黑色和 褐色	2		
97	806	E-I 5B	甕					9.4	ハケメ・ナデ・ケズリ	ナデ	にぶい・黃褐色	4mm砂利・黑色和 褐色	2		
97	807	E-I 5B	甕(中)		7.3	19.7			ヨコナデ・ハケメ・ケズ リ	ハケメ・ナデ・指揮	灰黃褐色	2mm砂利・鐵錆斑	2		
97	808	E-I 5B	甕		8.1	20.0			ケズリ・ナデ	ハケメ	にぶい・黃褐色	鐵錆斑・黑色和 褐色	2		
97	809	E-I 5B	甕					24.0	硝子目タキ	摩減	褐色	2mm砂利・黑色和 褐色	2		
97	810	E-I 5B	甕						硝子目タキ	ハケメ	にぶい・黃褐色	1mm砂利・赤色	2		
97	811	E-I 5B	甕					24.0	ハケメ・ケズリ	ハケメ	にぶい・褐色	5mm砂利	2		
97	812	E-I 5B-F	甕(大)		14.7	25.5			ハケメ	ハケメ	明淡褐色・淡褐色	鐵錆斑・黑色和 褐色	2		
97	813	E-I 5B	甕					27.6	ハケメ	ハケメ・ナデ	褐色	2mm砂利・黑色和 褐色	2		
97	814	E-I 5BG	甕(一孔式)		14.6	24.5			ハケメ・ケズリ	ハケメ	褐色	2mm砂利・鐵錆斑	2	底部に焼成の跡	
97	815	E-I 5B	甕					13.8	24.6	ケズリ・ハケメ・ナデ	ハケメ	にぶい・黃褐色	4mm砂利・黑色和 褐色	2	口下部下部に 褐色・凹陷あり
97	816	E-I 5B	甕(大)		13.7	32.2			ハケメ	ハケメ	褐色・褐色	2mm砂利・赤色・黑 色	3		
97	817	E-I 5BC	林(大)		16.0	33.0			ハメ・板ナデ	ハメ	褐色・にぶい・赤 色	4mm砂利・赤色	2		
98	818	E-I 5B	手探		4.4	6.6			ハ押	ハ押	褐色	2mm砂利・黑色和 褐色	2		
98	819	E-I 5B	林(小)		14.2	15.7			タキ・ハケメ・ケズリ	ハケメ・ケズリ	褐色・明褐色	4mm砂利・黑色和 褐色	2		
98	820	E-I 5BC	高环		28.2				ハケメ・ヨコナデ・ナデ	ハケメ・ガガニ	褐色	2mm砂利・2mm赤色 色・角型凹	2		
98	821	E-I 5B	高环					16.0	ハケメ	タキ・ハハメ	褐色	2mm砂利	2		
98	822	E-I 5B	部探					16.0	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ・指揮	にぶい・黃褐色	2mm砂利・赤色	2		
98	823	E-I 5B	部探		19.1	16.3			17.0・ハメ・平行タキ	ハケメ・指揮・ナデ	西向・淡褐色	3mm砂利・空洞	2	口下部下部に 黒斑	
98	824	E-I 5B	部探					16.0	硝子目タキ	指揮・ナデ	褐色	2mm砂利・褐色	3		
98	825	E-I 5B	13		18.1	17.1			15.0・硝子目タキ	ナデ・ハケメ・平打タキ	にぶい・黃褐色	2mm砂利	2		
98	826	E-I 5B	部探					20.2	30.4	ナデ・ハケメ・平打タキ	ハケメ(一部ナデ消 L.)	褐色・砂粒含む	2		
98	827	E-I 5B	部探					16.0	硝子目タキ	ナデナデ	灰黃褐色	2mm砂利	2		

回	No	出土地点						調査	色調	胎土	赤彩 或 外 面	備考	
		区	土器部	位置	層位	器形	高さ	口径	底径	外面	内面		
98	828	E-1	SB	96	器台	22.1	18.0	19.8	ヨコナ・タテナ・ハケ・平 ハケ・ヌード	淡黄褐色 に赤い褐色	3mm粒 黑褐色 2mm粒	2	上縁部に押注 痕あり
98	829	E-1	SB		器台	16.0	9.5	18.0	ヨコナ・タテナ・ハケ	ハケ・ヌード	淡黄褐色 に赤い褐色	2mm粒	2
99	830	E-1	SB		器台	16.5	10.0	17.5	ヨコナ・タテナ・ハケ	ハケ・ヌード・指揮	暗褐色 2mm粒と赤褐色	4	
98	831	E-1	SB		器台	19.3	18.5	18.8	ヨコナ・タテナ・ハケ	ハケ・ヌード・指揮	に赤い黄褐色 3mm粒	2	
99	832	E-1	SB		器台	19.2	16.2	18.2	ヨコナ・タテナ・ハケ	ハケ・ヌード・指揮	褐色 2mm粒と金雲母	2	
99	833	E-1	SB		器台	20.2	18.5	17.8	ヨコナ・タテナ・ハケ	ハケ・ヌード・指揮	に赤い黄褐色 2mm粒と云母	2	
99	834	E-1	SB		器台	20.0	17.5	19.4	ヨコナ・タテナ・ハケ	ハケ・ヌード・指揮	褐色 2mm粒と云母	2	
99	835	E-1			器台	20.5	19.5	18.0	ヨコナ	ハケ・ヌード・指揮	に赤い黄褐色 2mm粒	3	
99	836	E-1	SB		器台	22.5	15.5	19.2	ヨコナ	ハケ・ヌード・指揮	に赤い黄褐色 2mm粒	2	
99	837	E-1	SB		器台	21.8	15.0	20.0	ヨコナ	ハケ・ヌード	に赤い黄褐色 1mm粒	2	
99	838	E-1	SB		器台	21.3	18.5	19.2	ヨコナ	ハケ・ヌード・指揮	に赤い黄褐色 3mm粒と金雲母	2	
100	839	E-1	SB		支脚	8.4	5.1	9.1	ヨコナ・タテナ	指揮	に赤い黄褐色 2mm粒と白雲母	3	
100	840	E-1	SB		支脚	9.4	5.8	9.6	ヨコナ・タテナ	指揮・ナデ	に赤い黄褐色 2mm粒と黒褐色 2mm粒	2	
100	841	E-1	SB		支脚	10.5	5.0	12.7	ヨコナ・タテナ	指揮・ナデ	に赤い黄褐色 2mm粒と赤褐色 2mm粒	2	
100	842	E-1	SB		支脚	9.0	8.4	11.3	ヨコナ・ナデ	指揮・ハケメ	灰褐色 2mm粒	4	
100	843	E-1	SB		支脚	12.2	7.3	16.0	ヨコナ	ハケ・ヌード	に赤い黄褐色 2mm粒と角閃石	2	
100	844	E-1	SB		支脚	11.3	8.0	13.7	ヨコナ・タテナ	指揮・ナデ	褐色 2mm粒と黒褐色 2mm粒	2	
100	845	E-1	SB		支脚	10.7	7.8	13.7	ヨコナ・タテナ・ハケメ	指揮・ナデ	に赤い黄褐色 3mm粒と白色	2	
100	846	E-1	SB		支脚	11.7	9.0	12.8	ヨコナ・ミコナデ	ハケ・ヌード	に赤い黄褐色 2mm粒	3	
100	847	E-1	SB		支脚	11.2	8.2	12.0	ヨコナ・タテナ	しばり・指揮・ナデ	灰黃褐色 母・黑色粒	2	
100	848	E-1	SB		支脚	13.5	10.6	16.0	ヨコナ・タテナ	指揮	灰褐色 2mm粒	2	
101	849	E-1	SC		手探	4.5	8.5	ナデ		ナデ	に赤い黄褐色 1mm粒と角閃石	2	
101	850	E-1	SC		手探	13.6			ハケメ	ハケメ	褐色 2mm粒と鐵褐色 2mm粒	2	
101	851	E-1	SC		手探	13.6			ヨコナ・ナデ	ナデ・指揮・ケツリ	灰褐色 2mm粒	2	
101	852	E-1	SC		手探				ハケメ・ヨコナ・タテナ	ハケメ	に赤い黄褐色 2mm粒	2	保存資
101	853	E-1	SC		裏	27.2	18.0	18.0	ヨコナ・ケツリ	ハケ・ヌード	灰褐色・浅黄色 2mm粒と鐵褐色 2mm粒	2	
101	854	E-1	SC		裏		30.8		ヨコナ・ハケメ	ハケメ	に赤い黄褐色 3mm粒	2	
101	855	E-1	SC		器台	19.7	15.5	18.0	ヨコナ	ハケ・ヌード	褐色 2mm粒	3	
101	856	E-1	SC		鉢	31.2			ハケメ	ハケメ	に赤い黄褐色 3mm粒と鐵褐色 2mm粒	2	
101	857	E-1	SC		鉢				ヨコナ・タテナ	摩滅	に赤い黄褐色 2mm粒と黑色粒 2mm粒	2	
101	858	E-1	SC		高环				ヨコナ・タテナ	シボリ・ハケメ	淡黄色 精良・赤褐色 2mm粒	3	
102	859	E-1	SD		手探	5.4	8.5		ヨコナ	指揮	褐色 2mm粒	2	
102	860	E-1	SD		手探	5.7	12.0		ヨコナ	指揮・ナデ	灰褐色 2mm粒	2	
102	861	E-1	SD		裏	17.5			ハケメ・ヨコナ・タテナ	当て前?・ハケメ	に赤い黄褐色 2mm粒	2	
102	862	E-1	SD		人形鉢	33.8			ハケメ	ハケメ	明赤褐色 2mm粒・5mm粒	3	交帶に櫛状斜口
102	863	E-1	SD		裏	20.2			ハケメ	ハケメ	精良・鐵褐色 2mm粒	2	
102	864	E-1	SD		台付盤	28.1	24.0	15.0	ヨコナ	ハケメ	灰褐色 2mm粒	2	
102	865	E-1	SD		皿				ハケメ	ハケメ	に赤い褐色 2mm粒と黑色粒	3	
102	866	E-1	SD		皿	14.1	24.8		ハケメ・指揮	ハケメ	に赤い黄褐色 1mm粒と鐵褐色 2mm粒	2	底部に燒成前斜面
102	867	E-1	SD		皿	21.0	45.6		ハケメ・ヨコナ・タテナ	ハケメ	に赤い黄褐色 2mm粒・茶褐色	2	
103	868	E-1	SE		鉢	50.4			ハケメ・ヨコナ・タテナ	ハケメ	褐色 3mm粒と赤褐色 2mm粒	2	凸部に割目
103	869	E-1	SE		裏	26.5			ハケメ・ヨコナ・タテナ	ハケメ	に赤い褐色 4mm粒と鐵褐色 2mm粒	2	保存資
103	870	E-1	SE		皿	19.2	16.3		ハケ・ヌード	ハケメ	に赤い褐色 2mm粒	2	
103	871	E-1	SE		裏	18.1			ハケメ・板	ハケメ	灰褐色 2mm粒	2	保存資
103	872	E-1	SE		皿				ヨコナ・タテナ・ハケメ	ハケメ	灰褐色 2mm粒	2	
103	873	E-1	SE	北半	上層	付鉢			ミガキ?	ハケメ	に赤い黄褐色 微細な茶褐色	2	
104	874	E-1	SF		皿				タタキ・ヨコナ	ハケメ	に赤い褐色 2mm粒と鐵褐色 2mm粒	2	
104	875	E-1	SF		皿				タタキ・ヨコナ	ハケメ	褐色 1mm粒と褐色 1mm粒	2	保存資
104	876	E-1	SF		皿				タタキ	ハケメ	灰褐色 2mm粒	2	空帶に割目
104	877	E-1	SF		皿				タタキ	ハケメ	灰褐色 2mm粒	2	保存資
104	878	E-1	SF		皿	18.9	15.2		ヨコナ・ケツリ	ハケメ	暗灰褐色・黃褐色 2mm粒	3	鋸歯形 尖り底
104	879	E-1	SF		皿	10.8			ヨコナ	ハケメ	に赤い黄褐色 3mm粒と鐵褐色 2mm粒	2	保存資
104	880	E-1	SF		皿	8.1	12.0		ヨコナ	指揮	褐色 2mm粒	2	保存資
104	881	E-1	SF		皿	30.0			ヨコナ・ハケメ	ナデ・ハケメ	粗面褐色 粗面鐵褐色 2mm粒	3	
104	882	E-1	SF		皿				ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	褐色 2mm粒	2	
105	883	E-1	SF		手探	3.5	7.4		ヨコナ	指揮	に赤い黄褐色 2mm粒	2	
105	884	E-1	SF		手探	5.1	8.8		ヨコナ	指揮	灰褐色 2mm粒	2	保存資
105	885	E-1	SF		皿	27.2			ヨコナ	ハケメ	褐色 2mm粒	2	
105	886	E-1	SF	15	底盤				3.6ヨコナ・タテナ	ハケメ	淡黄色 3mm粒	2	やや上方底
105	887	E-1	SF		皿	6.4	14.5	5.3	ヨコナ・タテナ	指揮・ナデ	淡黃褐色 精良	2	保存あり
105	888	E-1	SF		皿	8.1	12.0		ヨコナ	指揮・ナデ	褐色 6mm粒	4	
105	889	E-1	SF		皿	17.4			ヨコナ	ハケメ・ナデ	褐色 2mm粒	4	
105	890	E-1	SF		底盤	14.8	16.0		ヨコナ・ヨコナ・タテナ	ハケメ・ヨコナ・タテナ	淡黄色 2mm粒	3	
105	891	E-1	SF		付鉢	12.1	14.2	11.6	タタキ・ハラダ・ハラ	ハケメ・ハラダ	に赤い黄褐色 2mm粒	2	

回	No.	出土地点	器形	調査				地土	地 質 成 分	赤 彩 外 面 内 面	備考			
				区	土器部	位置	層位	器高	口径	底径	外面	内面		
105	892	E-I	SF	支脚	9.2	8.2	12.4	平行タキツ	指押+ナデ	灰灰褐色	2mm砂粒	4		
105	893	E-I	SF	支脚	9.5	5.0	9.9	平行タキツ	指押+ナデ	にふい・黄褐色	2mm砂粒・黑色	2		
105	894	E-I	SF	器台	20.3	16.0	18.6	ケメーナデ	ハケメ+ナデ	にふい・黄褐色	2mm砂粒・白色	2		
106	895	E-I	SG	手捏	3.3	6.8			指押	にふい・黄褐色	2mm砂粒・黑色	2		
106	896	E-I	SG	面	4.2	14.0			指押	にふい・黄褐色	2mm砂粒・鐵礫岩	2		
106	897	E-I	SG	高付仔 鉢	6.4	9.6	5.0	角押+ナデ+ハケメ	指押+ナデ	相色にふい・黒 色	2mm砂粒	2		
106	898	E-I	SG	脚+鉢		11.0	ケメ	ハケメ		鐵礫岩粉・黑色	4			
106	899	E-I	SG	面		19.6		指押さ+ハケメ	ハケメ	にふい・褐色	2mm砂粒・鐵礫岩	2	保付鉢	
106	900	E-I	SA	面		20.4		ハケメ	ハケメ	にふい・褐色	1mm砂粒・鐵礫岩	2		
106	901	E-I	SC	面	15.9	14.6	14.0	ハケメ+ハラ工抜	ハケメ+ハラ工抜	灰灰褐色	2mm砂粒・黑色	2	伴れあり	
106	902	E-I	SC	面		52.4		横ナデ+ハケメ	ハケメ	相色	4mm砂粒	2	安附に副陶文	
107	903	E-I		面部 上縁				ハケメ	ハケメ	相色	1mm砂粒+赤色 粘土+雲母	2		
107	904	E-I		四 赤色土	面			鐵皮底(タキキ)	ナデ	灰黄色	純白・鐵皮黒色	4	半周系	
107	905	E-I		下 赤土層	支脚	10.2	5.2	10.0	角押+ナデ	指押+ナデ	灰黄色	1mm砂粒	2	
107	906	E-I	SY	面	32.3	26.5	25.0	ケメ	ハケメ	3mm砂粒	2			
107	907	E-I	SW	面	36.0			ナデ	ナデ	浅黃褐色	3mm砂粒	2		
108	908	E-I	SK	面	18.0			ハケメ	ハケメ+ナデ	明褐色	3mm砂粒	2		
108	909	E-I	SK	面	25.0			ナデ+指押	ナデ+指押	明赤褐色	3mm砂粒	2	深付鉢	
108	910	E-I	SK	面	13.4	11.6	2.7	ナデ+指押	ハケメ+ナデ+指押	相色	2mm砂粒・赤色	2		
108	911	E-I	SK	面		9.0	ケメ		ナデ	浅黃褐色	3mm砂粒	2	他或後乳	
108	912	E-I	SK	面		3.8	ナデ	ハケメ	ハケメ	にふい・褐色・黃 色	3mm砂粒	2		
108	913	E-I	SK	面		8.1	摩減+ハケメ	ナデ+指押	ナデ	浅褐色	3mm砂粒+赤色	2		
108	914	E-I	SK	面		8.0	子目タキキ	ナデ	ナデ	鐵灰色	1mm砂粒+雲母	2		
108	915	E-I	SK	脚+鉢		12.0	ケメ	ハケメ	ハケメ	にふい・褐色	3mm砂粒+赤色	2		
108	916	E-I	SK	鉢		4.0	ハケメ	ナデ+指押さえ	ナデ+指押	にふい・黃褐色 灰褐色	3mm砂粒+雲母	2		
108	917	E-I	SK	鉢		11.5	26.8	スジ+ケメ	ハケメ+板ナデ	にふい・黃褐色	2mm砂粒	2		
108	918	E-I	SK	器台	17.9	11.0	12.4	ナデ	ナデ+指押	にふい・黃褐色	3mm砂粒+褐色	2		
108	919	E-I	SK	器台		16.0	ハケメ	ハケメ		相色	2mm砂粒+雲母	2		
108	920	E-I	SK	器台		11.0		ハケメ	ハケメ+ナデ+指押	にふい・褐色	1mm砂粒+雲母	2		
108	921	E-I	SK	器台	22.5	15.0	19.2	ナデ+ハケメ	ナデ+指押	にふい・黃褐色	2mm砂粒+雲母	2		
108	922	E-I	SK	面										
109	923	E-I	SY	面	38.0	ナデ+ハケメ	ヨコナデ+ナデ			にふい・黃褐色	2mm砂粒+雲母	2	又ス付着	
109	924	E-I	SY	面	30.0	ヨコナデ+ハケメ	ヨコナデ+ハケメ			にふい・褐色	2mm砂粒・赤色	2	保付面	
109	925	E-I	SY	面	32.6	ヨコナデ+ナデ	ヨコナデ+ナデ			にふい・黃褐色	2mm砂粒+雲母	2		
109	926	E-I	SY	高杯	28.4					泥斑	1mm砂粒+雲母	2	?	
109	927	E-I	SY	面	26.1	21.3	7.3	ヨコナデ+ハケメ	ヨコナデ+ナデ	にふい・褐色	1mm砂粒+兩面石 雲母	2	覆付面	
109	928	E-I	SY	面	27.5	22.2	7.6	ヨコナデ+ハケメ	ナデ+指押	にふい・褐色	2mm砂粒	2		
110	929	E-I	SY	面	25.9	8.2	ハケメ	ナデ+ヨコナデ	ナデ+ヨコナデ	にふい・褐色	2mm砂粒・赤色	2		
110	930	E-I	SY	面	37.6			ヨコナデ	ヨコナデ	にふい・黃褐色	1mm砂粒	2	?	
110	931	E-I	SY	面	29.2			横ナデ+ハケメ+横ナデ	ヨコナデ	に黄褐色	1mm砂粒+雲母	2	内部黒化	
110	932	E-I	SY	面	33.1	31.0	9.0	ハケメ	ナデ+ヨコナデ+ヘラナ ゲ	相色	2mm砂粒・赤色	2	すす付着	
110	933	E-I	SY	面	40.0	ヨコナデ+ハケメ	ヨコナデ+ナデ			2mm砂粒・合母	2	保付面		
110	934	E-I	SY	面	30.5	26.2	8.8	ヨコナデ+ハケメ	ナデ+指押	浅黃色	1mm砂粒+赤色	2	保付面	
111	935	E-I	SY	面	32.8	ヨコナデ+ハケメ	ヨコナデ+ナデ			にふい・褐色	2mm砂粒・合母	2	保付面	
111	936	E-I	SWY	面	28.2	ナデ+摩減	ナデ+摩減			にふい・褐色	1mm白色+褐色	2	△	
111	937	E-I	SY	面	25.0	ヨコナデ+ハケメ	ヨコナデ+板ナデ			に黄褐色	2mm砂粒+雲母	2		
111	938	E-I	SY	面	25.0	ヨコナデ+ハケメ	ヨコナデ+ナデ			にふい・褐色	1mm砂粒+雲母	2	保付面	
111	939	E-I	SY	面	32.4	24.9	7.3	ハケメ+摩減	ナデ+指押	にふい・褐色	2mm砂粒+赤色	2	保付面	
111	940	E-I	SY	面	54.5	38.7	10.7	ヨコナデ+ハケメ	ナデ	相色	砂粒	2		
112	941	E-I	SY	面	35.0	22.0	7.6	ヨコナデ	ヨコナデ+ナデ+指押	にふい・黃褐色	2mm砂粒+雲母	2		
112	942	E-I	SY	面	30.0			ハケメ	ハケメ	にふい・黃褐色	1mm砂粒+雲母	2	脚下部に既成後 壁	
112	943	E-I	SY	鉢				平行タキツ	摩減	相色	2mm白色+小孔 砂粒	2		
112	944	E-I	SY	面	13.6	毛打牛	シボリ+ナデ			にふい・褐色	2mm砂粒+褐色	2	?	
112	945	E-I	SY	面	9.6	毛打牛	シボリ+ナデ			にふい・黃褐色	1mm砂粒	2	?	
112	946	E-I	SY	面	10.4	毛打牛	ナデ+指押			明赤褐色	1mm砂粒+褐色	2	○ ?	
112	947	E-I	SY	面	8.2	ナデ	ナデ+指押			明赤褐色	1mm砂粒+褐色	2	○ ○	
112	948	E-I	SY	鉢	6.2	10.9	8.6	ハケメ	ナデ	にふい・黃褐色	1mm砂粒+褐色	2		
112	949	E-I	SY	鉢	5.0	9.0	3.5	ヨコナデ+ハケメ	板ナデ+ナデ	灰褐色	鐵礫砂粒	2		
112	950	E-I	SY	鉢	4.6	16.4	4.6	ヨコナデ+ハケメ	ハケメ	にふい・黃褐色	1mm砂粒+雲母	2		
112	952	E-I	SY	鉢	10.1	17.5	4.6	ヨコナデ+ハケメ	ミガキ	相色	1mm砂粒+雲母	2		
112	953	E-I	SY	鉢	11.5	11.8	11.5	ナデ	ナデ	にふい・黃褐色	1mm砂粒+雲母	2	○ ○	

図	No.	出土地点				調査			色調	胎土	赤彩 或 内面	備考		
		区	土器部	位置	層位	器形	高さ	口径	底様	外面	内面			
112	954	E-I	SY	器	器	7.5	27.0	5.8	摩滅	ヨコナデ・ナデ	にふ・黄褐色 合模痕	2mm砂粒・赤褐色 合模痕	2	
112	955	E-I	SY	器	器	9.7	26.8	6.1	ハケメ	ナデ	にふ・黄褐色	2mm砂粒・赤褐色 合模痕	2	
112	956	E-I	SY	器	器	10.8	27.4	5.7	ハケメ・ナデ	ナデ	にふ・黄褐色	1mm砂粒・赤褐色 合模痕	2	
113	957	E-I	SY	器	器	26.0	摩滅	ナデ	にふ・黄褐色	1mm砂粒・赤褐色 合模痕	2			
113	958	E-I	SY	器	器	26.0	摩滅	ミガキ	ミガキ	にふ・黄褐色	1mm砂粒・赤褐色 合模痕	2		
113	959	E-I	SY	器	器	31.4	モリ牛	モリ牛	モリ牛	モリ牛	にふ・黄褐色 明黄色	薄細白色・雲母	2 ○ ○	
113	960	E-I	SY	器	器	28.4	摩滅	モリ牛	モリ牛	モリ牛	モリ牛	1mm砂粒・褐色 合模痕	2	
113	961	E-I	SY	器	器	12.0	モリ牛	ミガキ・ナデ	モリ牛	モリ牛	モリ牛	1mm砂粒・褐色 合模痕	2	
113	963	E-I	SY	器	器	21.3	モリ牛	ナデ	モリ牛	モリ牛	モリ牛	1mm砂粒・褐色 合模痕	2 ?	
113	964	E-I	SY	器	器	19.4	10.4	10.2	ナデ	ナデ	にふ・黄褐色	2mm砂粒・雲母	2	
113	965	E-I	SY	器	器	9.8	ナデ・押押	ナデ・押押	ナデ・押押	ナデ・押押	ナデ・押押	1mm砂粒・赤褐色 合模痕	2	
113	966	E-I	SY	器	器	15.7	8.4	12.6	ナデ	ナデ	にふ・黄褐色	1mm砂粒・雲母	2	
113	967	E-I	SY	器	器	16.2	9.2	11.6	ハケメ	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	1mm砂粒・雲母・角 型石	2	
113	968	E-I	SY	器	器	15.3	10.2	12.2	ハケメ・ナデ	ナデ	にふ・黄褐色	2mm砂粒	2	
113	969	E-I	SY	器	器	9.6	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	にふ・黄褐色	1mm砂粒	2	
113	970	E-I	SY	器	器	9.6	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	にふ・黄褐色	1mm砂粒	2	
113	971	E-I	SY	器	器	15.6	12.7	10.1	ハケメ	ナデ・押押	ナデ・押押	1mm砂粒・褐色 合模痕	2	
113	972	E-I	SY	器	器	13.6	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	1mm砂粒・雲母	2	
113	973	E-I	SY	器	器	11.7	10.2	11.6	ハケメ	ナデ	にふ・褐色	1mm砂粒・雲母	2	
114	974	E-I	SZ	器	器	46.8	37.2	12.0	ヨコナデ・ハケメ	ナデ・押押	ナデ・押押	1mm砂粒・雲母	2 保付番	
114	975	E-I	SZ	器	器	28.9	25.6	7.1	ヨコナデ・ハケメ	ナデ・押押	ナデ・押押	1mm砂粒・赤褐色 合模痕	2	
114	976	E-I	SZ	器	器	28.3	24.4	7.1	ヨコナデ・ハケメ	ナデ・押押	ナデ・押押	1mm砂粒・褐色 合模痕	2	
114	977	E-I	SZ	器	器	29.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	1mm砂粒・雲母・角 型石	2	
114	978	E-I	SZ	器	器	25.1	7.9	12.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	ナデ	1mm砂粒・褐色 合模痕	2	
114	979	E-I	SZ	器	器	8.7	ハケメ	ナデ	ナデ	ナデ	明赤褐色	1mm砂粒・褐色 合模痕	2	
115	980	E-I	SZ	器	器	24.6	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	明赤褐色	2mm砂粒・雲母	2 保付番
115	981	E-I	SZ	器	器	27.8	ハケメ・摩滅	ナデ・摩滅	ナデ・摩滅	ナデ・摩滅	ナデ・摩滅	1mm砂粒	2	
115	982	E-I	SZ	器	器	23.6	7.3	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	にふ・黄褐色	1mm白色・赤褐色 2mm砂粒・雲母・角 型石	2 保付番	
115	983	E-I	SZ	器	器	24.8	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	1mm砂粒・雲母	2 保付番	
115	984	E-I	SZ	器	器	23.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	1mm砂粒	2 保付番	
115	985	E-I	SZ	器	器	25.4	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	1mm砂粒・赤褐色 合模痕	2	
115	986	E-I	SZ	器	器	25.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	にふ・褐色	1mm砂粒・雲母	2 保付番
115	987	E-I	SZ	器	器	23.0	19.1	9.2	モリ牛	ナデ	にふ・黄褐色	明赤褐色	2mm砂粒・雲母	2
115	988	E-I	SZ	器	器	8.2	ハケメ	ナデ	ナデ	ナデ	にふ・黄褐色	1mm砂粒・雲母	2 保付番中央後側 丸孔	
115	989	E-I	SZ	器	器	7.5	ハケメ	ナデ・押押	ナデ・押押	ナデ・押押	ナデ・押押	1mm砂粒・雲母	2	
116	990	E-I	SZ	器	器	69.3	64.4	13.2	ミガキ・ナデ	ナデ・押押	ナデ	1mm砂粒	2	
116	991	E-I	SWZ	器	器	7.5	ミガキ・摩滅	摩滅	摩滅	摩滅	にふ・赤褐色	1mm砂粒	2 口縁欠	
116	992	E-I	SZ	器	器	6.5	モリ牛	ナデ・押押	ナデ・押押	ナデ・押押	ナデ	1mm砂粒・褐色 合模痕	2 △ △ 部に欠け、腹下 部に複数丸孔	
116	993	E-I	SZ	器	器	6.0	ミガキ	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	明赤褐色・褐色 合模痕	2 □ □	
116	994	E-I	SZ	器	器	69.1	ヨコナデ	ナデ	ナデ	ナデ	にふ・黄褐色	3mm砂粒・雲母	2	
116	995	E-I	SZ	器	器	30.5	ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	1mm白色・赤褐色 2mm砂粒・雲母	2	
116	996	E-I	SZ	切削面	切削面	21.5	11.3	6.9	ミガキ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	1mm砂粒・褐色 合模痕	2	
16	997	E-I	SZ	器	器	7.0	モリ牛	ナデ	ナデ	ナデ	明赤褐色	3mm砂粒・雲母	2 ○ ○	
117	998	E-I	SZ	鉢下部	鉢下部	12.9	15.3	8.0	モリ牛	ナデ・押押	ナデ・押押	1mm砂粒・赤褐色 合模痕	2 ? ?	
119	999	E-I	SXZ	器	器	12.2	8.8	5.5	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	ナデ・明赤褐色	1mm砂粒・赤褐色 合模痕	2	
117	1000	E-I	SZ	器	器	10.9	10.1	5.0	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・押押	にふ・黄褐色	1mm砂粒・赤褐色 合模痕	2	
117	1001	E-I	SZ	器	器	7.9	9.7	5.2	摩滅	ナデ	明赤褐色	2mm砂粒・雲母	2	
117	1002	E-I	SZ	器	器	16.2	17.6	9.0	モリ牛	ナデ	にふ・粉色	精良白色・雲母	2 ? △	
117	1003	E-I	SZ?	鉢下部	鉢下部	9.5	19.8	8.6	モリ牛	ナデ	明赤褐色	1mm砂粒	2	
117	1004	E-I	SZ	鉢	鉢	9.8	16.5	6.0	摩滅	ヨコナデ	ナデ	2mm白色・赤色・雲 母	2 ? ○	
117	1005	E-I	SZ	鉢	鉢	10.2	17.8	9.2	ナデ	ナデ	にふ・粉色	2mm砂粒・赤褐色 合模痕	2	
117	1006	E-I	SZ	鉢	鉢	4.4	12.2	4.5	ヨコナデ・ナデ	ナデ	にふ・黄褐色	1mm白色・雲母	2	
117	1007	E-I	SZ	鉢下部	鉢下部	6.5	11.6	6.2	ヨコナデ・ハケメ	ナデ	明赤褐色	1mm砂粒	2	
117	1008	E-I	SZ	鉢	鉢	9.0	16.6	7.0	摩滅	ナデ	にふ・粉色	1mm砂粒・赤褐色 合模痕	2	
118	1009	E-I	SZ	器	器	31.4	26.4	16.6	モリ牛	ミガキ・ボロナデ	ミガキ・ボロナデ	明赤褐色 合模痕	2	
118	1010	E-I	SZ	器	器	32.0	27.8	17.7	モリ牛	ミガキ・ハケメ・しほり	ミガキ・ハケメ・しほり	2mm砂粒・赤褐色 合模痕	2 ○ ○ 部は全面赤彩	
118	1011	E-I	SZ	器	器	10.2	28.0	22.0	モリ牛	モリ牛	モリ牛	2mm砂粒	2 ○ ○	
118	1012	E-I	SZ	器	器	—	—	—	モリ牛	ヨコナデ・ナデ・しほ り	ヨコナデ・ナデ・しほ り	2mm砂粒・赤褐色 合模痕	2 ○	

回	No.	出土地点			調査				地土	被 成 度 外 面 内 面	参考		
		区	土器部	位置	器形	高さ	口径	底径	外面	内面	色調		
118	1013	E-1	SZ	高环	28.1	24.5	16.8	ミガキ・ミガキ	ミガキ・しぶり・ナデ	褐色に少い粒	1mm砂粒・赤色調	2 ○ △ 环部は全面赤色	
118	1014	E-1	SE???	高环	25.6			摩滅	ナデ	褐色・赤褐色	2mm白色粒・青緑	2 ? ?	
118	1015	E-1	SZ	高环				18.8ミガキ	しぶり・ナデ	に少い褐色	2mm砂粒・赤色調	2 ? ?	
119	1016	E-1	SZ	高	13.0	36.8	7.5	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	褐色	3mm砂粒・赤色調	2	
119	1017	E-1	SZ	高	9.5	30.0	5.5	シラメ	ハケメ・ナデ	に少い褐色	3mm砂粒・青緑	2	
119	1018	E-1	SZ	高	11.4	28.7	6.4	ハケメ	ハケメ・ナデ・指揮	に少い褐色	1mm砂粒・青緑	2	
119	1019	E-1	SZ	高	10.2	26.5	5.1	ハケメ	ナデ	に少い褐色	2mm砂粒・赤色調	2	
119	1020	E-1	SZ	高	11.3	28.8	6.4	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	に少い褐色	2mm砂粒・青緑	2	
119	1021	E-1	SZ	高	1.5	8.0	ミガキ	ナデ	明赤褐色	微細白色粒・青緑	2 ○		
119	1022	E-1	SZ	高	2.0	11.2	1.8	ミガキ	ミガキ・ナデ	褐色	2mm砂粒・赤色調	2	
119	1023	E-1	SZ	窓附	18.1	10.8	12.8	横テナデ・ハケメ	ナデ・横ナデ	褐色	1mm砂粒・赤色調	2	
119	1024	E-1	SZ	窓附	13.5	9.7	11.8	シラメ	ナデ	に少い黄褐色	1mm砂粒・青緑	2	
119	1025	E-1	SWZ	窓附	15.0	9.6	14.0	シラメ	ハケメ・ナデ	褐色	1mm砂粒・青緑	2	
119	1026	E-1	SZ	窓附	16.0	9.7	14.0	シラメ・ナデ	ナデ・横ナデ	褐色	2mm砂粒・青緑	2	
119	1027	E-1	SZ	窓附	16.3	10.7	12.5	シラメ・ナデ	ナデ・横ナデ	赤泥褐色	2mm砂粒・青緑	2	
119	1028	E-1	SZ	窓附	17.2	10.2	13.0	シラメ・ナデ	ナデ	褐色	2mm砂粒	2	
119	1029	E-1	SZ	窓附	16.7	10.3	13.0	シラメ・ナデ	ナデ・横ナデ	に少い褐色	2mm砂粒・青緑	2	
119	1030	E-1	SZ	窓附	16.4	10.6	14.2	ヨコナデ・ハケメ	ナデ・横ナデ	に少い黄褐色	1mm砂粒	2	
119	1031	E-1	SZ	腐葉土	17.6	11.6	13.3	シラメ	ハケメ・ナデ	灰褐色	1mm砂粒・青緑	2	
120	1032	E-2		高			22.4	ヨコナデ・ハケメ	ナデ・ケズリ	褐色	2mm砂粒・青緑	2	
120	1033	E-2		高			35.0	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ	に少い褐色	2mm砂粒・赤色調	2	
120	1034	E-2	下腐葉土	高		24.0	ヨコナデ	ヨコナデ・ケズリ	に少い褐色	褐色・微細砂粒	2		
120	1035	E-2	1層	高		25.2	ハケメ	ハケメ	に少い褐色	1mm砂粒・青緑	2		
120	1036	E-2	左下	1層	高	22.2	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ケズリ	灰褐色	1mm砂粒・青緑	2		
120	1037	E-2	下腐葉土	高		25.2	ハケメ	ハケメ	に少い褐色	2mm砂粒・赤色調	2		
120	1038	E-2	左下	1層	高	18.0	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ケズリ	灰褐色	1mm砂粒・青緑	2		
120	1039	E-2	下腐葉土	腐葉土		11.4	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	灰褐色	1mm砂粒・青緑	2		
120	1040	E-2	下腐葉土	高		12.0	ヨコナデ・ハケメ	ナデ・指揮	に少い褐色	1mm砂粒・白色調	2		
120	1041	E-2	上	1層	高	17.6	ナデ	ナデ	に少い褐色	1mm砂粒・赤色調	2		
120	1042	E-2	腐葉土	高		8.5	摩滅	ナデ・シボリ	明闇灰色	1mm砂粒・赤色調	2		
120	1043	E-2	左下	1層	高		6.0	ヨコナデ・ミガキ	ナデ・指揮	褐色	1mm砂粒・青緑	2	
120	1044	E-2	腐葉土	高		8.1	11.4	ミガキ	ミガキ・ナデ	に少い褐色	2mm砂粒・青緑	2	
121	1045	E-2	腐葉土	路		13.6	13.2	ハケメ・ケズリ	ナデ・ケズリ	に少い褐色	2mm砂粒・青緑	2	
121	1046	E-2	1層	路		12.8	17.4	ハケメ	ハケメ・指揮	に少い褐色	2mm砂粒・青緑	2	
121	1047	E-2	1層	路		23.4	ハケメ・ナデ	ハケメ	に少い褐色	2mm砂粒・青緑	2		
121	1048	E-2	1層	路		6.2	13.0	ナデ	ナデ	に少い褐色	2mm砂粒・青緑	2	
121	1049	E-2	1層	高		18.4	ハケメ	ハケメ	に少い褐色	2mm砂粒・青緑	2		
121	1050	E-2	上	1層	高环		11.8	摩滅	ナデ	赤褐色	1mm砂粒・青緑	2	
121	1051	E-2	溝の中	支脚		13.1	8.0	15.1行タキ	ナデ	灰褐色	1mm砂粒・赤色調	2	
121	1052	E-2	腐葉土	支脚		11.6	6.9	9.8	ナデ	ナデ・シボリ	灰褐色	4mm砂粒・赤色調	2
121	1053	E-2	腐葉土	高环		10.8	3.7	ミガキ	シボリ・ナデ	に少い褐色	精良・砂粒	2	
121	1054	E-2	下	上層特器部		5.3	11.3	ナデ	ナデ・指揮	に少い黄褐色	2mm砂粒・黑色調	2	
122	1055	E-2	P1	高		22.4	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	に少い黄褐色	1mm砂粒・青緑	2		
122	1056	E-2	腐葉土	下		18.8	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	灰褐色	1mm砂粒・青緑	2		
122	1057	E-2	3層	跡		6.0	14.8	ミガキ	ミガキ	に少い黄褐色	2mm砂粒・赤色調	2	
122	1058	E-2	腐葉土	跡		7.0	14.0	ハケメ・ケズリ	ハケメ	に少い褐色	1mm砂粒・青緑	2	
122	1059	E-2	腐葉土	下		17.0	ハケメ・倒落	ハケメ	灰褐色	2mm砂粒・赤色調	2		
122	1060	E-2	P3	6.0中	高		6.0	ハケメ	ハケメ・ナデ	褐色	1mm砂粒・赤色調	2	
122	1061	E-2	P2	高		7.2	24.2	7.0ヨコナデ	シボリ・ナデ	に少い褐色	3mm砂粒・青緑	2	
122	1062	E-2	P3	高		7.2	摩滅	シボリ・ナデ	に少い褐色	5mm砂粒・赤色調	2		
122	1063	E-2	上	砂	高	1.5	10.6	摩滅	ナデ・指揮	灰褐色	1mm砂粒・青緑	2 ?	
122	1064	E-2	下	下層下脚	高	11.6	ミガキ	ナデ・シボリ	に少い褐色	2mm砂粒・青緑	2 ○		
122	1065	E-2	左土	砂	高环		19.6	ハケメ・ミガキ	シボリ・ハケメ	に少い褐色	2mm砂粒・赤色調	2	
122	1066	E-2	下	堆積	高环		ハケメ	ナデ	に少い黄褐色	4mm砂粒・青緑	2		
122	1067	E-2	堆積	上	砂			シボリ・ナデ	に少い褐色	3mm砂粒・青緑	2		
122	1068	E-2	堆積	下			9.2	9.2	ナデ	に少い黄褐色	2mm砂粒・青緑	2	
123	1069	E-2	9	高		30.4	ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ・ナデ	に少い褐色	2mm砂粒・青緑	2		
123	1070	E-2	9	路		6.2	12.5	4.0ナデ・指揮	ナデ・指揮	に少い褐色	1mm砂粒・赤色調	2	
123	1071	E-2	9	路			15.0	ハケメ・ナデ	ハケメ	に少い褐色	2mm砂粒・赤色調	2	
123	1072	E-2	9	高环			20.4	ハケメ・ナデ	シボリ・ナデ	褐色	微細白色粒・青緑	2	
123	1073	E-2	9	器台			8.3	ナデ	ナデ・指揮	褐色	1mm砂粒・青緑	2	
123	1074	E-2	9	器台			14.5	ハケメ・平行タキ	ハケメ・ナデ	に少い黄褐色	1mm砂粒・青緑	2	
123	1075	E-2	9	器台			13.5	9.4	11.6ハケメ	ナデ・ハケメ	に少い褐色	2mm砂粒・赤色調	2

回	No.	調査							色調	鉱土	赤彩 或 外 面	備考				
		区	土壤組	位置	層位	器形	器高	口径	底径	外面	内面					
124	1076	E-I			曲					ナ・開底文(タキ)	ハ・斜ナ・ナ・ナ	灰色	粘土・微細黑色粘土	4	平島系	
124	1077	E-I			紙	高台		9.25	6.65	ナ・ナ	斜輪ナ・ナ	灰色	微細白色粘土	1		
124	1078	E-I			紙	高台		7.25	6.65	ナ・ナ	斜輪ナ	浅黃褐色	2mm砂粒・雲母	2		
124	1079	E-I			紙	高台		7.00	6.65	ナ・ナ	斜輪ナ	灰・褐色	微細白・赤色粘土・雲母	2	スタンプあり	
125	1080	E-I			甕	甕	21.6	22.2	7.8	開底	ナ・デ・押	灰黄色	3mm砂粒	2		
125	1081	E-I			甕	甕	25.0	19.4	6.95	ノ・メ	ナ・デ	灰・黃褐色	2mm砂粒・雲母	2		
125	1082	E-I			甕	甕	25.5	22.2	7.69	ノ・メ・摩滅	ナ・デ	灰黃褐色	2mm砂粒・赤色粘土	2		
125	1083	E-I			下刷	甕	32.0	25.3	8.50	ノ・メ・摩滅	ナ・デ	褐色	2mm砂粒	2		
125	1084	E-I			甕	甕	27.9	22.2	7.8	摩滅ナ・ハ・ケメ	摩滅	灰褐色	2mm砂粒・赤色粘土	2		
125	1085	E-I			甕	甕	32.8	24.8	9.00	ノ・メ	ナ・デ	灰・褐色	2mm砂粒・雲母	2	保付箇	
125	1086	E-I			甕	甕	32.0	27.3	8.45	ノ・メ・ハ・ケメ	ココナ・ナ・ナ	褐色	2mm砂粒・雲母	2		
125	1087	E-I			甕	甕	22.4	16.5	5.95	ハ・メ・ナ・テ	ハ・ケメ	灰・褐色	2mm砂粒・雲母	2	保付箇	
126	1088	E-I			甕	甕	16.9			摩滅ナ・ハ・ケメ	ハ・ケメ・ヘラ削	灰・褐色	微細白色粘土・赤色粘土	2	保付箇	
126	1089	E-I			甕	甕	15.5			摩滅	ナ・デ・ヘラ削	褐色	微細白・赤色粘土	2	保付箇	
126	1090	E-I			甕	甕	13.4			ハ・ケメ・ヘラ削	ハ・ケメ	灰・褐色	2mm砂粒・雲母	2		
126	1091	E-I			甕	甕	17.6			摩滅ナ・ハ・ケメ	ハ・ケメ・ヘラ削	灰・褐色	2mm砂粒・雲母	2	保付箇	
126	1092	E-I			甕	甕	16.8			摩滅	ナ・デ・ヘラ削	明赤褐色	2mm砂粒・雲母	2		
126	1093	E-I			甕	甕	17.6			摩滅ナ・ハ・ケメ	摩・ナ・ヘ・ラ削	褐色	微細白色粘土	2		
126	1094	E-I			甕	甕	18.8			ヨ・コ・ナ・デ・ハ・ケメ	ヨ・コ・ナ・デ・ヘ・ラ削	灰・褐色	1mm砂粒・赤色粘土	2		
126	1095	E-I			甕	甕				ハ・ケ・メ・ヘ・ラ・ケ・リ	ハ・ケ・メ	灰黃褐色	3mm砂粒・雲母	2		
126	1096	E-I			甕	甕	18.2			ハ・ケ・メ	ハ・ケ・メ・ヘ・ラ・削	灰・褐色	3mm砂粒・赤色粘土	2		
126	1097	E-I			甕	甕				ナ・デ・ハ・ケ・モ・滅	ナ・デ・摩滅	2				
127	1098	E-I			下刷	曲	21.7	6.25	4.75	ノ・ガ・キ	ミガキ	明赤褐色	3mm砂粒・赤色粘土	2	○○	
127	1099	E-I			甕	甕		6.1		ハ・メ・ミ・ガ・キ	ミ・ガ・キ・ナ・デ	灰・褐色	微細白・赤色粘土	2	△△	
127	1100	E-I			甕	甕	12.9	11.2	6.8	ナ・デ・横ナ・デ	ナ・デ・横ナ・デ	明赤褐色	3mm砂粒・赤色粘土	2		
127	1101	E-I			甕	甕	11.0			ナ・デ	ナ・デ・ヘ・ウ・削	灰褐色	微細白・雲母	2		
127	1102	E-I			甕	甕	27.7			摩滅	摩滅	灰黄色	2mm砂粒・雲母	2	焼成後穿孔あり	
127	1103	E-I			甕	甕	26.0			ハ・ナ・テ	摩・ナ・テ	灰褐色	2mm砂粒・雲母	2		
127	1104	E-I			甕	甕	35.4	16.0	9.95	摩滅ナ・ハ・ケメ	摩・ナ・ハ・ケメ	灰・褐色	2mm砂粒・赤色粘土	2		
127	1105	E-I			甕	甕	27.0			摩滅	摩・ナ・ハ・ケ・リ	灰褐色	2mm砂粒・雲母	2		
127	1106	E-I			甕	甕	15.8			摩滅	ヨ・コ・ナ・デ	ヨ・コ・ナ・デ	微細白色粘土	2	○○	
127	1107	E-I			甕	甕				ナ・デ	ヨ・コ・ナ・デ	灰褐色	2mm砂粒・赤色粘土	3		
127	1108	E-I			甕	甕	17.4			ヨ・コ・ナ・デ	ヨ・コ・ナ・デ	浅黃褐色	2mm砂粒・微細雲母	4		
127	1109	E-I			甕	甕	26.9	11.6	9.00	摩・ナ・ハ・ケメ	ナ・デ・泡	灰・褐色	2mm砂粒・赤色粘土	2		
127	1110	E-I			甕	甕				ハ・ケ・メ	ナ・デ	灰・褐色	2mm砂粒・赤色粘土	2		
128	1111	E-I			手捏	手捏	3.5	8.0		泡	泡	灰褐色	2mm砂粒・微細雲母	2		
128	1112	E-I			甕	甕	7.4	18.6	4.65	ミ・ガ・キ	ミ・ガ・キ	灰・褐色	1mm砂粒・赤色粘土	2	○○	
128	1113	E-I			甕	甕	8.4	17.8	7.00	ナ・ハ・メ	ハ・ミ・ガ・キ	灰・褐色	1mm白色粘土・雲母	2		
128	1114	E-I			甕	甕				ナ・デ	ハ・ケ・メ	灰黃色	2mm砂粒・雲母	2		
128	1115	E-I			甕	甕	10.6	29.7	8.25	摩滅	摩・ナ・テ	灰・褐色	2mm砂粒・雲母	2		
128	1116	E-I			甕	甕		12.2	9.75	ナ・ハ・メ	ハ・ケ・メ	黃灰色	2mm砂粒・雲母	2		
128	1117	E-I			甕	甕	12.6	16.5	7.2	摩滅	ナ・デ	淺黃褐色	1mm砂粒・雲母	2		
128	1118	E-I			甕	甕		26.0		ナ・デ	ナ・デ・ハ・ケ・メ?	褐色	2mm砂粒	2		
128	1119	E-I			甕	甕	12.8	8.7	7.0	ナ・デ	ナ・デ・シ・出	褐色	2mm砂粒	2		
128	1120	E-I			器台			10.8			ナ・デ	ナ・デ	灰褐色	2mm砂粒・赤色粘土	2	
128	1121	E-I			器台		17.7	15.8	18.2	ノ・ケ・メ・ヘ・ラ・ナ・デ	ナ・デ	灰・褐色	2mm砂粒・雲母	2		
128	1122	E-I			器台					ハ・ケ・メ	ハ・ケ・メ	灰・褐色	3mm砂粒・雲母	2		
128	1123	E-I			器台					ハ・ケ・メ	ハ・ケ・メ・ヘ・ラ・ナ・デ	灰・褐色	2mm砂粒・雲母	2		
128	1124	E-I			器台			19.8	14.0	14.7	タ・キ・タ	ハ・ケ・メ	灰・褐色	2mm砂粒・雲母	2	
128	1125	E-I			支拂		10.8	9.0	14.0	平行タ・キ・タ	ナ・デ	灰・褐色	3mm砂粒・雲母	2		
128	1126	E-I			甕	甕	8.2	26.9		摩滅	ナ・デ	灰・褐色	3mm砂粒・赤色粘土	2		
128	1127	E-I			甕	甕	9.6	25.2	6.65	ナ・ハ・メ	ナ・デ	灰・褐色	微細白色粘土・雲母	2		
128	1128	E-I			甕	甕		25.6		摩滅	ハ・ミ・ガ・キ	灰・褐色	2mm砂粒・赤色粘土	2	△○	
128	1129	E-I			甕	甕		7.0		摩滅	シ・ボ・リ・ナ・デ	灰黄色	3mm砂粒・雲母	2		

5 自然科学分析

当調査区では自然流路 S D 01 より多くの自然遺物が出土した。本章では、株式会社古環境研究所に委託して行った自然化学分析の報告を掲載する。実施した分析は次のとおりである。

○ 放射性炭素年代測定

I 区から出土した自然木・種実及び II 区で出土した船材の一部と思われる木製品である。それぞれの資料の位置や層位については報告中の表 1 の下部に追加説明を加えた。

○ 種実同定

S D 01 では、各地点・各層ごとに、一定量の土壤を篩いにかけ、種実の取得を行った。文中に区名の記載があるものは、おむね篩いにかけた土壤中から出土したもので、他は、各層（時代）から出土したものである。

○ 花粉分析および植物珪酸体分析

No. 1 ベルト（文中では 1 号ベルトと記載）・C ~ E - 3・4 区間ベルト（同 2 号ベルト）・C ~ E - 5・6 区間ベルト（同 3 号ベルト）の 3 本のベルトから各層（時代）ごとに土壤を採集し、両分析を行った。以下、その報告である。なお、一部原文を変え、表・図の番号等は、本報告書の番号とは統一せず、本章の中での番号としている。

元岡・桑原遺跡群第 42 次調査における自然化学分析

株式会社 古環境研究所

I 放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去の大気中の ^{14}C 濃度は一定ではなく、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学の成果などを利用した較正曲線により ^{14}C 年代から曆年代に換算する必要がある。

2. 試料と方法

注) No. 1・2 は別地点の資料

試料名	地点・層準	種類	前処理	測定法
No. 3	II 区出土、木製品	木材	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No. 4	B 1 区、弥生下腐葉土（種実 No. 6）	種実	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No. 5	E 6 区右下、弥生下（種実 No. 8）	種実	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No. 6	D 5 区右下、下部腐葉土（種実 No. 9）	種実	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No. 7	地山下出土自然木	樹木	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No. 8	下層出土自然木、X-3 区	樹木	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS

AMS：加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

3. 測定結果

表 1 に放射性炭素年代測定結果および曆年較正結果を示し、図 1 に曆年較正結果（較正曲線）を示す。

(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化することで同位体分別効果を補正する。

(2) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在 (AD1950 年基点) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は 5,730 年であるが、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いた。

(3) 曆年代 (Calendar Age)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正することで、より実際の年代値に近づけることができる。曆年較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴの U/Th (ウラン / トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した (較正曲線データは IntCal04、較正プログラムは OxCal3.1)。

曆年代は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅で示し、OxCal3.1 の確率法により 1σ (68.2% 確率) と 2σ (95.4% 確率) で示した。較正曲線が不安定な年代では複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。() 内の % 表示は、その範囲内に曆年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

表 1 放射性炭素年代測定結果

試料名	測定番号 PED-	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (年BP)	曆年代	
				1σ (68.2% 確率)	2σ (95.4% 確率)
No.3	9955	-29.51±0.43	2095±30	170BC(60.6%)90BC 70BC(7.6%)50BC	200BC(95.4%)40BC
No.4	9956	-26.47±0.14	2480±25	760BC(13.8%)720BC 700BC(3.7%)680BC 670BC(50.7%)530BC	770BC(93.3%)500BC 440BC(2.1%)410BC
No.5	9957	-28.82±0.12	3055±25	1390BC(68.2%)1295BC	1410BC(95.4%)1260BC
No.6	9958	-25.69±0.19	1760±25	240AD(21.7%)265AD 275AD(46.5%)330AD	210AD(95.4%)390AD
No.7	9959	-25.02±0.24	19110±70	20740BC(68.2%)20530BC	20940BC(95.4%)20440BC
No.8	9960	-30.29±0.16	1925±25	30AD(4.5%)40AD 50AD(43.4%)90AD 100AD(20.3%)125AD	10AD(95.4%)130AD

No. 3 は 2 区出土 (24 年度報告予定) 隣壁状船材 (弥生時代終末頃か)

No. 4 は B-1 区出土種実

No. 5 は E 6 区出土繩文時代晚期層出土種実

No. 6 は D 5 区出土種実

No. 7 は C 5 区地山 (シルト層) 下約 1 m 出土自然木

No. 8 は 2 区 X-3 区出土 (24 年度報告予定) 風化立木 (弥生時代後期?)

4. 所見

加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定の結果、No.3では 2095 ± 30 年BP(BC200~40年)、No.4では 2480 ± 25 年BP(BC770~500, BC440~410年)、No.5では 3055 ± 25 年BP(BC1410~1260年)、No.6では 1760 ± 25 年BP(AD210~390年)、No.7では 19110 ± 70 年BP(BC20940~20440年)、No.8では 1925 ± 25 年BP(AD10~130年)の年代値が得られた。

文献

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy. The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), p.425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.
- Paula J Reimer et al., (2004) IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26.0 ka BP. Radiocarbon 46,p.1029-1058.
- 尾崎大真 (2005) INTCAL98 から IntCal04 へ、学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジア No.3 - 炭素年代測定による高精度編年体系の構築一、p.14-15.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎、日本先史時代の¹⁴C 年代、p.3-20.

II 種実同定

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

2. 試料

試料は、No.1~No.19に区分された選別試料19点である。下記に、試料が採取された地点、層準、種類、年代等を示す。

- No.1 : D 6 区中央、砂礫直上 (縄文時代晚期?)
- No.2 : D 6 区左下、下部腐葉土 (弥生時代後期前半)
- No.3 : D 6 区左上、下部腐葉土 (弥生時代中期後半)
- No.4 : D 6 区左下、最下層 (弥生時代晚期)
- No.5 : D 1・2 区、D 2 区 W 3 付近 (古墳時代初期)
- No.6 : B 1 区、弥生下腐葉土 (縄文時代?) : 年代測定 No.4 (2480 ± 25 年BP)
- No.7 : C 1 区、最下層一括 (縄文時代晚期?)
- No.8 : E 6 区右下、弥生下 (縄文時代晚期?) : 年代測定 No.5 (3055 ± 25 年BP)
- No.9 : D 5 区右下、下部腐葉土 (弥生時代中期から後期) : 年代測定 No.6 (1760 ± 25 年BP)
- No.10 : 栗+種子 (弥生時代中期)
- No.11 : 麦大の小粒種子 (弥生時代中期から後期)
- No.12 : 微細種子 (弥生時代中期から後期)
- No.13 : 小種子 (縄文時代?)

- No. 14 : 植物棘状（古墳時代）
No. 15 : 葉（縄文時代晚期）
No. 16 : 葉（縄文時代晚期）
No. 17 : 桃の種状（古墳時代）
No. 18 : 桃の種状（弥生時代中期後半）
No. 19 : 葉（弥生時代中期）

3. 方法

肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4. 結果

（1）分類群

樹木 33、草本 22 の計 55 分類群が同定された。学名、和名および粒数を表 1 に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

〔樹木〕

イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* K.Koch 種子（完形・破片） イヌガヤ科
茶褐色で長楕円形を呈す。表面には顆粒状の隆起がある。断面は両凸レンズ形である。
狭楕円体や長楕円体を呈する。側面では、基部は鈍隆条、先端の方は鋭い稜に変わる。

ヤマモモ *Myrica rubra* S. et Z. 核（完形・破片） ヤマモモ科
茶褐色で楕円形を呈し、両端がややとがる。一端にへそがあり、表面は粗い。断面は扁平である。

クリ *Castanea crenata* S. et Z. 堅果（破片） ブナ科

堅果は三角状扁円形を呈す。一侧面は円みがあり、反対面は平らな形が多い。両面とも円みがある。
ツブライジイ *Castanopsis cuspidata* Schott. 堅果（破片） ブナ科

堅果は広卵形を呈し、先端に花柱が見られる。

シイ属 *Castanopsis* 堅果（破片）・幼果 ブナ科

堅果は広卵形を呈し、先端に花柱が見られるが堅果のみの破片のため属レベルの同定にとどめた。
幼果は暗灰褐色で、外表面に小さな突起が帶状に並んでいる。

シイ属—コナラ属 *Castanopsis — Quercus* 堅果（破片） ブナ科

ツブライジイとイチイガシ両方出土しており破片でありために鑑別できないためシイ属—コナラ属とした。

イチイガシ *Quercus gilva* Blume 堅果（破片） ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、先端に明瞭な花柱を持つ。花柱の先端は直上かやや内側に向き、殻斗壁が厚い。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* 堅果（破片）・殻斗・幼果 ブナ科

堅果は広卵形を呈し、先端に花柱が見られるが破片のため亜属レベルの同定にとどめた。

殻斗は黒褐色でゆるやかな椀状を呈し、輪状紋がある。

幼果は黒褐色で輪状紋の殻斗に包まれている。上端は花柱が突出している。

なお、殻斗に輪状紋をもつコナラ属アカガシ亜属で基部から先端に向かって直線的な椀状を呈する

ものをイチイガシとした。

コナラ属 *Quercus* 堅果(破片) ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。この分類群は殻斗欠落し堅果のみの破片のため、属レベルの同定にとどめた。

ムクノキ *Aphananthe aspera* Planch. 核(完形・破片) ニレ科

淡褐色で広卵形を呈し、一端に白色の突起がある。表面には微細な網目模様がある。一側面は挾倒卵形で厚く、他方は稜になつて薄い。

クスノキ *Cinnamomum camphora* S. 種子(完形・破片) クスノキ科

黒褐色で球形を呈す。一条の稜線が走りその中央が突起する。

クスノキ科 Lauraceae 種子

黒褐色で球形を呈し、一条の稜線が走りその中央が突起する。

モモ *Prunus persica* Batsch 核(完形・半形・破片) バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

キイチゴ属 *Rubus* 核 バラ科

淡褐色でいびつな半円形を呈す。表面には大きな網目模様がある。

イヌザンショウ *Zanthoxylum schinifolium* S. et Z. 種子(完形・破片) ミカン科

種子は黒褐色で楕円状球形を呈す。側面に長く深いへそがある。表面にやや大きな網目模様がある。

センダン *Melia azedarach* var. *subtripinnata* Miq. 核 センダン科

黒褐色で楕円形を呈し、一端は円孔となる。縦に5本の発達した稜が走る。

アカメガシワ *Mallotus japonicus* Muell. et Arg. 種子 トウダイグサ科

黒色で球形を呈し、「Y」字状のへそがある。表面にはいぼ状の突起が密に分布する。

モチノキ *Ilex integra* Thunb. 核 モチノキ科

浅赤黄色で楕円形を呈し、V字状の溝があり、縁は鋭く光沢はない。鋭い隆条や凹凸が多く、粗面。

ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. 種子(破片) ムクロジ科

灰黒色で円状球形を呈し、線形のへソがみられる。

アワブキ属 *Meliosms* 種子 アワブキ科

黒褐色で横長の楕円形を呈す。表面には縦方向に深い筋が走る。

ウドカズラ *Ampelopsis lecoquoides* Planch. 種子 ブドウ科

茶褐色で卵形を呈し、先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある。表面には隆起がある。

ブドウ属 *Vitis* 種子(完形・破片) ブドウ科

茶褐色で卵形を呈し先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある。

ホルトノキ属 *Elaeocarpus* 核(完形・破片) ホルトノキ科

黄褐色で長卵形を呈す。表面には不明瞭で微細な凸凹がある。

ヤブツバキ *Camellia japonica* L. 果実(破片) ツバキ科

果実は三片に分かれたものである。黒色で楕円形を呈し、両端がややとがる。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. 種子(完形・破片) ツバキ科

広卵状円形、円形、楕円形などを呈する。へその一端近くは嘴状。側面は挾倒卵形、倒卵形、長楕円形(やや両凸レンズ状)である。

- ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. 種子 ツバキ科
種子は心臓形を呈する。背面は長楕円状・狹3角形状など種々な形がある。どの形もへその方に薄い。へそを中心に楕円形や円形四点による網目模様が指紋状に広がる。
- クマノミズキ *Cornus brachypoda* C. A. Mey. 核(完形・破片) ミズキ科
淡褐色で球形を呈す。表面に一本の広い溝がめぐり、数本の細い縦筋が走る。
- エゴノキ *Styrax japonica* S. et Z. 核(完形・破片) エゴノキ科
黒褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面に3本の溝が走る。
- チシャノキ *Ehretia ovalifolia* Hassk. 核 ムラサキ科
黄褐色で半球形を呈す。表面を数本の溝がめぐり、しわが網目状にある。
- クサギ *Clerodendrum trichotomum* Thunb. 核(完形・破片) クマツヅラ科
暗褐色で倒卵形を呈す。断面は三日月形。腹部の一端には発芽口があり、背面の表面には大きな網目状の模様がある。
- ニワトコ *Sambucus sieboldiana* Blume ex graedn 核(完形・破片) スイカズラ科
黄褐色～茶褐色で楕円形を呈す。一端にへそがある。表面には横方向の隆起がある。
- オオカメノキ *Viburnum furcatum* Blume ex Maxim. 核 スイカズラ科
赤褐色～茶褐色で広卵形を呈す。それぞれ1個の浅い縦溝と深い縦溝があり、斑紋がある。
- ガマズミ属 *Viburnum* 核 スイカズラ科
茶褐色で楕円形を呈す。腹面に1本と背面に2本の溝が走り、下端に小さなへそがある。
- [樹木・草本を含むもの]
- ウコギ科 *Araliaceae* 種子
淡褐色ないし茶褐色で、半月状を呈する。断面は扁平、向軸側はほぼ直線状になり、肺軸側には浅い溝が2～3本走る。表面はざらつく。
- [草本]
- ヘラオモダカ *Alisma canaliculatum* A. Br. et Bouche 果実 オモダカ科
黄褐色で倒卵形を呈す。背部には縦方向に1本の深い溝がある。
- オモダカ属 *Sajittaria* 果実 オモダカ科
淡褐色～黄褐色で歪んだ倒卵形を呈す。周囲は翼状部が傷んでおり、その概形が判別できないため、属レベルの同定にとどめた。
- エノコログサ属 *Setaria* Beauv. 穂 イネ科
穂は茶褐色で楕円形を呈す。表面には横方向の微細な隆起がある。
- イネ科 *Gramineae* 穂
穂は灰褐色～茶褐色で楕円形を呈す。腹面はやや平ら。背面は丸い。表面は滑らかである。
- ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科
黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起があり、基部に4～8本の針状の付属物を持つ。
- スゲ属 *Carex* 果実 カヤツリグサ科
茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。
- カヤツリグサ科 *Cyperaceae* 果実
黄褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

イボクサ *Aneilema Keisak* Hassk. 種子 ツユクサ科

黒褐色～黒色で楕円形を呈す。腹部に一文字状のへそがあり、側面にくぼんだ発芽孔がある。

カナムグラ *Humulus japonicus* Sieb. et Zucc. 種子 クワ科

黒色で円形を呈し、断面は両凸レンズ状である。側面には心形を呈するへそがある。

ミゾソバ *Polygonum thunbergii* S. et Z. 果実(破片) タデ科

黄褐色で三角状広卵形を呈し、基部に小突起がある。表面には微細な網目模様がある。

タデ属 *Polygonum* 果実(完形・破片) タデ科

黒褐色で先端がとがる卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。

カラムシ属 *Boehmeria* 種子 イラクサ科

黄褐色を呈し、ゆがんだ卵形で両端は尖る。表面はざらつき、種皮は厚くやや堅い。

アカザ属 *Chenopodium* 種子 アカザ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝が走る。

マルミノヤマゴボウ *Phytolacca japonica* Makino 種子 ヤマゴボウ科

黒色で扁平楕円形を呈す。一端にくぼみがあり、ここから褐色の突起が出る。表面には光沢があり滑らかで、指紋状の模様がある。

ナデシコ科 *Caryophyllaceae* 種子

黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。

アオツヅラフジ *Cocculus trilobus* DC. 種子 ツヅラフジ科

茶褐色で円形を呈し、中央部は大きくくぼむ。縁は隆起し、隆起上には放射状の模様がある。

ハスノハカズラ *Stephania japonica* Miers 種子 ツヅラフジ科

馬蹄形を呈する。中央部の中心に小さい穴を持つ大型凹みがある。凹みの縁は高く、腎臓状楕円形である。全縁は狭翼状の稜になり、中心部の腎臓状楕円形の縁とは互いに連結する隆条が直角に列生する。

ノブドウ *Ampelopsis brevipedunculata* var. *heterophylla* Hara 種子 ブドウ科

茶褐色で広卵形を呈す。腹面に「ハ」字状の孔が2つあり、背面のカラザは長く伸びる。

セリ科 *Umbelliferae* 果実

淡褐色～黄褐色で楕円形を呈す。果皮はコルク質で厚く弾力があり、片面に3本の肥厚した隆起が見られる。断面は半円形である。

イヌホオズキ *Solanum nigrum* L. 種子 ナス科

黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだへそがある。表面には網目模様がある。

ウリ類 *Cucumis melo* L. 種子(破片) ウリ科

淡褐色～黄褐色で長楕円形を呈し、上端は「ハ」字状にくぼむ。

藤下によると小粒種子(雑草メロン型)、中粒種子(マクワウリ・シロウリ型)、大粒種子(モモルディカ型)がある。

メナモミ *Siegesbeckia pubescens* Makino 果実 キク科

黒色で倒卵形を呈し、上端は切形で、下端は細く曲る。表面は粗く、断面はひし形である。

不明種実：種実ではあるが表面模様が欠落しているため、同定には至らなかった。

不明幼果：未成熟のため鑑別点できず、同定には至らなかった。

不明植物遺体：形態は植物の一部と考えられるが、種実かどうか不明。

刺: バラ科、サンショウ属、ウコギ科などにある。サンショウ属、ウコギ科の刺は比較的大型であり、真っ直ぐなものとやや片寄るものがある。本試料はウコギ科のタラノキ等に類似している。

No 15 葉: いずれも破片であり識別箇所が観察できないため断定できないが、不分裂葉で、葉脈は、主脈、側脈、細脈を有する羽状脈で全縁であるため常緑広葉樹の可能性が示唆される。

No 16 葉: 土付きで、刺がすことが出来ず、1枚ほぼ全形で、後は破片であった。ほぼ全形のものは、不分裂葉で、長さ約4.5cm、幅1.8cmで、葉柄は残っていない。葉脈は、主脈、側脈、細脈を有する羽状脈で大部分の広葉樹が示す。葉縁は、全縁で常緑広葉樹に多い。したがって、ここでは常緑広葉樹の可能性が示唆されるが樹種の特定には至らなかった。

No 19 葉: いずれも破片であり、一番大きく残存するものは、土付きで4.5cm、幅4.0cmであった。先端および葉柄は残っていない。葉脈は、主脈、側脈、細脈を有する羽状脈で全縁であるため常緑広葉樹の可能性が示唆され、No 15、No 16の葉より大型である。

(2) 種実群集の特徴

1) No 1

ヤマモモ 36、ツブライイ 151、シイ属堅果破片多数、幼果 21、イチイガシ 16、コナラ属アカガシ亜属堅果破片多数、幼果 60、殻斗 14、クスノキ 6、ムクロジ 1、アワブキ属 21、サカキ 1、ヒサカキ 1、不明種実 2、不明植物遺体 7が同定された。

2) No 2

ヤマモモ 1327、ツブライイ 1、シイ属一コナラ属堅果破片 2、コナラ属アカガシ亜属殻斗 2、クスノキ 137、クスノキ科 2、キイチゴ属 1、アカメガシワ 9、アワブキ属 26、ウドカラズ 3、ブドウ属 7、サカキ 1、ヒサカキ 1、クマノミズキ 9、エゴノキ 38、クサギ 2、ウコギ科 3、イネ科 1、カヤツリグサ科 1、カナムグラ 2、タデ属 20、アオツヅラフジ 2、ノブドウ 6、ウリ類 1、メナモニ 2が同定された。

3) No 3

ヤマモモ 1609、コナラ属アカガシ亜属堅果破片 1、幼果 1、殻斗 1、クスノキ 58、モモ 2、アカメガシワ 1、アワブキ属 11、ブドウ属 2、サカキ 1、ヒサカキ 2、クマノミズキ 1、エゴノキ 10、カナムグラ 8、タデ属 2、メナモニ 1、不明植物遺体 2が同定された。

4) No 4

ヤマモモ 12、ツブライイ 5、シイ属一コナラ属堅果多数、コナラ属アカガシ亜属幼果 21、殻斗 11、モモ 1、アワブキ属 9、不明幼果 1が同定された。

5) No 5

イヌガヤ 43、モモ 19が同定された。

6) No 6

ヤマモモ 137、イチイガシ 51、コナラ属アカガシ亜属堅果破片多数、幼果 441、殻斗 263、クスノキ 24、センダン 1、モチノキ 1、アワブキ属 171、ホルトノキ 1、サカキ 2、エゴノキ 15、イネ科 1、不明植物遺体 2が同定された。

7) No 7

ヤマモモ 11、イチイガシ 355、コナラ属アカガシ亜属幼果 47、殻斗 64、クスノキ 9、センダン 1、アワブキ属 1、ヤブツバキ 1、エゴノキ 1が同定された。

8) № 8

ヤマモモ 37、ツブライ 14、シイ属 21、コナラ属アカガシ亜属堅果破片多数、幼果 4、殻斗 1、クスノキ 6、アカメガシワ 1、アワブキ属 3、ホルトノキ 2、クマノミズキ 1、エゴノキ 11、クサギ 1、ノブドウ 1 が同定された。

9) № 9

イヌガヤ 1、ヤマモモ 22、コナラ属 2、ムクノキ 4、クスノキ 5、キイチゴ属 6、イヌザンショウ 20、アカメガシワ 1、アワブキ属 2、ブドウ属 18、ヒサカキ 2、クマノミズキ 10、クサギ 7、ニワトコ 3、オオカメノキ 53、ガマズミ属 1、ウコギ科 4、ヘラオモダカ 2、オモダカ属 1、エノコログサ属 1、イネ科 1、ホタルイ属 48、スゲ属 2、カヤツリグサ科 43、イボクサ 8、カナムグラ 74、ミゾソバ 6、タデ属 33、カラムシ属 40、アカザ属 2、マルミノヤマゴボウ 14、ナデシコ科 6、ハスノハカズラ 1、ノブドウ 504、セリ科 2、イヌハウズキ 1 が同定された。

10) № 10

イヌガヤ 1、クリ 5 が同定された。

11) № 11

オオカメノキ 29 が同定された。

12) № 12

チシャノキ 1、ノブドウ 7 が同定された。

13) № 13

ヤマモモ 8、コナラ属アカガシ亜属堅果破片 2、幼果 7、殻斗 18、ヒサカキ 8 が同定された。

14) № 14

刺 30 が同定された。ウコギ科のタラノキ等に類似している。

15) № 15

ヤマモモ 3、葉が同定された。

16) № 16

シイ属一コナラ属堅果破片 5、葉が同定された。

17) № 17

モモ 5 が同定された。

18) № 18

モモ 5 が同定された。

19) № 19

葉が同定された。

5. 種実同定から推定される植生と有用植物

(1) 繩文時代 (№ 1, 6, 7, 8, 13, 15, 16)

ツブライ、イチイガシ、ヤマモモ、クスノキが多く、サカキ、ヒサカキ、モチノキ、ヤブツバキなども認められることから、遺跡周辺にこれらの照葉樹林が分布していたと推定される。種実数が多い№ 1 ではツブライ、№ 7 ではイチイガシ、№ 8 ではヤマモモが多い。ツブライとイチイガシは、アケがほとんどない優良な堅果類であり、ヤマモモも食用となる。一般にツブライはやや乾燥したところ、イチイガシは適潤地、ヤマモモは海岸沿いのやや乾燥したところに生育していることから、採取地点による環境の違いが反映されている可能性も考えられる。アカメガシワ、クサギ、クマノミ

表1 元岡桑原遺跡群第42次発掘調査における種実定結果

分類群		種名	部位	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	No.15	No.16	No.17	No.18	No.19
Aster	イヌタチ	種子						27														
Cyperaceae heterostachys K. Koch	イヌタチ	種子	(繊維)					16														
Mitchella repens L.	ヤマモモ	種子		18	416	538	10		82	11	12							3	3			
Gentianaceae	タリ	種子(繊維)		18	911	1071	2		55	27	10							5				
Gentianella rotundifolia S. et Z.	タリ	種子(繊維)						151	1	3							14					
Gentianopsis ciliolata Schlecht.	ツブライ	種子(繊維)							1								14					
Gentianopsis	シイタケ	種子(繊維)								21							21					
Gentianopsis - Quercus	シイタケ・コナラ属	種子(繊維)		2			[+/-]														5	
Quercus glauca Blume	イチイノシ	種子		18					51	355												
Quercus ilex L.	コナラ属・アガバ属	種子(繊維)		[+/-]	1				[+/-]	[+/-]											2	
Cornaceae	シイタケ	種子(繊維)							60	1	21	441	47	6						7		
Prunus persica Benth.	モモ	種子		14	2	1	11		263	64	1									18		
Prunus	コナラ属	種子(繊維)																		2		
Aphanius apodus Pallas	ムクノホ	種子																1				
Commelinaceae	クスノホ	種子	(繊維)	6	47	14			15	8	4							3				
Loranthaceae	クスノホ科	種子	(繊維)		90	44			9	1	2	5										
Pithecellobium	モモ	種子						2												3	4	
Pithecellobium	モモ	種子	(半形)						3									2				
Rubiaceae	モモイロ属	種子																		1		
Zanthoxylum schinifolium S. et Z.	イヌザンショウ	種子	(繊維)															19				
Melastomaceae L. var. Sabiceastra Miq.	センダン	種子							1	1												
Melastomaceae Muell. et Arg.	センダン	種子	(繊維)		9	1					1	1										
Ericaceae Thunb.	モチノク	種子										1										
Symplocaceae Gomes	ムクノホ	種子(繊維)		1																		
Melastoma	アワガタ属	種子		21	26	11	9		171	1	3	2										
Anisognathus brasiliensis Benth.	ウドリズカウ	種子		3								1										
Frau	ブリの属	種子		6	2							17										
Elaeocarpus oblongus Pur. var. ellipticus Blame	ホルトノキ	種子										1										
Genista japonica L.	ヤツリギの属	種子(繊維)											1									
Genista japonica Thunb.	ヤカニ	種子		1		1						2										
Eurya japonica Thunb.	ヒサカニ	種子		1	1	2						2									8	
Genista frondosa C.A. Mey.	ヤマノミズキ	種子		8	1							10										
Syringa japonica S. et Z.	エゴノキ	種子			1							2										
Eleocharis multiflora Benth.	チシャノキ	種子						38	9		14	9										
Grindelia exaltata Thunb.	カサガリ	種子										21										1
Asplenium nidus L.	アスplenium	種子	(繊維)																			
Asplenium nidus L.	アスplenium	種子	(繊維)																			
Hedera canariensis L.	カナリアグリ	種子																				
Polypodium vulgare L.	モミジバ	種子	(繊維)																			
Polypodium	モミジバ	種子																				
Bartsia	カラムシ属	種子																				
Thlaspi	アカゲノリ	種子																				
Physalis japonica Makino	マル・シマヤマゴボウ	種子																				
Geum urbanum L.	シダレソウ	種子																				
Gentiana scabra Benth.	アオガラフタジ	種子		2																		
Stephanotis japonica Thunb.	ハスルノカズラ	種子																				
Asplenium lyngbyoides var. heterophyllum Blame	ノブリカズラ	種子		6								1	304									
Uncultivated	セリ科	種子																				
Selaginella sibirica L.	イヌスイカズラ	種子																				
Geum urbanum L.	ウリソウ	種子(繊維)		1																		
Ssegmentaria pectinata Makino	メタセコイ	種子		2	1																	
Total	合計			328	1006	1711	59	62	1108	490	103	1160	6	29	8	43	0	3	5	5	0	
Unknown	不明種				2																	
	不明花被					1																
	不明植物遺体			7	2	2												1		1		
	留着																					

ズキは二次林要素でもあることから、部分的に森林植生が二次林化していた可能性も示唆される。

(2) 弥生時代 (No.2, 3, 4, 9, 10, 11, 12, 18, 19)

No.2とNo.3では、ヤマモモが多く、クスノキなど照葉樹も比較的多い。また、人為干渉によって増えるカナムグラ、タデ属、アオツヅラフジ、ノブドウ、メナモミなどの草本もやや多い。No.9では、人為干渉地などに生育するイヌザンショウ、オオカメノキ、クマノミズキ、クサギ、ニワトコがやや多く、水田雜草の性格を持つヘラオモダカ、オモダカ属、エノコログサ属、イネ科、ホタルイ属、スゲ属、カヤツリグサ科、イボクサ、ミゾソバ、人為干渉地に生育するカナムグラ、タデ属、カラムシ属、ノブドウの草本も認められる。遺跡周辺には、おもに照葉樹林が分布していたと考えられるが、人為干渉地やその縁辺に多い樹木や草本、および水田雜草も多くなっており、人里周辺の環境が推定される。

栽培植物としてはウリ類とモモがあり、食用となる有用種実としてはヤマモモ、クリ、ブドウ属、キイチゴ属などがある。No.3ではヤマモモが極めて多いことから、近接してヤマモモが生育したことや種実が投棄されたことが想定される。

(3) 古墳時代 (No.5, 14, 17)

古墳時代については種実が少ないが、栽培植物のモモが認められた。

文献

笠原安夫 (1985) 日本雜草図説、養賢堂、494p.

笠原安夫 (1988) 作物および田畠雜草種類、弥生文化の研究第2巻生業、雄山閣 出版、p.131—139.

金原正明 (1996) 古代モモの形態と品種、月刊考古学ジャーナル No.409、ニューサイエンス社、p.15—19.

南木睦彦 (1991) 栽培植物、古墳時代の研究第4巻生産と流通1、雄山閣出版株式会社、p.165—174.

南木睦彦 (1992) 低湿地遺跡の種実、月刊考古学ジャーナル No.355、ニューサイエンス社、p.18—22.

南木睦彦 (1993) 葉・果実・種子、日本第四紀学会編、第四紀試料分析法、東京大学出版会、p.276—283.

渡辺誠 (1975) 繩文時代の植物食、雄山閣、187p.

III. 花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、自然流路の1号ベルトから採取された試料1（古墳時代）、試料2・試料3（弥生時

代中期)、試料4(縄文時代晚期)、2号ベルトから採取された試料5(古墳時代)、試料6(弥生時代中期)、3号ベルトから採取された試料7(縄文時代晚期)、およびW-3区から採取された試料11(弥生時代中期)の計8点である。

3. 方法

花粉の分離抽出は、中村(1973)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比を行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(ー)で結んで示した。イネ属については、中村(1974, 1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉26、樹木花粉と草本花粉を含むもの5、草本花粉16、シダ植物胞子2形態の計49である。また、寄生虫卵4分類群が認められた。分析結果を表1に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

[樹木花粉]

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亞属、スギ、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、ノグルミ、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属ーアサダ、クリ、シイ属ーマテバサイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属ームクノキ、サンショウ属、モチノキ属、カエデ属、トチノキ、ムクロジ属、ブドウ属、グミ属、モクセイ科、ツツジ科、イスノキ属、スイカズラ属

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科ーイラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属ーガマズミ属

[草本花粉]

ガマ属ーミクリ属、イネ科、イネ属型、コムギ、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、アカザ科ーヒユ科、キンポウゲ属、アブラナ科、チドメグサ亜科、セリ亞科、ナス科、タンボボ亜科、キク亜科、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

単条溝胞子、三条溝胞子

表1 元岡桑原遺跡群第42次発掘調査における植物珪酸体分析結果

学名	俗名	1号ペルト				2号		3号		W-315	
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
Aleurall pollen	稻木花粉					1	1			1	
Palisander	マツ葉										
Buxus	モミ葉		1								
Tsuga	ツガ葉	1		1							
Pinus subgen. <i>Diplostrobium</i>	マツ葉(球果葉)	13	2	6	6	5	10	2	4		
Cyprinus japonicus	スギ	5	2	11	1	4	6	2	1		
Taxaceae-Cephaelisace-Cyperaceae	イチイ科-イヌサボテン科-ヒキ科	1	2	2		5	3	2	2		
Platanus strobus	ノグリ			1							
Betula	ガシノキ葉			2			5		1		
Corylus	ハシバミ葉	2	1	2	6	3	2	8	1		
Carpinus Ostrya japonica	タマシグサ葉-アヤダ	3	1	2	2	1	1				
Castanea crenata	クリ	16	211	91	172	58	236*	21			
Castanopsis fissa	シイ葉-マテバシイ葉	24	26	13	189*	27	29	122			
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ葉-コナラ葉	3	4	4	1	5	2	2			
Quercus subgen. Cyclobalanus	コナラ葉-アカシキ葉	40	38	90	26	29	35	154	5		
Celtis lophophora caprea	ニミキ葉-クシノキ	2	3	29	3	1	13	2			
Zanthoxylum	サンショウ葉			1			1	1			
Ilex	モチノキ葉			2							
Acer	カエデ葉			1							
Aesculus turbinata	トチノキ								1		
Sapindales	ムロジ葉			1							
Fissidens	ブリトリ葉						1	1			
Equisetum	ゲンケ葉	1		3			5	1			
Osmunda	セキセイラン			1			1	1			
Ericaceae	ツツジ科								1		
Daphne	イヌクチ葉										
Lonicera	スイカズラ葉			1							
樹木・草本花粉											
Mimoso-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	6	12	15		22	89	1			
Rosaceae	バラ科			1			1	1			
Lemnaceae	ミズバ科							2			
Araliaceae	ウツボグサ科			1				4			
Sambucus Thunbergii	ニワトコ葉-ガマズミ葉		20			3	1				
非樹木花粉											
Type-Sporogenesis	コマ葉-ミクニ葉			1							
Gramineae	イネ科	36	29	37	1	37	43	1	2		
Oryza type	イネ葉			1			1				
Tetraploid	コシギ							2			
Cyperaceae	カヤツリグサ科	31	11	19		33	9				
Polygonum sect. Persicaria	タデ属-ナエチダ属	1	2	1		3	4				
Ranunculaceae	ゼンゼン科							3			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ユウリ科							1	1		
Ranunculus	キンポウゲ科							9			
Crotonaceae	アブサボ科		8	2			14	4			
Hedysaraceae	ナシメタササ科							2			
Ajaniaceae	セリ花科		4	1	1	5	2	2			
Solenaceae	ナス科			1							
Lecythidaceae	ランボボ科							1			
Asteraceae	キク科	3	3	1		2	2				
Annonaceae	ヨモギ科	109	13	1	4	41	9				
Fern spore											
Monolete type spore	單孔孢子	10	26	28	16	38	19	3	4		
Trilete type spore	三孔孢子	47	19	13	11	92	26	5	3		
Aleurall pollen	南木花粉	124	255	270	97	152	331	327	14		
Aleurall Sphaeroid pollen	南木-草木花粉	27	13	17	4	30	56	1	6		
Sphaeroid pollen	草木花粉	204	73	99	7	162	85	2	9		
Total pollen	花粉总数	352	381	376	416	344	466	381	23		
Pollen frequencies of len ²											
試料1cm ² 中の花粉密度		1.5	3.0	1.9	1.2	2.1	3.5	7.9	1.8		
×10 ³											
Unknown pollen		11	11	9	11	11	5	10	6		
Fern spore		52	66	41	27	130	39	8	7		
Hymenoptera eggs											
Acaridae											
Tetrachidae											
Dipteridae											
Unknown eggs											
Total		0	0	3	0	4	2	0	0		
Hymenoptera eggs frequencies of len ²		0.0	0.0	0.1	0.0	4.5	5.1	0.0	0.0		
試料1cm ² 中の花粉密度						×10 ³	×10 ³	×10 ³	×10 ³		
Dipteridae		(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)		
Classical fragments		(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)		

*乱用

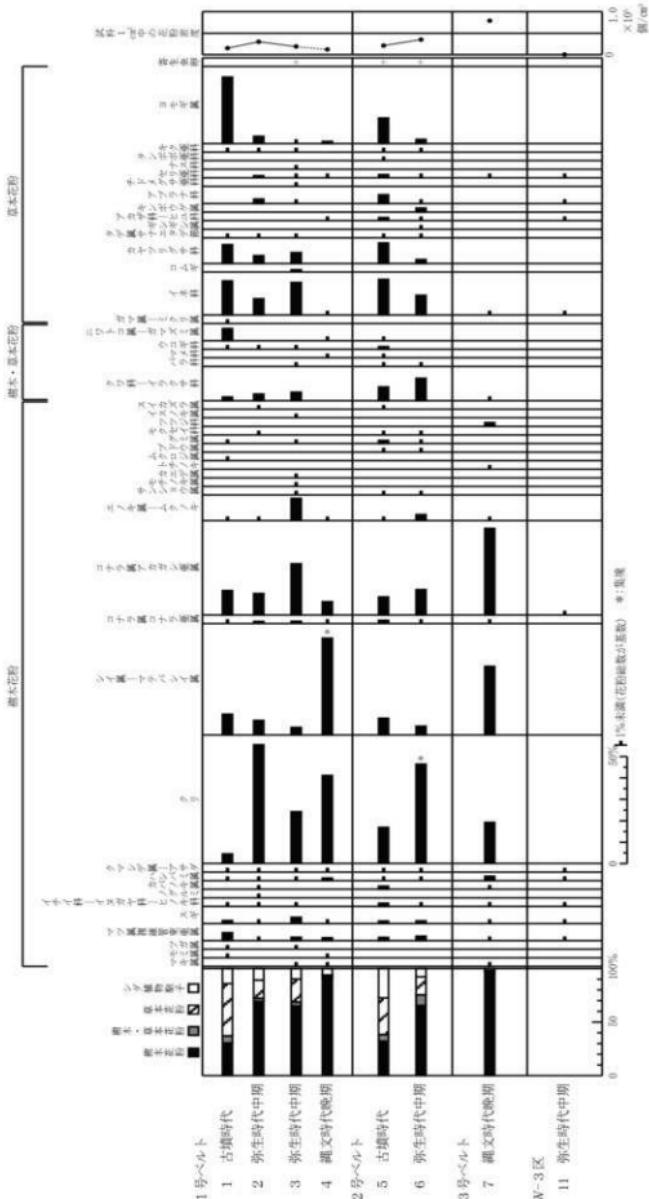


図 1 元岡桑原遺跡群第42次発掘調査における花粉ダイアグラム

[寄生虫卵]

回虫卵、鞭虫卵、マンソン製頭条虫卵、不明虫卵

(2) 花粉群集の特徴

1) 1号ベルト

試料4では、樹木花粉が占める割合が極めて高く、シイ属一マテバシイ属、クリが高率に出現し、コナラ属アカガシ亜属などが伴われる。草本花粉では、ヨモギ属、イネ科、アカザ科ヒユ科、セリ亜科が認められる。試料3では、樹木花粉の占める割合がやや減少する。樹木花粉では、クリ、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属一ムクノキが比較的多く、樹木・草本花粉のクワ科一イラクサ科なども認められる。草本花粉では、イネ科(イネ属型を含む)が比較的多く、カヤツリグサ科、コムギなどが伴われる。また、鞭虫卵、マンソン製頭条虫卵、不明虫卵がわずかに検出された。試料2では、樹木花粉のクリが高率に出現し、シイ属一マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属などが伴われる。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アブラナ科、セリ亜科などが認められる。試料1では、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉ではヨモギ属、イネ科、カヤツリグサ科が比較的多く、樹木・草本花粉のニワトコ属一ガマズミ属も認められる。樹木花粉では、クリが大幅に減少している。

2) 2号ベルト

試料6では、樹木花粉の占める割合が草本花粉より高い。樹木花粉では、クリが高率に出現し(塊あり)、コナラ属アカガシ、シイ属一マテバシイ属、エノキ属一ムクノキなどが伴われる。樹木・草本花粉のクワ科一イラクサ科も認められる。草本花粉では、イネ科が比較的多く、カヤツリグサ科、キンボウゲ属、ヨモギ属などが伴われる。また、回虫卵、鞭虫卵がわずかに検出された。試料5では、樹木花粉と草本花粉の占める割合がほぼ同じになり、シダ植物胞子の占める割合が約30%と高くなる。草本花粉のイネ科(イネ属型を含む)、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アブラナ科などが増加し、樹木花粉のクリが大幅に減少している。また、鞭虫卵、不明虫卵がわずかに検出された。

3) 3号ベルト

試料7では、樹木花粉で占められ、コナラ属アカガシ亜属、シイ属一マテバシイ属、クリが高率に出現する。

4) W-3区

試料11では、マツ属複維管束亜属、コナラ属アカガシ亜属、イネ科(イネ属型を含む)、アカザ科ヒユ科などが検出されたが、いずれも少量である。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

縄文時代晩期の調査区周辺は、おもにシイ属一マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属などの照葉樹林が分布していたと考えられ、近接してクリ林も多く分布していたと推定される。

弥生時代中期になると、イネ科、カヤツリグサ科、クワ科一イラクサ科(生態からカナムグラやイラクサの草本と考えられる)などの草本類が生育する人為地が拡大し、森林植生のうちシイ属一マテバシイ属は大幅に減少したと考えられる。また、イネ属型やコムギが認められることから、周辺で稻

作およびコムギなどの畑作が行われていた可能性が考えられる。なお、少量ながら寄生虫卵の鞭虫卵が認められることから、集落周辺における生活汚染が示唆される。鞭虫は中間宿主を必要とせず、虫卵の付着した野菜・野草の摂取や水系により経口感染する。

W-3区の弥生時代中期の層準では、花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難である。花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられ、水田であれば乾田の環境が想定される。

古墳時代になると、ヨモギ属、イネ科、カヤツリグサ科、アブラナ科、ニワトコ属—ガマズミ属、クワ科—イラクサ科、シダ植物などが生育する日当たりの良い人為地が拡大し、周辺のクリ林は大幅に減少したと推定される。

文献

- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262。
- 島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態、大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p。
- 中村純（1973）花粉分析、古今書院、p.82-110。
- 中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として、第四紀研究、13,p.187-193。
- 中村純（1977）稲作とイネ花粉、考古学と自然科学、第10号、p.21-30。
- 中村純（1980）日本産花粉の標識、大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p.

IV. 植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オ・パール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山、1984）。

2. 試料

分析試料は、自然流路の1号ベルトから採取された試料1（古墳時代）、試料2・試料3（弥生時代中期）、試料4（縄文時代晚期）、2号ベルトから採取された試料5（古墳時代）、試料6（弥生時代中期）、3号ベルトから採取された試料7（縄文時代晚期）、およびW-3区から採取された試料8（古墳時代）、試料9・試料10（弥生時代後期）、試料11（弥生時代中期）の計12点である。このうち、試料1～試料7および試料11の8点は、花粉分析に用いられたものと同一試料である。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピース法（藤原、1976）を用いて、次の手順で行った。

1) 試料を 105°C で 24時間乾燥（絶乾）

2) 試料約 1g に対し直徑約 $40 \mu\text{m}$ のガラスピースを約 0.02g 添加（0.1mg の精度で秤量）

表1 元間桑原遺跡群第42次発掘調査における植物珪酸体分析結果
検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料		1号ベルト		2号ベルト		3号		W-3区			
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
イネ科	Gramineae												
イネ	<i>Oryza sativa</i>			7		5	20		70	155	152	106	138
ムギ類(穀の表皮細胞)	<i>Hordeum-Triticum Husk Phytolith</i>												17
キビ属型	Panicaceae type			7									
ヨシ属	<i>Phragmites</i>				7	5						5	7
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	56	57	47		5	14	7	28	6			5
ウシクサ族A	<i>Andropogoneae A type</i>	14	7	20		11	7	14	14				
タケ亜科	Bambusoideae												
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>				7		14		28		6		
マダケ属型	<i>Phyllostachys</i>										7		
未分類等	Others	7	7	7		11	14	7	21		6	5	
その他のイネ科	Others												
表皮毛起源	Husk hair origin	7	7	13		16			7	31	11	29	26
棒状珪酸体	Rod-shaped	91	7	67		65	14		132	155	90	101	144
茎部起源	Stem origin												7
未分類等	Others	125	128	101	22	131	123	76	111	186	163	174	242
樹木起源	Arboreal												
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>	105	71	74	52	54	102	312	70	74	73	77	85
ブナ科(アカガシ亜属)	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		7	7		11	14	7	7	6	6	10	13
クヌキ科	Lauraceae	14	21	34	7	44	34	42	42	31	6	24	26
マンサク科(イスノキ属)	<i>Dipteridium</i>	14	14	13	7	22	20	7	14		6	14	13
アワブキ科	Sabiaceae	7	21	20	7	11	7	21	14	31	34	14	33
その他	Others	56	43	67	22	93	61	145	83	87	62	68	124
(海綿骨針)	Sponge			7		7				6	6		
植物珪酸体総数	Total	495	405	485	120	885	443	637	647	764	631	632	858

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²·cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.21	0.16	0.60		2.04	4.56	4.47	3.12	4.04			
ヨシ属	<i>Phragmites</i>		0.43	0.34							0.30	0.41	
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.69	0.70	0.59		0.07	0.17	0.09	0.34	0.08		0.06	
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>		0.02		0.04		0.08		0.02				

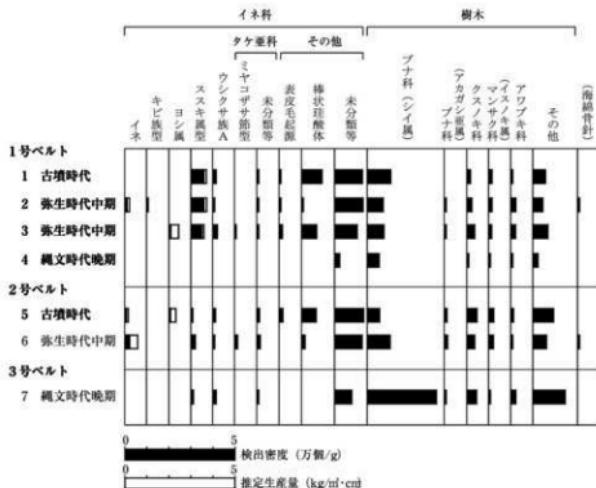
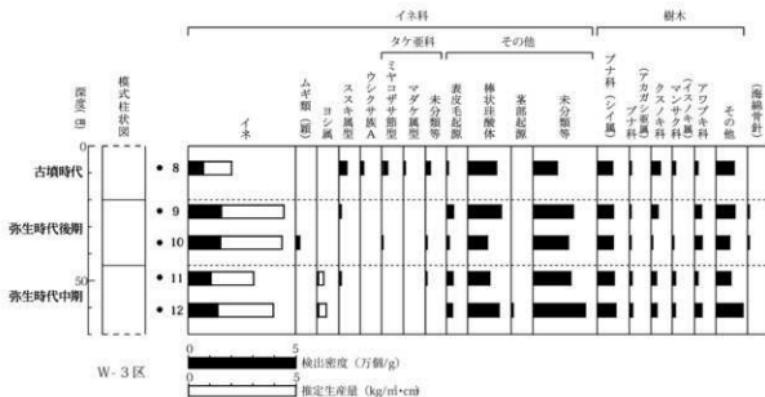


図1 元岡桑原遺跡群第42次発掘調査における植物珪酸体分析結果

- 3) 電気炉灰化法 (550°C・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による 20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 檢鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料 1 g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重 (1.0 と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位: 10 - 5 g) をかけて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる (杉山, 2000)。

4. 分析結果

(1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表 1 および図 1 に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、ムギ類 (穎の表皮細胞)、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型 (おもにススキ属)、ウシクサ族 A (チガヤ属など)

[イネ科ータケ亜科]

ミヤコザサ節型 (ササ属ミヤコザサ節など)、マダケ属型 (マダケ属、ホウライチク属)、未分類等
[イネ科ーその他]

表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

[樹木]

ブナ科 (シイ属)、ブナ科 (アカガシ亜属)、クスノキ科、マンサク科 (イスノキ属)、アワブキ科、その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

1) 1号ベルト

試料 4 では、樹木 (照葉樹) のブナ科 (シイ属)、クスノキ科、マンサク科 (イスノキ属)、アワブキ科などが検出されたが、いずれも比較的少量である。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある (杉山, 1999)。なお、すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく、落葉樹では形成されないものも多い (近藤・佐瀬、1986)。試料 3 から試料 1 にかけては、ススキ属型が比較的多く検出され、ウシクサ族 A なども認められた。また、ブナ科 (シイ属) がやや増加し、試料 2 ではイネやキビ族型も検出された。イネの密度は 700 個/g と低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている 5,000 個/g を下回っている。

2) 2号ベルト

試料6と試料5では、イネ、スキ属型、ウシクサ族Aなどが検出されたが、いずれも少量である。樹木では、ブナ科（シイ属）が比較的多く、ブナ科（アカガシ亜属）、クスノキ科、マンサク科（イヌキ属）、アワブキ科なども認められた。イネの密度は、試料5では500個/gと低い値であり、試料6でも2,000個/gと比較的低い値である。

3) 3号ベルト

試料7では、樹木のブナ科（シイ属）が多量に検出され、ブナ科（アカガシ亜属）、クスノキ科、マンサク科（イヌキ属）、アワブキ科なども認められた。イネ科では、スキ属型、ウシクサ族Aなどが検出されたが、いずれも少量である。

4) W-3区

下位の試料12から試料9にかけては、イネが多量に検出され、樹木のブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属）、クスノキ科、マンサク科（イヌキ属）、アワブキ科なども認められた。イネの密度は106.00～15,500個/gとかなり高い値である。また、試料10ではムギ類（穎の表皮細胞）が1,700個/gと比較的低い密度で検出された。試料8では、スキ属型、ウシクサ族A、ミヤコザサ節型、マダケ属型などが出現している。イネの密度は7,000個/gと高い値である。

5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

縄文時代晩期の調査区周辺は、シイ属、カシ類、クスノキ科、イヌキ属などの照葉樹林が分布していたと考えられ、イネ科の草本類はあまり見られなかったと推定される。

弥生時代中期には、調査区周辺で稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形で自然流路内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。また、W-3区ではイネがかなり多量に検出された。同地点付近では土器が多量に出土しており、ここで稲作が行われていた可能性は考えにくいくことから、何らかの目的で稲藁（イネの茎葉）が集積されていたことが想定される。稲藁の利用としては、屋根材や敷物、藁製品など多様な用途が考えられる。

弥生時代後期から古墳時代にかけては、スキ属などが生育する日当たりの良い草原的なところが見られるようになり、弥生時代後期には稲作に加えてムギ類の栽培も行わっていたと考えられる。当時の遺跡周辺には、シイ属、カシ類、クスノキ科、イヌキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

文献

- 近藤鍊三・佐瀬隆（1986）植物珪酸体、その特性と応用。第四紀研究、25, p.31-63.
杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として一。考古学と自然科学、19, p.69-84.
杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史。第四紀研究、38(2), p.109-123.
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学、同成社, p.189-213.
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－。考古学と自然科学、9, p.15-29.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－。考古学と自然科学、17, p.73-85.

図 版

元岡桑原遺跡第42次発掘調査の種実 I



図版2

元岡桑原遺跡第42次発掘調査の種実 II



元岡桑原遺跡第42次発掘調査の種実 III



図版4

元岡桑原遺跡第42次発掘調査の種実 IV

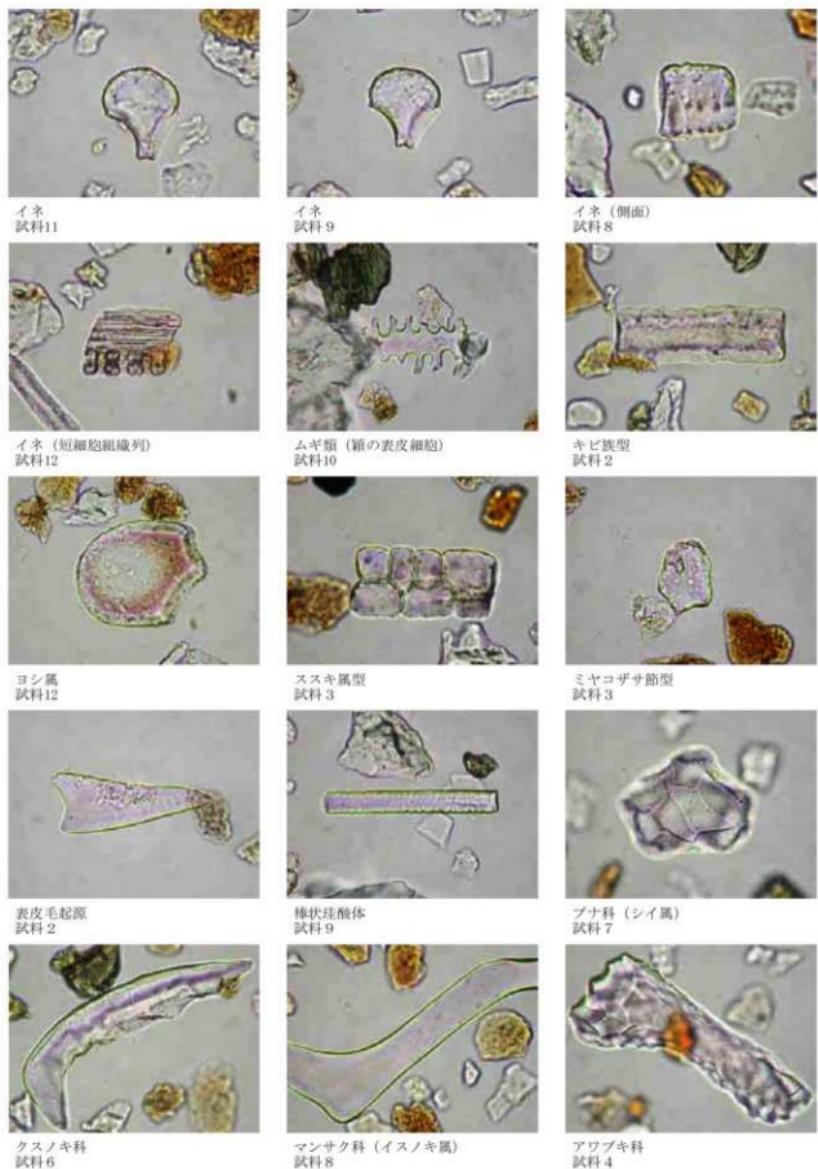


元岡桑原遺跡の花粉・胞子・寄生虫卵



図版 6

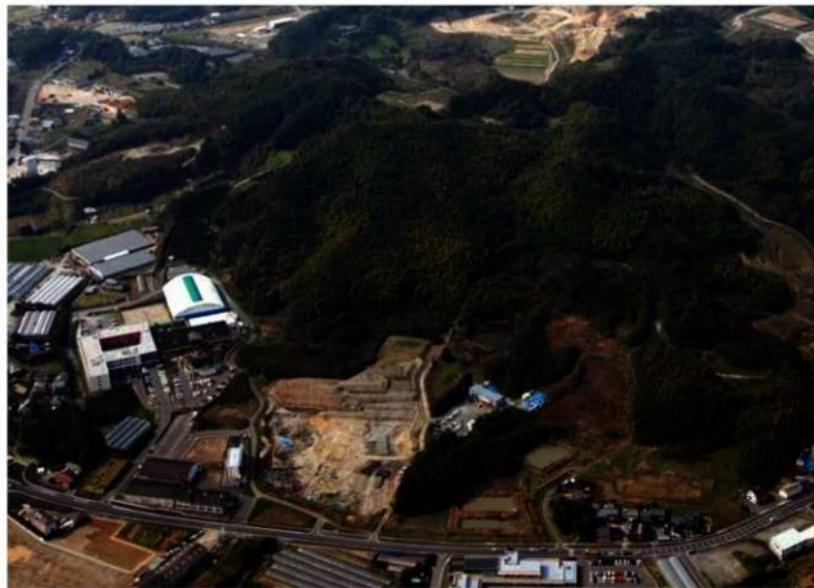
元岡桑原遺跡の植物珪酸体 (プラント・オパール)



— 50 μ m —



元岡・桑原遺跡群全景（西から）



第 42 次調査区遠景（南から）

図版 8



第 42 次調査区全景（北東から）



第 42 次調査区全景（北から）

図版 9



第42次調査区全景（南東から）



第42次調査区 II区（調査中・南から）

図版 10



SD01 全景（北から）



SD01 コーナー部（東から）



図版 12



No.1 ベルト 土層断面図 1



No.1 ベルト 土層断面図 2



1号小銅鐘



2号小銅鐘



SB08・09及び同柱穴



SB08 横の完形土器群（土器群 14）



土器群 5B



土器群 5Z



29 外底



29 見込



714 口縁部



714 創部



716



291

朝鮮半島・楽浪系遺物



格子目タタキを施した土器とひょうたん形土器



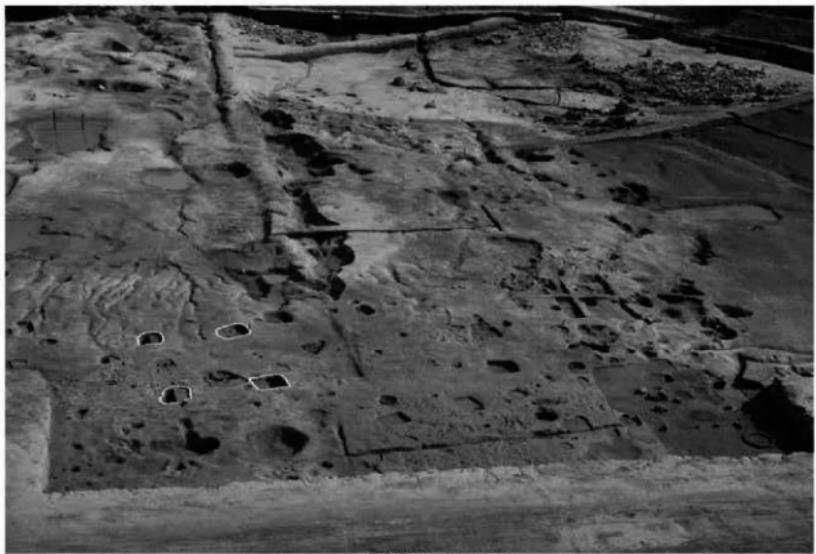
I 区全景（南西から）



I 区全景（南東から）



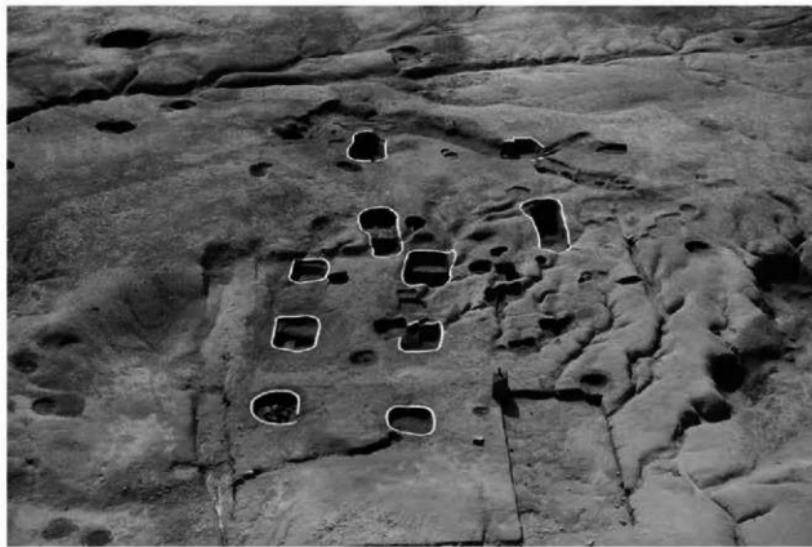
II区全景（南から、調査途中）



I・II区北端遺構群（北から）



SB08・09・152 (南東から)



SB08・09 (東から)

图版 20



SB08 + 09 柱穴



SD03



SD04 土層断面



SX06 及び同杭



SX10



土器群 10 ~ 13



土器群 11A



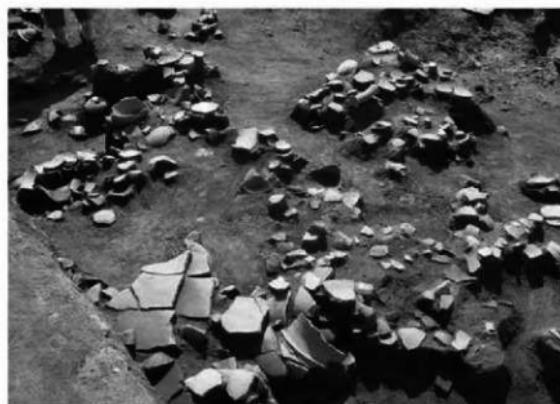
土器群 11A・12・13



土器群 8



土器群 1



土器群 2



土器群 6 A



土器群 4 A・5 A・6 A



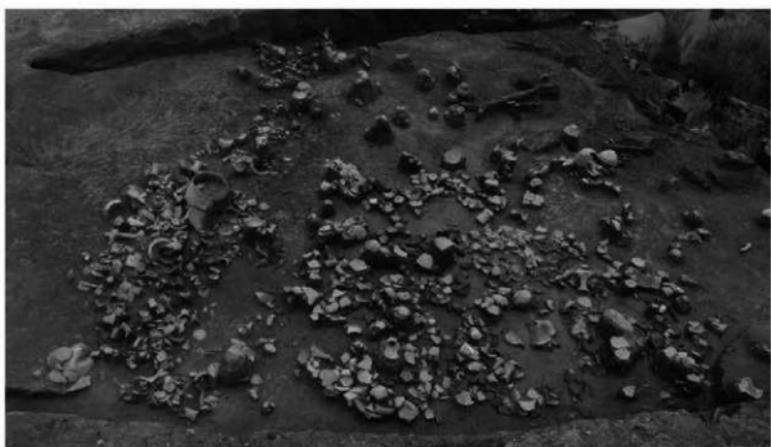
土器群 5 C (部分)



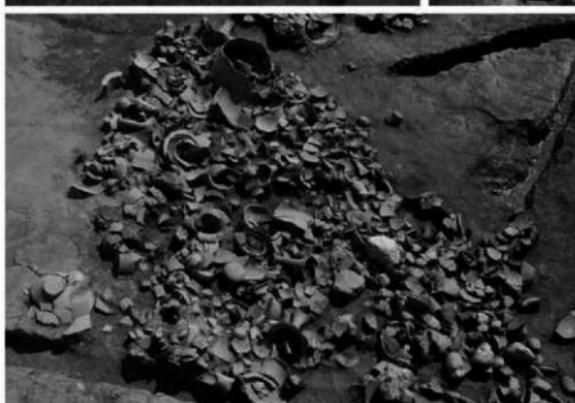
土器群 5 F



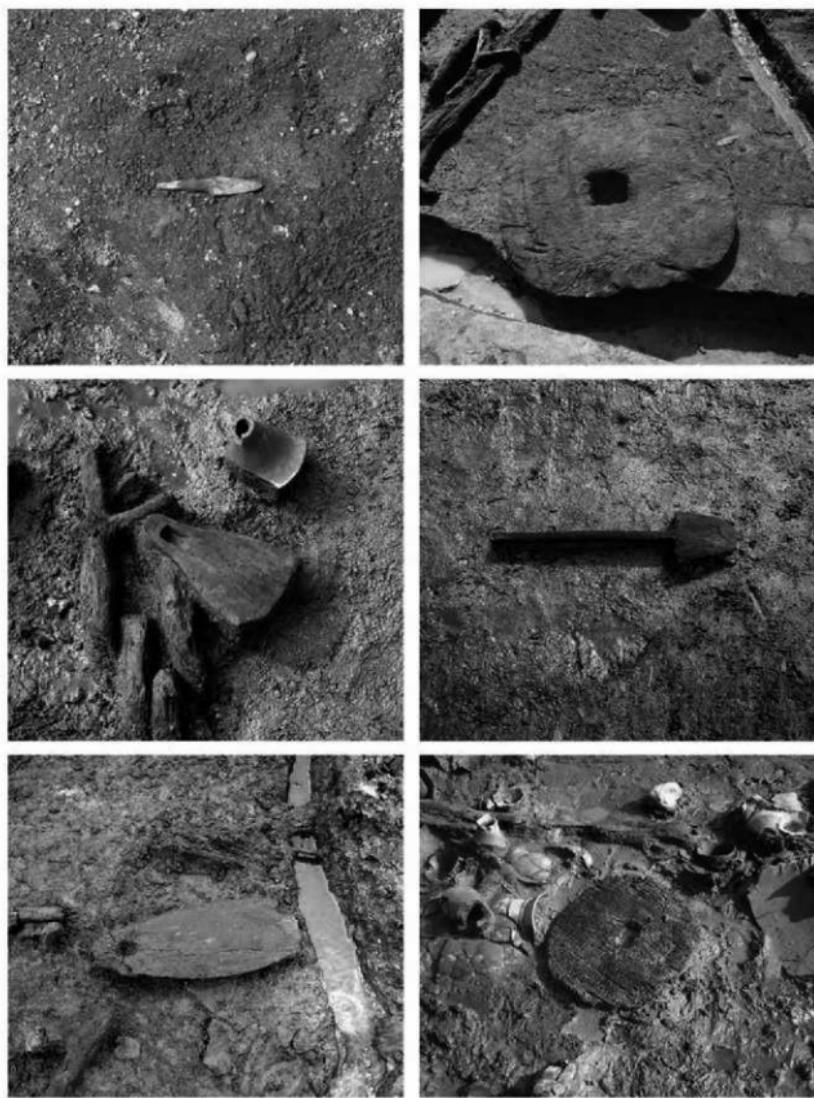
土器群 5 D



土器群 5W・5X 及び同部分

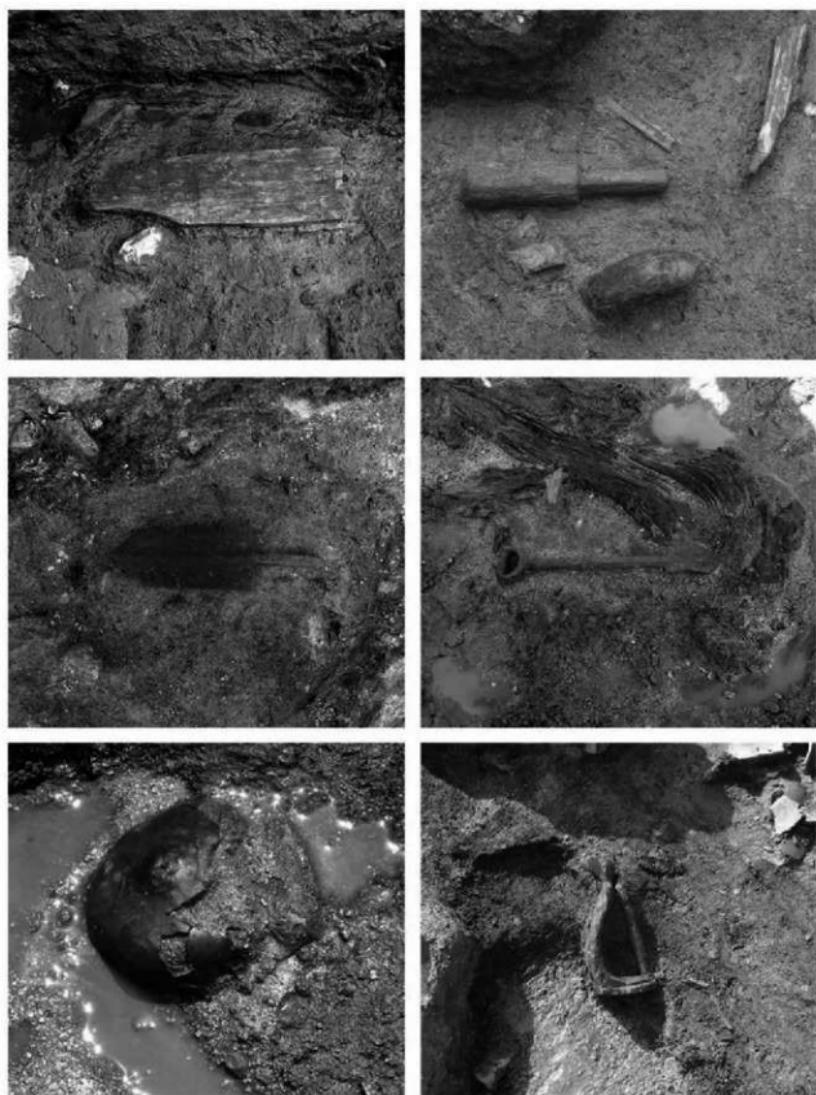


土器群 5Z

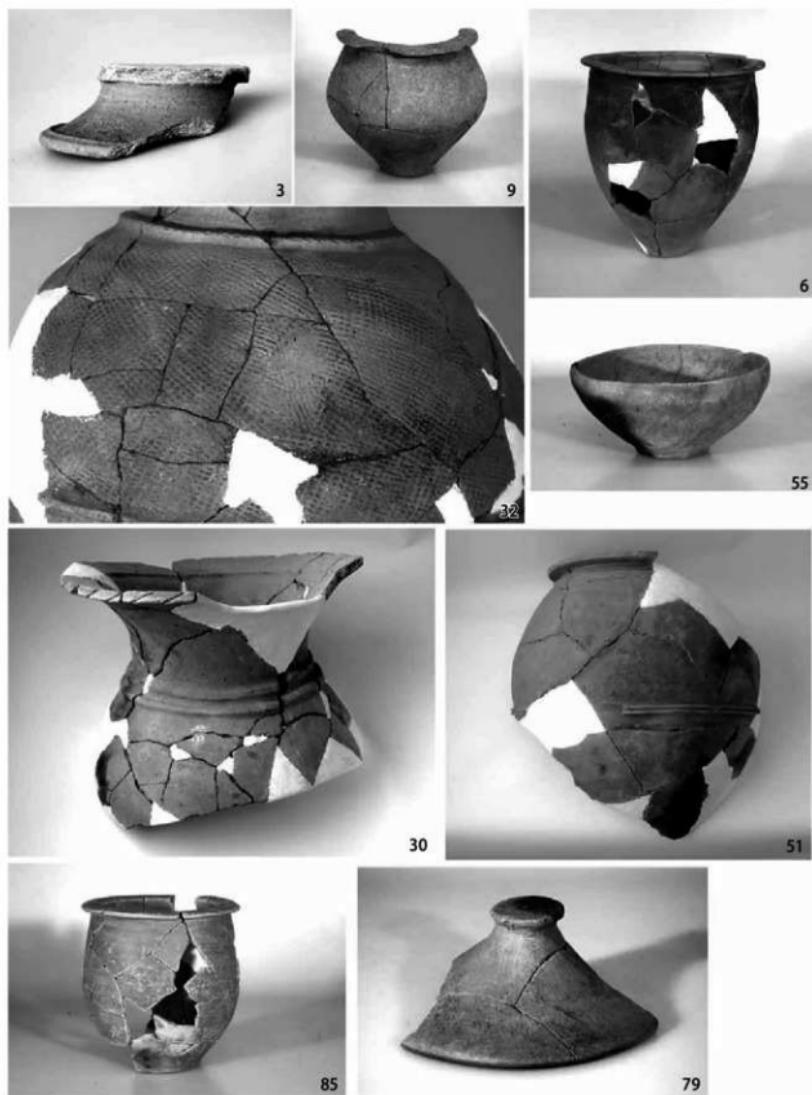


遺物出土状況 1

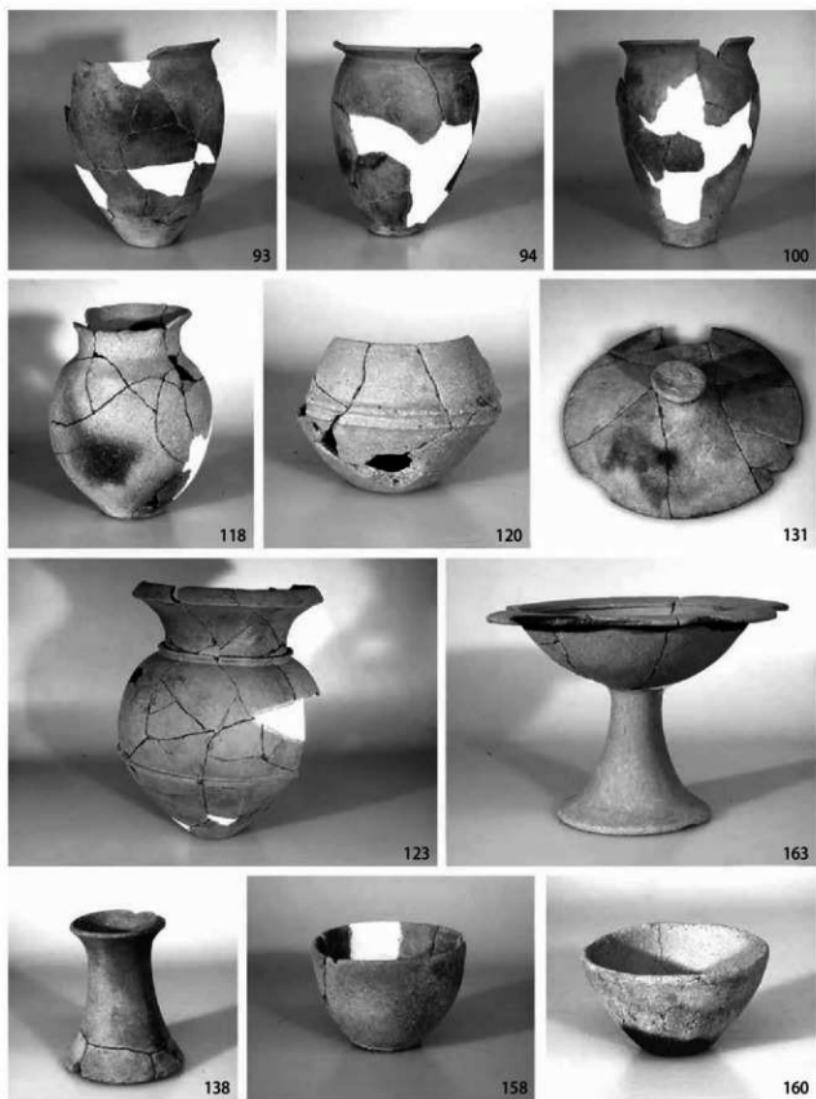
図版 28



遺物出土状況 2



出土遺物 1

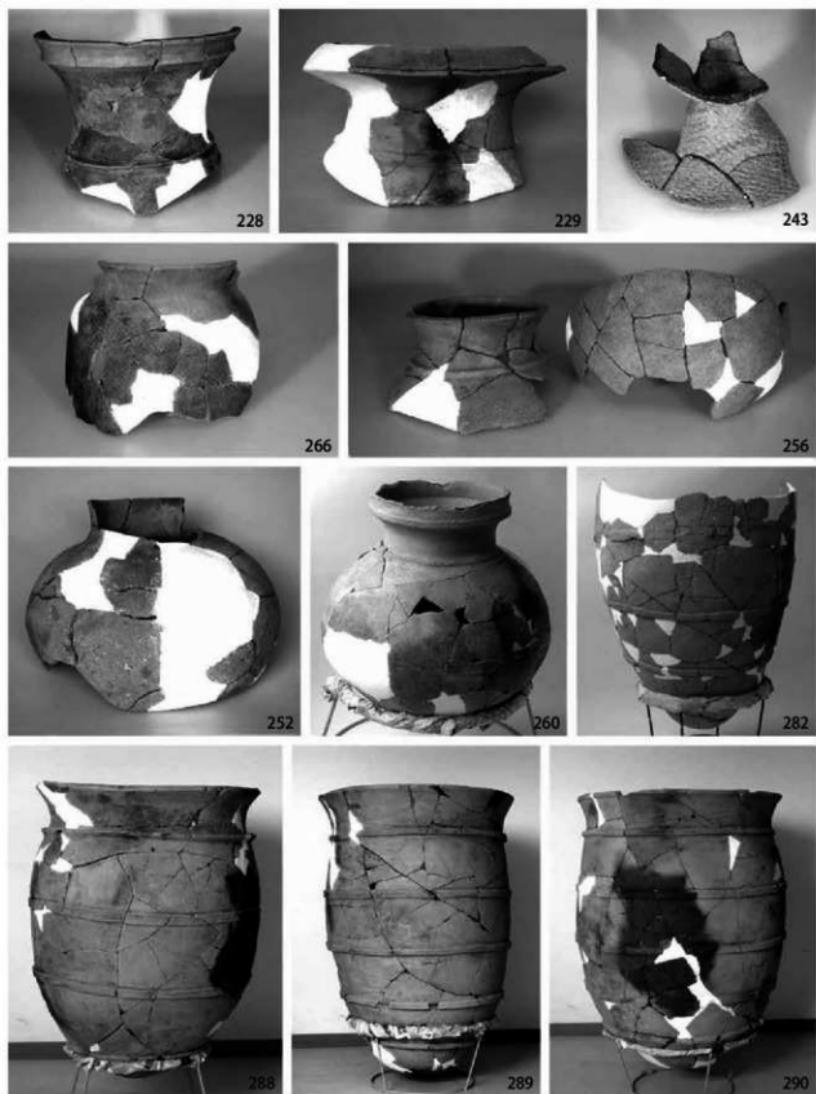


出土遺物 2



出土遺物 3

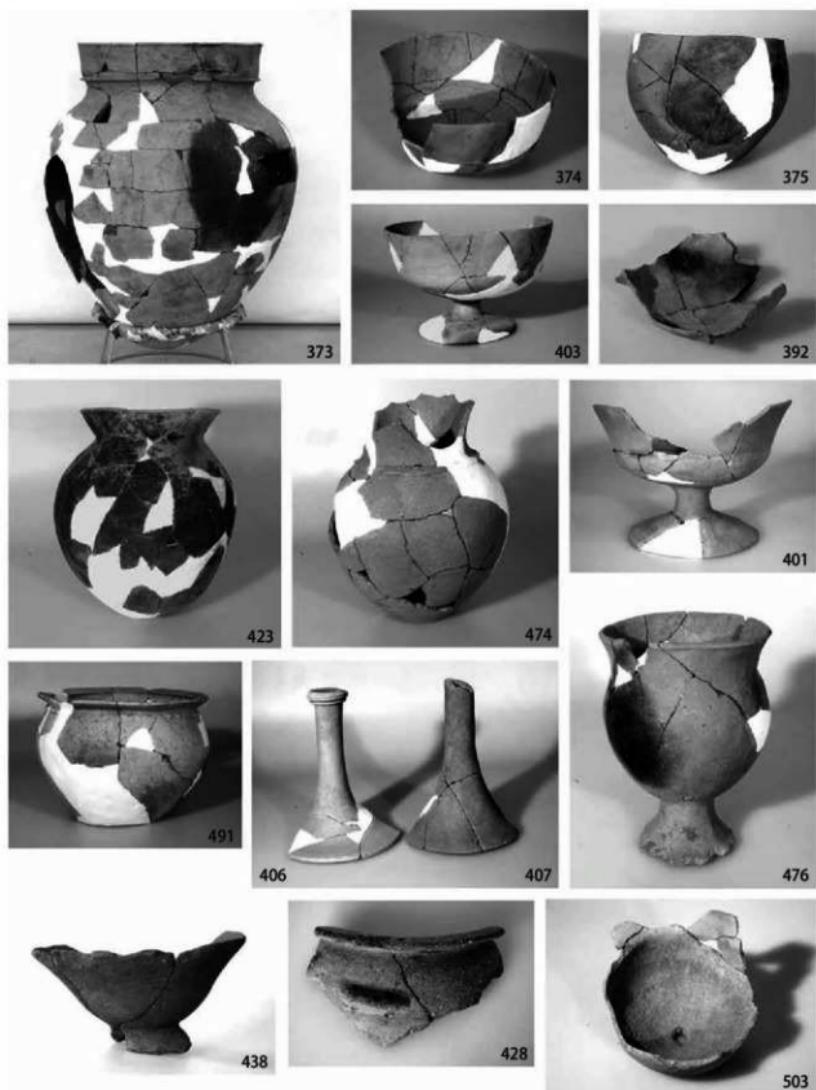
図版 32



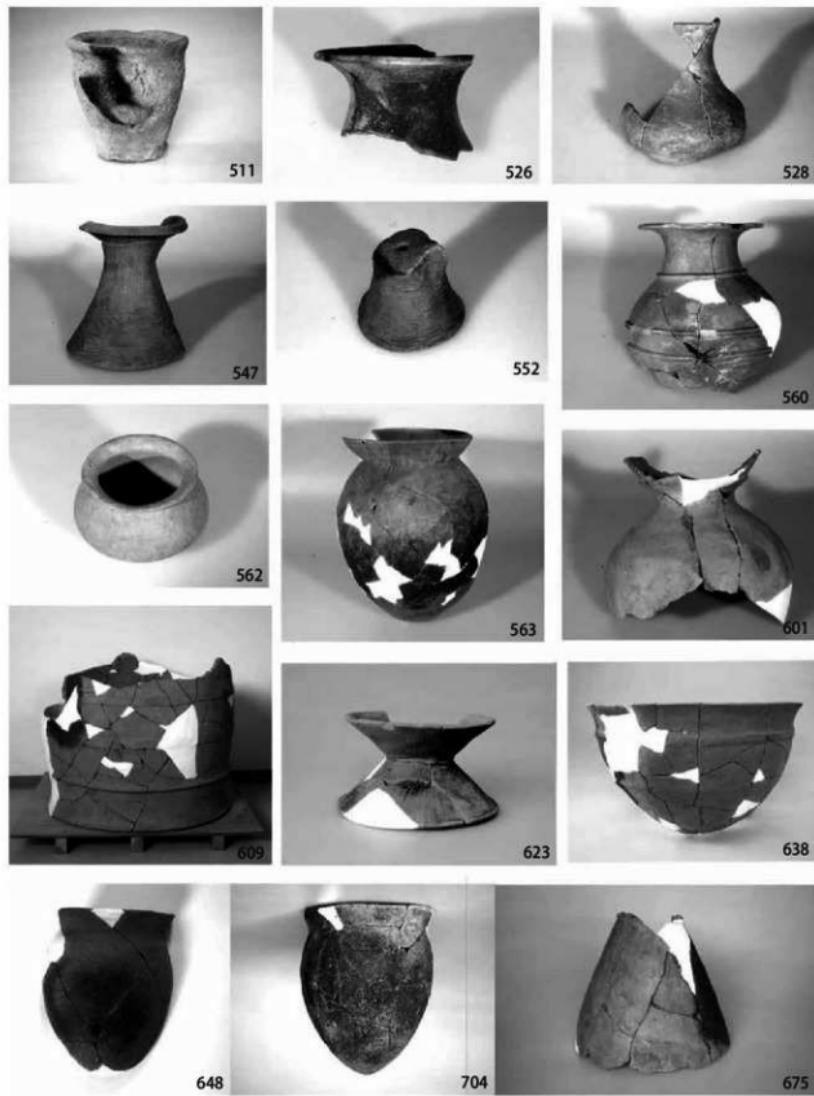
出土遺物 4



出土遺物 5



出土遺物 6



出土遺物 7

図版 36



出土遺物 8



760



761



763



762



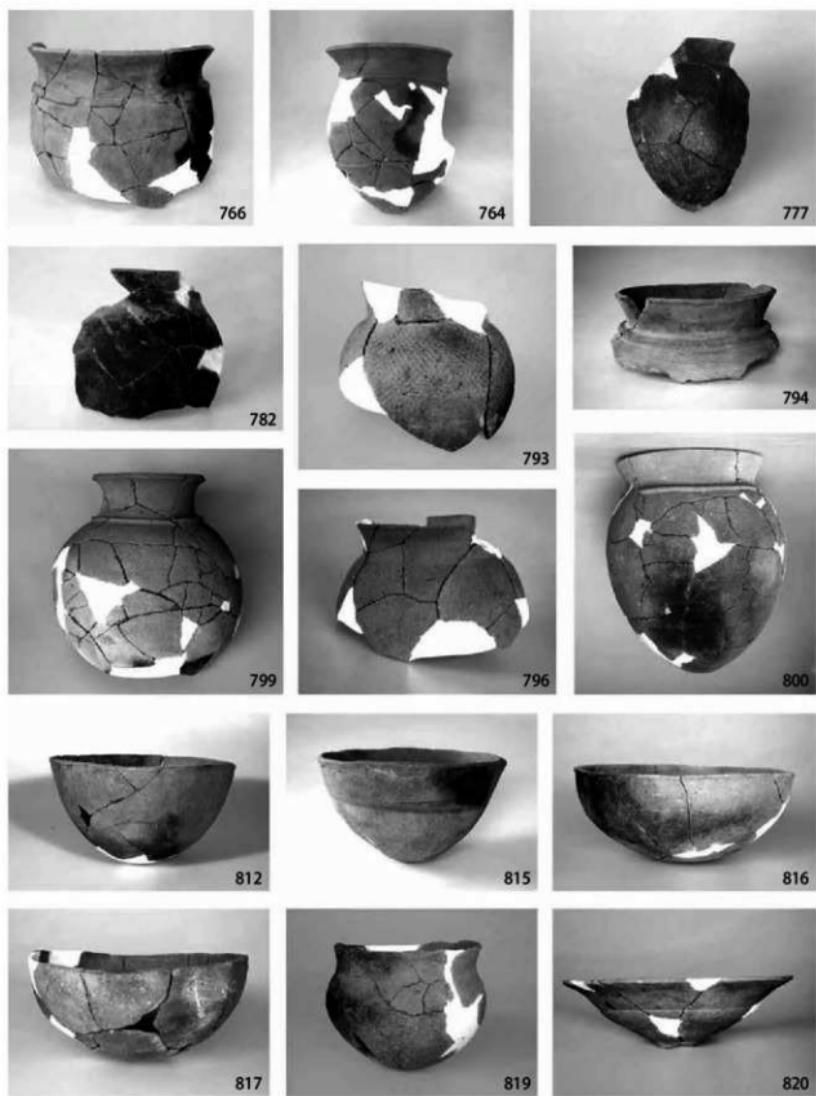
764



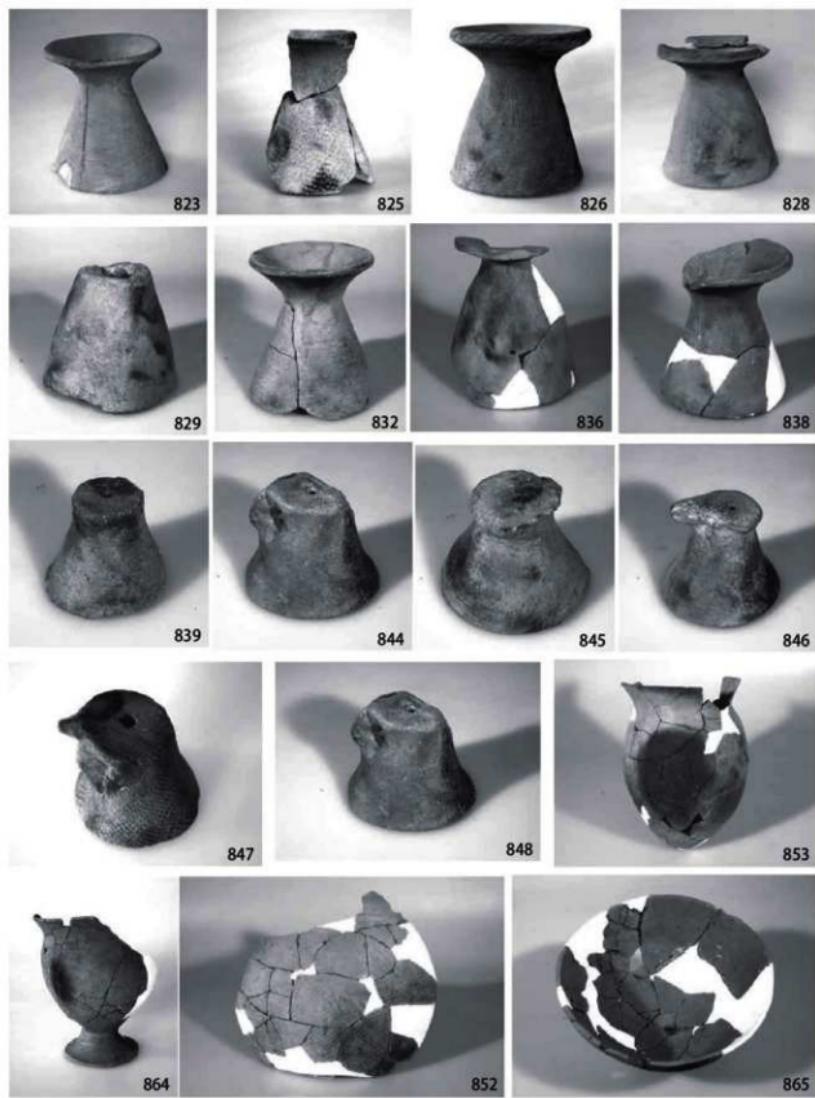
765

出土遺物 9

図版 38

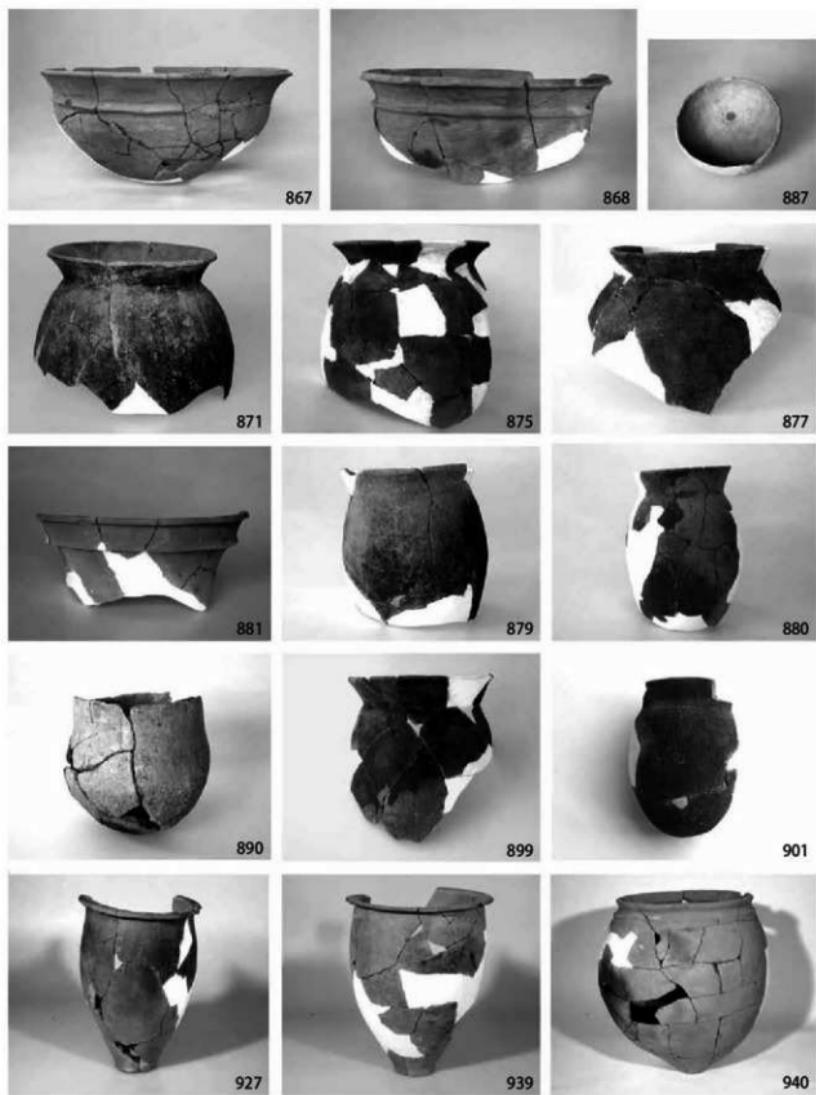


出土遺物 10



出土遺物 11

図版 40

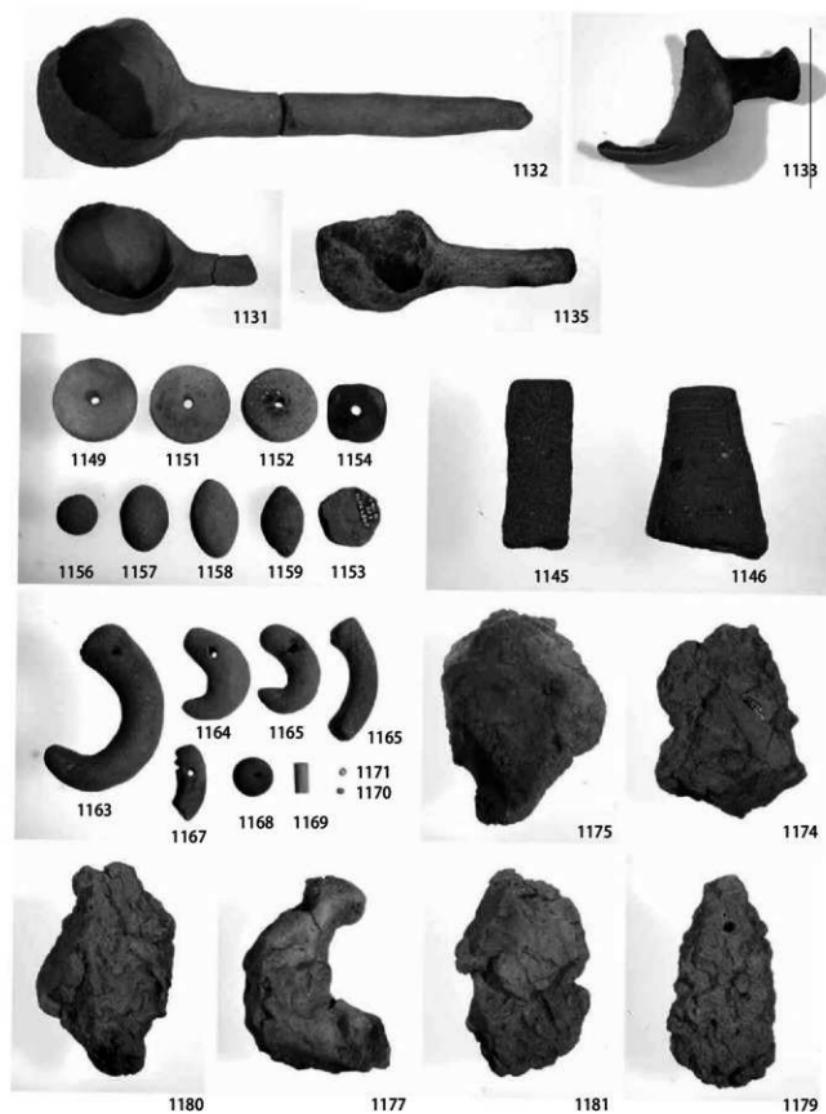


出土遺物 12



出土遺物 13

図版 42



出土遺物 14

報告書抄録

ふりがな	もとおか・くわばるいせきぐん21
書名	元岡・桑原遺跡群21
副書名	第42次調査の報告1
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1174集
編著者名	米倉秀紀・古環境研究所
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1
発行年月日	2012年3月16日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
もとおか・くわばる いせきぐん	ふくおかけんふくおかし	40130	2782	33°35'6"	130°12'4"	2004.10.01 ～ 2009.06.30	7,000	記録保存 調査
元岡・桑原遺跡	福岡県福岡市							
	にしくおおあざもとおか							
第42次調査	西区大字元岡							

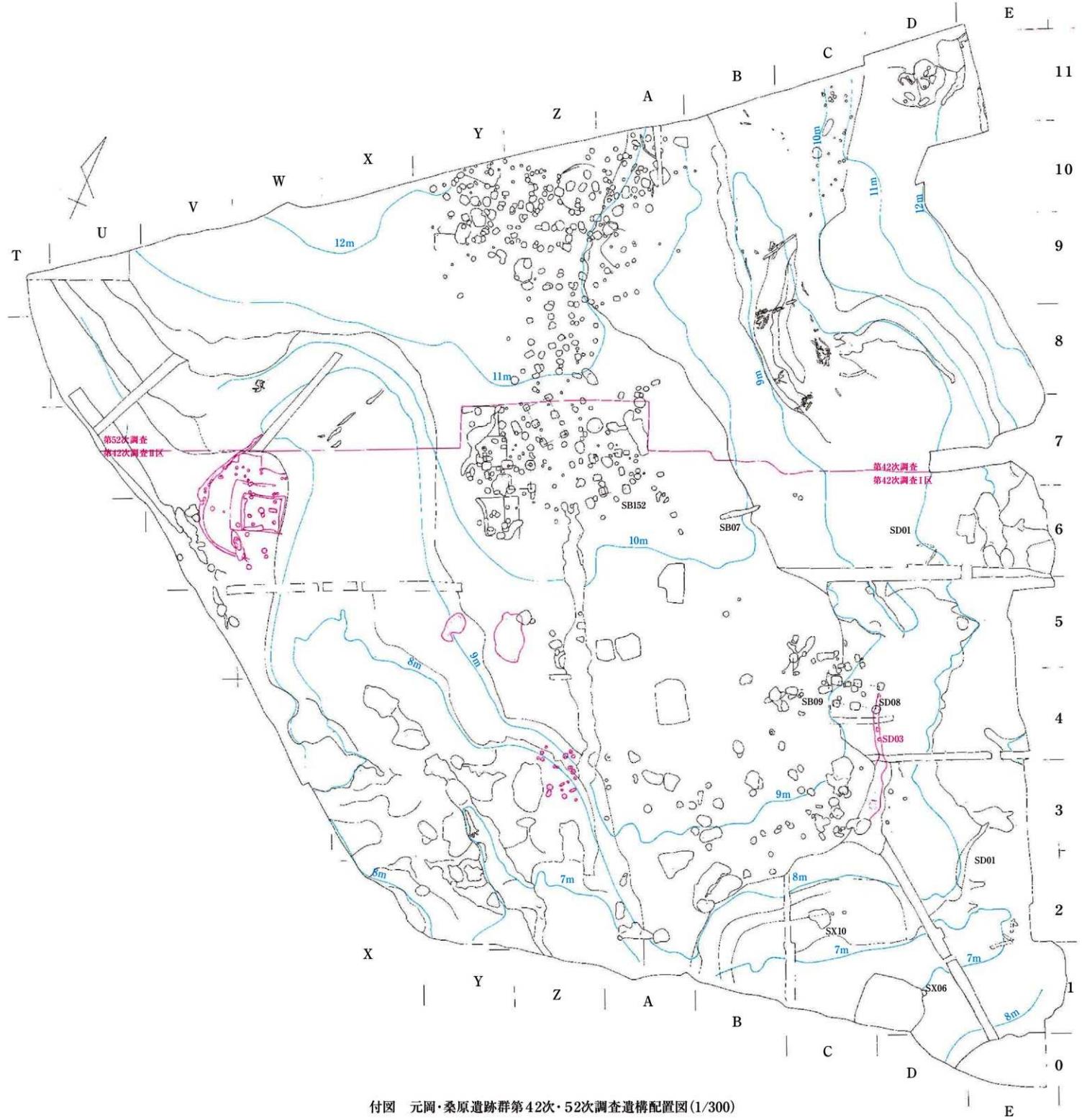
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元岡・桑原 遺跡群 第42次調査	集落	縄文時代～ 古墳時代	自然流路 竪穴住居 掘立柱建物	弥生土器・土師器・楽浪系土器・朝鮮半島系土器・石器・小銅鐸・青銅鏡・中国銭	半島系土器、中国銭8枚、小銅鐸2点の他、絵画土器や絵画木製品、船材など特異な遺物が多数出土。総量1万箱。
要約				谷の中を流れる2本の自然流路（幅30m前後）の中から1万箱を越える遺物が出土した。縄文時代晚期・弥生時代中期から古墳時代前期までの土器・石器の他、小銅鐸2点、貨泉・五銖銭などの中国銭8枚、小形埴製鏡2面、絵画土器や絵画入り木製琴など祭祀系遺物、楽浪系土器などの朝鮮半島系の土器群、さらに船材を始めとする多種多様な木製品など、特徴的な遺物群が出土した。さらには、当地で焼かれたと思われる朝鮮半島系の器形を持つ土器なども出土した。2本の流路の間には、竪穴住居や掘立柱建物群があり、弥生時代中期中頃から古墳時代初頭における、糸島半島の拠点集落と考えられ、当集落の居住者が朝鮮半島との交易を行っていたものと考えられる。	

元岡・桑原遺跡群21

—第42次調査の報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1174集

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1
電話 092-711-4667

印刷 九州チューエツ株式会社
電話 092-411-8367



付図 元岡・桑原遺跡群第42次・52次調査遺構配置図(1/300)

遺跡番号は第42次I区のみ